

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第560集

なかむらじょうあと

中村城跡発掘調査報告書

一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査

2010

岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部

(財)岩手県文化振興事業団

中村城跡発掘調査報告書

一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会资本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県一関市花泉町の一般国道342号花泉バイパス道路改築事業に関連して平成20年度に発掘調査を実施した、中村城跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、平安時代には集落が営まれ、中世には城館が築かれていたことが明らかとなりました。平安時代の水田跡や中世の出土遺物は、この時期の様相を考える上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局・一関総合支局土木部、一関市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県一関市花泉町老松字寺田320ほかに所在する中村城跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、一般国道342号花泉バイパス道路改築事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部の委託を受けた㈲岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コードはOE37-0332、遺跡略号はNJ-08である。
- 4 野外調査及び室内整理期間、調査担当者は次の通りである。

野外調査　期間　平成20年5月1日～11月6日

面積　5.893m²

担当者　北田　勲・佐藤あゆみ

室内整理　期間　平成20年11月1日～平成21年3月31日

担当者　北田　勲・佐藤あゆみ

- 5 本報告書の作成は、北田・佐藤が本文原稿（佐藤分を明記、そのほか北田）、遺構・遺物図化を行った。また、I調査に至る経過は岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部、附編　自然科学分析は1を株式会社加速器分析研究所、2・3を古代の森研究室、4を木工舎「ゆい」、5を岩手県立博物館が行った。全体の編集は北田が行った。

- 6 分析・鑑定は次の機関等に委託した。

石製品の石材鑑定……………花崗岩研究会

炭化材同定……………木炭協会

放射性炭素年代測定……………株式会社加速器分析研究所

花粉分析・植物珪酸体分析……………古代の森研究室 吉川昌伸

種実同定分析……………古代の森研究室 古川純子

樹種同定分析……………木工舎「ゆい」 高橋利彦

金属製品分析……………岩手県立博物館 赤沼英男

- 7 座標原点の測量及びグリッド図作成、水田跡の測量、空中写真撮影は次の機関に委託した。

座標原点の測量・グリッド図作成……………株式会社一測設計

水田跡の測量……………株式会社北日本朝日航洋

航空写真撮影……………東邦航空株式会社

- 8 本書では以下の地形図・地質図・近世絵図を使用した。

「1/25,000地形図　有壁・若柳」、「1/50,000地形図　一関・若柳」（国土地理院）

「東北地方デジタル地質図3」「建設技術者のための東北地方の地質」（（株）東北建設協会・（独）産業技術総合研究所）承認番号第63500-A-20090223-001号

「流中村絵図　元禄十六年（1703年）」（中村共有会所蔵）

「流中村絵図（写）　文化十三年（1816年）」（宮城県図書館所蔵）

上記絵図の掲載にあたっては、所有者の許可を得て、一関市博物館が撮影したカラーポジフィルムを借用した上で使用した。

9 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関・方々から御指導・ご助言・ご協力をいたいた（敬称略・五十音順）。

赤沼英男（岩手県立博物館）、石崎高臣（奥州市世界遺産推進室）、一関市博物館、岩手日日新聞社、菊池強一（岩手大学非常勤講師）、斎野裕彦（仙台市文化財課）、千葉和人（天満社）、中村共有会（代表木村貞雄）、中村雅彦（花泉町老松）、名久井文明（岩手大学非常勤講師・芦舍）、新野一浩（瑞巖寺博物館）、畠山篤雄・後藤円（一関市教育委員会）

10 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

11 調査成果の一部については、現地説明会資料・平成20年度発掘調査報告書調査概報（岩埋文第546集）等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

凡　　例

1 遺構図の用例は次の通りである。

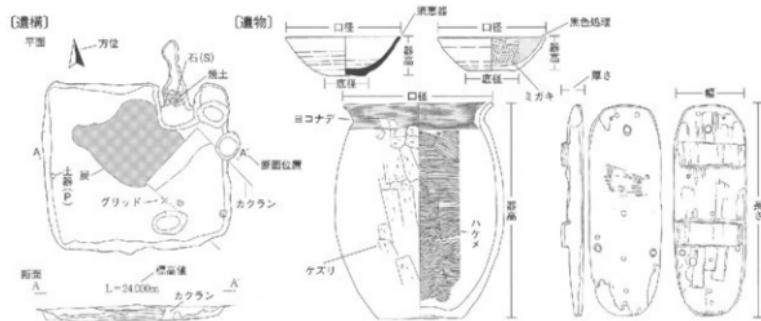
- (1) 遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡の平面・断面図1/60、カマド平面・断面図1/30、土坑平面・断面図1/60、橋跡・堀跡・溝跡の平面図1/150・断面図1/60、ピットの平面・断面図1/30で表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。
- (2) 推定線は破線で表した。また、遺構同士の切り合いは線種を変えて表現した。
- (3) 層位は、基本層位にローマ数字、各遺構堆積上などにアラビア数字を使用した。
- (4) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- (5) 遺構図中の「P」は土器、「S」は石器または礫を表している。

2 遺物実測図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

- (1) 遺物実測図の縮尺は土器・陶磁器・木製品・自然遺物1/3、石製品・金属製品1/2、錢貨原寸で表した。ただし法量の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。
- (2) 土器のうち、須恵器は断面を黒色とした。黒色処理は外外面にスクリーントーンで示した。

3 写真図版の用例は次の通りである。

- (1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。
- (2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。



遺構・遺物凡例図

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置	2
2 遺跡の地形環境	2
(1) 遺跡の成立過程	2
(2) 調査区と周辺の地形	4
(3) 調査区の層序	4
3 歴史的環境・過去の調査	5
III 調査・整理の方法	15
1 野外調査方法	15
(1) グリッド設定	15
(2) 本調査と調査以前の工事部分の取り扱い	15
2 調査経過	18
3 整理方法	18
(1) 遺構の整理	18
(2) 遺物の整理	19
(3) 写真撮影	20
4 整理経過	20
5 広報活動	20
IV 検出した遺構と遺物	23
1 全体の概要	23
2 北 区	23
(1) 堅穴住居跡	23
(2) 土 坑	26
(3) 河川跡・捨て場	27
(4) 北区遺構外出土遺物	30
3 中 央 区	30
(1) 水 田 跡	30
(2) ピ ッ ト	35
(3) 溝 跡	35
(4) 河 川 跡	38
(5) 中央区遺構外出土遺物	43

4 南 区	43
(1) 壁 穴 住 居 跡	43
(2) 土 坑	44
(3) 水 田 跡	44
(4) 橋 跡	51
(5) 横 状 遺 構	56
(6) 堤 跡	56
(7) 溝 跡	61
(8) 河 川 跡	63
(9) 南区遺構出土遺物	63
 V 自然科学的分析	92
1 放射性炭素年代測定	92
2 花粉・植物珪酸体分析	99
3 種実同定分析	108
4 樹種同定分析	112
5 金属製品分析	126
 VI 遺構・遺物のまとめ	133
1 平 安 時 代	133
2 中 世	143
3 総 括	151
報告書抄録	253

図版目次

第1図 岩手県全図・遺跡位置図	1	第37図 北区・1号河川跡（2）出土遺物	66
第2図 遺跡位置図（拡大）	3	第38図 北区・1号河川跡（3）出土遺物	67
第3図 周辺の地形図	3	第39図 北区・1号河川跡（4）出土遺物	68
第4図 基本層序模式図	5	第40図 北区・1号河川跡（5）出土遺物	69
第5図 周辺の遺跡分布図（古代・中世）	7	第41図 北区・1号河川跡（6）出土遺物	70
第6図 周辺の遺跡分布図（中世城館）	8	第42図 北区・1号河川跡（7）出土遺物	71
第7図 グリッド配置図	16	第43図 北区・1号河川跡（8）出土遺物	72
第8図 遺構配置図（全体・拡大①～③）（1）	21	第44図 北区・1号河川跡（9）出土遺物	73
第9図 遺構配置図（拡大①・②）（2）	22	第45図 北区・1号河川跡（10）出土遺物	74
第10図 北区・1号堅穴住居跡（1）	24	第46図 北区・1号河川跡（11）出土遺物	75
第11図 北区・1号堅穴住居跡（2）	25	第47図 北区・1号河川跡（12）出土遺物	76
第12図 北区・1号土坑	26	第48図 北区・1号河川跡（13）出土遺物	77
第13図 北区・1号河川跡・捨て場（1）	27	第49図 中央区・1号ピット、1号水田跡、1・2 号溝跡、2号河川跡（1）出土遺物	78
第14図 北区・1号河川跡・捨て場（2）	28	第50図 中央区・2号河川跡（2）、 3号河川跡（1）出土遺物	79
第15図 中央区・1号水田跡（1）	31	第51図 中央区・3号河川跡（2）、4号河川跡、 中央区遺構外、南区・2号堅穴住居跡 出土遺物	80
第16図 中央区・1号水田跡（2）	32	第52図 南区・2号土坑、2号水田跡出土遺物	81
第17図 中央区・1号水田跡（3）、水田面微細図	33	第53図 南区・1号柵状造構、2号壙跡出土遺物	
第18図 中央区・1号水田跡（4）	34	第54図 南区・1号堀跡（1）出土遺物	82
第19図 中央区・1号ピット、1号水田跡（5）、 1～3号溝跡	36	第55図 南区・1号堀跡（2）出土遺物	83
第20図 中央区・2号溝跡	38	第56図 南区・1号堀跡（3）出土遺物	84
第21図 中央区・2号河川跡	39	第57図 南区・1号堀跡（4）出土遺物	85
第22図 中央区・3・4号河川跡（1）	41	第58図 南区・1号堀跡（5）、 2・3号堀跡（1）出土遺物	86
第23図 中央区・4号河川跡（2）	42	第59図 南区・3号堀跡（2）、 4・5号堀跡（1）出土遺物	87
第24図 南区・2号堅穴住居跡	43	第60図 南区・5号堀跡（2）、 6号堀跡（1）出土遺物	88
第25図 南区・2号水田跡（第1水田面）	45	第61図 南区・6号堀跡（2）出土遺物	89
第26図 南区・2号水田跡（第2水田面）、 8号溝跡	46	第62図 南区・6号堀跡（3）、7号堀跡、 6号河川跡、南区遺構外出土遺物	90
第27図 南区・6・7号溝跡	47	第63図 上利田aテフラを被覆する水田跡	91
第28図 南区・2号水田跡、6・7号溝跡	48	第64図 土器集成図（1）	134
第29図 南区・2号橋跡、1号堀跡	50	第65図 土器集成図（2）	136
第30図 南区・2号土坑、1号柵状造構、1・2 号橋跡、1～7号堀跡、5号溝跡	52	第66図 土器集成図（3）	137
第31図 南区・2号土坑、1号橋跡、 2～6号堀跡、5号溝跡	53	第67図 土器集成図（4）	138
第32図 南区・1号柵状造構（1）	54	第68図 土器集成図（5）	139
第33図 南区・1号柵状造構（2）	55	第69図 土器集成図（6）	140
第34図 南区・5・6号河川跡	62		141
第35図 北区・1号堅穴住居跡（1）出土遺物	64		
第36図 北区・1号堅穴住居跡（2）、 1号河川跡（1）出土遺物	65		

第70図 中村城跡の想定図	145	第73図 岩手県内の板碑分布図	148
第71図 橋跡・柵状遺構の類例	147	第74図 木製品集成図	150
第72図 出土板碑	148		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡分布表（古代・中世）	9	第10表 陶磁器観察表	160
第2表 周辺の遺跡分布表（中世城館）	10	第11表 木製品観察表	161
第3表 中村氏系譜と姻戚関係	12	第12表 金属製品観察表	166
第4表 基準点位置	15	第13表 銀貨観察表	166
第5表 遺構名変更表	19	第14表 石製品観察表	167
第6表 1号掘跡・2号柵跡柱計測表	49	第15表 骨角遺物観察表	167
第7表 出上土器分類表	135	第16表 炭化材観察表	168
第8表 土器観察表	153	第17表 種実観察表	169
第9表 土製品観察表	160		

写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景	173	写真図版22 中央区・2号河川跡（1）	194
写真図版2 遺跡近景	174	写真図版23 中央区・2号河川跡（2）	195
写真図版3 流中村塙図	175	写真図版24 中央区・3号河川跡（1）	196
写真図版4 出土遺物	176	写真図版25 中央区・3号河川跡（2）、 4号河川跡	197
写真図版5 米倉東空軍撮影航空写真	177	写真図版26 南区・2号堅穴住居跡	198
写真図版6 国土地理院撮影航空写真	178	写真図版27 南区・2号水田跡（1）	199
写真図版7 北区・1号堅穴住居跡（1）	179	写真図版28 南区・2号水田跡（2）	200
写真図版8 北区・1号堅穴住居跡（2）	180	写真図版29 南区・2号水田跡（3）、 6～8号溝跡	201
写真図版9 北区・1号堅穴住居跡（3）	181	写真図版30 南区・2号水田跡（4）、 2号土坑	202
写真図版10 北区・1号土坑	182	写真図版31 南区・1号柵状遺構（1）	203
写真図版11 北区・1号河川跡（土器捨て場）（1）	183	写真図版32 南区・1号柵状遺構（2）	204
		写真図版33 南区・1号柵状遺構（3）	205
写真図版12 北区・1号河川跡（土器捨て場）（2）	184	写真図版34 南区・1号柵状遺構（4）	206
		写真図版35 南区・1号柵跡、2号柵跡（1）	207
写真図版13 北区・1号河川跡（土器捨て場）（3）、 中央区・1号ピット	185	写真図版36 南区・2号柵跡（2）	208
写真図版14 中央区・1号水田跡（1）	186	写真図版37 南区・1号堀跡（1）	209
写真図版15 中央区・1号水田跡（2）	187	写真図版38 南区・1号堀跡（2）	210
写真図版16 中央区・1号水田跡（3）	188	写真図版39 南区・2号堀跡（1）	211
写真図版17 中央区・1号水田跡（4）	189	写真図版40 南区・2号堀跡（2）	212
写真図版18 中央区・1号水田跡（5）	190	写真図版41 南区・3号堀跡	213
写真図版19 中央区・1号水田跡（6）	191		
写真図版20 中央区・1号溝跡	192		
写真図版21 中央区・2～4号溝跡	193		

写真図版43	南区・5・6号堀跡（1）	215	写真図版66	中央区・3号河川跡（2）、4号河川跡、 遺構外、南区・2号竪穴住居跡、2号 上坑、2号水田跡（1）出土遺物	…238
写真図版44	南区・5・6号堀跡（2）	216	写真図版67	南区・2号水田跡、1号櫛状遺構（1） 出土遺物	…239
写真図版45	南区・5～7号堀跡	217	写真図版68	南区・1号櫛状遺構（2）、2号橋跡 出土遺物	…240
写真図版46	南区・5・6号溝跡	218	写真図版69	南区・1号伽跡（1）出土遺物	…241
写真図版47	南区・6・7号溝跡	219	写真図版70	南区・1号堀跡（2）、2号溝跡（1） 出土遺物	…242
写真図版48	南区・5号河川跡	220	写真図版71	南区・2号堀跡（2）、3、4号堀跡、 5号堀跡（1）出土遺物	…243
写真図版49	南区・6号河川跡	221	写真図版72	南区・5号堀跡（2）、6号堀跡（1） 出土遺物	…244
写真図版50	北区・1号竪穴住居跡（1）出土遺物	222	写真図版73	南区・6号堀跡（2）、7号堀跡、 遺構外出土遺物	…245
写真図版51	北区・1号竪穴住居跡（2）、 1号河川跡（1）出土遺物	223	写真図版74	中央区・2、3号河川跡、南区・ 1号櫛状遺構（1）出土遺物	…246
写真図版52	北区・1号河川跡（2）出土遺物	224	写真図版75	南区・1号櫛状遺構（2）出土遺物	…247
写真図版53	北区・1号河川跡（3）出土遺物	225	写真図版76	南区・1号櫛状遺構（3）出土遺物	…248
写真図版54	北区・1号河川跡（4）出土遺物	226	写真図版77	南区・1号櫛状遺構（4）、2号櫛跡、 1号堀跡（1）出土遺物	…249
写真図版55	北区・1号河川跡（5）出土遺物	227	写真図版78	南区・1号堀跡（2）、3、5号堀跡、 6号堀跡（1）出土遺物	…250
写真図版56	北区・1号河川跡（6）出土遺物	228	写真図版79	南区・6号堀跡（2）、6、7号溝跡 出土遺物	…251
写真図版57	北区・1号河川跡（7）出土遺物	229			
写真図版58	北区・1号河川跡（8）出土遺物	230			
写真図版59	北区・1号河川跡（9）出土遺物	231			
写真図版60	北区・1号河川跡（10）出土遺物	232			
写真図版61	北区・1号河川跡（11）出土遺物	233			
写真図版62	北区・1号河川跡（12）出土遺物	234			
写真図版63	北区・1号河川跡（13）出土遺物	235			
写真図版64	北区・1号河川跡（14）、中央区・ 1号ピット、1号水田跡、1号溝跡（1） 出土遺物	236			
写真図版65	中央区・1号溝跡（2）、2号溝跡、 3号河川跡（1）	237			

I 調査に至る経過

中村城跡は、「道路改築事業花泉バイパス」工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道342号は、秋田県横手市を起点とし、奥羽山脈栗駒山（須川岳）を越え岩手県一関市を経由し宮城県登米市に至る総延長約160kmの幹線道路である。また、岩手県内陸部と宮城県沿岸部を最短で結び、一般国道45号や整備中の三陸縦貫自動車道へのアクセス路となり、産業・経済・観光そして文化交流に重要な役割を担った路線である。

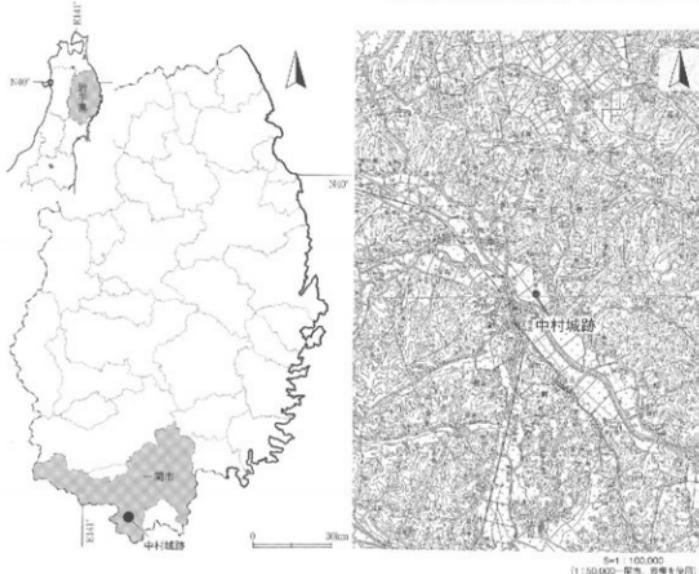
事業対象箇所の花泉町市街地は道路幅員が狭く歩道が無いうえ直角クランクがあるなど交通安全上の問題を多数抱えており、これらの諸問題を解決するためバイパス工事により整備を行なっているものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局一関総合支局土木部から平成18年10月16日付「総土第516号「道路改築事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」」により岩手県教育委員会に対し試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年12月11日に試掘調査を実施し、工事に着手するには中村城跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年12月20日付教生第1318号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部では岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成20年5月1日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

(岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部)



第1図 岩手県全図・遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

中村城跡は岩手県一関市花泉町老松字寺田320ほかに所在し、国土地理院発行50,000分の1地形図「一関・若柳」の図幅に含まれ、北緯38度50分19秒、東経141度11分04秒に位置する。

遺跡は、一関市役所花泉支所の北東約0.6kmの場所にあり、金流川左岸の最低位段丘に立地している。標高は22～23m前後、現況は水田であり、ほぼ平坦な地形である。

一関市は岩手県の南端に位置し、南は宮城県、西は秋田県と接している。現在の一関市は平成17年9月20日に、・一関市・西磐井郡花泉町・東磐井郡大東町・同郡千厩町・同郡東山町・同郡室根村・同郡川崎村の1市4町2村が合併して誕生した。・一関市の総面積は1133.10km²と岩手県内で最も広く、東西は約63km、南北は約46kmある。土地利用の状況は、総面積のうち56.1%が山林、次いで水田が11.8%、畑が7.1%となっており、岩手県内で見れば比較的農地の割合が高い地域である。人口は12万5818人（平成17年国勢調査）で、岩手県全体の9.1%を占めている（一関市HPから引用）。

一関市の中でも本遺跡の所在する花泉町は最南端に位置し、南は宮城県と接する人口15,346人（平成17年国勢調査）の県境の町である。北側は一関市・・一関市川崎町（旧一関市・旧東磐井郡川崎村）、東側は藤沢町、宮城県登米市（旧登米郡東和町・中田町・石越町）、西側は宮城県栗原市（旧栗原郡若柳町・金成町）と隣接している。

花泉町は、昭和30年1月1日に永井村・涌津村・湯島村・花泉村・老松村・日形村、昭和31年9月30日に金沢村の計7村が合併して誕生した。これ以前の状況として、本遺跡が所在していたと考えられる花泉村（現在の住所は老松）は、明治22年4月1日に町村制が施行され、旧花泉村と奈良坂村が合併して成立している。

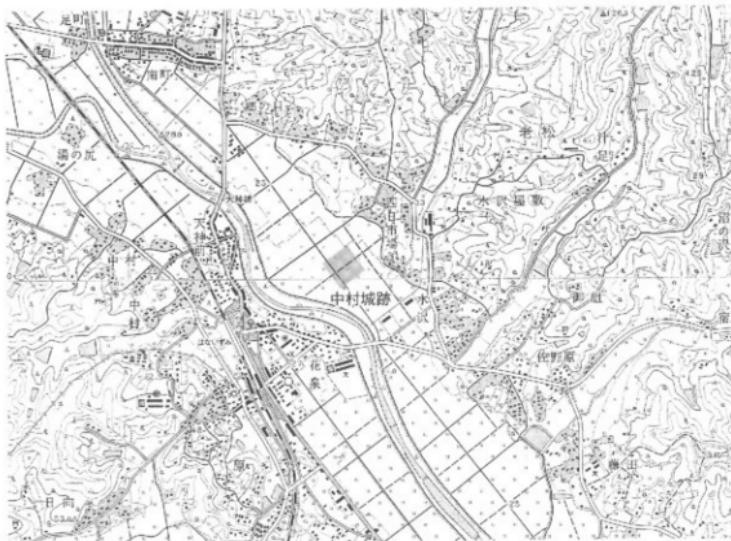
2 遺跡の地形環境

（1）遺跡の成立過程

北上・阿武隈両山地を結ぶ山地列と奥羽山脈の間の低地帯には、ほぼ南北方向の丘陵地と平野の交互配列がみられる。花泉町を含む一関付近は丘陵の発達する地域で、いわゆる磐井丘陵が、北側の北上盆地と南側の仙台平野を隔てて発達し、しかも、北上山地の西縁部に接している。このような地形発達の背景には地盤運動の影響を考えられ、北上盆地を南下してきた北上川の流路が、盆地南端部の一関市狐禪寺地区で東方に向きを変えた後、北上山地西縁部の古生層分布地帯の中に、北から南への順に、いわゆる狐禪寺峡谷・大泉峡谷（田辺1952）を形成しているのも、その反映であろう。これらの峡谷は、現在の丘陵背面に基づいて復元される過去の平坦な地形面が開析されて以後の段丘形成期を通じて、下流側から上流側へ向かって、段丘地形形成のための基準面支配が及ぶ際の通路となった。

磐井丘陵を開析した古磐井川と古金流川はそれぞれ、狐禪寺・大泉両峡谷からなる峡谷部の北端と南端で古北上川に合流しながら、その流域に段丘地形を形成し、現在の水系を出現した。

北上川中流沿岸の模式的な段丘区分（中川ほか1963）に従うと、中村城跡は海拔高度22～23m前後、中位段丘である花泉段丘より下位の金流川左岸の低位段丘最低位面及び沖積低地に立地している。金流川は宮城県栗原市栗原町付近を源とし、遺跡北西の花泉町花泉湯の尻で有馬川と合流、さらに下流



第2図 遺跡位置図（拡大）



第3図 周辺の地形図

の花泉町日形館ヶ崎で北上川に注ぐ全長14.7242mの一般河川である。

遺跡はちょうど金流川に有馬川が合流する地点から1km下流の左岸部に位置する。地形観察からは自然堤防があり、遺跡はその後背湿地の微高地（自然堤防上）に立地している（小野寺1993を基に加筆）。

引用参考文献

- 小野寺信吾 1993 「Ⅲ 花泉遺跡の環境と基本層序」『花泉遺跡』p30-31 花泉町教委
 田辺健一 1952 「北上川中流の狐禪寺峡谷の成因に関する若干の考察」『東北地理』4、3-4 p35-37
 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内真子・石田琢二 1963 「北上川中流沿岸の第四系および地形－北上川流域の第四紀地歴（2）－」『地質学雑誌』69、p219-227
 社団法人東北建設協会 2006 『建設技術者のための東北地方の地質』
 杉谷隆・半井幸弘・松本淳 1993 『風景のなかの自然地理』 古今書院
 日下哉編 2002 『国解 日本地形用語事典』

（2）調査区と周辺の地形

調査区内の地形を概観すると、現況が水田利用されていたためほぼ平坦である。北区と中央区の境である27グリッド付近から北側は約1.5m標高が上がり、元地形の変換点であることが分かる。南側の最も低い部分は沖積低地の一部と考えられ、金流川とはほぼ同じ比高である。北側は低位段丘の最低位面と考えられる。沖積低地である中央区及び南区は雨天時には當時冠水し、標高の低さが分かる。

現表土を除去し残存した旧地形を観察すると、北区に南北に走る1号河川跡が1条、中央区に南北から東西方向に屈曲する2号河川跡、南北方向の3号河川跡、南区に東西方向の5号河川跡、南北方向の6号河川跡がある。また、中央区の1号堀跡も元来は南北に走る河川と思われ、2号水田跡も同様である。

これらの位置関係から、旧地形は自然堤防である微高地の間を小河川（沢）が南北方向を基本として蛇行しながら金流川に注入り組んだ地形であったと考えられる。また、標高の低い箇所は湿地化し、金流川が増水した際には氾濫原となっていた可能性がある。

（3）調査区の層序

本遺跡全体の基本層序は以下の通りである。第4図に基本層序模式図を示した。

I 层 表土（碎石など道路路盤・盛土）	50~100cm
II 層 旧水田耕作土・盛土	20~50cm
III 層 褐灰色砂質土	30cm 平安時代遺構検出面（北区）
IV 層 暗緑灰色細砂	100cm以上 上面が中央区・南区の遺構検出面
V 層 暗緑灰色粗砂	層厚不明

I層現表土は碎石など道路路盤・盛土など圃場整備による整地層である。北区では約70cm、中央区では約50cm、南区は80~100cmと区域ごとにばらつきがある。中央区北側の1号水田跡付近では、圃場整備時に埋められた廃材などが見つかった。

II層は旧水田耕作土や盛土で、圃場整備時に遺構検出面であるIII・IV層まで削平されずに残存した箇所に限定的に認められる。以前は遺跡全体を覆っていたと考えられる旧表土層である。

III層は褐灰色砂質土で、調査区の中で最も標高がある北区に限定して見られる層位である。北区で

は削平された遺構検出面として確認され、この上面から1号竪穴住居跡や1号河川跡（捨て場）が検出されている。

IV層は暗緑灰色細砂で、III層が残存する北区以外の中央区・南区で認められる。上面が遺構検出面となるが、III層と同様に削平されている。以前は中央区・南区にもIII層が堆積していたと考えられるが現況では残存しておらず、I層直下にIV層が露出する。遺構・遺物は確認されない。

V層は各区域で層序確認のための深掘りを行った際に認められた層位で、多量の湧水を含んでいる。下位には古金流川によって運ばれたと見られる流木など自然木が多量に堆積している。遺構・遺物は確認されない。

本遺跡の堆積層位は基本的に古金流川によって運搬された土砂により形成されたものである。自然堤防として残った箇所に遺跡が形成されたと考えられ、標高の低い部分は金流川が増水した時には河水が上がる範囲であったと考えられる。これは、調査区全域に水成堆積と考えられるラミナ構造が認められることからも想定される。

また、標高の低い箇所から検出された水田跡や河川跡を中心とし、十和田aテフラ（以下、To-aテフラ）の堆積を確認した。今回の調査ではテフラ同定分析を実施していないが、平成15年に花泉町教委で行った調査の際には溝跡覆土内から検出した白色テフラについて火山ガラスと屈折率を計測し分析を行っている（花泉町教委 2005）。層厚は約10cmで、1号水田跡では2枚以上に細分可能なことから、噴出単位が想定できる可能性がある。上位層が削平されているため全体の堆積は不明であるが、III・IV層で検出される遺構堆積上にプライマリーな層準として確認されるため、II層とIII層の間に降下して堆積したものと考えられる。

3 歴史的環境・過去の調査

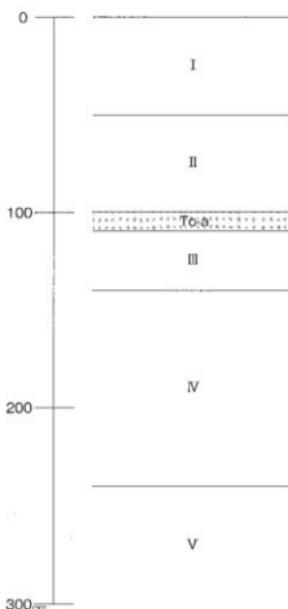
岩手県遺跡台帳（平成19年12月31日）によると、一関市花泉町には147箇所の遺跡が登録されている。

旧石器・縄文・弥生時代の遺跡が23箇所、古代が18箇所、中世が44箇所、近世が2箇所、古代の複合遺跡が13箇所、近世の複合遺跡が5箇所、時代区分不明が42箇所である。

一関市花泉町は特に金流川を中心として中世城館が多く分布しており、本遺跡もそのひとつであるとされてきた。今回の調査により平安時代と中世の遺構・遺物が検出されているため、本遺跡と関わる古代と中世に関連した遺跡を提示し、その歴史的環境を概観する。

（1）中村氏が移住する以前の遺跡周辺

本遺跡は、現在の住所で一関市花泉町老松字寺田に所在するが、平安時代は磐井郡流郷（注：1）



第4図 基本層序模式図

仲村に属していたと思われる。承平年間（931～938年）に成立した和名類聚抄の磐井郡の項目の中には「仲村 奈加無良」が認められ、現在、花泉町のほぼ中央に位置する中村は、この仲村と考えられる。現在の中村地域から金流川を挟み、田園が広がる対岸一帯も同じく中村と称されていたようであり、本遺跡もこの地域に含まれる。

周辺の遺跡について、旧石器時代の関連遺跡では、金森遺跡におけるハナイズミモリウシやヘラジカの出土事例があり、縄文時代の遺跡では貝取貝塚が著名で昭和31・32・41・44年度の調査により、縄文中期～弥生に属する出土遺物や数10体の人骨が見つかっている（花泉町教育委員会1971年『貝取貝塚』）。1988年以前に町内で実施された調査は（花泉町教育委員会1993年『花泉遺跡』）に詳しい。

ちなみに、本遺跡から最も近い遺跡は、北東方向へ直線距離にしておよそ400mの老松四日市場に、縄文時代の遺跡として四日市場遺跡がある。

さて、平安時代に入り、延暦21年（802年）坂上田村麻呂が胆沢城を築き、磐井・胆沢・江刺は胆沢城の支配下におかれた。この「胆沢三郡」説（注：2）は同時期に磐井の名前が文献から見出しき事ができないことから、3郡が同時期に胆沢城の支配下になったという確証が薄いという見方もあるようだが、遅くとも弘仁3年（812年）頃までに磐井郡は、胆沢城の支配下に置かれたと思われる。（潤原：2005、注：3）

平安中期になり、中村周辺の地域は、高倉荘（注：4）として京都藤原氏に属する。しかしながら高倉荘は、奥州藤原氏が領有し、関白家に寄進したものであったため、実質の管理は奥州藤原氏であり、この地に影響をおよぼしていることに変わりはなかったようである。前九年の役の様子を記述している『陸奥話記』に、この時期の中村が登場する場面がある。安倍宗任ら賊軍を追う官軍が兵糧尽きてくる場面である。「磐井郡仲村の地に入らしむ。陣を去ること四十余里なり。耕作の田畠・民戸は崩る腕かなり。即ち兵士三千余人を遣はして、稻禾等を刈らしめ、特に軍糧に給せんと。」つまり、この時代すでに中村の地で稻作がおこなわれ、そこには、豊かな生活をしていた人々の姿があったこと、そして、広がる田畠の風景をこの『陸奥話記』の一場面でうかがい知ることができるのではないか。

（2）奥州征伐による中村氏の登場

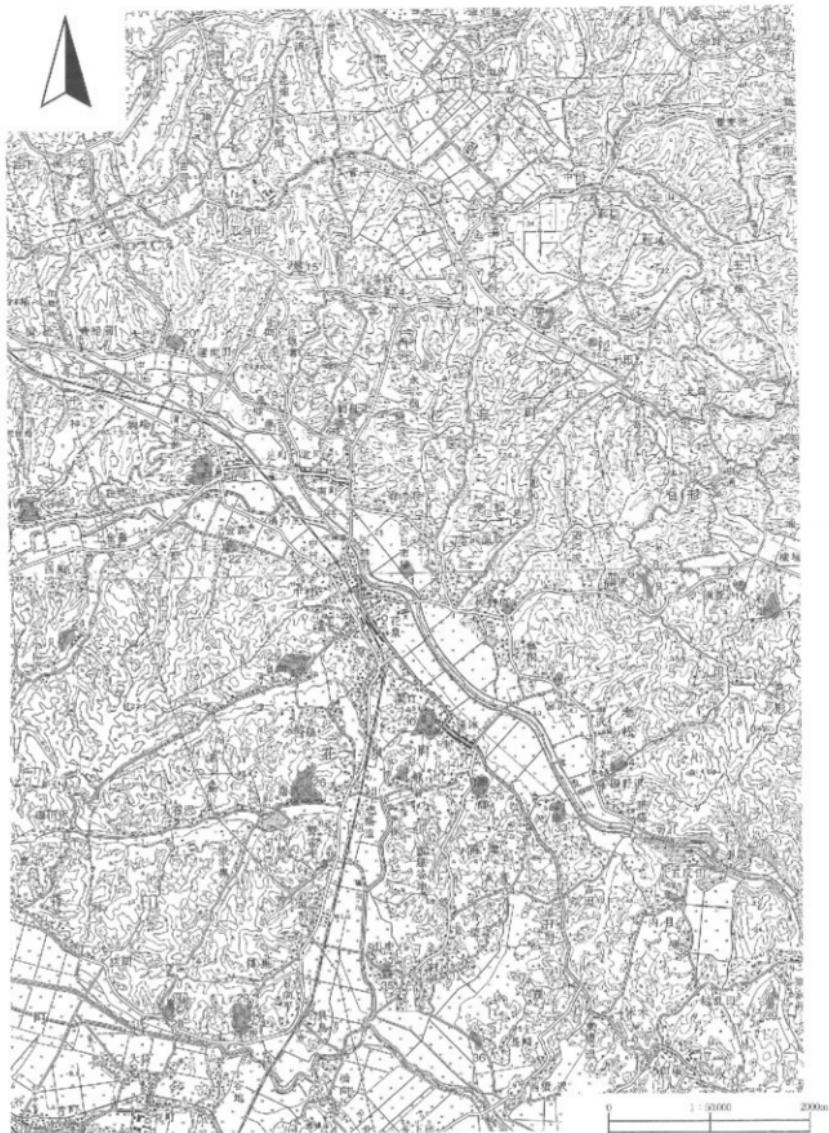
前九年の役（1051～1062年）・後三年の役（1083～1087年）を経て、藤原清衡が平泉政権の下で奥州を治めてから100年余りが経った1189年、文治5年奥州合戦で源頼朝の大軍に敗れ藤原氏は滅亡した。そして、奥州征伐を終えた源頼朝が、功のあった御家人に領地を与えることとなり、中村の地にも鎌倉政権が入り込んでくることになった。『吾妻鏡』には、「凡ソ清重、今度ノ勳功、殊ニ抜群ノ重職ヲ奉ハルノミニ匪ズ。剩へ伊沢・磐井・牡鹿等ノ郡以下、數箇所ヲ押領スト云云」とある。清重とは、葛西清重のことであり、奥州各地に広がった関東武士の総奉行を務めた。葛西氏は、もともと武蔵国奥島郡豊島に住み豊島氏と称していたが、下総の葛西に移り住み葛西氏となり奥州征伐に従軍していた。

この葛西清重の子孫が中村城城主となるのであるが、その葛西氏の子孫が中村に住むことになるのは、この文治5年から、およそ100年後の弘安9年（1286年）2月といわれている。

ここで同時期に活躍していた周辺諸氏についても触れておきたい。城館と城主等については、表を参照していただきたい。表は、『岩手県史』と『花泉町史』にもとづいて『古城書上』の欄を設けるなどして加筆した。『古城書上』とは、延宝年間（1673～81）に仙台藩が幕府に提出したもので、山城か平城の区別や、城主、大きさが記されているものである。表からもわかる通り、13世紀後半にもなると、中村氏とともに、金沢氏、寺崎氏、奈良坂氏、清水氏、などが出現していく。



第5図 周辺の遺跡分布図（古代・中世）



第6図 周辺の遺跡分布図（中世城館）

第1表 周辺の遺跡分布表（古代・中世）

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	調査経緯
1	中村城	城郭跡	平安～中世	壁跡、陶器器（中世）、須恵器、土師器	老松寺田	平成15調査
2	四日市場跡塚	塚			老松四日市場	
3	一里塚	一里塚		塚2基	老松上津見・佐野原敷	
4	山廬	塚	鎌倉～室町	石塔婆3・6基	老松藤田	
5	宮沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、須恵器	老松下宮沢・（上宮沢）	昭和57町指定文化財
6	赤穂城	祭祀跡		塚	老松寺沢	
7	今枝寺跡	寺院跡		塚2基、石塔婆23基	老松寺沢	
8	御山廬	塚		石塔婆	日影上通	
9	宝寿院跡	寺院跡		墓石	日影須益	
10	開成寺跡塚	寺院跡		墓石	日影石畠	
11	中浦	散布地	縄文・古代	須恵器、土師器、（純文土器、かわらけ）	日影中通	
12	北ノ畠跡塚	絆塚	平安～鎌倉	古常滑焼瓦器、塚2基	日影中通	昭和59町指定文化財
13	高古寺跡	寺院跡			金沢手代森	
14	西川塚	石碑跡		塚4基	金沢西川	
15	越后森塚	疊塚		塚2基	金沢小沢田	
16	尼塚	塚		塚	金沢尼ヶ沢前	
17	大門沢塚	塚	難窓	塚3基	金沢大門沢	
18	馬場	散布地	古代	須恵器、土師器	花京馬場	平成16分布調査
19	葛西聚落	祭祀跡	空町	塚、石塔婆	花京田東	毎和5町指定文化財・平成16分布調査
20	東京院跡	寺院跡			花京出来	平成16分布調査
21	下金森	散石地	縄文・古代	須恵器、須恵器、獸骨	花京東	平成16分布調査
22	七ヶ堀	祭祀跡		塚9基	花京阿志沢	昭和29調査・平成16分布調査
23	上野沢1	散布地	縄文・古代	須恵器、土師器、石燃	花京上野沢	平成16分布調査
24	上野沢2	散布地	古代	須恵器	花京上野沢	平成16分布調査
25	上野沢3	散布地	縄文・古代	須恵器、土師器、石燃	花京上野沢	平成16分布調査
26	阿智沢塚	散布地		塚2基	花京阿智沢	平成16分布調査
27	上油田塚	絆塚		塚1基	油田穴ノ沢	平成16分布調査
28	名賀山塚	塚	家		油田名賀山	
29	明月山塚	塚			油田明月山	平成16分布調査
30	石塚聚落	塚		塚2基	油田石塚	平成16分布調査
31	赤坂塚	祭祀跡		塚1基、塚	油田北ノ沢	平成16分布調査
32	山中沢1	散布地	古代	須恵器、土師器	油鳥山中沢	平成16分布調査
33	山中沢2	散布地	縄文・古代	須恵器、土師器、石燃	油鳥山中沢	平成16分布調査
34	山中沢3	散布地	古代	須恵器、土師器	油鳥山中沢	平成16分布調査
35	瀬戸塚	塚		塚4基	油鳥瀬戸沢	平成16分布調査
36	表谷地	散布地	古代	須恵器	油鳥表谷地	平成16分布調査
37	大石坂塚	祭祀跡		墓石、塚2基	油鳥大石沢	三竹古墳・平成16分布調査
38	久保庭園	庭園		池山、古木、塔塚	油鳥久保園内	平成16分布調査
39	飛ヶ沢	祭祀跡		塚6基	油鳥飛ヶ沢	盛塚、平成16分布調査
40	平寺跡	寺院跡			油鳥貞鳥	平成16分布調査
41	下三ノ町	散布地	古代	土師器	油津	平成7新規
42	五輪堂	祭祀跡	縄文	鉄五輪塔・地盤	油津五輪堂	昭和55、山指定重文
43	松ノ坊	散石地	古代	須恵器、土師器	油津松ノ坊	
44	船山1	散布地	古代	須恵器、土師器	油津船山ノ食	
45	船山2	散布地	古代	須恵器、土師器	油津船山ノ食	
46	向山塚	塚		塚4基	油津向山	
47	久ノ目I	散布地	古代・中世	須恵器	油津久ノ目	平成14調査
48	久ノ目II	散布地	古代	須恵器、土師器	油津久ノ目	
49	久ノ目家	塚		塚1基	油津久ノ目	
50	石塚	散布地	古代	須恵器、土師器	油津石塚	
51	忍法師	散布地	古代	須恵器、伊吹	油津忍法師	
52	火床前	散布地	古代	須恵器、土師器	油津亥年前	
53	上吉田	散布地	古代	須恵器、土師器	油津吉田	
54	・向行場入塚	祭祀跡		石碑	水井南小茂	
55	一李木行人塚	祭祀跡		石碑	水井南小茂	吉海坊塚
56	狼の沢塚	祭祀跡		石塔婆	水井西狼ノ沢	
57	内渡の沢經塚	絆塚		塚	水井西狼ノ沢	昭和38調査
58	七里塚	一里塚		塚1基	水井三本木	

「岩手県遺跡台帳」(平成19年12月31日)

第2表 周辺の遺跡分布表（中世城館）

No.	地名(市町名)	時代	年代	城主	占據者上		形態	遺跡・遺物	所在地	開発経緯	備考
					姓主	大きさ					
1	中村城 (志摩地)	中世	1280(弘安9)	中村良房・足利氏	千葉相模	東都山、朝日山、山北山、山南	平城	史跡、礎石跡(小田)、瓦砾、土器、空甕	老松寺田	平成15・20発見	平姓千葉氏
2	伊勢佐野 (松原)	平安～	年代不詳	修院養賢院	青井氏	山城	石器、土器、空甕、瓦砾、手斧、手鉢	青井、手斧、手鉢、瓦砾	老松寺		
3	伊勢 (富田)	室町(元)～	天文10年(1543～92)	以田伊勢		山城	石器、土器、空甕、瓦砾	老松寺上宮社			
4	磐城郡 (今：磐城)	安土～	1548(天文17)	足利義定	足利山馬丸	東都山、山北山、山南	山城	石器、土器、空甕、瓦砾	老松寺坂平		
5	有田郡(近畿) (岐阜)	安土～	1548(天文17)	岐阜守在城城主	安藤忠昌(二門)	奈良原在東門	東西100m、南北180m	山城	手斧	老松寺	守護一門
6	有田郡(近畿) (岐阜)	安土～	1575(永禄元年) 1581(永禄6年)	千疋越山原宣 寺庭源清大綱守清清	千疋越山原宣	西都山、北山、山北山、山南	山城	手斧、土器、空甕	老松寺沢		今姓源氏(千疋越氏)、 寺庭源清大綱守清清 寺庭源清かふを 守護間に受けた 後の守護権
7	有田郡(近畿) (岐阜)	安土～	1571～1581 (永禄4年～19)	千疋越山原宣 寺庭源清大綱守	千疋越山原宣	西都山、北山、山北山、山南	山城	手斧、土器、空甕	老松寺沢		
8	有田郡(近畿) (岐阜)	安土～	1572～1581 (永禄4年～19)	千疋越山原宣 寺庭源清大綱守	千疋越山原宣	西都山、北山、山北山、山南	山城	手斧、土器、空甕、瓦砾	日影山浦	寺庭・内	
9	有田郡(近畿) (岐阜)	安土～	1572～1581 (永禄4年～19)	千疋越山原宣 寺庭源清大綱守	千疋越山原宣	西都山、北山、山北山、山南	山城	手斧、土器、空甕、瓦砾	日影山浦		
10	上野守	桃山	1571～1581 (永禄4年～19)	寺庭守千代丸				手斧	保原	日影山浦	
11	山形郡(小字) (山形・浪江・白河)	安土～	1578～1591 (天文7年～19)	小野寺把佐		山城	手斧、土器、空甕、瓦砾	日影山浦	平成24海賊侵入		
12	柏原郡(今：柏原・大野郡)	小姓	年代不詳	一ノ瀬大瀬		山城	手斧、土器、空甕	今虎船水			
13	柏原郡	小姓	年代不詳	阿部政義		山城	手斧、土器、空甕	今虎船水			
14	北条	安土～	1576(永禄2)	北条氏直守直見		山城	手斧、通刃、鎧刀	今虎船水南面			今姓千葉氏、金 武城の守護
15	磐田郡 (愛知県)	安土～	1432(永亨4)	猪谷春源 千賀源兵衛政	千賀源兵衛政	東都50間、山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	今虎船水南面			
16	磐田郡	安土～	1581(天正11)	猪谷春源		山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	今虎船水南面			
17	明月院 (岐阜)	安土～	1581(天正11) 1580(慶長3)	寺庭守宗 寺庭守宗七	寺庭守宗	東都50間、山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	今虎船水南面			
18	大郡城	伏山	天文10年(1543～92)	大庭佐兵守多喜				手斧	保原、津	今虎船水南面	平姓千葉氏、 守護一施、因襲領 上り移管
19	山形郡	中世									
20	毛利城／城 (佐渡城)	中世									
21	二荒山城 (清須城・鶴ヶ城)	平成～	1801清(延慶元年) 1397(延慶2)	柴田重村・吉川 清六守秀	清六守秀	清水内50間、 南北30間	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉上原	昭和51.1.23周 指定史跡	早姓千葉氏	
22	二荒山城 (清須城・鶴ヶ城)	平成～	1604(慶長9)	伊達政宗		山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	金沢西川			
23	東山城 (金森城)	安土～	1520(永正17)	猪谷春源	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
24	高須城 (高須城)	安土～	1534(永正11)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
25	高須城 (高須城)	安土～	1535(永正12)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
26	高須城 (高須城)	安土～	1536(永正13)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
27	高須城 (高須城)	安土～	1537(永正14)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
28	高須城 (高須城)	安土～	1538(永正15)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
29	高須城 (高須城)	安土～	1539(永正16)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
30	高須城 (高須城)	安土～	1540(永正17)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
31	高須城 (高須城)	安土～	1541(永正18)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
32	高須城 (高須城)	安土～	1542(永正19)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
33	高須城 (高須城)	安土～	1543(永正20)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
34	高須城 (高須城)	安土～	1544(永正21)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
35	高須城 (高須城)	安土～	1545(永正22)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
36	高須城 (高須城)	安土～	1546(永正23)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
37	高須城 (高須城)	安土～	1547(永正24)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
38	高須城 (高須城)	安土～	1548(永正25)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
39	高須城 (高須城)	安土～	1549(永正26)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
40	高須城 (高須城)	安土～	1550(永正27)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
41	高須城 (高須城)	安土～	1551(永正28)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
42	高須城 (高須城)	安土～	1552(永正29)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
43	高須城 (高須城)	安土～	1553(永正30)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花泉少弐	平成16公布選定	
44	高須城 (高須城)	安土～	1554(永正31)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花井登月	故城であった所 に堆積した所	
45	高須城 (高須城)	安土～	1555(永正32)	猪谷春源内蔵真	猪谷春源内蔵真	東都50間、 南北30間	山城	曲輪、土器、空甕、瓦砾	花井登月	故城であった所 に堆積した所	

「伊予縣高木台帳」(令和19年12月31日)をもとに「老子高木史」「花泉町史」から引用し、さらに加筆して作成

例えば、金沢氏の祖清胤は、暦応3年（1340年）頃に朝日館（金沢城）に入ったとされているし、この金沢氏から分立したのが寺崎氏（千葉胤資）である。平姓奈良坂氏については、その初代朝重は、葛西清重の二男朝清の子であり中村氏と近い家系である。中村氏房と同じく、惟康親王に従軍し領地を下賜されて建武年間（1334～1336）に下向したとされている。朝清から7代目にあたる重賢に、中村信継の女が嫁入りしているが、この信継は、平姓奈良坂氏から中村氏に養子になったものである。清水氏は、金沢氏と同じく、葛西清重の子重光又は、時重を祖とし、その子清秀が延慶年間（1308～1311年）頃に移住してきたようである。応仁2年（1468年）、この清水氏が苦境におちいりそうな時、家老職として清水城に入城したのが、藤姓奈良坂氏の祖家重であるが、この家重は、中村信定の弟のようである（紫桃1990）。

この時期、中村周辺の状況は金沢氏などの勢力圏が存在していた所に奥州攻め後に葛西氏一族が入ってきて、東部が守崎氏、北部が金沢氏、西武が奈良坂氏（高森城）、南部が中村氏となり鼎立するような形となった（佐藤1979）。

（3）中村氏の動静とその環境

中村氏については、考古学的な情報として、平成15年度に花泉町教育委員会が調査した『中村城跡発掘調査報告書』が刊行されている。12世紀後半の常滑窯、渥美窯陶器や13世紀後半の宮城県北部産の陶器、15世紀中葉の中国青磁などが出土しており中村氏が居城していたとされる時期と合致する遺物である。しかし、文字資料の面では、文献等に登場する機会が少なく、多くの研究がされてこなかった為に、誰の家系とまでいわれている。そんな中、中村氏の末裔といわれる花泉町四日市場の中村氏から、中村系譜の写しを紹介して頂いた。この中村系譜であるが、系譜を一般史料として示すには、決定的な確証がないのが実情であり考証が必要ではあるが、少ない文献の中でこれが占める割合は大きいと感じるし、参考資料としても取り上げてみようと思う。中村氏系譜の一部解説は紫桃正隆氏の『戦国大名葛西氏家臣団事典』に記されているが、下記に中村城初代城主氏房の部分のものを中村系譜から引用し、ここで補足したいと思う。

弘安元年正月近侍於將軍右大將惟康親王以有勳績於□之巣井郡賜食邑三千余町居於同郡流莊中村邑同八年十一月十七日將軍惟康大王伐秋田城介藤原泰盛之叛時先登有出衆之功同九年二月徒於中村館時將軍家命氏房曰汝農祖中村武藏守將常者勤労於王家而伐凶（？）徒顯武譽於天下如汝奉（？）受封於中村宣改称号為中村揮武威於邦內傳佳名後既矣因以為中村氏

家紋 旗旌 赤地黒七星 椎幕 二葉柏又舞鶴

正和三年七月二七日卒年五一

法名俊翁字秀岳号廣智院母相馬九郎平茂胤女

内容は、氏房が弘安元年に、右大將惟康親王により流の中村の約3000余町の領地を賜り、中村氏を称することになったとある。ここで気になるのが将常なる人物と、中村を称することになる経緯である。

将常は、氏房と同じ桓武天皇の流れをくんでいる平将常（将桓とも）のことであると思われる。奥州葛西家の祖である葛西清重は、秩父平氏の豊島康家の二男であった。この秩父平氏の祖が武蔵権守将常といわれている。秩父平氏のはじまりは、将常が秩父郡中村郷に居住した時からのようであり、その後、秩父平氏は勢力を拡大し活躍していくことになるわけであるが、その将常と、氏房の姿を惟

康親王が重ねあわせていたようである。同じ中村という名の地に居を構えることになった氏房に、中村というのはとても縁起の佳い名前であると勤め、中村氏房と称することになったことが読み取れる。

千葉栄氏の『奥州磐井高倉荘之歴史』には、「千葉家人中村時実の養子家督となり、流懸の須崎館に移住」と記しており、流の日代であった中村氏が、しばらく途絶えていたところに、御家人の配置仕置きとして氏房があてられたとのことである。中村系譜に記されている内容と食い違う点があるが、系譜が一級史料と確証できないため、これだけで判断するわけにはいかないが、「中村館」という所に住んでいた中村氏の養子となり中村を称したかは、今後も考察が必要である。

また、城館の様子をみると、中村城は須崎館とも称され『仙台領古城書上』には、中村の項目に「中村城 二十四間 二十三間 城主千葉相模。」、『風土記』には「須崎館 東西廿四間 南北廿三間 右城主葛西御家臣千葉相模」と記されている。同時期の周辺城館の中では、中村城以外はすべて山城である。分布調査等で二接城・朝日館・上油田城・峰城・高山館・高森城などには空堀・土塁も確認されており、まさに山城として全体を俯瞰できる高台に立地していた。しかし中村城は丘陵でもない場所で平城の形をとっていた。今回の調査区付近より北西方向にある丘陵先端部に、頂上を削平したような所に榮館の地名が残っている。花泉教育委員会『花泉町文化財調査報告書第5集』によると、この場所が緊急時を考え詰の城を榮こうとして未完に終わった地ではないかとしているが調査等は行われていない。

町内に中村氏所縁のものとして、花泉東鹿野の天満社がある。天満社は磐井郡中村鎮守天満宮として昔原道真を祀っているが、この勲進が中村城の3代目城主信房であるという。口碑伝説によると、応永34年（1427年）日照りに苦しむ人々のために信房が7日間の精進雨乞いをした。すると祈願が成就し、大雨が降り、雷雨とともに光が降下した。その光のもとに信房が祠を建て、日頃信仰していた天満宮を祀ったということである。天満宮には、「天満社御勲進棟札写」があり、これは、明治30年（1897年）官殿屋根の改修工事時に発見された棟札の写しである。その時の官殿が、宝永7年（1710年）9月25日に造立されたこともこの棟札からわかった。また、この宝永の造立時に書かれたと思われる系

第3表 中村氏系譜と姻戚関係

代	名前	字名	没年	法名	姻戚関係
1	氏房	中村二郎	1314（正和3年）	像清字秀岳號廣智院	女：岩瀬経清の妻 女：島四信方の妻
2	魏房	中村小三郎	1352（文和元年）	明翁字施山號宗實院	
3	信房	中村平三郎	1382（永徳2年）	延壽字道瑞號稱大祥寺	
4	供就	中村弘治郎	1369（応安2年）	正の字瑞○號質樂院	平姓奈良坂延清男
5	信義	中村太郎三郎	1416（応永22年）	明智字惠光號常心院	女：島西持信の妻 女：奈良坂軍督の妻
6	信周	中村弥四郎	1440（永享11年）	節嚴字寛忠號淨光院	男：清水家家老（家重）藤姓奈良坂初代？
7	信定	中村弥四郎	1471（文明3年）	道虎字蘿山號長福院	
8	信清	中村八郎	1518（永正14年）	宗英字蘿山號德壽院	男：分家永井中村祖（信行） 男：清水家相続（信貞→重光） 側室男：金沢氏入姫（通姫→常正） 通姫女：寺崎時継の妻 妻：岩瀬真経女 妻：大原広忠女
9	信氏	中村弥八郎	1547（天文15年）	淨翁字清岳號眞觀院	女：中村重信（永井）の妻
10	信常	中村弥八郎	1561（永禄3年）	真翁字實岩號顯他院	女：寺崎正徵の妻 妻：寺崎時継女
11	信方	中村弥太郎	1554（天文22年）		金沢胤正の男
12	常弘	中村弥七郎	1611（慶長15年）	玄翁字淨岩號清光院	

（千葉栄氏『奥州磐井郡：流懸中世葛西頃親族検証系譜』を参考に作成したもの）

諸が存在し、この中に信房の名前を見出すことができる。その系譜によると、応安7年（1374年）天満社の初代となった人物が、国内を修行し中村に戻り、信房の勧進した天満社の職に就いたとある。また、信房が「祭田数町ヲ附す」とも記されている。

こうなると疑問が生じるのは、口碑伝説であるが、信房は、中村系譜によると永徳2年（1382年）に没したとされている。そのため、この応永34年の雨乞いによる勧進という点は、年代がさかのぼることが考えられるのではないだろうか。

さて、こうして中村の地に根をおろし着実に固い地盤をつくっていたわけであるが、千葉栄氏作成の『奥州磐井郡：流懸中世葛西頼親族検証系譜』を参考に見ていくと、周辺の諸氏と多くの姻戚関係を結んでいたようである。千葉氏の作成した系譜と、先述した中村系譜をもとに作成した中村氏姻戚関係系譜表を前記に示しておく。

（4）中村氏の終焉

こうして中村氏は、初代氏房より常弘まで12代およそ300年の間続いた。

天正17年（1589年）、豊臣秀吉は全国の諸大名を巻き込んで小田原攻めを実行した。奥州の諸大名もまた同じであったが、これに参陣した伊達・相馬・南部・津軽の諸氏は所領安堵とされ、参陣しなかった葛西・大崎・和賀・稗貫の諸氏は追放となつたのである。『岩手県史』によると、葛西氏も当初は参陣する予定であったが、領内での争乱の心配があり参陣のタイミングを逃したようである。天正18年（1590年）秀吉は、奥州仕置きを端に、木村弥一郎・蒲生氏郷の軍にこの地を攻めさせた。『花泉町史』には少なくとも17名の武将がこの戦に関わったと史料から導き出している。つまり、ほとんどの武将が、この戦で敗れ農民などになり一家離散していくことになったことが想像される。葛西氏もまた追放・居城没収となり中村氏も共に没落し、およそ300年居住した中村の土地を追放された。12代常弘は、父信常が亡くなつた時まだ7歳であったが、外舅の寺崎信繼の協力もあって多くの軍功をあげたと系譜には記されており、没落後は一閑昌で慶長15年（1611年）に没したとされている。この奥州仕置後の中村城には、木村吉清の家人なる人物大内源内が配されていたと『小野文書』に記されている（花泉教育委員会1985）。しかし、その後の中村城について詳細は不明である。

秀吉の天下統一の野望の前に、全てを失つた葛西氏は平安時代末から400年も治めていた土地を奪われ滅んでいった。かつての葛西家臣たちは、葛西家の再興を願い、その目印として家の門前にサイカチの木を密かに植えたという。サイカチは「葛西勝つ（カサイカツ）」になぞらえたものである。現在の花泉町内にそれが残っている所があるそうである。

中村城跡は度重なる土地改良事業に伴い、基盤整備が行われ城址と偲ぶ様相は失われている。開田以前のその場所にサイカチの木が植えられていたかどうかは、今となってはわからない。（佐藤）

注：1 『花泉町史』によると、流鄧は、「古代の高倉莊を踏襲した地域で、中世は葛西氏の支配地であった」としている。近世には伊達領になっている。

また、『岩手県史』には、流十五郷と称し「長井（後世東・西に分ける）、涌津、上浦田、下油田、姥島、奈良坂、志津、金森、中村、金沢、神、男沢、日形、富沢、柏生」が、これにあたるといふ。しかし、南北争乱後、度重なる争乱に巻き込まれ、領域が動き継げた地域であり郡郷の名称が変転し、判断し難いとしている。

注：2 伊藤博幸氏が提唱した説によるもので、肥沢城造営後の延暦23年（804）頃までに、磐井・肥沢・江刺の三郡は同時に置かれて肥沢城の支配下になったとされている。

注：3 清原氏は「磐井郡の成立」の中で8C当時の磐井郡には人口が少なく地域勢力も乏しかった為、磐井郡を1郡とせず柴原郡の一部とし、伊治城廢絶を機に分置されてから肥沢城に支配されたとしている。

注：4 高倉莊は 岩ヶ崎・猪飛来・石越・水井・若柳・川北・奈良坂・三の迫・金森・中村・金沢・清水・富沢・揚生・日

形・男沢・崎・涌津・姫島・上油田・下油田」(「花泉町史」)の村々であったと思われ、現在の磐井郡南部と栗原郡北部周辺である。

引用参考文献

- 朝尾直弘ほか編 1996 『新版日本史辞典』
岩手県 1971 『岩手県史 第三巻 中世篇下』
佐藤正助 1979 『葛西四百年』
紫桃正隆 1972 『史料 仙台城内古城館・第1巻』
紫桃正隆 1990 『戦国大名葛西氏家臣事典』
音原市兵衛 1916 『磐井郡元流郷村史』
千葉栄 2008 『奥州高倉莊之歴史』
花泉町教育委員会 1971 『貝塚貝塚』
花泉町教育委員会 1993 『花泉遺跡』
花泉町教育委員会 1985 『花泉町文化財調査報告書第5集』
花泉町教育委員会 2005 『中村城跡発掘調査報告書』
花泉町史編纂委員会 1984 『花泉町史(通史)』
酒原智幸 2005 『磐井郡の成立—平安初期陸奥北部の境界領域—』
『和名類聚抄』
『吾妻鏡』
『陸奥誌記』(2002年『新編 日本書紀全文集』による)
『仙台城古城書上』(1923年『仙台築雪第四巻』による)

III 調査・整理の方法

1 野外調査方法

(1) グリッド設定

中村城跡の調査区域は北西から南東の直線上に約440m、幅15~16mで、道路幅分（2車線+歩道分）の帯状の形状を呈している。このうち、北区と中央区が約100m離れており、北区が飛び地となっている。

グリッドは調査区の形状に合うように設定しており、国土座標X系から36.8度西に振り、調査区全域をカバー出来るようにグリッドを設定した。大グリッド（5×5m）は長軸方向に算用数字1～94、短軸方向にアルファベット大文字A～Dである。また、小グリッドは大グリッドを2.5×2.5mで4分割し、長軸方向を北とした場合、北西隅を起点として、東西方向に1・2・3・4とした（例：1 A 1 グリッド）。なお、基準点の成果値は以下の通りである。

第4表 基準点位置

基準点	グリッド	日本測地系			世界測地系			緯度・経度	
		X	Y	H	X	Y	H	北緯	東経
P1	5C1	-129159.426	30802.685	23.812	-128851.104	30502.077	23.812	38°50'19"	141°11'04"
P2	9C1	-129175.415	30814.700	23.786	-128867.093	30514.092	23.786	38°50'19"	141°11'05"
P3	41C1	-129303.324	30910.821	22.737	-128965.000	30610.209	22.737	38°50'14"	141°11'09"
P4	45C1	-129319.313	30922.836	22.451	-129010.990	30622.223	22.451	38°50'14"	141°11'09"
P5	71C1	-129423.240	31000.934	22.440	-129114.916	30700.318	22.440	38°50'11"	141°11'13"
P6	75C1	-129439.228	31012.950	22.607	-129130.903	30712.333	22.607	38°50'10"	141°11'13"

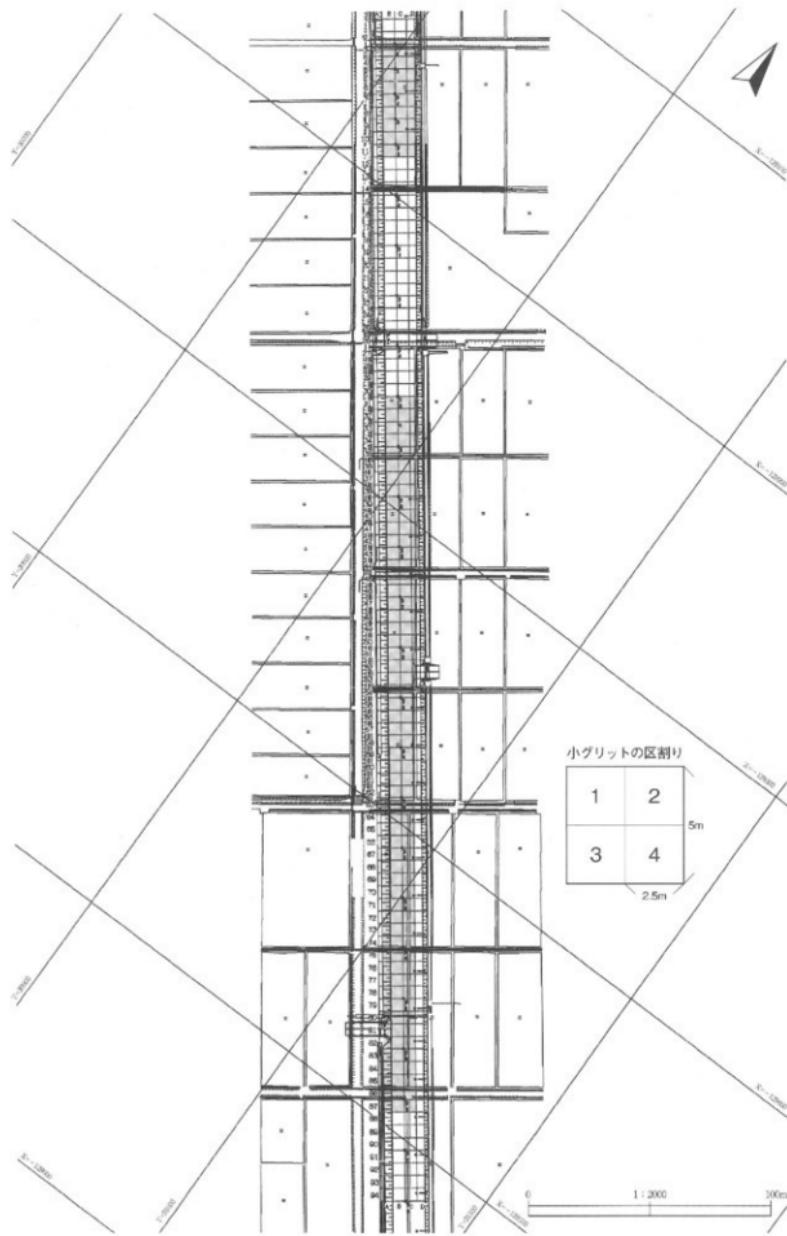
(2) 本調査と調査以前の工事部分の取り扱い

調査は委託者である一関総合支局土木部との打ち合わせと地域住民との話し合いから、農作業用道路を確保するため、全面通行止めせずに実行することになった。調査は北区の飛び地を平成20年5月1日～6月15日、中央区・南区を平成20年6月16日～終了までと期間を分けて部分通行止めして行った。北区の調査が終了した平成20年6月12日には、北区750mについて部分終了確認を行い、部分的な埋め戻しを行って道路分を確保した。また、南区についても63グリッド付近から90グリッドまでの西側に道路を確保した上で、これ以外の調査を行い、遺構が確認された箇所までを短期間部分通行止めにして調査する措置などを講じながら進めた。よって、調査は区域ごとに調査→道路切替→埋め戻しを繰り返しているため、全面調査よりも時間が多くかかった。

調査はまず地形の状況と地層の堆積状況、遺構の有無、遺構・遺物集中区域の確認と把握を目的として、任意に約10～15箇所の2×2mトレンチを設定し、人力で試掘調査を行った。前述の経緯もあり、本調査を北区→中央区→南区と進めたため、試掘調査もこれに従って行った。

北区の試掘調査は当初中央にあった碎石道両脇の部分に各々3箇所ずつを設定して開始した。この段階で、調査区域の東側に沿って直径約200mmの水道管（本管）がすでに埋設してあることを確認した。パイプは幅2～3m、深さ1mが掘削されて埋設されており、これより上部はすでに破壊されていた。

水道管理設工事は花泉バイパス予定地に花泉町水道課（現一関市花泉町）により行われており、調



第7図 グリッド配置図

査区全域（長さ440m）にすでに埋設されている状況であった。遺構検出面は現地表から60~70cmの深さにあり、調査することなく破壊されていた。

水道管理設部分の調査については、県生涯学習文化課の判断を仰ぎ、遺構・遺物が残存する場合は水道管際まで調査を行うこととした。遺構検出面まで表土除去した段階で、工事の痕跡（重機によって埋め戻された跡）が確認された場合は水道管埋設部分の表土は除去せず、擾乱扱いとしている。

中央区から南区の試掘調査は、前述の水道管埋設部分の範囲確認を兼ねて、調査区東側を中心に等間隔に設定した。調査区全域に観察される事項であるが、調査以前の圃場整備により遺構検出面は広範間に削平されており、一部では削平された遺構検出面に重機のキャビタ跡も確認されるなど荒れている状況が認められた。南区の80グリッド付近には、調査区を横断して約1×1mマスの用水用折形コンクリート管がすでに設置されていた（下位には6号河川跡）。

上記の状況から、調査区の大部分は圃場整備時に整地された際に削平・整地の影響を受け、その後の水道管・用水管工事でも擾乱されている。よって、I層現表土（碎石など道路路盤・盛土など圃場整備による整地層）50~100cmの下は、削平された遺構検出面（褐灰色砂質土など）となる。

調査は前述の通り、北区から順次南に向かって行うこととした。試掘調査の成果をもとにII層旧水田耕作土・盛土（部分的）、またはIII層褐灰色砂質土（北区）、IV層暗緑灰色細砂（中央区以南）のいずれかまでを重機（バックホウ0.45・1台）により掘削した。また、調査の進捗により堆土場が離れ場合は運搬にダンプトラック4t・1~2台、堆土山整地のためバックホウ0.25・1台を併用した。合わせて、岩手県教育委員会生涯学習文化課が平成14年12月2~12日、平成18年12月11日の2回行った試掘調査の際に重機で掘削したトレンチも掘り下げを行い、堆積を確認した。

重機による表土除去を行った後、人力によってジョレンがけなど1次遺構検出を行い、検出した遺構から随時精査を行った。また、区域ごとに重機による深掘りを行い、下位の堆積状況と遺構の有無を確認したが、湧水が著しいIV層以下は自然木が多量に出土するものの、人工的な遺構・遺物は認められなかつた。

調査方法については、大型遺構の調査は四分法で、その他の遺構については原則的に二分法で行い、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、上層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を同時に実施した。実測は遺り方測量、光波トランシットによる測量を併用した。

なお、野外調査時点で付した仮名称と異なる性格の遺構種類となる場合は、室内整理時点での遺構名を変更している。

遺跡・遺構・現場出土遺物の写真撮影については、キヤノンEOS5D（デジタルカメラ・1200万画素）とニコンFM2（35mmモノクローム）、中判ペンタックス6×7cm判（モノクローム）を使用した。また、平成20年10月23日には調査区域全体の航空写真撮影を実施した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、水田跡・堀跡・溝跡は1/50、水田跡微細図は1/10、その他他の遺構や土層断面なども種類や規模により1/50、1/100、1/200などの縮尺を用いて遺構実測図（第一原図）を作成した。なお調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。遺構外出土分はグリッドごとに出土層位を記し、I A 1・III層上位など記載して取り上げた。ただしI層現表土出土及び表探は大グリッドのみのものもある。

2 調査経過

5月1日調査開始。現場設営。5月2・7日北区から調査着手。試掘。防護柵設置。試掘により水道管が埋設されていることを確認。遺構検出面を掘り込んで埋設されているため、この部分は搅乱されていると判断。5月8～13・16・23・26日北区の重機による表土除去作業。並行して1次検出。To-aテフラを含む2号土坑・炭化物を多量に含む1号堅穴住居跡を検出。北側は低地（河川跡）を想定するが、北岸付近から遺物多量出土。5月16日北区の基準点設置。一関市教委後藤円氏が来跡し、平成15年度調査範囲などを教えて頂く。5月20日未明からの降雨により調査区向臨を走る水路から調査区が冠水。5月21日～6月26日北区遺構精査。1号河川跡北岸は捨て場と判明。平安時代の遺物が多量出土。6月12日北区750m²の部分終了確認。6月9～23日中央区の重機による表土除去作業。6月14日岩手・宮城内陸地震が発生。一関市は震度5強、隣接する宮城県栗原市は震度6強。事務所内の物品の転倒などはあったが現場には影響なし。その後も余震が続く。6月17日想定以上に遺物・遺構があることから、遺跡範囲確認のため、生涯学習文化課による北区周辺の再試掘を行う。6月18日中央区の基準点設置。6月20～30日中央区の1次検出、2号河川跡精査。6月25日作業員4名増員。7月15～16日河川跡を想定していた中央区北端が水田跡と判明（1号水田跡）。7月11～14・18日長雨により調査区全域が冠水。7月22日1号水田跡が調査区外まで延びるため、事務所内で調査区を拡張。7月23・24日と降雨のため冠水。7月24日岩手沿岸北部地震が発生。一関市は震度5強。現場は影響なし。7～8月は天候不順により作業停滞。降雨→冠水→水汲みを繰り返す。8月後半まで中央区精査。8月4～28日南区の重機による表土除去作業。8月5日作業員8名増員。8月11・12日菊池強一氏（岩手大学）現地指導。8月19日降雨により冠水。8月21日当センター高木晃専門員水田調査現地指導。8月24・25日局地的な集中豪雨により現場全域が冠水、事務所・休憩所も床上浸水。8月26日～9月1日南区の遺構検出。1号水田調査も並行して実施。9～10月は天候が安定し、作業が進む。9月堀跡群の精査。堆積土がすべて粘土のため、掘削難航。木製品が多く出土し始める。9月9日吉川昌伸氏（古代の森研究会）、1号水田跡の花粉・植物珪酸体分析試料採取。9月12日降雨のため冠水。9月18・19日1号水田跡委託測量（株式会社北日本朝日航洋）。9月27日現地公開（71名参加）。9月25日から2号水田跡、6・7号溝跡の精査。当初は河川跡と捉えていたが、トレチチでの断面確認から水田跡と判明。9月30日から1号堀跡・2号堅穴住居跡の精査。堀跡は土量が多いため、残り調査期間を縮めて重機により上部を掘削。柱が並列する1号掘跡、東壁には土留めと思われる杭列を確認。10月10日吉川昌伸氏（古代の森研究会）、2号水田跡の花粉・植物珪酸体分析試料採取。10月14日から5～7号堀跡の精査を開始。木杭・柱が多量出土。1号柵状遺構を確認。10月23日航空写真撮影。10月24日終了確認。降雨により調査区全域が冠水。事務所・休憩所は床下浸水。10月29日から2号堀跡、1号柵状遺構の解体を開始。実測、杭・柱の取り上げ、梱包作業を行う。11月6日調査終了、撤収。

3 整理方法

（1）遺構の整理

遺構は現場で図化してきた遺構図面を第一原図とし、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が遺構ごとに第二原図を作成し、その上で手作業によるトレースを行った。

各遺構は、位置・規模・形態などの基礎データを抽出し、遺構一覧表を作成した。遺構図版は調査区域ごとに、北区・中央区・南区の順に掲載した。その中で各遺構種別に、竪穴住居跡、土坑・ピット、水田跡、棚状遺構、橋跡、堀跡、溝跡、河川跡の順で掲載した。

遺構名は現場段階で命名しているが、当初命名したものとの異なる性格の遺構となった場合や登録抹消となる場合がある。このため、室内整理段階で遺構名を変更して付け直している（第5表）。

（2）遺物の整理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。登録番号は整理で混乱が起きないよう、種類別に百・千番台の番号とした。

土器（土師器・須恵器）001～233・土製品301～307・陶磁器401～416・石製品3001～3007・木製品1001～1068・杭柱類1101～1194・金属製品2001～2015・錢貨2016～2041・骨角製品・骨角類4001～4007・炭化材5001～5030・種実6001～6113。

本報告書掲載にあたっては、これらに掲載番号を付し、図版番号・写真図版番号も合わせて記載している。観察表の（ ）内数値は残存値、〔 〕内数値は推定値である。

土器は水洗乾燥後、土師器・須恵器に仕分けし、収納袋ごとに破片数及び重量計測を行った。次に註記・遺構・層位・グリッドごとに仕分けを行い、接合作業を行った。その後、復元作業、掲載遺物の選別、登録、実測、拓影、トレイス、写真撮影といった手順で行った。土器は完形に復元できたものが少ないため、口縁・底部について残存率を観察表に示した（完形を100%とし、5%刻みで表したもの）。

掲載土器は、遺構内出土は遺構帰属時期決定のため細片でも登録した。遺構外出土は種類・器種別に仕分けした上で、器形を推定できるものを優先して掲載した。底部外面に糸切り痕など痕跡がある場合は拓影を作成し、掲載した。

土製品・金属製品・錢貨は、登録した遺物すべてについて図化または拓影し、掲載した。

陶磁器は、中世～近世・近代に比定される遺物がある。中村城の存続期である中世と考えられる遺物はすべて掲載することとし、近世・近代のものについては図化・掲載しなかった。

石製品は、登録した遺物について可能な限り図化・拓影を行い、掲載した。

本製品は、本県での出土例が限られるため、すべて登録し図化した。また、杭・柱類についても類例が稀少な資料であるが、整理時間の都合上、特徴的な約1/10の資料のみ図化し、他は写真・観察表のみ掲載とした。棚状遺構の棚については多量であるため、現場段階で代表的な資料のみを選別し持

第5表 遺構名変更表

測定区	掲載遺構名	野外調査での仮遺構名
北	1号竪穴住居跡	1号住居
北	1号土坑	1号住居状遺構
北	1号河川跡	1号川河道
中央	1号ピット	1号ピット
中央	1号水田跡	1号水田
中央	1号溝跡	2号溝跡
中央		3号溝跡
中央		4号溝跡
中央	2号溝跡	11号溝跡
中央	3号溝跡	12号溝跡
中央	4号溝跡	13号溝跡
中央	2号河川跡	1号溝跡
中央	3号河川跡	5号溝跡
中央	4号河川跡	6号溝跡
中央	登録抹消	3号旧河道
中央	登録抹消	1号土坑
中央	登録抹消	2号土坑
中央	登録抹消	3号土坑
南	2号竪穴住居跡	2号旧河道
南	2号土坑	4号土坑
南	2号水田跡	2号水田
南	1号棚状遺構	棚羽
南	1号棚跡	1号土橋
南	2号棚跡	未命名
南	1号棚跡	1号棚跡（4号旧河道）
南	2号棚跡	14号溝跡
南	3号棚跡	9号溝跡
南	4号棚跡	8号溝跡
南	5号棚跡	7号溝跡
南	6号棚跡	18号溝跡
南	7号棚跡	19号溝跡
南	5号溝跡	10号溝跡
南	6号溝跡	15号溝跡
南	7号溝跡	17号溝跡
南	8号溝跡	16号溝跡
南	5号河川跡	20号溝跡
南	6号河川跡	6号旧河道
南	登録抹消	7号旧河道
南	登録抹消	4号旧河道
南	登録抹消	5号旧河道

4 整理経過・5 広報活動

ち帰った。

骨角類は調査員による肉眼観察を行った上で写真掲載とし、製品のみ図化掲載した。

炭化材は、肉眼による炭化材同定用にサンプルを持ち帰り、同定した種類のみを記載した。

種実は、採取資料すべてを種実同定用とし、計測した上で外部委託による分析を行った。

(3) 写 真 摄 影

遺物写真は、当センター写場にて写真撮影技師岩間和幸が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ(Canon EOS 1)を使用し、大型遺物(杭・柱など)は倉庫に撮影機材を搬入し、特設セットを組んで撮影を行った。

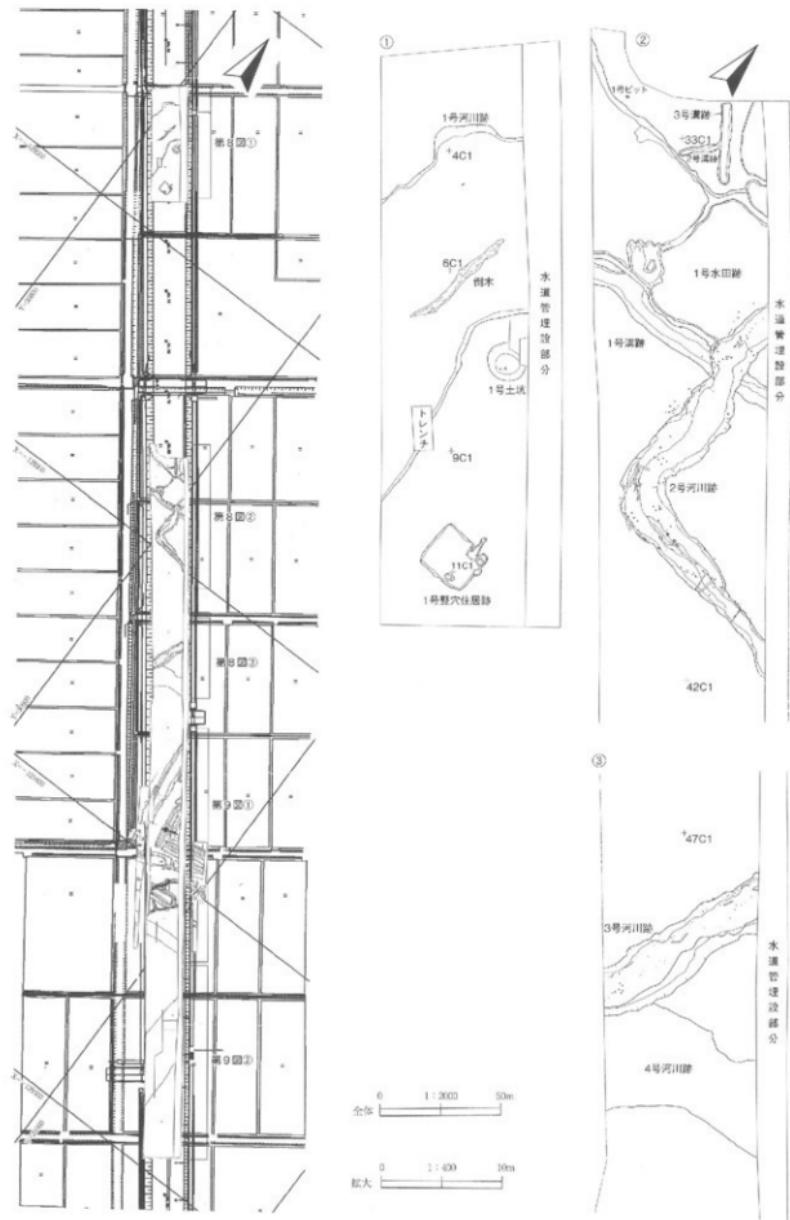
4 整理経過

平成20年6月16日～8月25日、9月4日～10月31日、11月1日～平成21年3月31日の期間で室内整理作業を行った。夏場の6月16日～10月31日は作業員2～3名体制で行ったが、調査と並行しながらであるため、調査員不在であった(週末に指示)。主な作業は、土器類の洗浄・註記・接合・復元、木製品の洗浄・保存のための仮処理などである。11月1日からの冬場の作業は5ヵ月間のうち11月は1名体制、これ以降は2名体制である。主な作業は、各遺物の実測・トレース、造構第二原図作成・トレース、写真撮影、版組み、原稿執筆など報告書作成全般である。

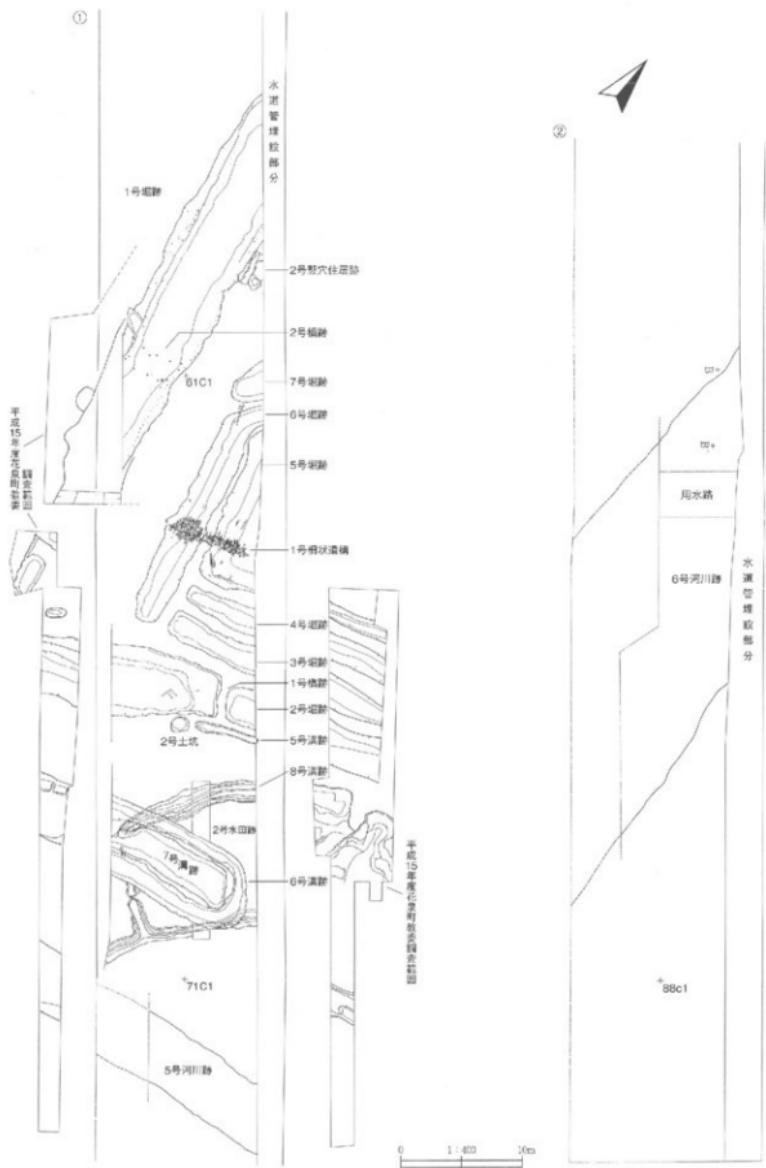
5 広 報 活 動

現地公開 平成20年9月27日(土)13～15時 71名参加

調査概報『平成20年度発掘調査報告書』岩埋文第546集 2009年3月発行



第8図 造構配置図(全体・拡大①~③)(1)



第9図 遺構配置図(拡大①・②)(2)

IV 検出した遺構と遺物

1 全体の概要

今回の調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡2棟・土坑1基・ビット1個・水田跡2地点・溝跡2条、平安時代または平安時代～近世・近代の河川跡6ヵ所（うち1ヵ所に土器捨て場）、平安以降の溝跡2条、中世の堀跡7条・橋跡2基・溝跡3条・土坑1基・柵状遺構1基である。

遺物総量は、平安時代の土器大コンテナ11箱・土錐5点・鉄錐2点・木製品2点、中世の陶磁器小コンテナ0.5箱・埴輪1点・板碑2点（うち1点に延文5年銘）を含む石製品7点・銭貨25点・漆椀や曲物、下駄などの木製品約60点・杭や柱多量、近世以降の陶磁器小コンテナ1箱・蹄鉄や煙管など金属製品小コンテナ1箱・杭多量・自然遺物（種実中コンテナ1箱・獸骨少量）が出土した。

調査区は調査の進行上、便宜的に北区・中央区・南区の3つに区分している。北区（2～11グリッド）は竪穴住居跡や河川跡（土器捨て場）などが検出されており、平安時代の遺構が集中する。中央区（31～52グリッド）は北側に平安時代の水田跡4区画約300m²があり、十和田aテフラ直下の田面には人や牛馬の足跡や耕作痕が残っている。南側には南北に走る河川跡がある。南区（53～87グリッド）は中世を中心とする区域で、幅7m・深さ1.5mの堀跡で囲まれた内部に幅2m・深さ1.5mの並列する堀跡5条が見つかっている。外周する堀跡は一部途切れる箇所があり、橋跡と考えられる。これら中世の遺構は中村城跡に関連する可能性がある。また、平安時代の水田跡2区画約150m²（2面）が検出されている。

事実記載は北区・中央区・南区の区域ごとに行い、それぞれ竪穴住居跡、土坑・ビット、水田跡・柵状遺構・橋跡・堀跡・溝跡、河川跡の順で記述した。近接遺構のため、記載順を変えている部分がある。

2 北 区

(1) 竪穴住居跡

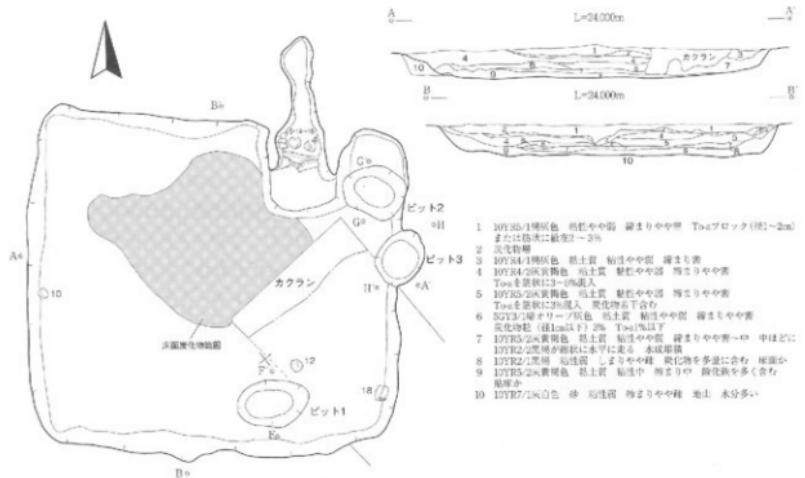
1号竪穴住居跡

遺構（第10・11図、写真図版7～9）

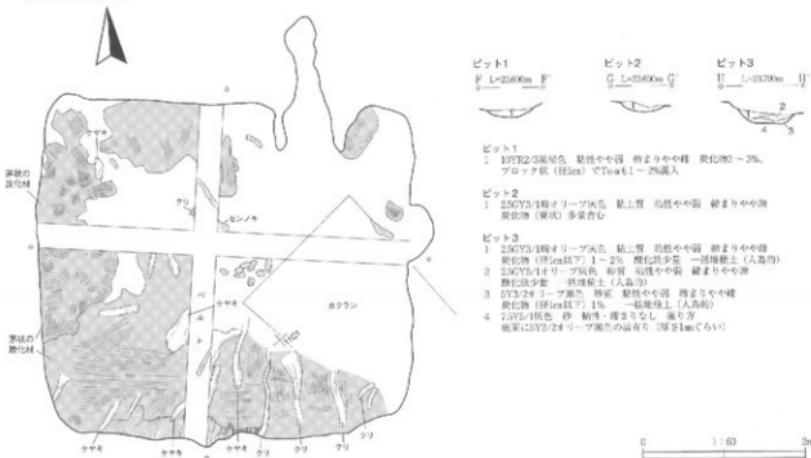
北区南側の10C3に位置する。北区では本遺構以外の住居跡は見つかっていない。1号土坑とは12.5m、1号河川跡とは5.5mの距離にある。I層表土、若干残存するII層旧水田耕作土を除去したIII層上面で褐灰色の方形プランとして検出した。検出段階からプラン際や堆積土中に多量の炭化物が認められた。

平面形は南北壁がやや長い隅丸方形を呈しており、規模は北壁4.30m、東壁3.60m、南壁4.05m、西壁4.10mである。西壁は中央がやや膨らんだ形状をしており、地山が砂質のため崩れている。住居主軸方向はN 7° Eである。壁高は北壁35cm、東壁20cm、南壁32cm、西壁26cmが残存で、壁は外傾しながら急斜度に立ち上がる。

堆積土は上位から10層に細分され、ほぼ水平に堆積している。2層炭化物層は堆積土の中でも上位に形成されている。1・3・7層は褐灰色粘土質土、4・5層は灰黄褐色粘土質土、6層暗オリーブ灰色粘土質土、8層炭化物を多量に含む黒褐色粘土質土、9層灰黄褐色粘土質土で構成される。1・

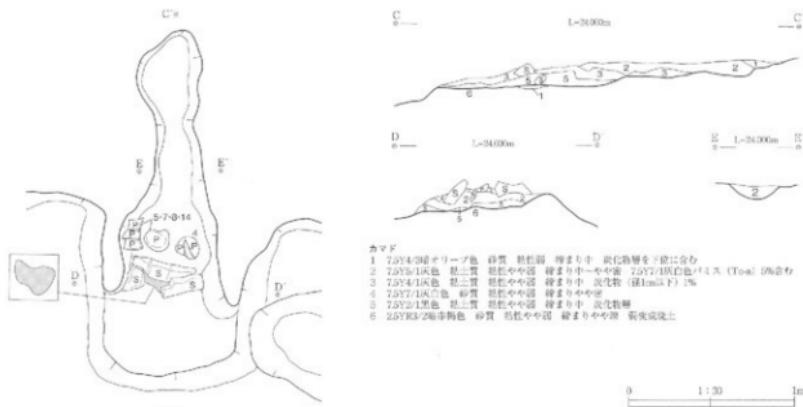


炭化材出土状況



第10図 北区・1号竪穴住居跡（1）

3・4・5層にはいずれも To-a テフラが筋状に 1~5%、7 層の層中ほどには炭化物を含む黒褐色粘土質土が水平に筋状に認められることからも 1・3~8 層は水成堆積した可能性が高い。9 層は当初貼床とも考えたが、地山との境界が曖昧な点や酸化鉄を多量に含むことからも壁崩落層もしくは廃絶後の流入層と思われる。床面を構成する 10 層灰色細砂は水分を多量に含んでおり、軟質である。



第11図 北区・1号堅穴住居跡（2）

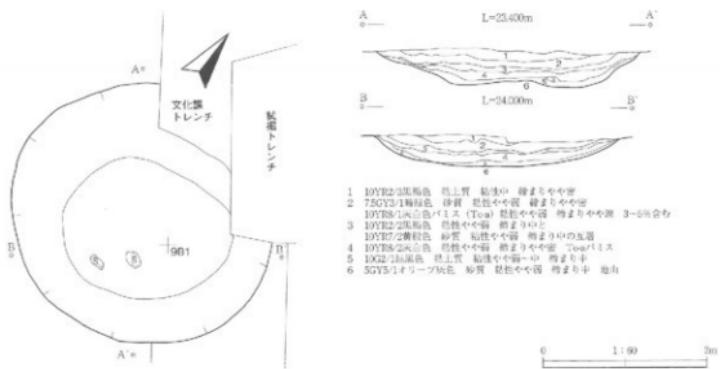
2層炭化物層の平面状況図を第10図下段に示した。広範囲に茅と思われる炭化物と放射状に並列する炭化材、南から西壁を中心認められた草壁状の炭化物のまとまりなどが確認された。炭化材は大半がクリ・ケヤキで、他にセンノキなどがある（炭化材同定）。茅状の炭化材は屋根に葺いていたものと思われ、放射状に並列した炭化材は屋根材の骨格と考えられる。炭化範囲はカマド付近に少なく、これ以外が多い傾向にあることはカマド付近がより燃焼したことを示していると思われる。これらの事項から本遺構は失火などにより焼失した住居であると言える。

カマドは北壁東寄りに1基設置されている。煙道方位は真北。床面よりも10~15cm程度高く作られており、台状を呈している。袖の残存部分は住居構築後に作られたと見られ、灰色粘土質などで構成されている。両袖は壁からほぼ平行に50cm程度に延びており、残存した袖の先端付近が焚き口を成している。この箇所の底面には25×17cmの不整形に拡がる焼成面が形成されている。燃焼による影響は深さ2cm程度と浅く、暗赤褐色に焼成されている。焼成面上には40×10cmや25×8cm、17×10cmの角窪が認められ、天井石を成していたものが崩落したと考えられる。焼成面より10cm奥には5~10cmの間隔で並置された2個の直立した亜円窪が認められ、支脚を成していたと思われる。支脚には廃絶時に置かれていた4・5・7・8・14土器が覆い被さるように出土している。煙道は全長で125cm（支脚からの距離）、先端は中央より拡がっている。煙出し孔の直径は約40cm程度と見られ、深さの残存値は約10cmと浅い。焼成面から徐々にレベルが高くなる作りになっている。焼成面直上には炭化物層が形成され、灰色粘土質が覆ってTo-aバニスを含むことから、廃絶後しばらく経過した後に焼失したものと捉えられる。

床面にはピット3基が作られている。南壁付近に90×60cmの梢円形ピット1、カマド東隣に78×67cmの梢円形ピット2、そのすぐ南に72×54cmの略円形ピット3がある。このうちピット3は人為的に埋めた形跡がある。また、柱穴は検出されなかった。

遺物（第35・36図、写真図版50・51）

遺物は床面及びカマド、炭化物層付近を中心に出土している。計18点を掲載した。床面は西壁際に10壺、南東隅付近に12壺・18瓶、5壺・14~16壺、ピット3に13壺などがある。遺物量は多いが接合



率は低い。10杯と17壺、18瓶を除きロクロ使用の土師器で、杯11点、甌1点、壺6点である。杯は11点のうち、1～3・6・9～11の7点が内面黒色処理を施したもので、4・5・7・8の4点は非黒色処理である。11は「問」墨書き土器、12～17壺、18瓶で、甌類は体部外面にヘラケズリ調整、内面にはハケメ、瓶は体部外面に輪積み痕跡を明瞭に残し、内面はヘラナダ調整される。内面には無貫通孔が残存部分で3箇所認められ、細工をしたものと思われる。他にカマド付近からモモ2個を出土した。

(2) 土 坑

1号土坑

遺構（第12図、写真図版10）

北区中央東の9B1に位置する。1号河川跡とは2m、1号堅穴住居跡とは12.5mの距離にある。試掘段階からI層表土直下（層厚60cm）にTo-aテフラを含む何らかの遺構があることは認識していた。表土除去後のⅢ層上面で、To-aテフラを含む黒褐～暗緑色の円形プランとして検出した。

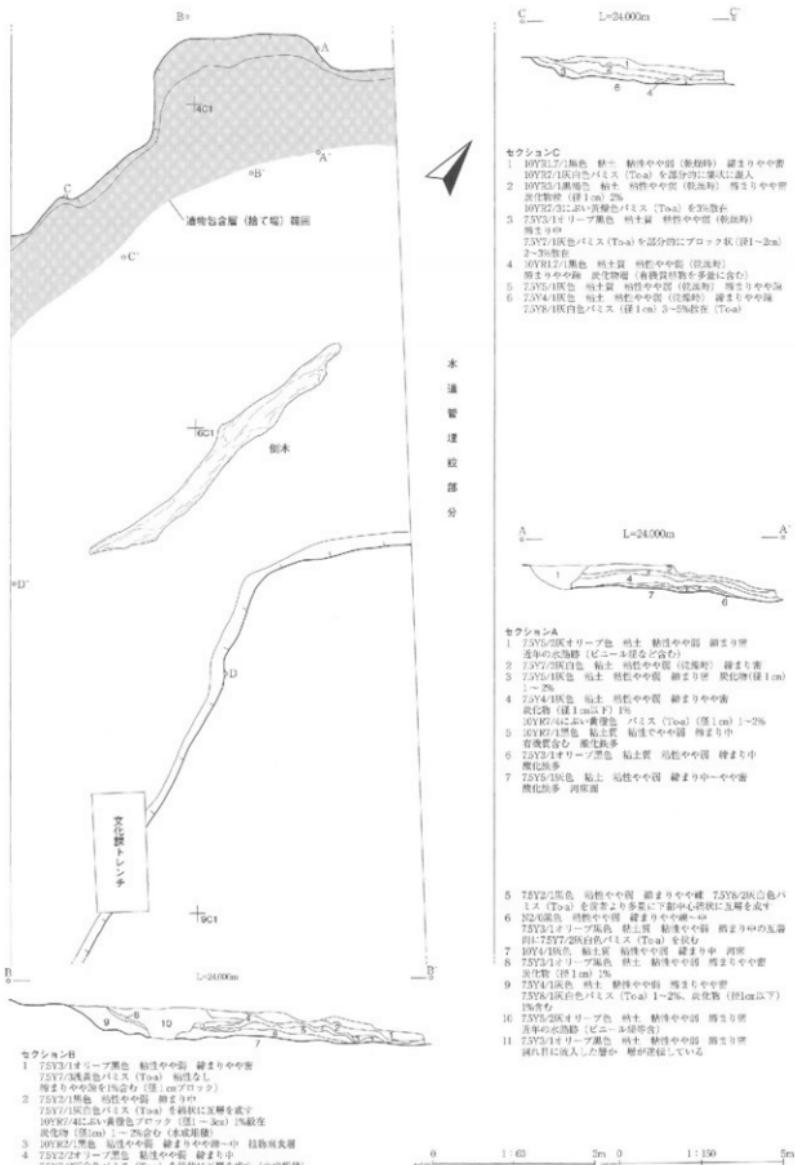
平面形はほぼ円形を呈しており、開口部が $3.20 \times 3.18\text{m}$ 、底部が $2.07 \times 1.73\text{m}$ である。北～東壁までは文化課トレンチと今回調査の試掘トレンチで壊されており、開口部は一部推定値である。深さは中央付近で44cmを測り、壁は外傾しながら緩やかに立ち上がる。断面形は皿状である。

堆積土は上位から5層に細分され、水平・レンズ状に堆積している。1層は黒褐色粘土質土、2層は灰白色のTo-aパミス3～5%を含む暗緑色砂質土、3層は黒褐色と黄橙色砂質土の互層、4層はTo-aパミスの純層、5層は緑黒色粘土質土、6層はオリーブ灰色砂質土の地山である。3層はラミナ構造、4層To-aパミスは層中に水平の筋が認められることから、水成堆積していると考えられる。

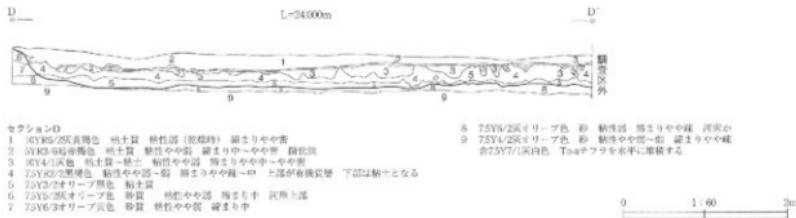
底面には20cm大の亜円標2個が出土しているが、使用痕跡は認められない。底面にはTo-aパミスがひび割れに混入している。

遺物

1層中からモモ1個を出土した。



第13図 北区・1号河川跡・捨て場(1)



第14図 北区・1号河川跡・捨て場（2）

(3) 河川跡・捨て場

1号河川跡

遺構（第13・14図、写真図版11～13）

北区北側の3～9区の範囲に位置する。1号竪穴住居跡とは5.5m、1号土坑とは2mの距離にある。当初は北側の試掘により遺物を多量に出土することから竪穴住居跡群を想定していたが、I層表土を除去したII層旧水田耕作土、III層上面の検出から幅14～15mの河川跡であることが分かった。

精査はまず河川跡の範囲と深さ、堆積状況を確認する目的で調査区東際（長軸方向）と範囲西側（セクションD）に幅50cmのトレンチを入れた。この結果、深さ40～50cmで河床に達することが分かり、北岸は2～3m幅でオリーブ黒色粘土主体の遺物包含層であることを確認した。河床面に至ると、多量に湧水する状況も認められた。

平面形は北東から南に緩やかに曲がる帯状を呈しており、幅は東際で14.73m、中央で13.15mである。流れの方向は北から南に向かっていると考えられるが、中央からカーブした南側は河幅が拡がる。

堆積土はセクションDから5層に細分され、ほぼ水平に堆積している。全体に粘土で構成されるが、1層は灰褐色粘土で、2層は3層との接触で暗赤褐色化した酸化鉄層、3層は灰色粘土、4層は黒褐色粘土で上部が有機質の炭化物層、5層はオリーブ黒色粘土である。6～9層は灰オリーブ色主体の砂質土及び細砂の地山で、9層にはTo-aテフラが水平堆積し下位層準にTo-aテフラ純層が堆積する。これより下位はまた粘土・砂の互層が続く。全体にラミナ構造が認められ、水成堆積している。

河川跡のほぼ中央6C1付近から長さ10m以上、直径0.6～1mの倒木（196）が出土した。検出層位は9層に覆われる状態で出土し、上部をTo-aテフラで被覆されていることから考えて、テフラ降下以前に倒れて埋没したものと考えられる。倒木の向きは当時の河川の流れに沿うと思われる。樹種は同定結果からケヤキと判明した。

河川北岸に遺物包含層を1箇所検出した。遺物は北岸2～4m幅で確認されており、人為的に廃棄したものと思われる。層厚は30cm、河川中央に向かって薄くなる。面積は40m²である。

遺物包含層の堆積状況を確認する目的で、3箇所にトレンチを設定した。東から西に向かってセクションA～Cである。

セクションAは1～7層で構成され、1層は近年の水路跡、7層は灰色粘土の堆山である。2～4層は灰オリーブ～灰色粘土で炭化物粒を含み、特に4層はTo-aバミス1～2%を混入する。5層は黒色粘土質土で、草など水生植物の有機質の炭化物層である。6層はオリーブ黒色粘土質土で、酸化鉄を多量に含む。

セクションBは1~11層で構成される。10層は近年の水路跡、7層は灰色粘土の地山で、1~6、8、9、11層が遺物包含層である。1層はTo-aバミスを含むオリーブ黒色粘土、2・4~6層はTo-aバミスとオリーブ黒色~黒色粘土が互層を成す堆積層、3層は黒色粘土質土の有機質炭化物層、8層はオリーブ黒色粘土、9層はTo-aバミスを含む灰色粘土である。11層はオリーブ黒色粘土だが、近年の水路跡である10層が上部に入り込んでおり、水流の影響か層の逆転が生じている。

セクションCは1~6層で構成され、6層は灰色粘土の地山である。1層は黒色粘土、2・3層はTo-aバミスを含むオリーブ黒色~黒褐色粘土、4層は黒色粘土質土の有機質炭化物層、5層は灰色粘土質土である。

セクションA・5層、セクションB・3層、セクションC・4層はいずれも有機質炭化物層であり、河川全体のセクションD・4層と共に通する。また、セクションA・7層、セクションB・7層、セクションC・6層とセクションD・6~9層の灰オリーブ色~灰色の地山も共通する層位であり、これらの下位にはTo-aテフラ降下堆積層が存在している。遺物は各々のセクションで確認されたオリーブ黒色や黒色粘土主体で構成される層位全体に含まれておらず、To-aテフラとの水成堆積によるラミナ構造が認められることから、テフラが降下して河底に堆積した後にまもなく廃棄されたと見られる。

また、当時の水流はテフラを流す勢いが無い程に緩やかに湿地化しており、降下後沈殿したと考えられる。

遺物（第36~48図、写真図版51~64）

今調査で出土した平安時代遺物の大半は本造構の遺物包含層から出土したものである。

19~52・54~67・69~102・104~113は土師器壺である。19~52・54~70・73・95・97・102・105・108~112は内面黒色処理、74~94・96・98~101・104・106・107・113は非黒色処理。内面黒色処理の場合は、大抵ヘラミガキが合わせて調整される。いずれもロクロ成形であり、切り離し法は回転糸切りによる。38・105~113は墨書き土器で、106・107「有」、109「十カ」、112「閏カ」、38・105・108・110・111・113「□（不明）」が正面に書かれている。104底面に穿孔1箇所が施されている。53・68・114~134は土師器高台付壺である。53・68・114~116・118・125・128・132・133は内面黒色処理、117は内外面黒色処理、119~124・126・127・129~131・134は非黒色処理である。壺と同様に黒色処理の場合はヘラミガキ調整がなされる。115・119・128には壺底面と高台部分の接着強化のためにヘラによる切り込みや指状工具による刺突が施されている。また、117は高台接着部分を予め突出させる作りをしている。135は土師器鉢である。部下半にヘラケズリ調整。136は土師器壺である。内外面とも黒色処理されている。103・137~180は土師器壺である。163~167は内面黒色処理、103は内外面黒色処理、137~162・168~180は非黒色処理。大半は体部全体もしくは下半にヘラケズリ調整が観察される。137・145は底外面に木葉痕が認められ、非ロクロ成形と思われる。162・173・174も非ロクロ成形。178のように下半は輪積み積み上げだが、上半はロクロ成形というものもある。168・169は焼成以前に体部上半に線を刻んだ刻書土器。181は土師器瓶である。単孔の瓶で、口縁は切り落とした形態をしている。底面は平滑に削られ、鈎状に外側へ張り出している。外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナダ調整で底付近は粘土をナデ付けている。182~189は須恵器である。182・183は壺、184~187は壺、188は瓶、189は大壺である。壺・瓶はいずれも体部外表面下半にヘラケズリ調整が認められる。大壺は口縁~肩部付近のみのため全形は不明だが大型である。他にも同一個体と思われる破片があるが接合しなかった。190は手づくねかわらけである。今調査で唯一であるが、小片のため詳細不明。193は砥石。凝灰岩製。197は煙管の吸口部分。近世~近代と思われる。191は灰釉陶器瓶類、192は瓷器系陶器の壺である。灰釉は平安時代（9世紀末~10世紀前半）、瓷器系陶器は中世

の所産と思われる。194は剖物の白木椀、195は剖物の白木皿である。樹種はいずれもケヤキで、横木取りされている。椀は高台を作出している。皿は円形の台部を作出しており、一部残存した口縁から推定すると口径22.3cm程度と思われる。自然遺物は種実が多量出土した。種類は、オニグルミ、モモ、クリ、コハクウンボク、ヒヨウタンである（V-3種実同定分析）。

（4）北区遺構外出土遺物

登録6105はコハクウンボク内果皮である。5C区から17個出土した。

3 中央区

（1）水田跡

1号水田跡

遺構（第15～19図、写真図版14～19）
中央区北側の31～37区に位置する。I層表土を除去後のIV層上面でオリーブ黒色主体の拭がりとして検出した。当初は堆積土が粘土質の大きな拭がりのため河川跡と考えたが、中央付近の北西～南東にトレンチを掘削して確認したところ、平面的に拭がるTo-aテフラと畦畔（畦畔2）の高まり、付属する水路（1号溝跡）を検出した。これから、To-aテフラを被覆した水田跡を想定して精査を進めた。精査はまず被覆したTo-aテフラ上層の1層オリーブ黒色粘土・2層灰色粘土の除去から開始した。

精査着手点ではTo-a上層の2層はテフラ降下後の自然堆積層（水成）と捉えていたが、2号水田跡の状況などからTo-aテフラ降下後にも水田耕作を行っていた可能性を考えられた。

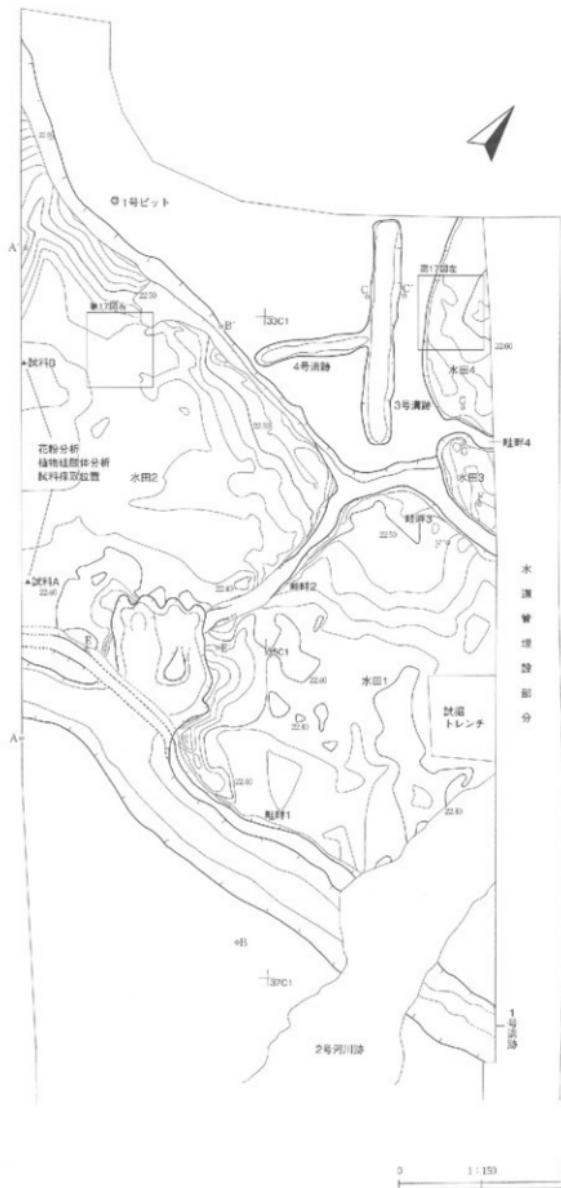
本遺構で確認された水田跡は水田1～4の4区画である。

水田1は35C1に位置する。区画は畦畔1～3に囲まれた区域である。検出範囲から東西方向は13.4m以上、南北方向は10.4m、面積は残存値で89m²、南側は後世に形成された2号河川跡により削られしており、東側は調査区外へと延びる。形状は不整な長方形である。田面の標高値は22.32～22.52mで北側が最も高く、南東隅付近が最も低いが、全体には22.40～22.50mの範疇が多い。

セクションA・1～2層を除去すると、全体を細粒の灰白色To-aテフラ一次堆積層で被覆されている（セクションB・13層）。耕作土と思われるのはセクションB・15層の灰色粘土であり、粘土主体であるが径1cm程の砂ブロックを混入しており、人為的に搅拌されている。層厚が10～20cm、層上部と下部で色調に違いがあり層相変化が認められる。層厚は南側が厚く、標高値が上がる北側に至る程薄い傾向にある。耕作土の色調、土質は他区画とはほぼ共通している。

水田面には多数の円形及び楕円形の窪みが分布する。すべてTo-aテフラの一次堆積層が入り込んで埋没したものである。長さは楕円形の窪みが20～30cm、円形の窪みが10cm前後である。楕円形のものは土踏まずのように一方が割れる形状があることから、人間の足跡と想定される。また円形の中には跡状に一方が割れるものも含まれ、また10cmよりも小さい楕円形のものも観察される。畦畔1・2付近には連続して列状となるものも見られることから、不規則ながら人間の歩行を思わせるものも認められる。南側でも耕作土が薄い南東隅付近には下位層が露出する箇所があり、この周辺には鋤など農工具と思われる三日月状の痕跡が多数認められる。

畦畔は1号溝跡との間にある東西方向の畦畔1・水田2との間にある南北方向の畦畔2・水田3との間にある東西方向の畦畔3を検出した。隣接する畦畔と水田面の比高差は、畦畔1が2.9～8.9cm、畦畔2が3.5～11.1cm、畦畔3が5.3～12.8cmであり、北側の標高が上がるほど畦畔が高くなる。畦畔

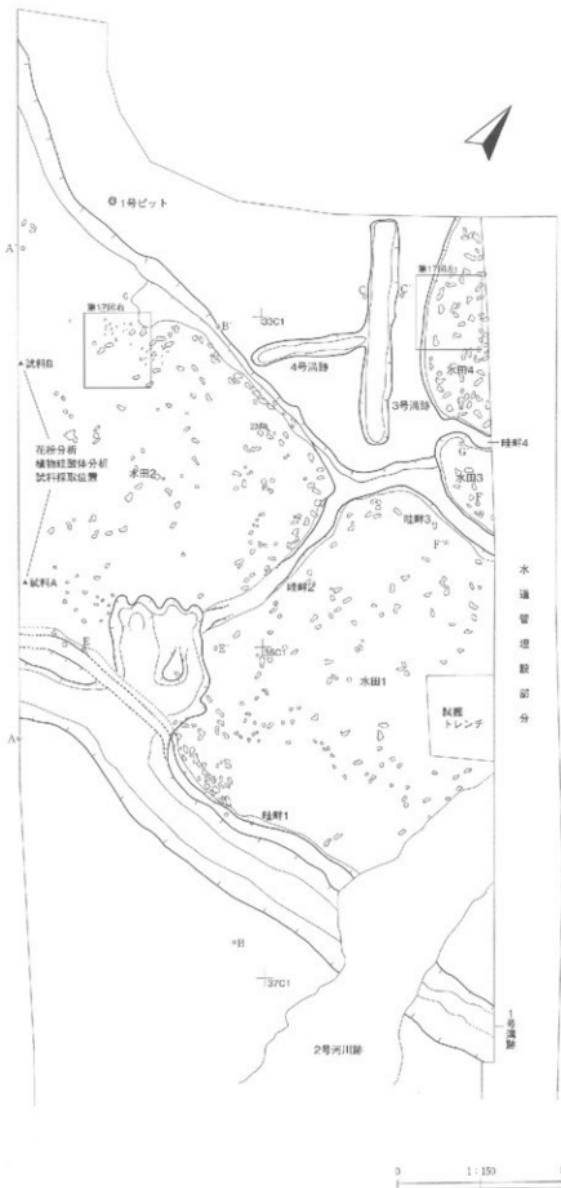


第15図 中央区・1号水田跡（1）

1と畦畔2の接点付近は、1号溝跡の氾濫により壊されている。セクションBの畦畔1と畦畔2の断面には畦畔下に下位層の高まりが存在することから、疑似畦畔Bと認められる。

水田2は33B2に位置する。区画は畦畔1・2及び北側の標高が上がる部分までの区域である。検出範囲から東西方向は15.0m以上、南北方向は10.2m、面積は残存値で87.5m²、西側は調査区外へ延びる。形状は不整な長方形である。田面の標高値は22.40~22.66mで北西隅付近が最も高く南側が最も低いが、水田1と同様に22.40~22.50mが大半である。

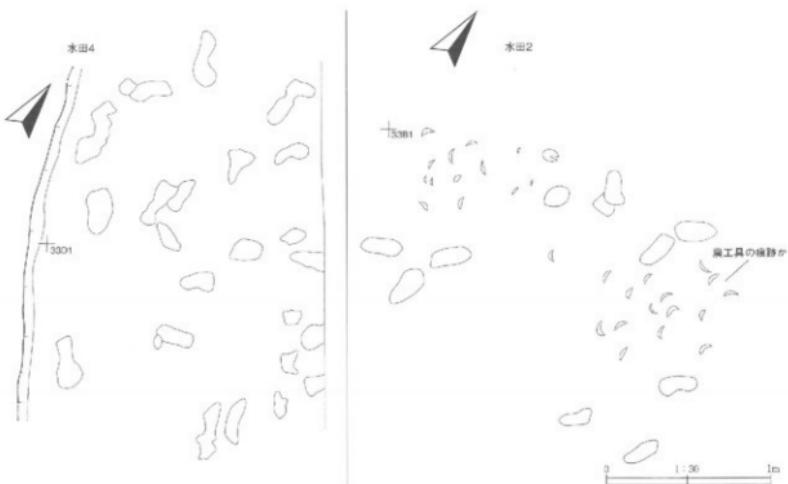
被覆するTo-aテフラは水田1とは異なり、濁ったオリーブ黄色を呈する。粗粒であることからも二次堆積層が被覆しているものと考えられる（セクションA・3層）。耕作土と思われるのはセクションA・9a層の灰色粘土であり、層厚は10~30cm、層上部に稻株の痕跡とも思われる酸化鉄の集積が認められる。人为的に搅拌された9a層と本來は同一層の9b層が下位層として存在し、砂ブロックの有無で区別



第16図 中央区・1号水田跡(2)

される。層厚は水田1と同様に標高の上がる北側に至る程薄い傾向にある。

水田面には多数の円形や椭円形の窪みが分布する。すべてTo-aテフラが埋没して入り込んだものであるが、水田1と異なり一次堆積と二次堆積したものが混在する。前述の通り、セクションA・3層はTo-a二次堆積層であり、下位に4a層To-a一次堆積層、4b層人為的に攪拌されたTo-aテフラ一次堆積層が認められる。4b層はTo-aテフラ降下直後の泥化した状態の耕作面に踏み込まれたことで形成されたと考えられ、To-aテフラと耕作土が混合している。この状況は平面的にも観察され、畦畔2及び北端にはTo-aテフラが入り込んだ状態で明瞭に残存するが、中央は攪拌されているため不明瞭である。明瞭に残存している部分の窪みは水田1と同様に長さは椭円形の窪みが20~30cm、円形の窪みが10cm前後である。人間や動物の足跡と想定される。畦畔2や北端には連続して列状となるものも見られることから、不規則ながら人間の歩行を思わせるものも認



第17図 中央区・1号水田跡（3）水田面微細図

められる。また、こちらでも北端に三日月状の痕跡が多数認められ、鋤など農工具を使用した作業痕跡と思われる。

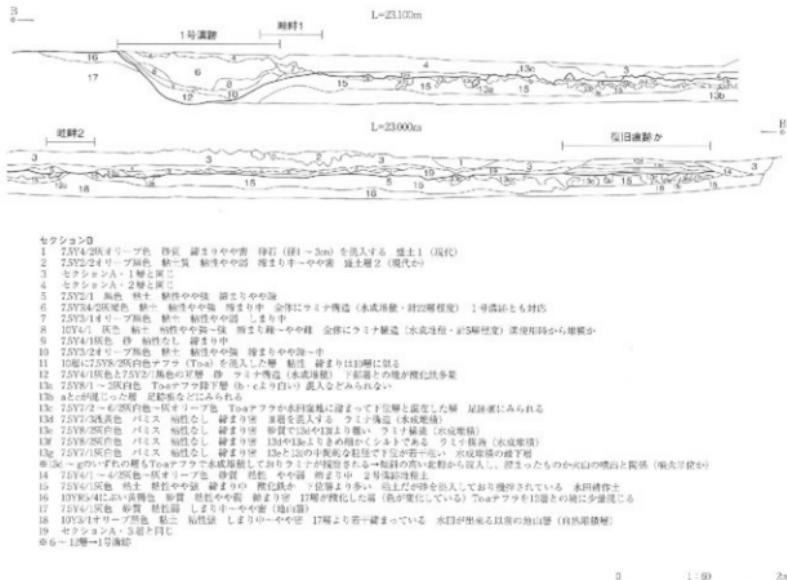
畦畔は1号溝跡との間にある東西方向の畦畔1、水田1との間にある南北方向の畦畔2を検出し、北側は標高が上がるため畦畔は認められない。隣接する畦畔と水田面の比高差は、畦畔2は5.2~10.3cm、畦畔1は比高差が少なく不明である。畦畔1と畦畔2の接点付近は、1号溝跡の氾濫により壊されている。セクションAの畦畔1の断面には畦畔下に下位層の高まりが存在することから、疑似畦畔Bと認められる。

水田3は34D1に位置する。区画は畦畔3・4に囲まれた区域である。検出範囲から東西方向は1.55m以上、南北方向は2.55m以上、面積は残存値で3.01m²、東側は調査区外へと延びる。形状は不整形である。田面の標高値は22.52~22.58mで、南側がやや高い。

I層表土直下に、細粒灰白色で被覆されたTo-aテフラ一次堆積層が確認される（セクションB・13層と同一）。耕作土の状況は水田1とほぼ同様でセクションB・15層の灰色粘土であり、人為的な攪拌痕跡を有する。層厚は10~14cmと水田1・2に比べ浅い。耕作土の色調、土質は他区画と共通している。

水田面には幾つかの楕円形の窪みが認められる。いずれもTo-aテフラの一次堆積層が入り込んで埋没したものである。長さは20~30cmで、人間の足跡と思われる。検出範囲が狭く、歩行列は見出せない。

畦畔は水田1との間にある畦畔3、水田4との間にある畦畔4を検出した。いずれも東西方向で、隣接する畦畔と水田面の比高差は、畦畔3が4.2~5.1cm、畦畔4が11.6~23.1cmであり、標高が上がる北側の畦畔4は今回調査の畦畔で最も高い。セクションFからは畦畔3が水田1・3の堆積土を積み上げて造ったことが観察され、疑似畦畔Bも認められる。またセクションGにも畦畔4が水田3・4の耕作土を積み上げて造成した痕跡と灰色細砂からなる疑似畦畔Bが確認された。



第18図 中央区・1号水田跡（4）

水田4は33D1に位置する。区画は畦畔4と標高が上がる西辺までの区域である。検出範囲は、東西方向は1.9m以上、南北方向は6.6m以上、面積は残存値で9.51m²、北及び東側は調査区外へ延びる。形状は、不明だが梢円形を呈する。田面の標高値は、22.52~22.62mと1号水田跡で最も高い位置にある。

To-aテフラの被覆状況は水田1・3と共に、耕作土は灰色粘土を主体とする。また、水田面には多くの梢円形の窪みが認められる。すべてTo-aテフラの一次堆積層が入り込んで埋没したものである。長さは20~30cm前後である。窪みは土踏まずのように一方が括れる形状や一方が幅広になる形状があることから、人間の足跡と想定される。不規則ながら人間の歩行を思わせるものも認められる。

畦畔は水田3との間にある畦畔4が隣接する。比高差は6~6.6cmとほぼ一定である。前述したが、セクションGに積み上げ痕跡と疑似畦畔Bが認められた。

水田2の北端にTo-aテフラが帶状に堆積する状況を確認した。長さ12.0m前後、幅0.3~1.8m、厚さ20cmで、畦畔2との接点から始まり、調査区西端まで及ぶ。堆積状況を観察すると、水田2では他区画全体を約5cm厚で被覆していた細粒灰白色のTo-aテフラ一次堆積層が確認されず、粗粒オリーブ黄色のTo-aテフラ二次堆積層が認められた。

北端に帯状に堆積するTo-aテフラは13d~g層の計4層に細分され、水平堆積するラミナが認められる。色調は浅黄色から灰白色を呈し、Ⅲ層を混入する13d層、砂質で粗い13e層、きめ細かいシル

ト質の13f層、若干粗い13g層が上位から順に堆積している。これらは水成堆積しているものと考えられるが、断面確認からセクションB・19層であるTo-aテフラ二次堆積層より以前に形成された堆積である。最終的には水成堆積によるかもしれないが、他の水田面より15~20cm積み上げられていることから考えても、To-aテフラ一次堆積時に人为的に降下した火山灰を寄せた復旧痕跡の可能性がある。

遺物（第49図、写真図版64）

199~203は土師器坏である。199は内外面黒色処理、200~203は内面黒色処理。200は底面ヘラケズリ調整、その他は回転糸切り痕が残存する。203は墨書「問」が外面正位に書かれている。205も土師器坏と思われるが、他と器形が異なる。他器種かもしれない。204は須恵器壺である。外面に自然釉が認められる。205は土師器坏である。底面及び体部下位にヘラケズリ調整。206~208は土錘である。重量には差がある。209は雁又鐵。鉄製。210は煙管雁首。銅製。他にオニグルミ、モモ、コハクウンボクが水田耕作土を中心に出土した。

（2）ビット

1号ビット

遺構（第19図、写真図版13）

中央区北側の32B1に位置する。1号水田跡・水田2までは1.1mの距離にある。I層表土を除去したIV層上面で、To-aテフラを含むオリーブ黒色の円形プランとして検出した。

平面形はほぼ円形を呈しており、開口部が34×32cm、底部が22×20cmである。深さは30cmを測り、壁は外形しながら急に立ち上がる。断面形はピーカー状である。

堆積土はオリーブ黒色粘土質土の単層で構成され、検出面にはTo-aテフラが堆積している。他に付属するビットは検出されていないため、建物を構成するかは不明である。

遺物（第49図、写真図版64）

198は内面黒色処理の土師器坏である。ヘラミガキ調整が認められる。

（3）溝跡

1号溝跡

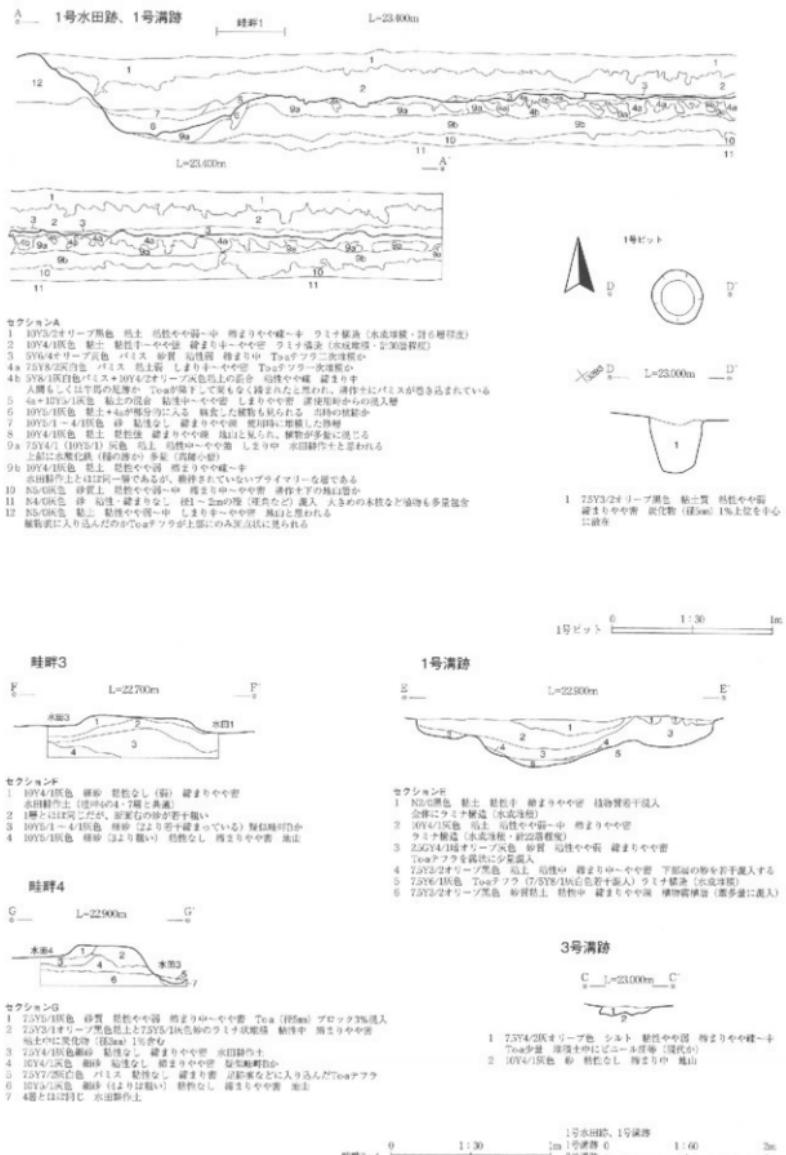
遺構（第19図、写真図版20）

中央区北側の35~37区に位置する。本遺構は1号水田跡の畔1南側に並行して東西方向に走る溝跡である。セクションA・1層オリーブ黒色粘土と2層灰色粘土を除去した段階で、北側の畔1頂部と南側のIV層暗緑灰色細砂に挟まれた灰色プランとして検出した。精査はまず1号水田跡と共に掘削したセクションBのトレーニングで層位の確認を行った。この結果、畔1頂部から約40cm、南壁からは65cmの深さで底面に達することが分かり、粘土と砂が互層で堆積することを確認した。

平面形は東西方向に延びる帯状を呈しており、若干蛇行するものはほぼ直線である。規模は開口部幅1.6~2.0m、底面幅0.3~0.98mで、中央付近がやや膨らんでいる。底面レベルは、西端で22.02m、中央で22.05m、東端で21.64mと西から中央に架けてはほぼ平坦だが、中央から東に架けて標高値を下げる。これから、流れの方向は西から東に向かっていると考えられる。

堆積土はセクションB・6~12層の計7層、セクションA・5・7・8層の計3層で構成される。セクションBは6層灰褐色粘土、7層オリーブ黒色粘土、8層灰色粘土、9層灰色砂、10層オリーブ黒色粘土、11層To-aバミスと10層混合層、12層灰色砂と黒色砂の互層で、11層は畔1崩落層、12層は溝使用時からの水成堆積層、これ以外は廃絶後の水成堆積層と考えられる。セクションAは5層

3 中央区



第19図 中央区・1号ビット、1号水田跡（5）、1～3号溝跡

To-aバミスと灰色粘土の混合、7層灰色砂、8層腐植物多量の灰色粘土で、いずれも溝使用時からの水成堆積層と考えられる。

35B付近の1号水田跡、畦畔1と2の接点付近は北側に大きく抉られている。規模は4.0×2.6mの範囲で、底面から流木が出土した。堆積土はセクションA・Bとはほぼ同様で、黒色や灰色粘土の水成堆積層である。To-aテフラは3層に若干混入するが他は認められないため、To-aテフラ降下後に氾濫し埋没したと考えられる。

遺物（第49図、写真図版64・65）

211は土師器壺、212は土師器高台付壺、213・214は土師器甕である。211～213は内面黒色処理が施される。いずれもロクロ成形と思われるが、213は厚手で輪積みの可能性もある。215は曲物の底板、樹種はモミ属である。側板を嵌める形状のしゃくり底となっている。他にオニゲルミ、ヒメゲルミ、トチノキが出土した。

3・4号溝跡

遺構（第19図、写真図版21）

3号溝跡は中央区北端の33C2、4号溝跡は33C1に位置する。1号水田跡の水田2と水田4に挟まれた箇所で、灰オリーブ色のT字状に連結する溝プランとして検出した。

3号溝跡は長さ6.9m以上、開口部幅80～92cm、底部幅50～64cm、4号溝跡は長さ3.4m、開口部幅50～64cm、底部幅20～36cmでいずれも断面形は皿形である。3号溝跡は北西方向にも続いており、全長は不明である。4号溝跡は3号溝跡の中央付近で連結している。深さは5cm前後で、ほぼ平坦である。

堆積土はいずれも単層、灰オリーブ色シルトでTo-aテフラを微量混入する。堆積土中に現代の遺物を少量混入することから搅乱とも思われるが、検出面が表土直下の削平されたIV層であることから、古くなる可能性もある。遺物なし。

2号溝跡

遺構（第19・20図、写真図版2）

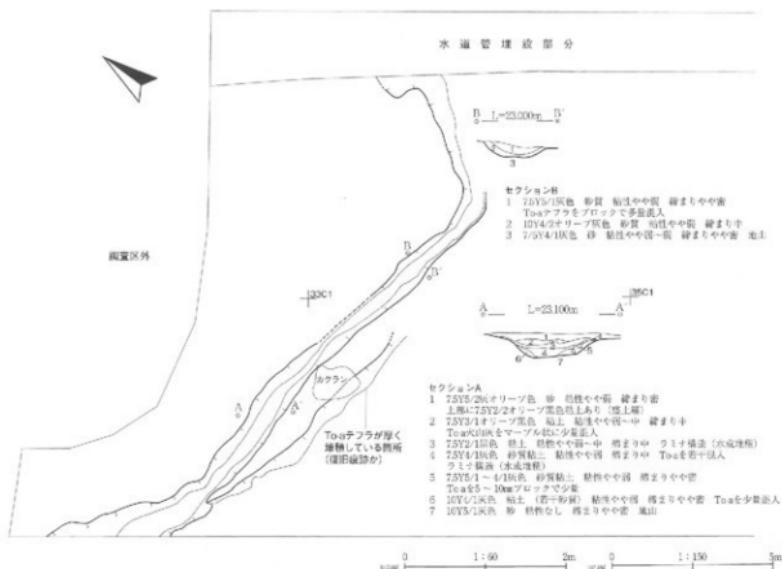
中央区北端の32～33区に位置する。本遺構は1号水田跡に設定したセクションB・14層として検出し、北側に標高値が上がる傾斜変換点に沿って走る灰オリーブ色の溝状プランとして確認した。

平面形はほぼ東西方向に延び、若干蛇行するものの直線的である。規模は、長さ15.0m以上、開口部幅0.5～1.3m、底部幅12～70cm、断面形は逆台形状である。底面レベルは、西端で22.53m、中央で22.60m、東端で22.53mと中央が若干高いがほぼ平坦である。

堆積土は、セクションAが計6層、セクションBが計2層で構成される。セクションAは1層灰オリーブ色砂、2層オリーブ色粘土、3層黒色粘土、4層To-aテフラ混じりの灰色砂質粘土、5層砂質粘土、6層灰色粘土で、1層は盛土、2～4層は水成堆積土、5・6層は溝使用時からの堆積層である。セクションBは1層灰砂質土、2層オリーブ色砂質土で、1層にはTo-aテフラを多量に混入する。いずれも地山は灰色細砂であるが、南壁の大半の箇所はTo-aテフラの二次堆積層で構成される。このため、遺構時期はTo-aテフラ降下以降と捉えられる。

遺物（第49図、写真図版65）

216は土鍤である。堆積土中から出土。他にモモ4個が出土した。



第20図 中央区・2号溝跡

(4) 河川跡

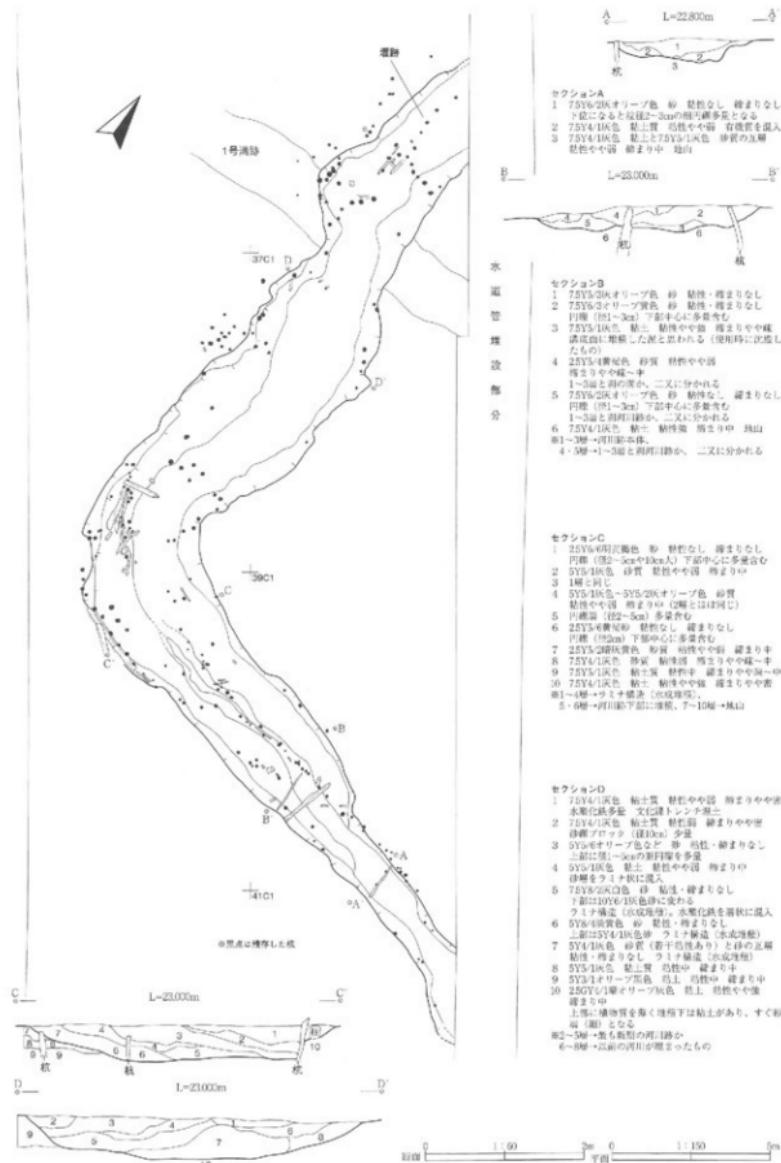
2号河川跡

遺構（第21図、写真図版22・23）

中央区中央北の36～41区の範囲に位置する。北側で1号水田跡・1号溝跡と重複しており、本遺構が新期である。遺構は断面観察から大きく2時期形成されていたと考えられるが、平面は最初段階の時期のみである。表土除去後のIV層上面で、L字形に屈曲する帯状プランとして検出した。精査はまずセクションA～Dの位置に幅約50cmのサブトレンチを設定した。セクションA・Bは約30cm、セクションC・Dは約50cmで河床面に達することを確認した。

規模は長さ34.3m以上、開口部幅1.1～4.2m、底部幅0.46～2.44m、断面形状は皿形である。底面レベルは、北端22.05m、中央22.39m、南端22.18mとカーブの中央が抉られてやや低いが、ほぼ変化無い。ただし、礫の産状を観察すると南方向に倒れているものが大半であるので、流路方向は北から南へ向かっていると考えられる。また、中央から南の39・40区付近は一部流路が二叉になる。

堆積土は大半が粘土と砂・礫の互層で構成される。セクションAは計2層、セクションBは計5層、セクションCは計6層、セクションDは計8層で埋没しており、各々地山層が続く。セクションAは1層灰オーリープ色粗砂・細円礫、2層は灰色粘土質土、3層は灰色粘土及び砂質土の地山、セクションBは1層灰オーリープ色細砂、2層オーリープ黄色粗砂・円礫、3層灰色粘土、4層黄褐色砂質土、5層灰オーリープ色粗砂・円礫、6層灰色粘土の地山、セクションCは1・3・6層明黄褐色粗砂・円礫、



第21図 中央区・2号河川跡

2・4・7・8層黄灰～灰色砂質土、5層円礫層、9・10層灰色粘土の地山、セクションDは1・2・4・5・8層灰白～灰色粘土・粘土質土、3層オリーブ色粗砂・亜円礫、6・7層淡黄～灰色粗砂、9・10層オリーブ黒・暗オリーブ灰色粘土の地山となる。いずれも水成堆積によるラミナが顕著に認められ、河床面付近は有機質薄層が観察される。層中には径2～5cmの円礫・亜円礫、河床には10～20cmの亜円礫が多量に認められることから、氾濫時の水流は強かったと想像できる。

河川の側壁付近にはほぼ垂直に設置された杭が多量に確認された。杭は側壁と底面の変換点に設置されることが多く、セクションB付近では杭間隔が1.35m、セクションC付近では2.2m、最も外側までは3.3mある。杭は側壁崩落防止のために設置されたと考えられ、中央付近には建築部材を転用して横木に利用した痕跡が認められた。また、北端からは樅と考えられる痕跡が認められ、弧を描くように列状に設置された杭の北側からは、多量の木枝など柴が見つかった。これら柴には大半に人為的な伐採痕が認められることから、柵（しがらみ）を成していたものと考えられる。

遺物（第49・50図、写真図版65）

218は渥美産陶器甕である。年代は12世紀後半～13世紀と思われる。219は織部の陶器向付である。16世紀後半～17世紀代である。

220～225は加工杭である。220・221・222マツ複維管束亞属、222クリ、224スギ、225コナラ属コナラ亞属コナラ箇と複数の樹種が用いられている。220・223～225は先端のみを尖らせる加工、221・222は建築部材の一部と見られる。221についてC14年代測定を行ったところ、1,730～1,810年が得られている（V-1参照）。226は鉄製の鉈。227は鉄製の踏鉄。228は真鍮製の肥後守。裏面にcm単位の日盛が付けられている。昭和初期と思われる。229・230は煙管雁首と吸口。銅製。231は寛永通寶。銅製。

3号河川跡

造構（第22図、写真図版24・25）

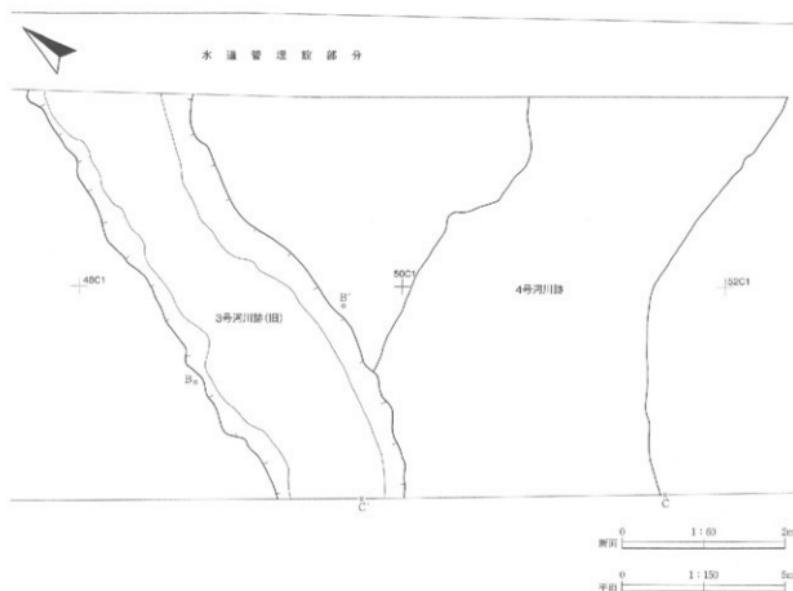
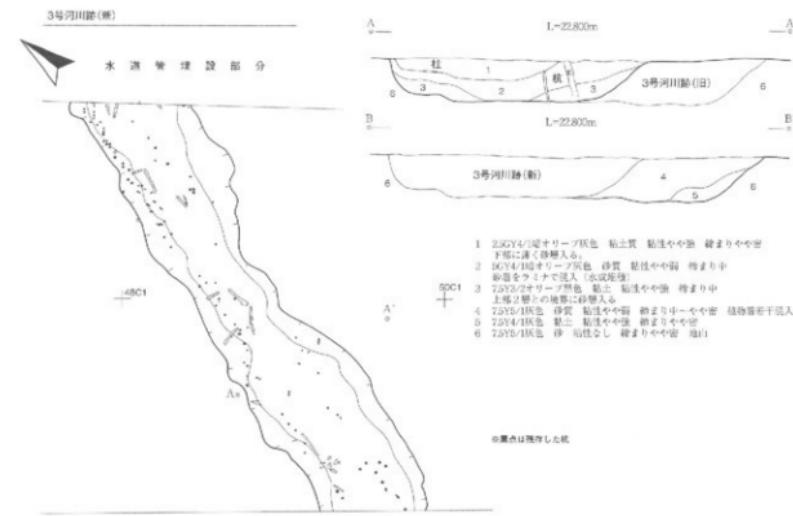
中央区南の47～49区の範囲に位置する。南側で4号河川跡と重複しており、本造構が新期である。造構は断面観察から大きく2時期に亘って形成されていたと考えられ、第22図上段が新期、下段が旧期を表している。表土除去後のIV層上面で、北東から南北にほぼ直線的に延びる帶状の暗オリーブ灰色プランとして検出した。精査はまず東西の調査区際とセクションA・Bの位置に幅約50cmのサブレンチを設定した。これから約50cmで河床面に達することを確認した。

規模は新期河川が長さ14.5m以上、開口部幅2.0～3.8m、底部幅1.04～2.7m、旧期河川が長さ14.5m以上、開口部幅3.7～4.9m、底部幅1.92～3.74mで、旧期が新期よりも規模が大きい。底面レベルは新旧期とも北東端22.01m、中央21.93m、南西端22.01mとはほぼ平坦である。

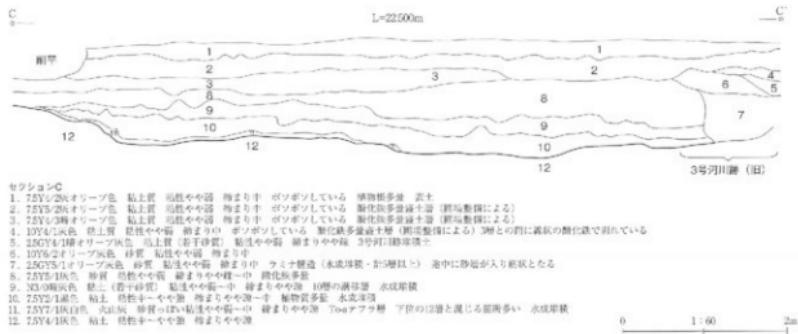
堆積土は計6層で構成される。1～3層は新期、4・5層は旧期、6層は地山に細分される。新期河川の1層は暗オリーブ灰色粘土質土、2層は暗オリーブ灰色砂質土、3層はオリーブ黒色粘土、旧期河川の4層は腐植物を含む灰色砂質土、5層は灰色粘土すべて水成堆積層である。6層は灰色砂の地山層である。

本造構は2号河川跡と同様に、側壁付近にはほぼ垂直に設置された杭が多量に確認された。杭は西側の西壁と底面の変換点に設置されており、1.0～1.2m幅で東側にも列状に設置されている。杭は側壁崩落防止のために設置されたと考えられ、位置から旧期河川が埋没後、新期河川の上留めとして設けられたと考えられる。

遺物（第50・51図、写真図版65・66）



第22図 中央区・3・4号河川跡(1)



第23図 中央区・4号河川跡（2）

232・233は土器部壺、234は須恵器壺である。233は非ロクロ、232は非ロクロの可能性あり、234はロクロ成形。233は底に木葉痕、底部が外側に張り出す。235は平瓦である。表面に繩敵き目が残されている。236は速歯下駄、樹種はスギ類似種。前壺の位置が右に偏っているため、左足用と思われる。237~240は加工板。樹種は237がマツ属複雑管束亜属、238がクリ、239・240がアスナロで、239・240は同一個体と思われる。241~245は加工杭である。先端を鉛筆状に尖らせる加工を施している。樹種は、244クリ以外はマツ複雑管束亜属である。243は割材を用いている。246は鉄製の鍤。247は煙管。雁首と吸口のセットで、取り上げ時には羅寧が残存していた。他にクリ、ツノハシバミ、モモ、クロマツ、ヒメグルミの種実が出土した。

4号河川跡

遺構（第22・23図、写真図版25）

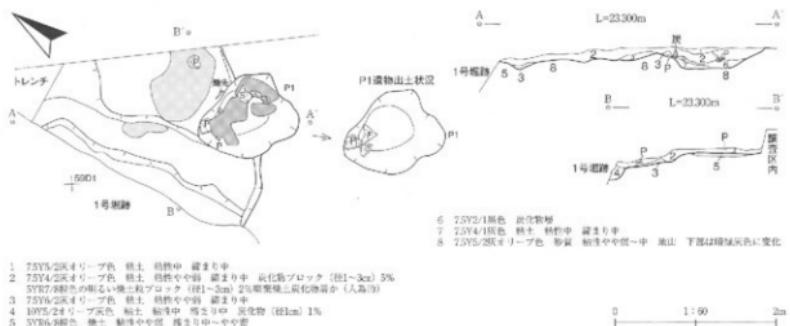
中央区南の49~52区の範囲に位置する。南側で3号河川跡と重複しており、本遺構が旧期である。表土除去後のIV層上面で東西方向に延び、3号河川跡と接する帯状の灰色プランとして検出した。精査はまず調査区西際に約50cm幅のトレーンチを設定した。これから約1.0mで河床面に達することを確認した。また、中央及び調査区東際にも50cm幅のトレーンチを設け堆積状況を確認した。結果、遺物がごく少量のみであることなどの理由から、精査は範囲と堆積状況の記録に留めることとした。

規模は長さ13.3m以上、開口部幅5.6~8.8m、底部幅はセクションBから7.3m以上で、西側がより幅広くなる。深さは0.7~1.0mで、粗砂の河床面に至る。

堆積土はセクションCから計12層に細分される。1~4層は灰オリーブ~灰色主体の表土層、5~7層は重複する3号河川跡堆積土、8~11層は4号河川跡堆積土、12層は地山である。1~4層は近年の圃場整備により形成され、粘土質土中に酸化鉄を多量に含む。本遺構堆積土の8層は酸化鉄を多量に含む灰色砂質土、9層は暗灰色粘土、10層は腐植物を多量に含む黒色粘土、11層はTo-aテフラ堆積層、12層は灰色粘土の地山である。8~11層はすべて水成堆積層である。

河床面付近にTo-aテフラ堆積層が確認されることから、テフラ降下時には存在しており、その後水成堆積により埋没した後に、3号河川跡が形成されたと考えられる。

遺物（第51図、写真図版66）



第24図 南区・2号竪穴住居跡

248はウマの歯である。249は須恵器壺である。底面に回転糸切り痕が見られる。

(5) 中央区遺構外出土遺物 (第51図、写真図版66)

250は鋳型もしくは羽口と思われる。251は鉄製の鎌。

4 南 区

(1) 竪穴住居跡

2号竪穴住居跡

遺構 (第24図、写真図版26)

南区北側の59D1に位置する。南区で唯一見つかった住居跡であるが、1号廻跡と重複しており本遺構が旧期である。また、北側は試掘トレンチに掘削され、北東側は調査区外となるため残存状態は良くない。表土除去後のIV層上面で、焼土・炭化物の抜がりと遺物が少量出土したことから何らかの遺構が存在するとして精査を進めた。

平面形は残存部分が少なく不明だが、方形基調と考えられる。規模は東西方向1.9m以上、南北方向で2.9m以上である。壁高は東壁に5cm残存するのみである。壁は外傾しながら急斜度に立ち上がると思われる。床面は焼土の抜がる東側が最も高く、西に向かって階段状に標高値を下げる。床面は灰オリーブ色砂質土の地山で構成され、堅く締まっている。

堆積土は計8層に細分される。1~4層は住居跡堆積土、5層は焼土、6・7層はP1堆積土、8層は地山である。1~4層は灰オリーブ色粘土主体で、2層には炭化物・焼土ブロックを含む。P1の6層は炭化物層を形成しており、人為的廃棄の可能性がある。

床面に形成された焼土の規模は90以上×67cmの不整形で、床面に約5cm厚で橙色に焼成されている。また、1段下がる床面にも56×18cmの不整形の焼成面が形成されている。焼成面から252土師器壺が伏せた状態で出土した。

P1の規模は126×102cmの不整形で、深さは約15cmである。6層炭化物層が平面的に抜がっており、底面の大半を覆っている。底面からは他に亜角礫、253・254土師器壺、255須恵器壺が出土している。

遺物（第51図、写真図版66）

252は土師器壺。体部外面に縦位ヘラケズリ、体部内面に横位ハケメ調整。253・254は土師器鍋、255は須恵器壺である。254・255は外面に縦位ヘラケズリ、内面にヘラナデ調整。体部上位には輪積み痕も認められ、255は定着させるためタタキが施される。256は土錘。表面にキズ有り。257は鉄製の鋤先で床面から一括して出土した。

（2）土 坑

2号土坑

遺構（第30・31図、写真図版30）

南区中央の66B4に位置する。2号堀跡とは20cm、5号溝跡とは50cmの距離にある。IV層上面で、オリーブ黒色の略円形プランとして検出した。

平面形は南北方向が潰れた略円形を呈しており、開口部が145×135cm、底部が113×99cmである。深さは55cm、断面形は鍋底形で、底面はほぼ平坦である。

堆積土は計15層に細分される。1・2層オリーブ黒色粘土、3層灰色砂質土、4層暗オリーブ灰色、5層灰色細砂の地山崩落層で、すべて水成堆積している。

2号堀跡や1号橋跡との位置関係から門を構成する遺構の可能性も考えられたが、対になる土坑は確認されなかった。

遺物（第52図、写真図版66）

258は土師器壺、259は土師器壺と思われる。

（3）水 田 跡

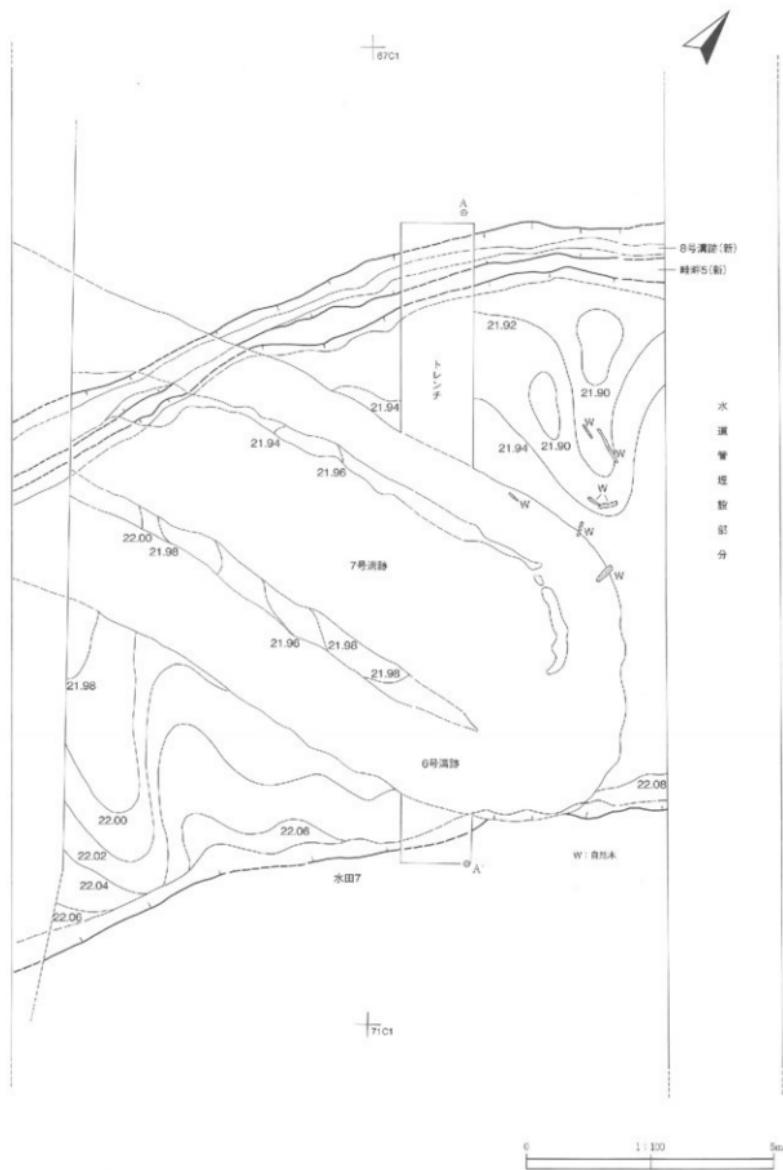
2号水田跡、8号溝跡

遺構（第25・26図、写真図版27～30）

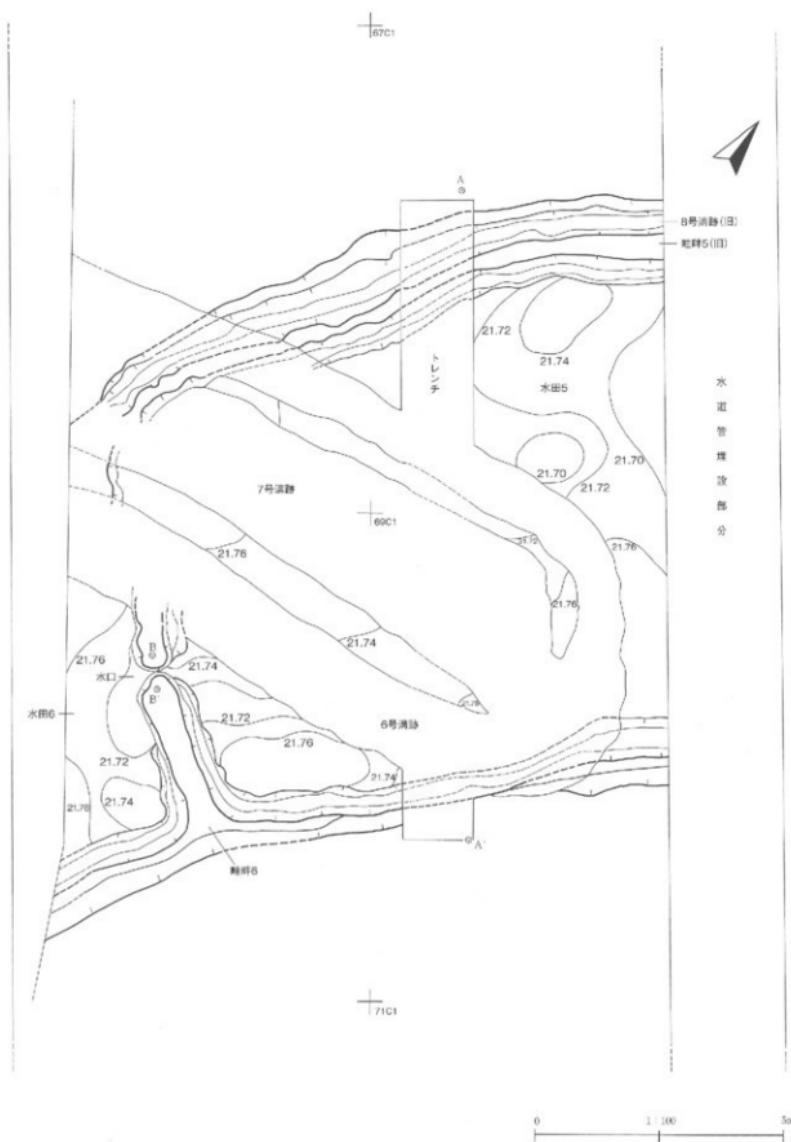
南区中央南の68～71区に位置する。I層表土を除去後のIV層上面でオリーブ黒色の帯状プランと灰オリーブ色の調査区内で途切れる帯状プランとして検出した。オリーブ黒色は本遺構、灰オリーブ色は6・7号溝跡である。精査は重複する6・7号溝跡を先行して作業し、終了後に本遺構の精査を開始した。精査はまず両遺構の堆積状況確認のためセクションAの位置に上幅約1.4mのトレンチを設定した。

断面観察から6・7号溝跡が2号水田跡より新期であることを確認した。2号水田跡は検出段階では河川跡と捉えていたが、断面からTo-aテフラに被覆された水平面、畦畔と付属する溝跡が確認されたため水田跡と判断した。また、植物珪酸体・花粉分析の結果、To-aテフラ上位層の12層灰色粘土からイネ機動細胞が検出されたため、水田面がTo-aテフラを挟んで2面に形成されていることから、まず第1面から着手した。2号水田跡に関係する層位は9～16層の計8層である。まず第1水田面上層の10層オリーブ黒色粘土と11層黒色粘土を除去した。

第1水田面（水田7）は12層灰色粘土を耕作土とする。調査区内では区画する畦畔は検出しなかつたが、北西壁際に付属する8号溝跡（新）とを区切る畦畔5（新）を確認した。検出範囲から北西～南東方向は8.3～10.5m、北東～南西方向は13.2m以上で調査区外へ延びる。形状は不整な長方形で、面積は残存値で131.8m²である。田面の標高は21.90～22.08mで北側が最も低く、南側が最も高いが、大半の範囲は±10cmに収まる。耕作土の12層灰色粘土は下位層To-aテフラ粒を含む人為的に攪拌された層位で、層厚は10～20cm、層上部と下部で色調に違いがあり層相変化が認められる。人為的攪拌後



第25図 南区・2号水田跡（第1水田面）



第26図 南区・2号水田跡（第2水田面）、8号溝跡



第27図 南区・6・7号溝跡

は水成堆積している。水田面には壅みはほとんど認められず、平滑である。

畦畔は畦畔5（新）を確認しており、水田面との比高差は2.6~8.1cmあり、中央の畦畔が若干高い。畦畔5（新）は下位層の畦畔5（旧）と8号溝跡（旧）の上位にあり、堆積した高まりをそのまま利用したと考えられる。疑似畦畔Bは確認されなかったことから、明確な畦畔でなかった可能性もある。

第2水田面は第1水田面耕作土である12層灰色粘土を除去後、全体を細粒の灰白色To-aテフラ一次堆積層で被覆された状況で検出した。To-aテフラは層厚4~15cm堆積しており、畦畔を除く水田面、8号溝跡（旧）、水口に水成堆積している。耕作土は直下の14層暗緑灰色粘土で、層厚8~36cm、層上部と下部で色調に違いがあり層相変化が認められる。層厚は中央が厚く、北西端と南東端に至ると薄くなる傾向にある。耕作上の色調、土質は水田5・6とも共通している。14層は元來河川跡の堆積層を水田耕作土として利用したものであるため、層厚などは自然堆積によるものである。

水田5は69C1付近に位置する。区画は畦畔5・6及び南東側の標高が上がる部分までの区域である。検出範囲から北東~南西方向は11.5m以上、北西~南東方向は8.4~9.8m、面積は残存値で95.5m²、北東側は調査区外へ延びる。形状は不整な長方形である。田面の標高値は21.70~21.76mで北側付近が最も低いが、ほぼ平坦である。

To-aテフラを流入した壅みは1号水田跡のように多量ではないが、北側付近に少数分布している。形状は楕円形が大半であるが円形も含まれ、長さ10~20cm、不規則ながら人間の歩行を思わせる列状を成すものも認められる。これらの



第28図 南区・2号水田跡、6・7号溝跡

記録は時間の都合上、写真のみに留めた。

畦畔は8号溝跡（旧）との間にある北東-南西方向の畦畔5（旧）、水田6との間にある北西-南東方向の畦畔6があり、南東側は標高が上がるため畦畔は認められない。また、隣接する畦畔及び南東端と接する水田面には開口部幅36~82cm、底部幅8~41cm、深さ2~5cmの浅い溝跡が巡るように作られている。畦畔頂部から溝底面の比高差は、畦畔5（旧）が14.3~18.2cm、畦畔6が3.2~13.8cmである。畦畔6には開口部幅14cm、底部幅4cm、深さ6cmの逆台形状を呈する水口が設けられている。

水田6は70B1付近に位置する。区画は畦畔6と標高の上がる南東側に囲まれた区域である。検出範囲から北東-南西方向は2.3m以上、北西-南東方向は7.0m程度、面積は残存値で21.5m²、南西側は調査区外へ延びる。大半は調査区外となるが、形状は水田5と同様に不整な長方形を呈すると思われる。田面の標高値は21.72~21.76mで、畦畔6に設置された水口付近が若干低い。

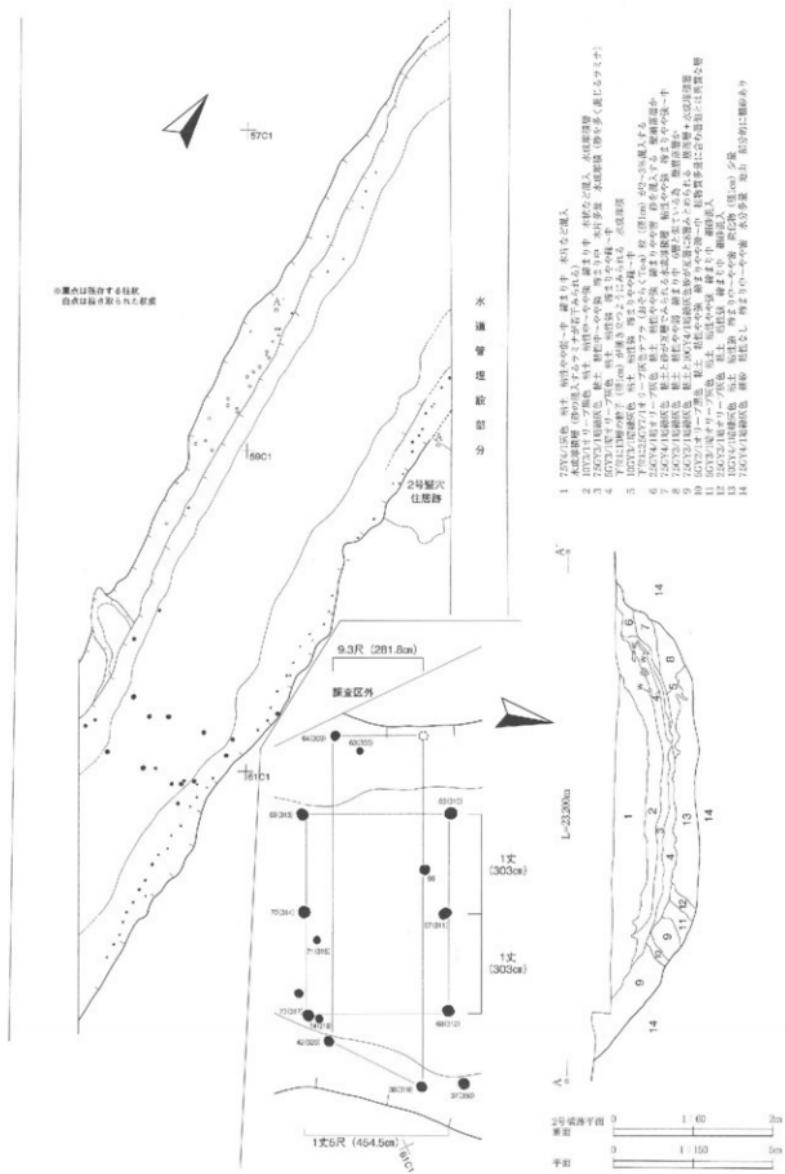
水田面の状況は水田5と同様に、少数の窪みにTo-aテフラが流入している。形状は円形、楕円形で、長さは10~20cm、畦畔6付近に偏る。

畦畔は水田5との境に畦畔6があり、南東側は認められない。水田5にも存在するが、畦畔6及び南東端と接する水田面には開口部幅24~60cm、底部幅10~28cm、深さ2~5cmの浅い溝跡が巡っている。畦畔6頂部から溝底面の比高差は7.6~13.0cmである。また、畦畔6などにはサンクラックにTo-aテフラが流入して白色のひび割れが観察される。これは水田使用時の乾燥具合を表している。

8号溝跡は67~68区に位置する。第1水田面においては畦畔5（新）によって区切れた8号溝跡（新）として、第2水田面においては畦畔5（旧）によって区切られた8号溝跡（旧）として検出した。規模は新期が長さ13.8m以上、開口部幅46~80cm、底部幅12~48cm、畦畔5（新）からの深さ4.1~6.9cm、旧期が長さ13.8m以上、開口部幅0.48~1.0m、底部幅18~33cm、畦畔5（旧）からの深さ12.9~19.4cmである。底面レベルは、新期が北東端21.90m、中央21.84m、南西端21.90m、旧期が北東端21.76m、中央21.72m、南西端21.77mといずれもほぼ平坦である。堆積土は新期が12層灰色粘土上の単層で水成堆積、旧期が13層灰白色To-aテフラの一次堆積層である。

第6表 1号溝跡・2号溝跡柱杭計測表

取り上 げNo	掘載 No	角度 (°)	長さ (cm)	備考
1		70	15	
2		70	14	
3		70	12	
4		60	22	
5	347	70	26	
6		60	19	
7		55	19	
8		65	18	
9		70	8	
10		60	5	
11		70	11	
12		60	7	
13		90	22	
14		90	30	
15		70	23	
16		75	51	
17				
18		70	10	
19		70	4	
20		80	8	
21		40	4	
22		60	9	
23		65	4	
24		55	19	
25		60	8	
26	348	65	10	
27	349	70	5	
28		65	3	
29		70	2	
30		50	14	
31		80	18	
32		50	41	
33		65	30	
34		60	25	
35		55	29	
36		70	6	
37	350	75	36	
38	319	45	71	2号溝跡橋脚補
39		70	5	
40		70	6	
41	351	55	25	
42	320	50	40	2号溝跡橋脚補
43		85	13	
44		90	13	
45			55	
46		30	11	
47		10	22	
48		25	4	
49		10	12	
50		20	15	
51		20	16	
52	352	35	36	
53		15	2	
54		25	35	
55		30	28	
56		25	19	
57		35	9	
58		40	24	
59		50	16	
60		100	5	
61	353	70	62	
62	354	85	60	
63	355	100	39	
64	309	100	30	2号溝跡橋脚補
65	310	90	77	2号溝跡橋脚補
66		90	42	
67	311	90	89	2号溝跡橋脚補
68	312	90	82	2号溝跡橋脚補
69	313	130	89	2号溝跡橋脚補
70	314	90	73	2号溝跡橋脚補
71	315	90	39	2号溝跡橋脚補
72	316	110	28	2号溝跡橋脚補
73	317	100	59	2号溝跡橋脚補
74	318	90	55	2号溝跡橋脚補



第29図 南区・2号橋跡、1号堀跡

遺物（第52図、写真図版67）

260～265は土師器壺である。260及び265は内面黒色処理、265の外面に正位で墨書「□」1字が施される。266は土師器蓋か。267・268は高台付壺。いずれも内面黒色処理で、268底にはヘラ押さえが認められる。269は土師器飼付土器か。内外面黒色処理が施されており、全面に丁寧なヘラミガキが認められる。口縁部と体～底部は接合しないが同一個体と思われる。270・271は土師器甕である。270は非クロクロ成形で、体部中央が張る。272は須恵器壺。底面に回転ヘラ切り痕が認められる。273は瓦質土器の火鉢（風炉）である。中世であろう。274・275は加工板。樹種は274がマツ属単維管束並属、275がアスナロである。276は曲物底板、樹種はクリ。他にオニグルミ、モモが出土した。

（4）橋 跡

1号橋跡

遺構（第29図、写真図版35）

南区中央の66C区に位置する。I層除去後のIV層上面でオリーブ黒色プランの2号堀跡が途切れる土橋として検出した。規模は長さ3.4m、幅65～80cm、2号堀跡底面からの比高差は東側で60cm、西側は隣接箇所が浅く作られており15cmである。堀跡が一段深い箇所までを橋跡と捉えれば、規模は幅2.68～3.60mと広くなり、西側との比高差は30cmとなる。断面形は逆台形状である。

作事は堀構築時から橋部分を残して掘削したもので、盛土痕跡は確認されていない。また、構造北側と南側に門跡も想定したが、柱穴などは見つかっていない。ただし、2号土坑をすぐ南に検出しており、堆積土も堀跡とほぼ同様であることから、遺構の存続時期は本遺構及び2号堀跡と同時期となる。遺物なし。

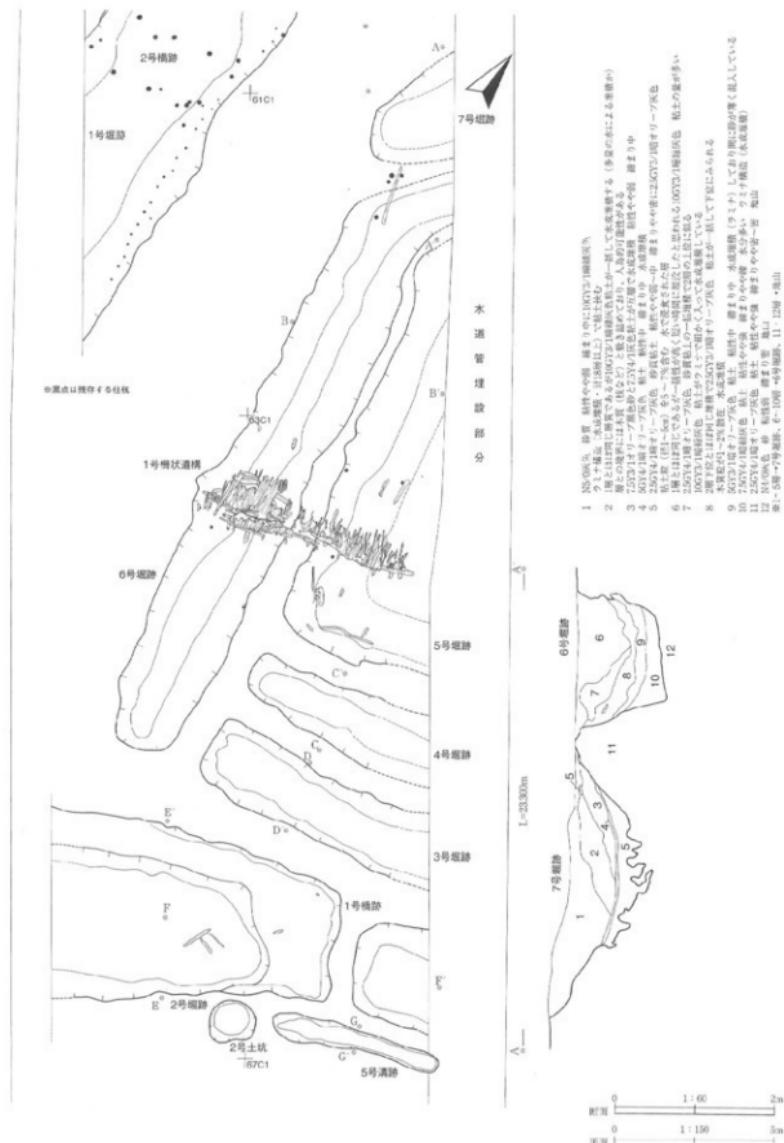
2号橋跡

遺構（第30図、写真図版35・36）

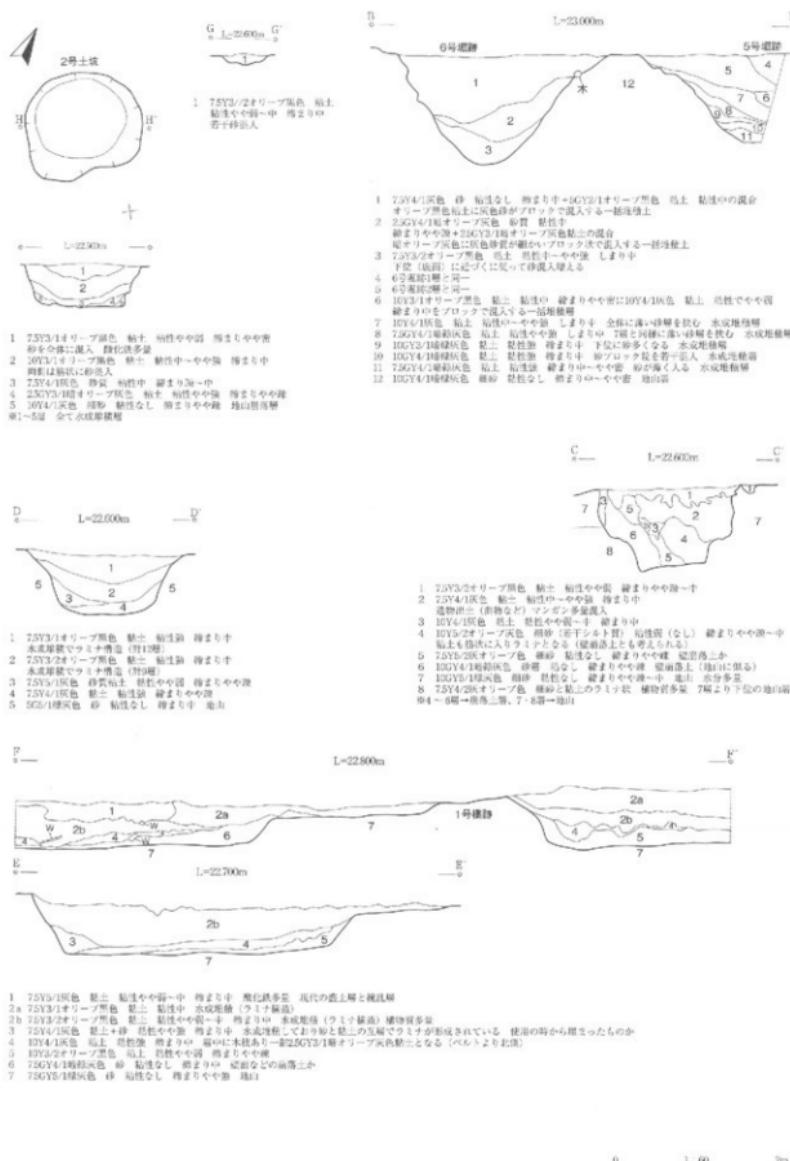
南区中央の60B区に位置する。1号堀跡精査中の堆積土から等間隔に並ぶ柱列として検出した。規模は堀跡底面に設置されている部分は1×2間で、桁行2丈（606cm）×梁行1丈5尺（454.5cm）である。柱間寸法は5尺単位（151.5cm）を基準としており、桁行は1丈（303cm）間隔である。また、堀側壁部分には9.3尺（281.8cm）間隔の補助的な柱も設けられている。橋跡は1号堀跡に直行して配置されており、検出した1号堀跡の最も南端から出土した。設置はすべて打ち込み式で立てられており、いずれも先端を鋭角に加工している。

遺物（第53図、写真図版77）

橋脚として出土しているのは、64（309）・65（310）・67（311）・68（312）・69（313）・70（314）・73（317）・38（319）・42（320）の計9本である。長さは残存値で、309は46.5cm、310は192cm、311は199cm、312は193.5cm、313は186cm、314は163cm、317は210cm、319は97cm、320は78cm、打設の深さは、310は117.7cm、311は115.8cm、312は111.9cm、313は126.9cm、314は89.9cm、317は101cm、319は64.7cm、309と320は計測なしである。補助柱の309・319・320を除いた平均は101.7cm、いずれもほぼ垂直に打設している（313・317は掘削時に傾いた）。また、補助柱は側壁に対して垂直に設置されている。柱の大半は全面に面取加工がされており、先端を鉛筆状に鋭く尖らせている。樹種は、310～317はコナラ属コナラ亜属コナラ節、309はクリ。318～320は同定せず。311及び314についてC14年代測定を実施したところ、311は1,391～1,443年、314は1,406～1,449年が得られている（V-1参照）。



第30図 南区・2号土坑、1号橋状遺構、1・2号溝跡、1～7号溝跡、5号溝跡



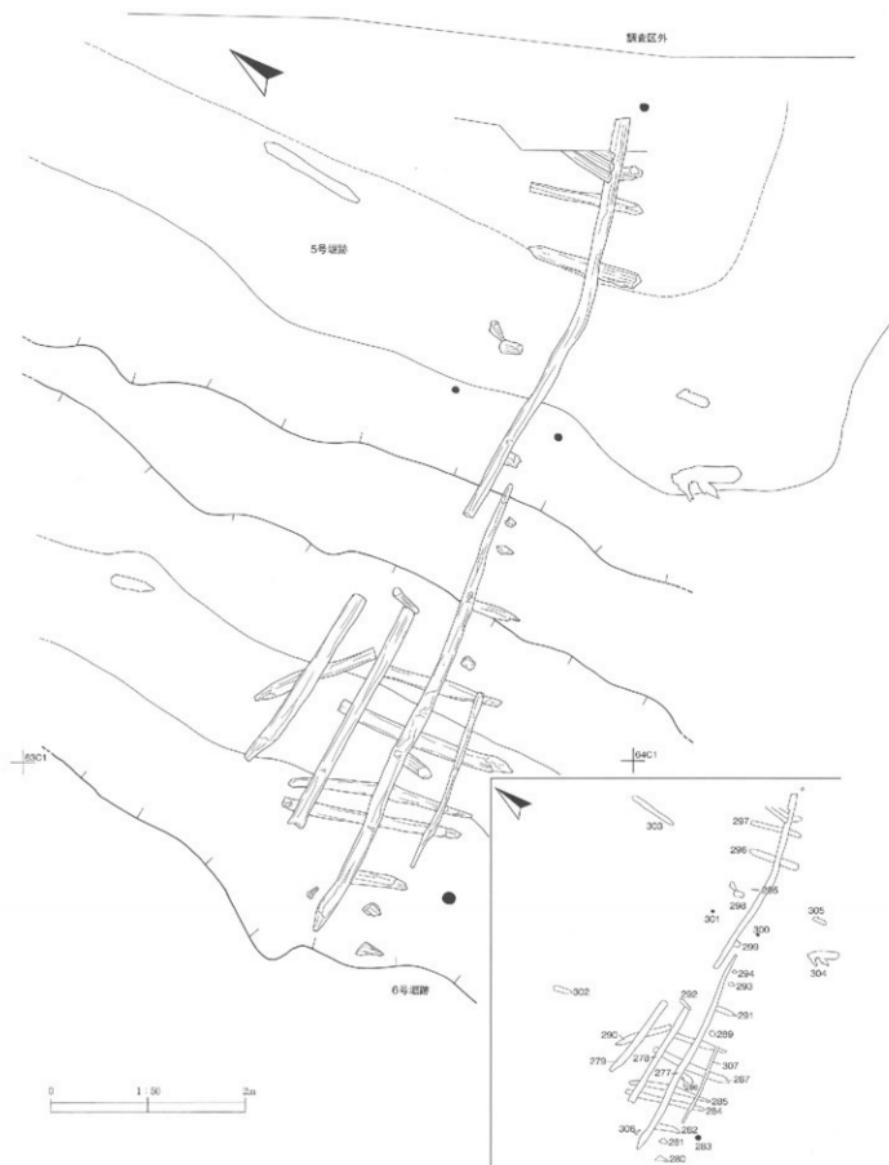
第31図 南区・2号土坑、1号橋跡、2～6号堀跡、5号溝跡

〈出土状況〉



第32図 南区・1号柵状遺構（1）

〈骨組状況〉



第33図 南区・1号柵状遺構 (2)

(5) 棚 状 遺 構

1号棚状遺構

遺構（第32・33図、写真図版31～34）

南区中央の63C区に位置する。本遺構は5・6号堀跡に跨って構築された遺構である。5・6号堀跡を検出した際に、オリーブ黒色・灰色の検出面から柵列上部が露出した状態であった。また、5号堀跡の東端にサブトレレンチを設定して掘削確認したところ、本遺構の東端部分にある柵上部を検出した。

本遺構の構造は第32・33図に示したように、丸太材や心持材、割材を立杭や横木として組み合わせた構造をしている。まず柵の骨組みとなる立杭を設置するが、第33図のように280や281・286・289・293・294・299などほぼ直に打設する杭を設定する。これに対して約60°南に傾く斜杭の282・284・285・287・291・292・296・297～299を設置する。この上で、横木となる277～279・295・307を支えとなる斜杭に組み合わせている。これら骨組みを構築した後に、第32図に表したように折断痕が明瞭に確認される樹皮が付いたままの木枝を縦に並べ敷き詰めている。

規模は長さ90m、幅30m、深さは5号堀跡側が94cm、6号堀跡側が155cm、底面レベルは5号堀跡側が21.64m、6号堀跡側が21.19mと6号堀跡側が幾分深く造られている。形状は堀の横断面に沿って構築されていることから、堀形状に従うが5号堀跡は底部がやや幅広くなっている。

使用材の樹種については、コナラ属コナラ亜属コナラ節277～279・281・286・287・289・291・293、クリ283・285・294・296・299・308、ブナ属295が用いられており、骨組み部分を中心に堅い樹種が選択されている。

遺物（第53図、写真図版74～77）

前述の通り、277～308は加工杭である。いずれも骨組みとして用いられたものである。多くは丸太材・心持材であるが、割材も認められる。表皮を剥がすためか面取りを行っている資料が多数である。長さは88.0～421.0cmまで幅広いが、2m前後に集中する。299についてCI4年代測定を実施したところ、1,399～1,447年（最外年輪）が得られている（V-1参照）。

(6) 堀 跡

1号堀跡

遺構（第29・30図、写真図版37・38）

南区中央の56～62区に位置する。本遺構は花泉町教委調査で2号溝として検出された遺構である（花泉町教委 2005）。町調査では12世紀後半の常滑産陶器壺片や13世紀後半の宮城北部産陶器壺片、堆積、不明板製品3点が出土している。遺構は文化課試掘トレレンチの再検出とIV層上面での確認により南北方向の直線状に延びる灰色の帯状プランとして検出した。

平面形はほぼ南北方向に延び、直線的である。規模は長さ25m以上、開口部幅5.5～6.9m、底部幅2.6～3.5m、断面形は底面の広い逆台形状である。底面レベルは、北端で21.48m、中央で21.60m、南端で21.20mと中央が若干高いがほぼ平坦である。

堆積土は、セクションAの計14層で確認されている。1層灰色粘土、2層オリーブ黒色粘土、3層木片を多量に混入した暗緑灰色粘土、4・6・8・11・12層暗オリーブ灰色粘土、5層オリーブ灰色テフラを含む暗緑灰色粘土、7・9層暗緑灰色粘土・砂、10層植物質多量に含むオリーブ黒色粘土、13層炭化物少量含む暗緑灰色粘土、14層暗緑灰色細砂の地山である。大半が水成堆積によるものであ

るが、壁際の6・8～12層などは壁崩落の影響も観察される。5層混入テフラはTo-aテフラの二次堆積層と思われる。

南端には2号橋跡が架けられており、本遺構とはほぼ同時期に形成されたと考えられる。詳細は2号橋跡記載を参照されたい。また、東壁を中心に杭列を検出した。計60本（西壁8・東壁52）出土しており、9本を取り上げ掲載した（347～357）。設置角度は10～100度の範囲で平均59.4度、いずれも壁と垂直もしくはそれ以上となるように設置されている。設置の深さは、5（347）は41cm、26（348）は101.5cm、27（349）は84cm、37（350）は33cm、41（351）は125cm、52（352）は156cm、61（353）は53cm、62（354）は64.5cm、63（355）は30.5cmで、大半が全体の長さ（残存値）の半分以上を壁面に打ち込まれている。このため、すべての杭は先端を鋭角に加工した上で打ち込まれている。残存した杭の逆側は腐蝕や欠損により明確に確認できないが、鋭角にするなどの加工は施されていないと思われる。用途は不明だが、かなり深くまで設置されていることから堅固な作りと思われる。現状からは防護目的か、土留め基礎かが考えられる。西側上端部には堀跡に沿って杭列が確認された。計24個あり、3個は杭が若干残存し、他は坑のみである。明確な列状となるものは判然としないが、堀跡に関連する遺構であろう。

遺物（第54～58図、写真図版69・70）

321・322は土師器壺、323は須恵器大甕である。321は内面黒色処理、323は锯歯状文が施される。324は堆塙、内面に黒色物質が付着している。325は羽口で先端が溶解している。326は鉄滓。327は中國産陶器の青磁碗である。12世紀後半～13世紀前半である。328・329は板磚。石材はいずれも頁岩（粘板岩）。328には延文五年（1360年）の銘が刻まれており、南北朝時代の所産と思われる。330・331は石鉢。安山岩製。332～334は挽物の漆器椀である。樹種はすべてブナ属。333・334の内面には朱漆で木葉が描かれている。335は挽物の器と思われるが不明。ブナ属。336～339は曲物底板で、樹種は338がスギ類似種、他はアスナロ。加工痕が顕著である。340も曲物で全形が推定できる個体。底板はアスナロ。側板は樹皮で綴じられている。341は桶の側板。スギ材。342は杓子。柄を欠いているが、柄の付け根に直径約1cmの孔が穿たれている。樹種はアスナロ類似種。343～345はスギ材の加工板。346は曲物を綴じる際に用いられたサクラの樹皮紐。347～357は加工杭である。348・352・354はクリ材。358～382は錢貨。すべて同着した状態で一塊となって見つかった。358・365は洪武通寶（明・1368年）、359・366は永楽通寶（明・1408年）、360・368・376・377は開元通寶（南唐・960年）、361・370は熙寧元寶（北宋・1068年）、362・369は元祐通寶（北宋・1078年）、363・380は元符通寶（北宋・1098年）、364は皇宋元寶（北宋・1038年）、367は天禧通寶（北宋・1017年）、371・381・382は紹聖元寶（北宋・1094年）、372は治平元寶（北宋・1064年）、374・378は元祐通寶（北宋・1086年）、375は淳祐元寶（南宋・1241年）、379は政和通寶（北宋・1111年）、373は不明。他にツノハシバミ、オニグルミ、モモが出土した。

2号堀跡

遺構（第30・31図、写真図版39・40）

南区中央の65～66区に位置する。本遺構は花泉町教委調査で1-1号、1-2号溝・溝③として検出された遺構である（花泉町教委 2005）。町調査では平安時代の土師器壺・甕や須恵器壺・甕、12世紀後半の常滑産陶器壺片や12世紀中～後半の渥美産陶器片口鉢片、漆器椀片、下駄や刀子状の木製品などが出土している。遺構はI幅除去後のIV層上面でオリーブ黒色の帯状プランとして検出した。また前述したが、本遺構東側が一部途切れており、1号橋跡が併設されている。

規模は長さ15.9m以上、開口部幅は1号堀跡より西側で3.5~5.94m（一段低い箇所の幅は3.5~4.8m）、東側で28~31.4m、深さは西側で45~60cm（浅い部分は10~15cm）、東側で60~78cmである。底面レベルは西側西端21.64m、西側1号堀跡側21.76m、東側1号堀跡側21.79m、東側東端21.73mとはほぼ平坦である。

堆積土はセクションE・Fから計7層が確認されている。1層飼場整備搅乱の灰色粘土、2a・b層オリーブ黒色粘土（bは植物質多量）、3層灰色粘土・砂、4層灰色粘土、5層オリーブ黒色粘土、6層暗緑灰色細砂、7層緑灰色砂の地山である。3層は使用時からの堆積土、6層は表面崩落土である。その他は水成堆積層である。

堆積土の状況と遺構の位置・規模から、本調査区では確認できなかったが1号堀跡と連結する可能性が高い。一部は町調査でも確認済みである。

遺物（第58図、写真図版70・71）

383は渥美産陶器の壺である。年代は12世紀後半~13世紀代。384は志野産陶器の皿である。16世紀後半~17世紀初頭である。385は挽物の漆器椀。C14年代測定から1,271~1,320年の年代観が得られている（V-1参照）。386は曲物の側板。アスナロ材。387~390は加工板。樹種は387クリ、388スギ類似種、389アスナロ類似種、390アスナロ。他にモモ3個が出土した。

3号堀跡

遺構（第30・31図、写真図版41）

南区中央の64~65区に位置する。本遺構は花泉町教委調査で1~1号溝・溝③として検出された遺構である（花泉町教委 2005）。遺構はI層除去後のIV層上面で2~5号堀跡が並列するオリーブ黒色の帯状プランとして検出した。

規模は長さ7.76m以上、開口部幅1.8~2.3m、底部幅1.12~1.5m、深さは85~118cmで断面形は鍋底形である。底面レベルは西端21.39m、中央21.29m、東端21.10mであるが、西は掘り過ぎにより深くなっている。

堆積土はセクションDから計5層確認されている。1・2層はオリーブ黒色粘土、3層灰色砂質粘土、4層灰色粘土、5層緑灰色砂の地山である。1・2層は水成堆積層、3・4層は使用時からの堆積土もしくは崩落土である。

遺物（第58・59図、写真図版71）

391は中国産陶器の青磁碗である。中世（13世紀か）と思われる。393はアスナロ材の範。先端が黒色化している。394はクリ材の連歛下駄。左足用と思われる。395は草本の繩である。撚りはL.R.。396・397は加工杭である。いずれも丸太材で、396は樹種コナラ属コナラ亜属コナラ節。396についてC14年代測定を行い、1,448~1,527年の年代観を得ている（V-1参照）。398は残存値の長さ9.6cmの鉄鎌である。399はシカ角である。

4号堀跡

遺構（第30・31図、写真図版42）

南区中央の64~65区に位置する。本遺構は花泉町教委調査で1~1号溝・溝②として検出された遺構である（花泉町教委 2005）。遺構はI層除去後のIV層上面で2~5号堀跡が並列するオリーブ黒色の帯状プランとして検出した。

規模は長さ6.2m以上、開口部幅1.3~2.12m、底部幅78~96cm、深さは87~102cm、断面形は崩落の

影響を多く受けているが、鍋底形であろう。底面レベルは西端21.26m、中央21.30m、東端21.32mとほぼ平坦である。

堆積土はセクションCから計8層確認されている。1層オリーブ黒色粘土、2・3層灰色粘土、4・5層オリーブ灰・灰オリーブ色細砂、6層暗緑灰色細砂、7層緑灰色細砂の地山、8層植物質多量の灰オリーブ色粘土・細砂の地山である。1～3層は水成堆積層、4～6層は壁面崩落土、7・8層は地山で、使用時からかなり崩落していたと考えられる。

遺物（第59図、写真図版71）

400は土師器壺である。内面黒色処理。401は挽物の漆器椀。樹種はブナ属。402は略完形の曲物容器。底はアスナロ材。403は速歯下駄。クリ材で台部より前後歯が幅広い。他にオニグルミ、モモが出土した。

5号堀跡

遺構（第30・31図、写真図版43～45）

南区中央の62～64区に位置する。本遺構は花泉町教委調査で1～1号溝・溝①として検出された遺構である（花泉町教委 2005）。遺構はI層除去後のIV層上面で2～5号堀跡が並列するオリーブ黒色の帯状プランとして検出した。検出時は2～4号堀跡に並列する箇所と6号堀跡と並行する箇所は別遺構と提えていたが、後にL字屈曲するものと確認された。

規模は長さ14.4m以上、開口部幅2.5～3.0m以上、底部幅1.0～1.36m以上、深さは56.7～94.8cmで南側が浅い。断面形はU字状と考えられる。底面レベルは北端・中央21.69m、南端21.76mとほぼ平坦である。

堆積土はセクションBから計8層確認されている。断面は6号堀跡と共に、4～12層が本遺構に関わる層位である。4層灰色砂、5層暗オリーブ灰色砂質土、6層オリーブ黒色粘土、7層灰色粘土、8～11層暗緑灰色粘土、12層暗緑灰色細砂の地山である。4～6層は6号堀跡1・2層などと共に、人為的な一括堆積土と考えられる。5・6層と7層の間に伐採した木枝や粗縫を敷き詰めた痕跡が認められた。7～11層はラミナが観察される水成堆積層となり、堆積土の上半と下半で堆積に違いがある。

南端のL字状に東へ屈曲する直前に1号棚状遺構が構築されている。詳細は譲るが本遺構底面に設置されていることから見ても同時期の遺構である。

遺物（第59・60図、写真図版71・72）

404は土師器壺である。405は志野産陶器の皿である。16世紀後半～17世紀初頭。406は中国産陶器の青磁碗である。13世紀中葉～14世紀前半。407も中国産と思われる青磁折縁皿片。13世紀中葉～14世紀前半。408は挽物の漆器椀。外側に木葉の模様が施される。クリ材。409・410は植物の桶削板。樹種はスギ材。411は纏物の籠か。2本越え2本潜り2本送りを基本とする。412はマツ属複維管束亞属の加工板。413～418は加工板。いずれも丸太材で、413はクリ、415・416はコナラ属コナラ亞属コナラ節である。先端を鉛筆状に尖らせている。419はシカ肩甲骨。他にオニグルミ、モモ、ツノハシバミが出土した。

6号堀跡

遺構（第30・31図、写真図版43・44）

南区中央の61～64区に位置する。I層除去後のIV層上面で南北方向へ直線的に延びる灰色の帯状ブ

ランとして検出した。

規模は長さ20.3m、開口部幅2.28~3.34m、底部幅72~118cm、深さは86.5~114.4cmで南端が最も浅い。断面形はU字状である。底面レベルは北端21.65m、中央21.17m、南端21.15mと北から南に向かって緩く傾斜している。

堆積土はセクションAから計6層、セクションBから計4層が確認されている。セクションAは6層暗緑灰色粘土、7層暗オリーブ灰色砂質粘土、8・9層暗オリーブ灰色粘土、10層暗緑灰色粘土、11層暗オリーブ灰色粘土の地山である。セクションBは1層灰色砂とオリーブ黒色粘土の混合、2層暗オリーブ灰色砂質土と粘土の混合、3層オリーブ黒色粘土、11層暗オリーブ灰色粘土・12層暗緑灰色細砂の地山である。セクションA・6層とセクションB・1・2層は一括堆積土で、大半を自然堆積で埋没した状態に入為的な一括土を埋めて整地した層位である。この状況は5号堀跡にも窺われ、4~6層が本遺構・一括堆積土と同様でこれより下位が自然堆積層である。5・6層と7層の間には伐採した木枝や粗糸を敷き詰めた痕跡が認められた。色調・土質ともに似ることから、両遺構は同時期に埋め戻されたと考えられる。セクションA・7~10層とセクションB・7~11層は水成堆積による自然堆積層である。

5号堀跡と同様に南端のL字状に東へ屈曲する直前に1号柵状遺構が構築されている。詳細は詳るが本遺構底面に設置されていることから見ても同時期の遺構である。

遺物（第60~62図、写真図版72・73）

421は古瀬戸と思われる灰釉の陶器花瓶。中世前半（15世紀）。422は瓦質土器の火鉢（手炙り）。中世。423是中国産陶器の背縫香炉片。同じく中世。424・425は挽物の漆器椀。いずれもブナ属。426は曲物の底板。スギ材。427はスギ材の箆。全面を面取りして丁寧に成形している。428はタケ製の不明製品。端部を面取りして丁寧に加工している。429~439は加工板。432はヒノキ属類似種、433・438クリ、435コナラ属コナラ亜属コナラ節、その他はスギ。440~452は加工杭。452は削材、その他は丸太材である。樹種は、440・446・448・450~452はコナラ属コナラ亜属コナラ節、442・445・449はクリ。453・454は鉄釘である。454は縫の可能性もある。455は鹿角製の刺突具である。先端付近を削り、尖らせている。456はシカ中手骨もしくは中足骨、457はシカ脛骨、458はシカ頭骨である。同一個体と思われる。他にオニグルミ、モモ、トチノキ、ツノハシバミ、ヒシ、クロマツの種実が出土した。

7号堀跡

遺構（第30図、写真図版45）

南区中央の60~61区に位置する。I層除去後のIV層上面で北東~南西方向へ直線的に延びる灰色プランとして検出した。検出段階では6号堀跡の一部と捉えていたが、精査が進むにつれて別遺構となることが分かった。遺構の存在はセクションAから認められた。

規模は長さ3.0m以上、開口部幅1.14~3.30m、底部幅1.30~1.90m、深さは108cm（浸食部分まで）、断面形は鍋底状と思われる。

堆積土はセクションAから計6層確認されている。1層灰色砂質土、2層暗緑灰色粘土を一括して含む灰色砂質土、3層オリーブ黒色砂と灰色粘土の互層、4層暗オリーブ灰色粘土、5層浸食層の暗オリーブ灰色砂質粘土、11層暗オリーブ灰色粘土の地山である。1~4層は水成堆積による自然堆積層、5層は清使用時に多量の水で浸食された層と思われる。遺物なし。

(7) 溝 跡

5号溝跡

遺構（第30・31図、写真図版46）

南区中央の60C・D区に位置する。I層除去後のIV層上面ではほぼ東西方向に走るオリーブ黒色の帯状プランとして検出した。

規模は長さ5.4m以上、開口部幅54~88cm、底部幅36~56cm、深さ7.7~15.8cmで、凹凸はあるがほぼ平坦である。底面レベルは西端22.16m、中央22.24m、東端22.20mである。

堆積土はセクションGからオリーブ黒色粘土の単層で形成され、水成堆積による自然堆積層である。検出位置から門跡など出入口に関わる遺構の一部とも考えられるが、不明である。遺物なし。

6・7号溝跡

遺構（第27・28図、写真図版46・47）

南区中央南の68~70区に位置する。本遺構は花泉町教委調査で3号落ち込みとして検出された遺構である（花泉町教委 2005）。町調査では平安時代の須恵器甕が出土している。I層表土を除去後のIV層上面でオリーブ黒色の帯状プランと灰オリーブ色の調査区内で途切れる帯状プランとして検出した。灰オリーブ色は本遺構、オリーブ黒色は2号水田跡である。精査は本遺構を先行して作業し、終了後に重複する2号水田跡の精査を行った。精査はまず両遺構の堆積状況確認のためセクションAの位置に上幅約1.4mのトレンチを設定した。

断面観察から本遺構が2号水田跡より新期であることを確認した。また、検出段階では1遺構と捉えていたが、断面形状を確認すると2~3条の溝で構成されていることが分かった。本遺構に関係する層位は1~9層、15・16層の計11層である。

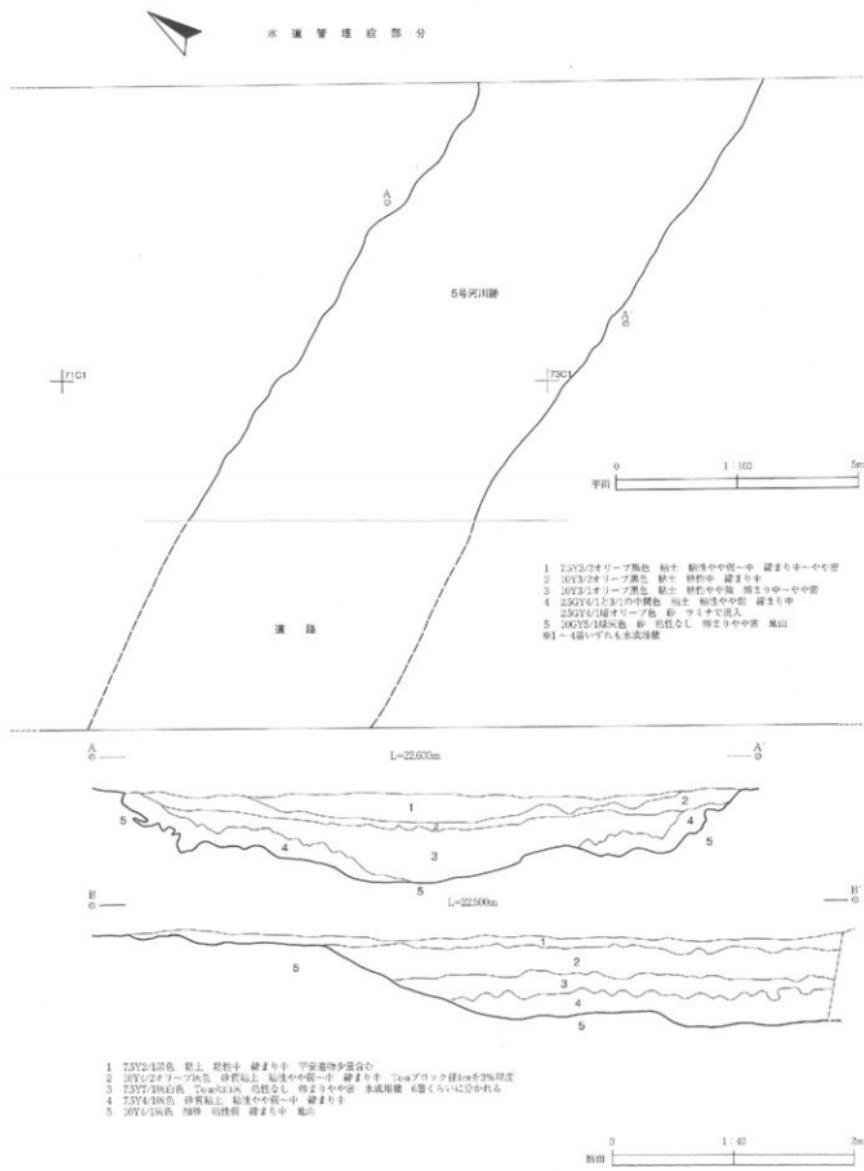
構造は外周する6号溝跡とその内側の7号溝跡の2条で1遺構を成すものと考えられる。6号溝跡は7号溝跡を巡るように造られており、両溝跡を区切る部分は外壁よりも低くなっている。

規模は全体の長さが13.1m以上、開口部幅6.1~6.6m、底部幅5.3~5.7mである。6号溝跡は長さ13.1m以上、開口部幅0.95~2.08m、底部幅0.3~1.3m、深さ61.9~71.1cmである。7号溝跡は長さ11.2m以上、開口部幅1.96~3.25m、底部幅0.4~2.2m、深さ40.2~52.4cmである。底面レベルは6号溝跡がU字頂部で21.57m、北側の西端21.55m、南側の西端21.57mと平坦、7号溝跡が東端21.57m、中央21.52m、西端21.54mとこちらもほぼ平坦である。深さは外壁上端と内壁上端のレベル差により違がある。

堆積土は計9層、地山が計2層で構成される。1層灰オリーブ色粘土、2・4層オリーブ黒色粘土、3・6層暗オリーブ灰色粘土、5層灰色粘土、7層To-aテフラブロックを混入する暗緑灰色粘土、8層オリーブ黒色土、9層黒色粘土、15層灰色砂、16層緑灰色粗砂である。各溝跡の堆積土は1・2層が共通しており、自然堆積層である。3・4層は6号溝跡、5~7層は7号溝跡に認められ、4・7層は溝使用時からの堆積土であり、その他は水成堆積と考えられる。15・16層は地山であるが、遺構自体は2号水田跡を切って形成されている。堆積土から見ても6・7号溝跡とも同時存在していたと考えられる。

遺物（第60・61図、写真図版79）

6号溝跡から459中国産磁器の染付皿。ほぼ完形で、16世紀後半と思われる。460・461は蓋板か。樹種は460アスナロ、461クリ。462はスギ材の加工板。463はエゴノキ属の心持材を用いた加工材。中



第34図 南区・5・6号河川跡

央に紐を結んだ痕跡がある。464は丸太材の加工杭、465は加工材。他にオニグルミ、モモ、クロマツの種実が出土した。7号溝跡から466差歛下駄。樹種はモクレン属、C14年代測定では1,455～1,635年の年代観が得られている（V-1参照）。467～469は加工板。467はアスナロ、468はヒノキ属、469はクリ。467に打ち込まれていた木釘はイネ科タケ亜科である。470～473は丸太材の加工杭、474・475は丸太材・心持材の加工材。樹種はクリ。

（8）河 川 跡

5号河川跡

遺構（第34図、写真図版48）

南区南の71～73区の範囲に位置する。本遺構は花泉町教委調査で3号落ち込みとして検出された遺構である（花泉町教委 2005）。I層表土を除去後のIV層上面でオリーブ黒色の帯状プランとして検出した。精査はセクションAの位置に幅約1.5mのサブトレンチを設定し、掘削した。これから約70cmで河床面に達することを確認した。トレンチ断面の堆積土確認と遺物出土量から、精査は検出範囲とセクションA断面の記録のみに留めた。

規模は長さ15.1m以上、開口部幅4.7～5.0m、底部幅はセクションAから10.3m程度、深さはセクションAから73cmである。

堆積土はセクションAから計5層に細分される。1～3層オリーブ黒色粘土、4層暗オリーブ色粘土と砂のラミナ、5層縁灰色砂の地山となり、堆積土はすべて水成堆積が認められる。また、セクションA北側の河床面には水流によって巻き上げられた痕跡が確認される。遺物なし。

6号河川跡

遺構（第9・34図、写真図版49）

南区南端の77～86区の範囲に位置する。I層表土を除去後のIV層上面で黒色の帯状プランとして検出した。精査はセクションAの位置に幅約1.5mのサブトレンチを設定し、掘削した。これから約70cmで河床面に達することを確認した。トレンチ断面の堆積土確認と遺物出土量から、精査は検出範囲とセクションA断面の記録のみに留めた。

規模は長さ18.5m以上、開口部幅17.5m、底部幅は2.6m以上、深さはセクションAから70cmである。

堆積土はセクションBから計5層に細分される。1層黒色粘土、2層オリーブ灰色砂質粘土、3層灰白色To-aテフラ堆積層、4層灰色砂質粘土、5層灰色細砂の地山である。

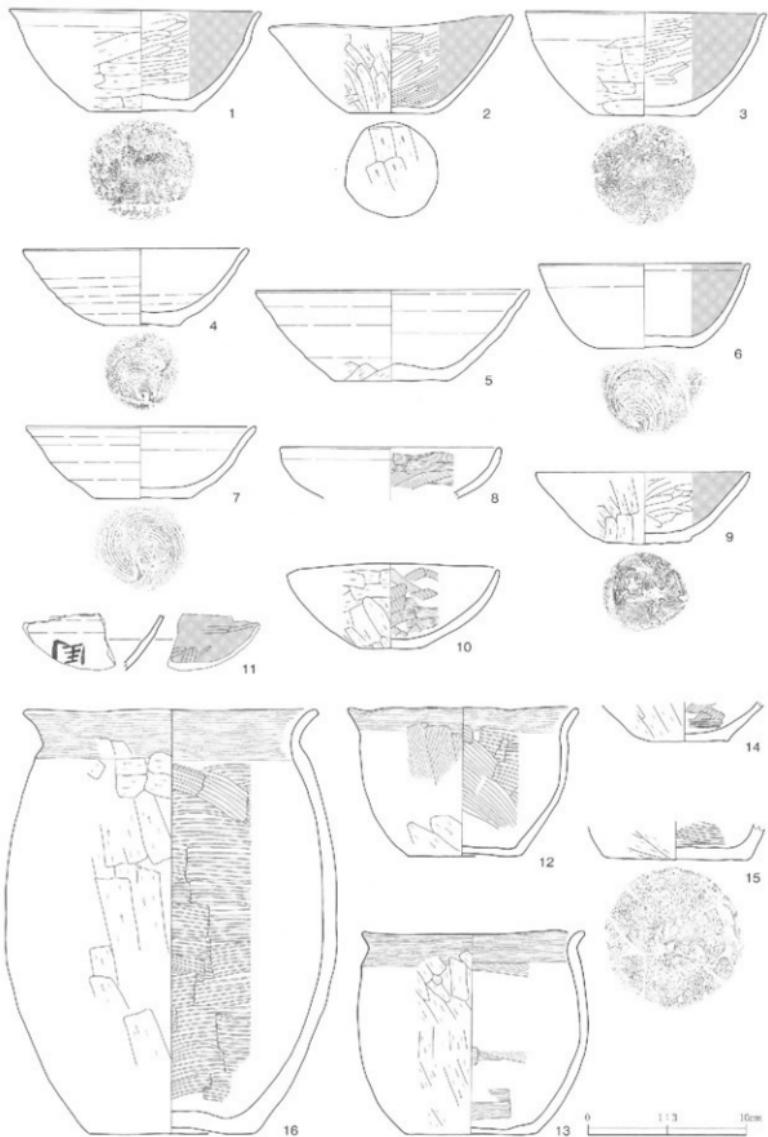
遺物（第62図、写真図版79）

476は土師器壺である。他にモモ・オニグルミの種実が出土した。

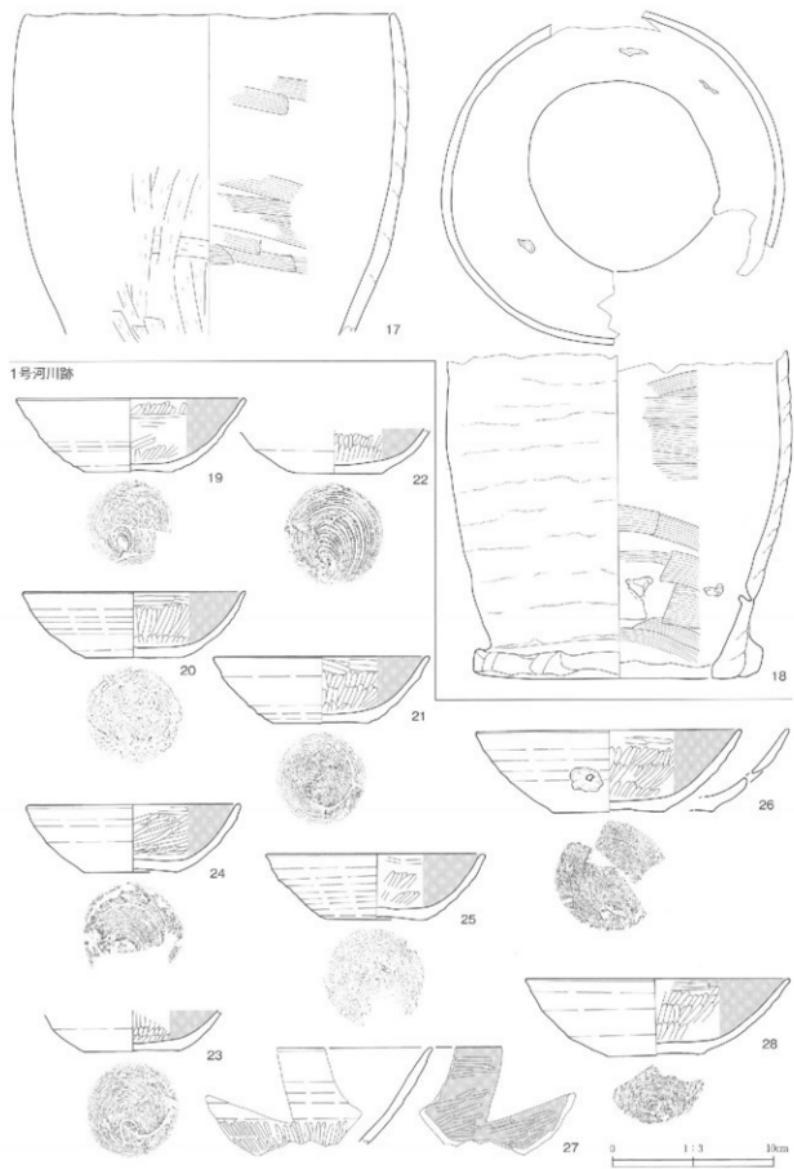
（9）南区遺構外出上遺物（第62図、写真図版79）

477はアスナロ材の蓋板。中央に直径1cmの孔。

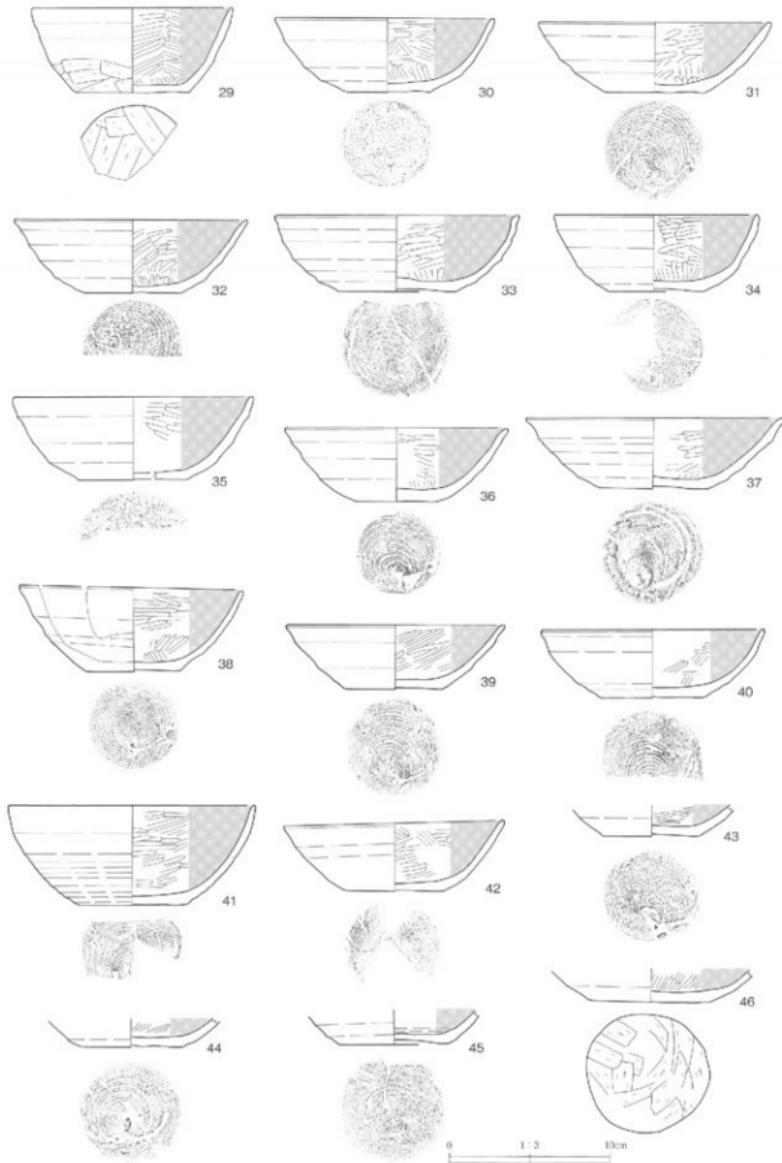
1号竪穴住居跡



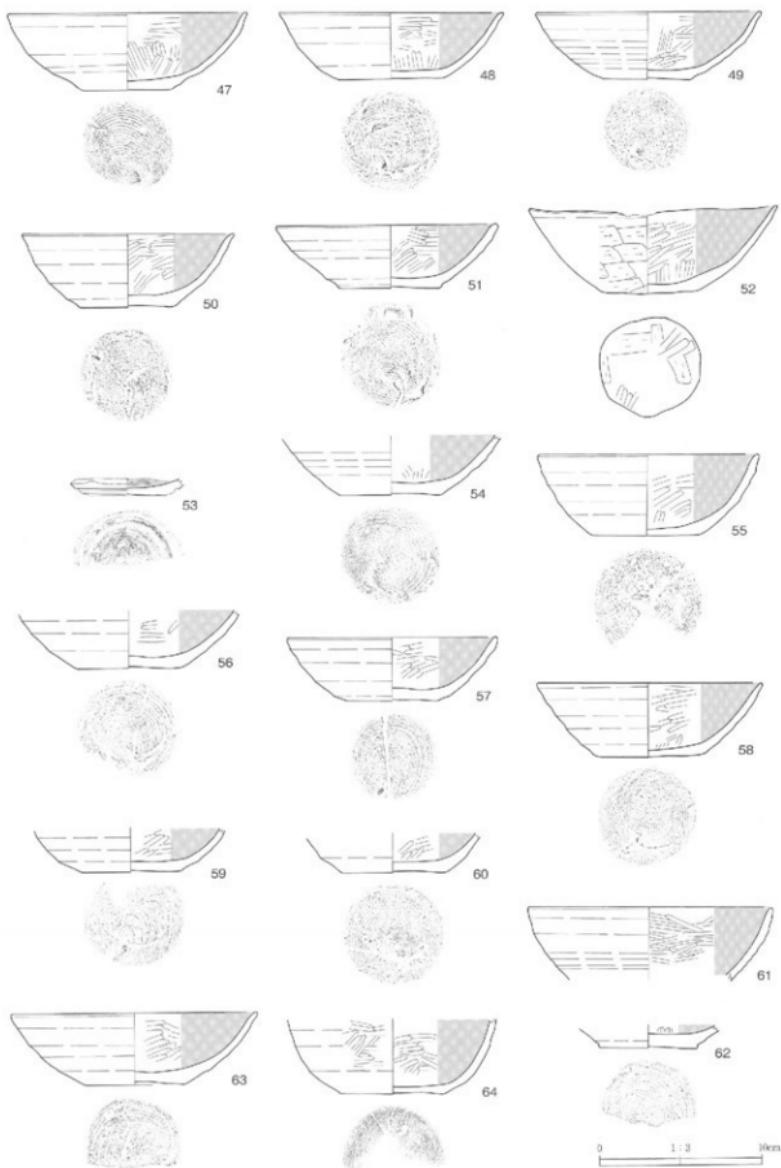
第35図 北区・1号竪穴住居跡（1）出土遺物



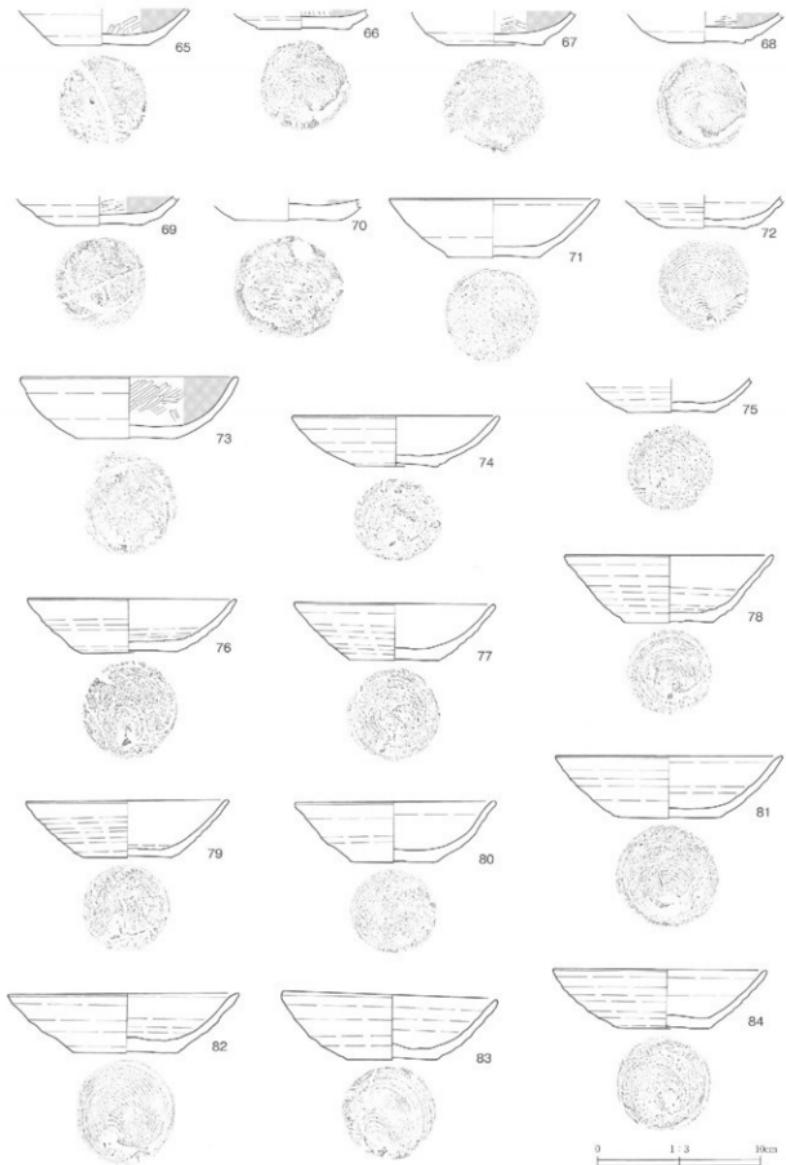
第36図 北区・1号竪穴住居跡（2）、1号河川跡（1）出土遺物



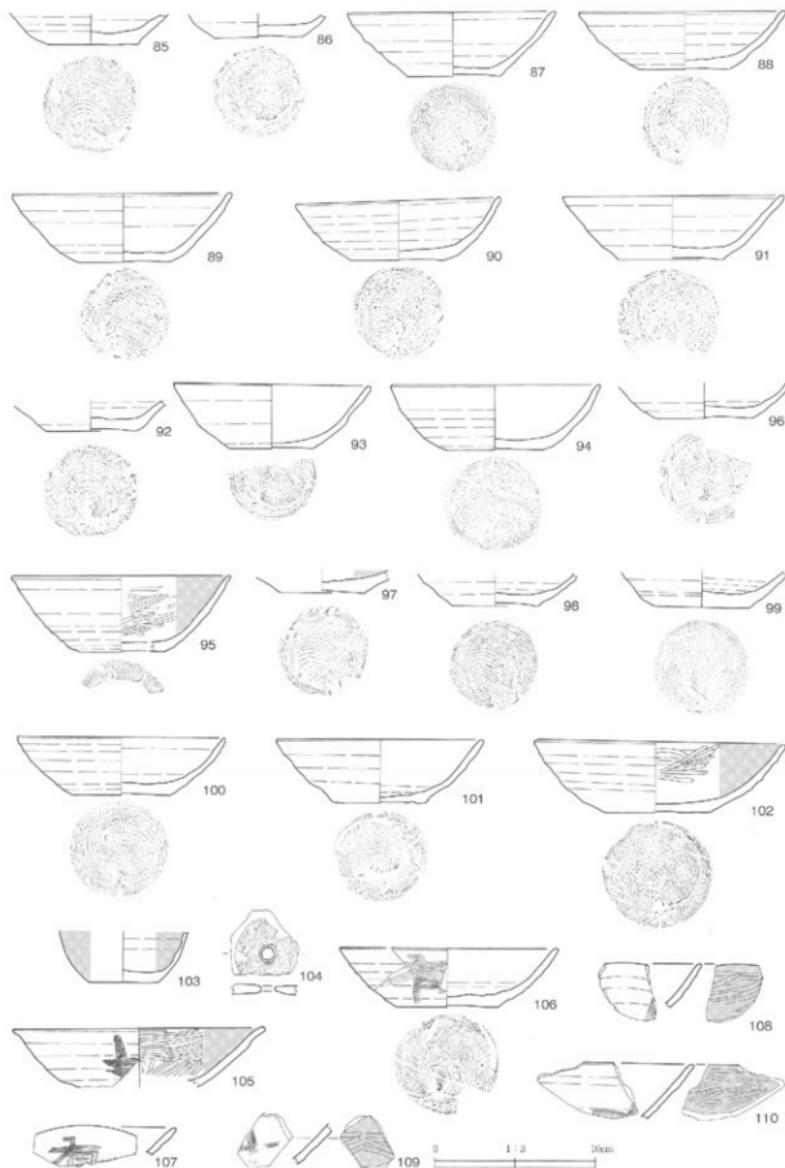
第37図 北区・1号河川跡(2)出土遺物



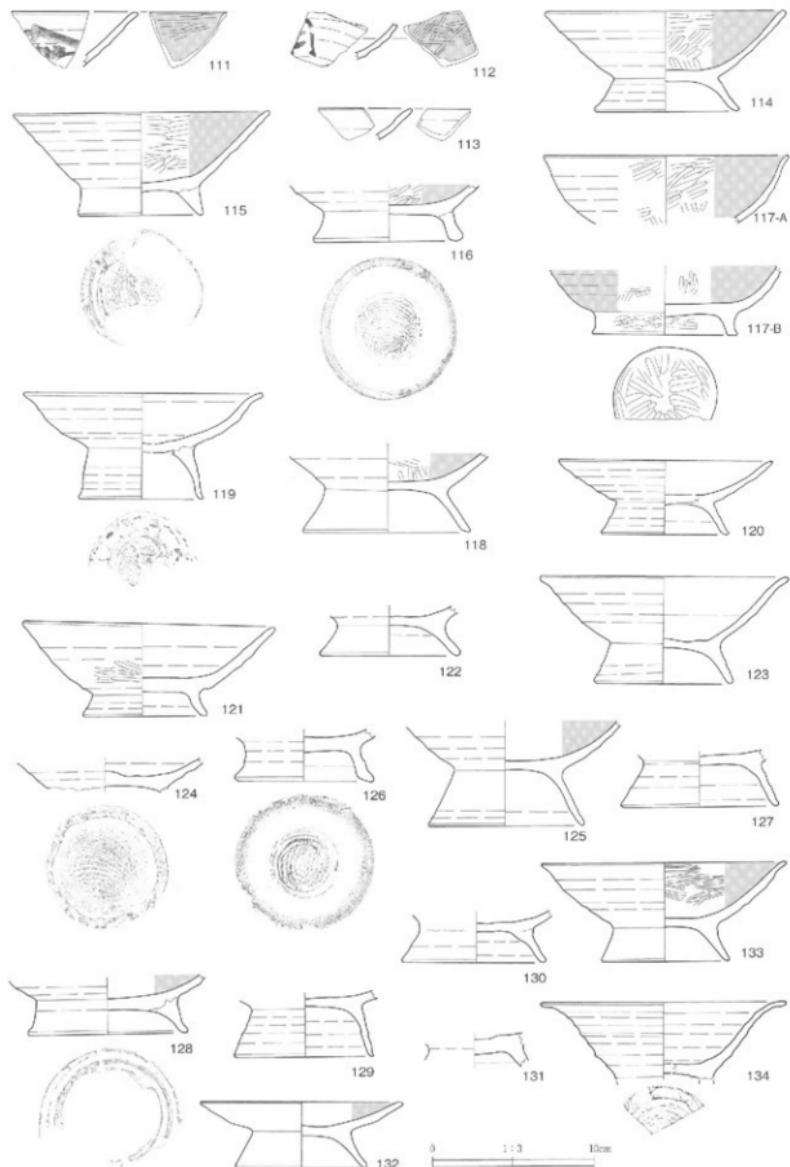
第38図 北区・1号河川跡（3）出土遺物



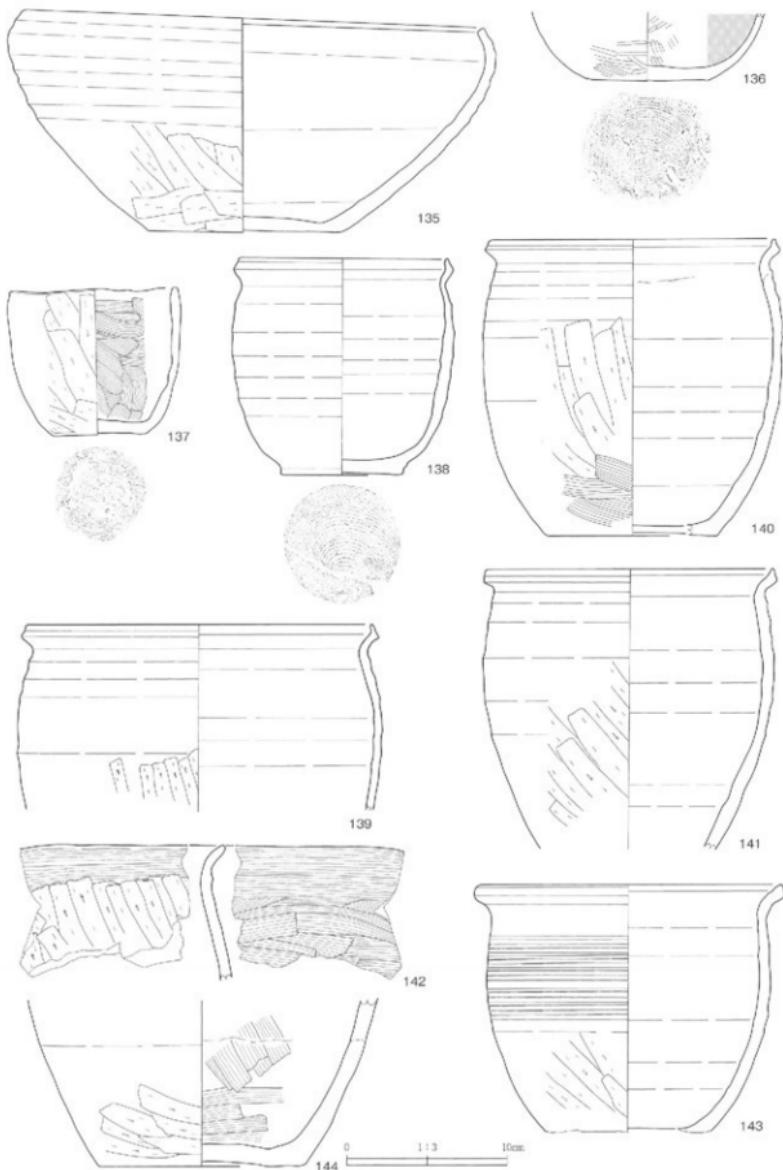
第39図 北区・1号河川跡(4)出土遺物



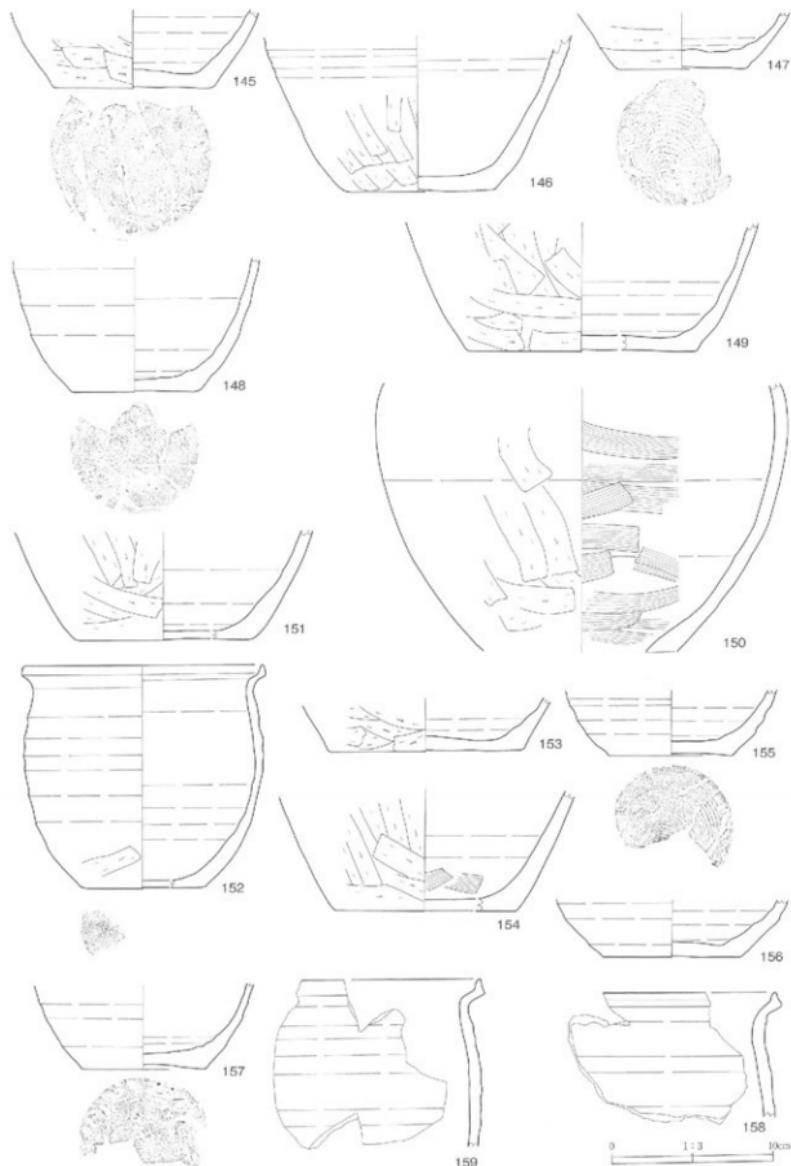
第40図 北区・1号河川跡(5)出土遺物



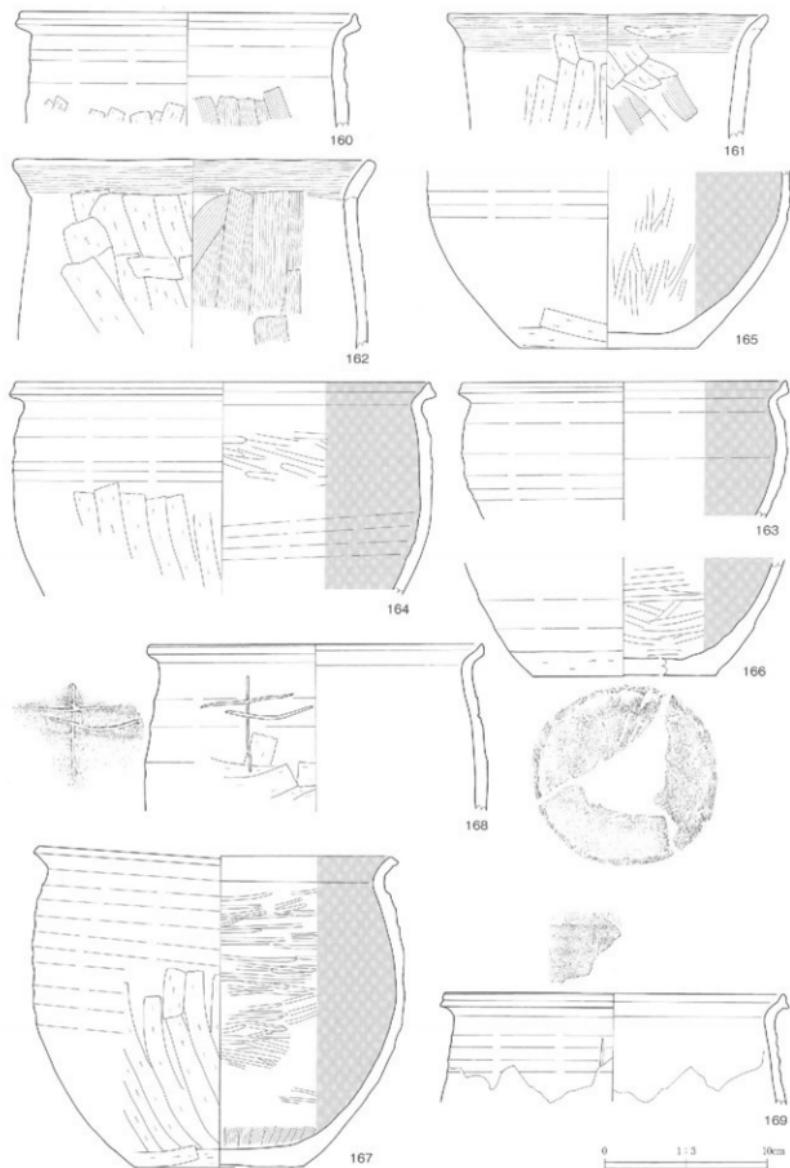
第41図 北区・1号河川跡（6）出土遺物



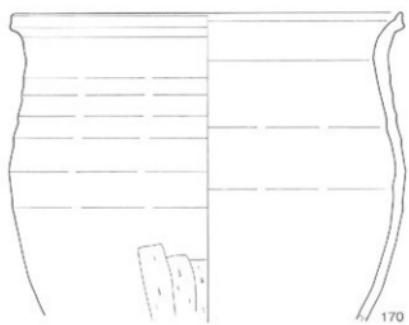
第42図 北区・1号河川跡（7）出土遺物



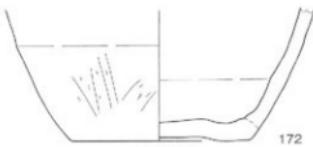
第43図 北区・1号河川路(8)出土遺物



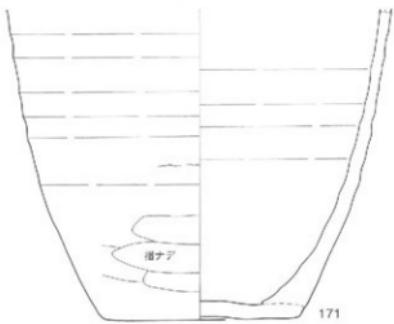
第44図 北区・1号河川跡(9)出土遺物



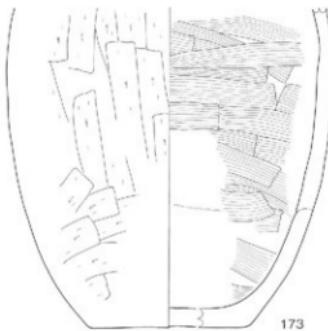
170



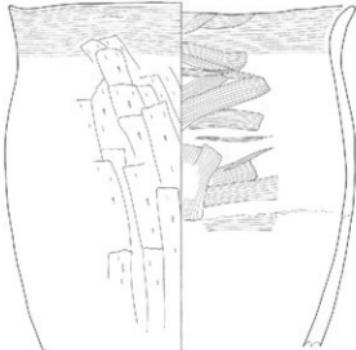
172



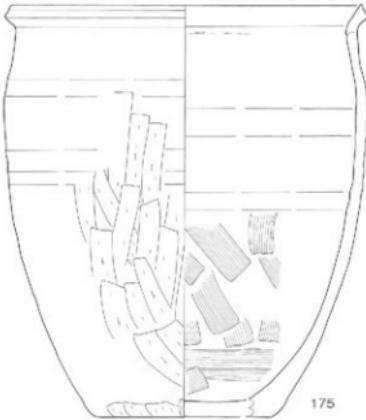
171



173



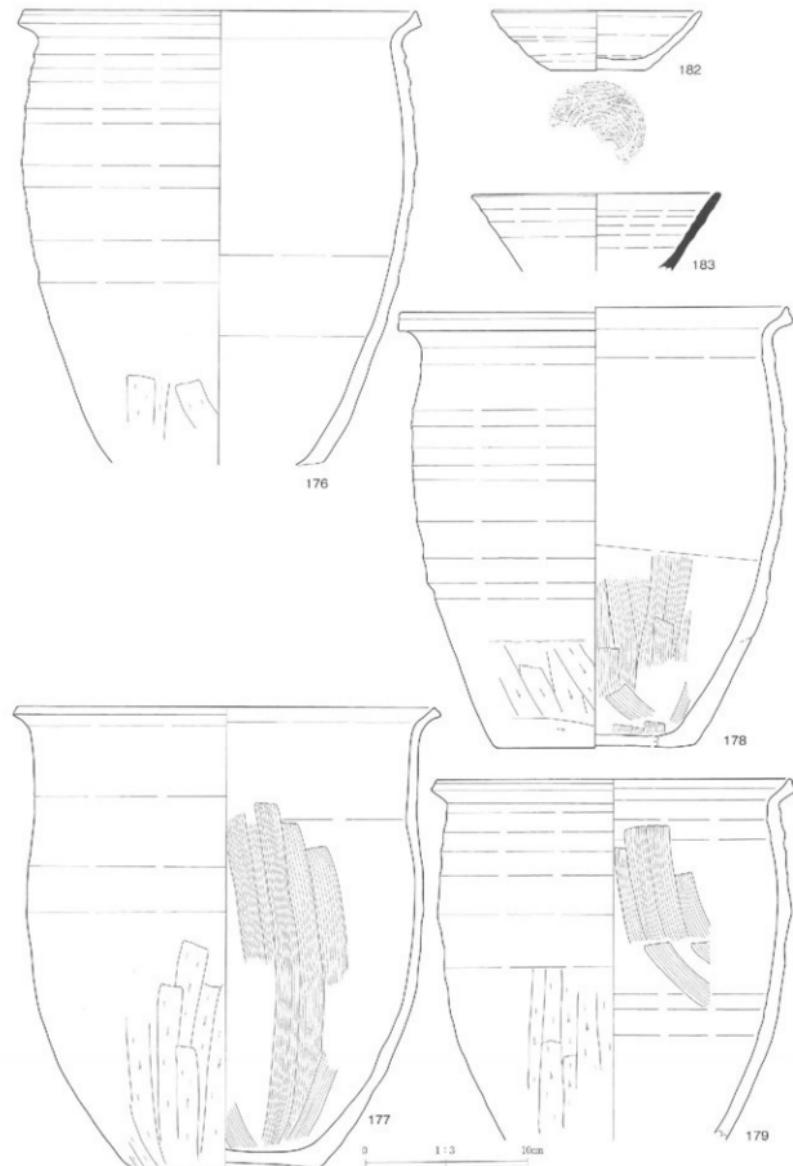
174



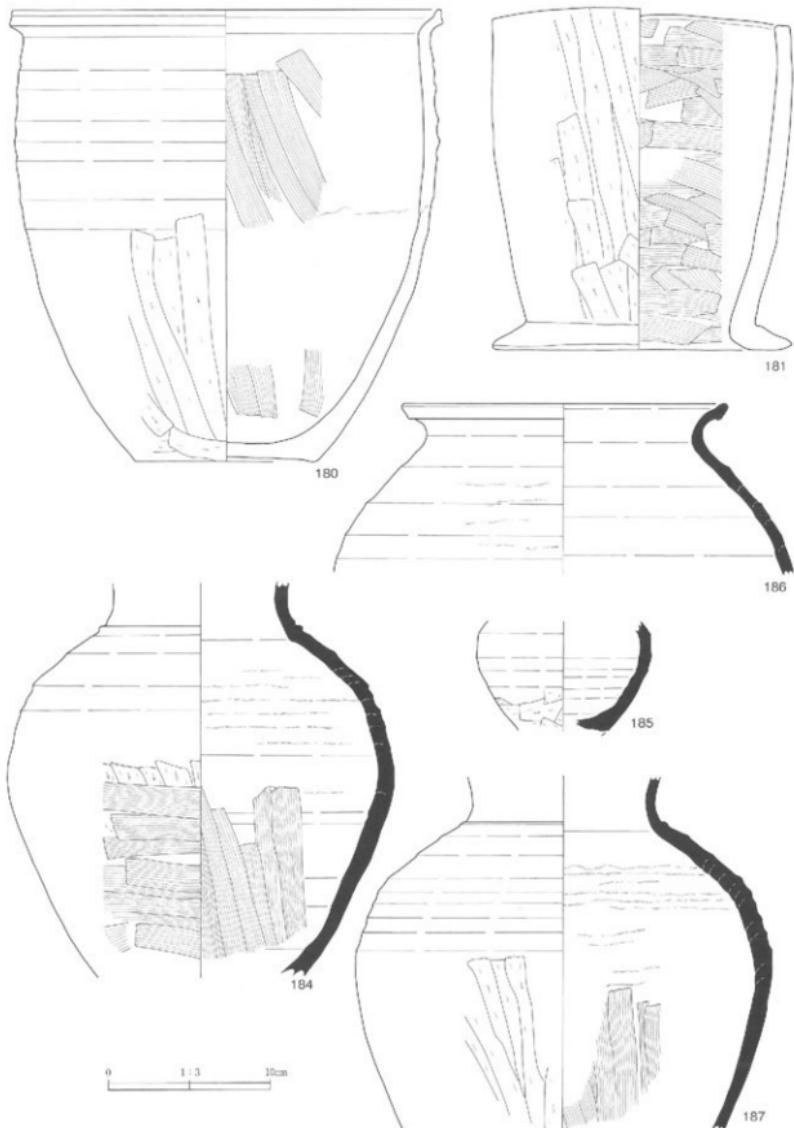
175

0 1:3 10cm

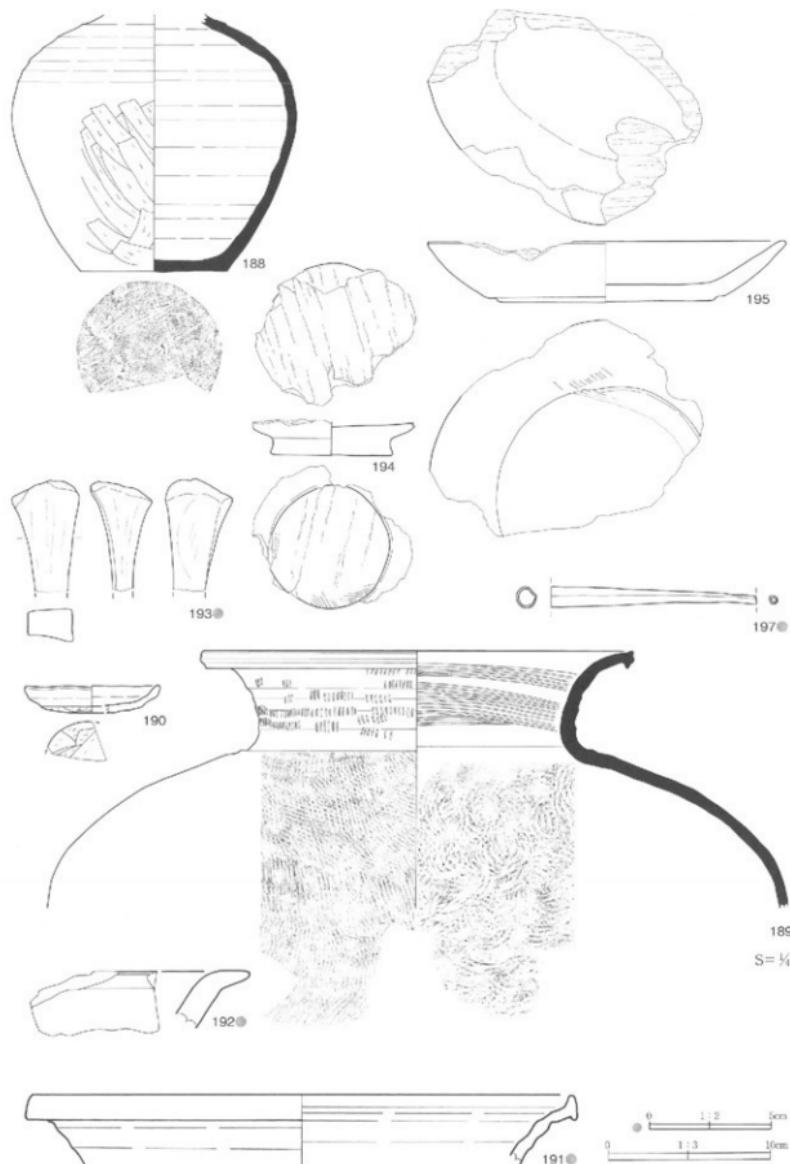
第45図 北区・1号河川跡(10)出土遺物



第46図 北区・1号河川跡(11)出土遺物

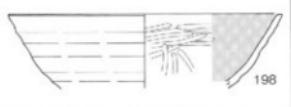


第47図 北区・1号河川跡(12)出土遺物

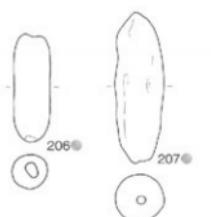
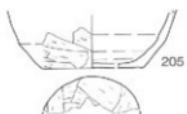
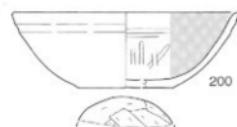
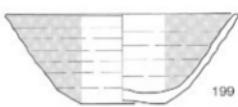


第48図 北区・1号河川跡(13)出土遺物

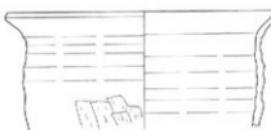
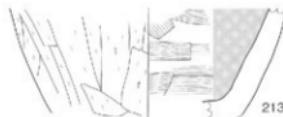
1号ピット



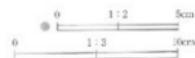
1号水田跡



1号溝跡



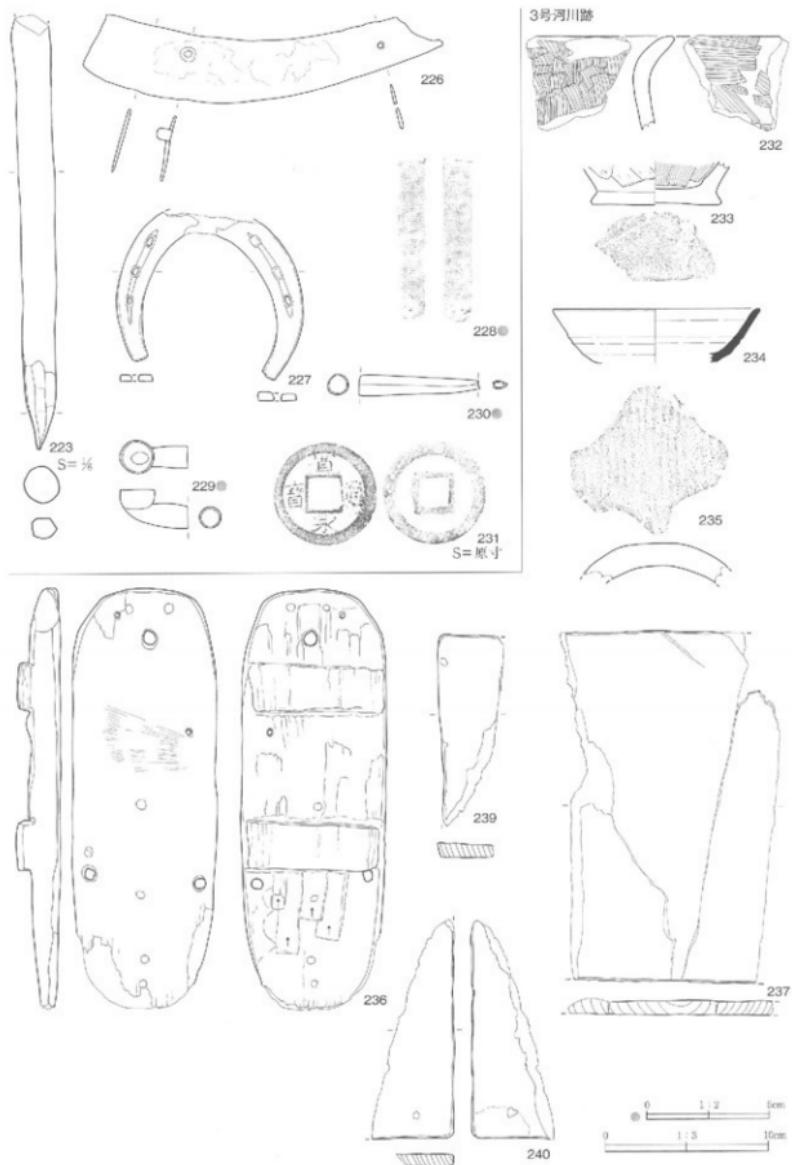
2号溝跡



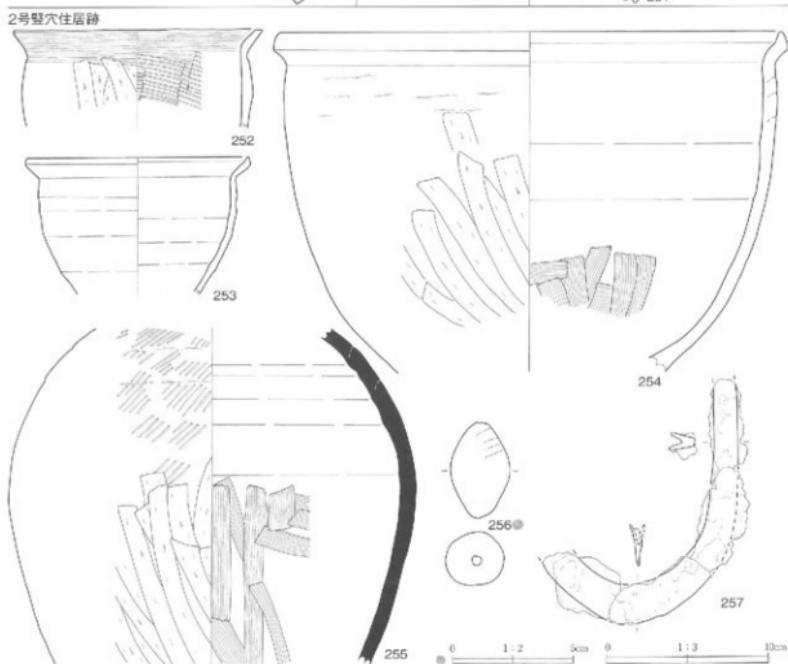
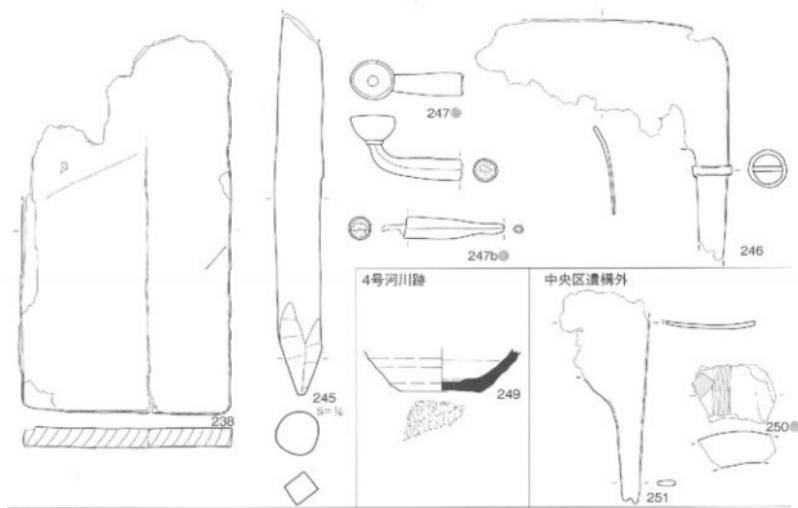
2号河川跡



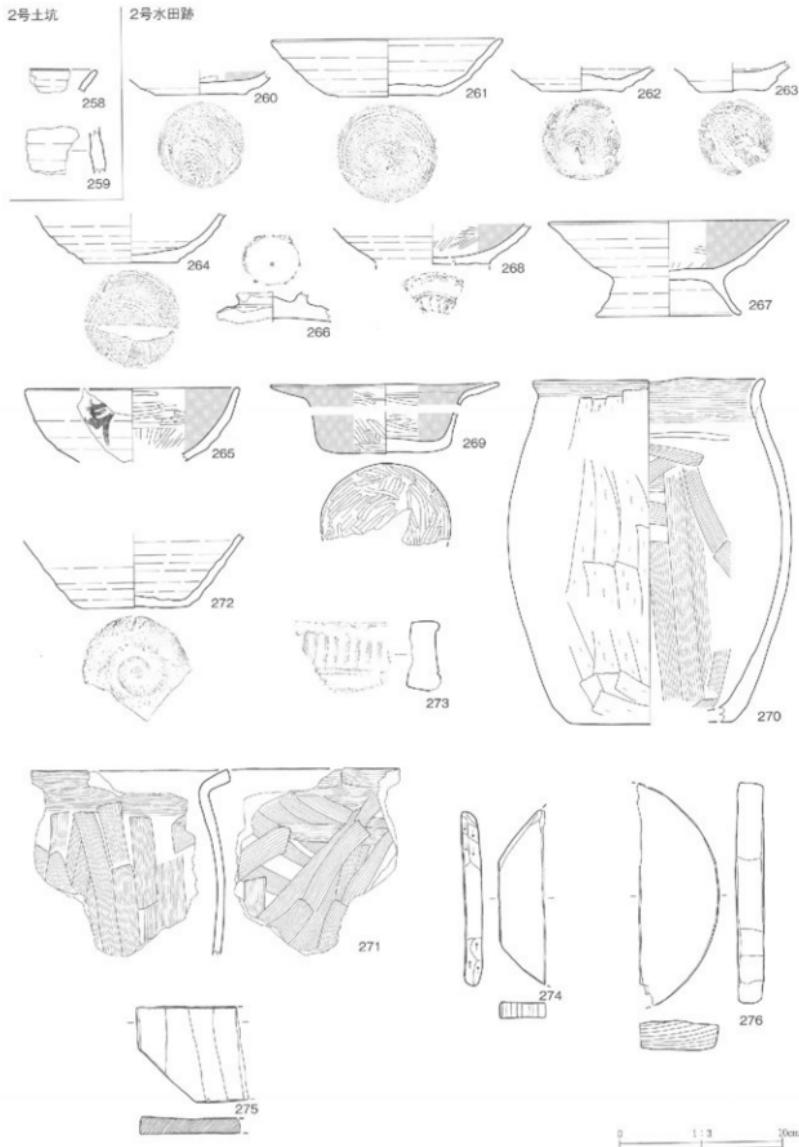
第49図 中央区・1号ピット、1号水田跡、1・2号溝跡、2号河川跡（1）出土遺物



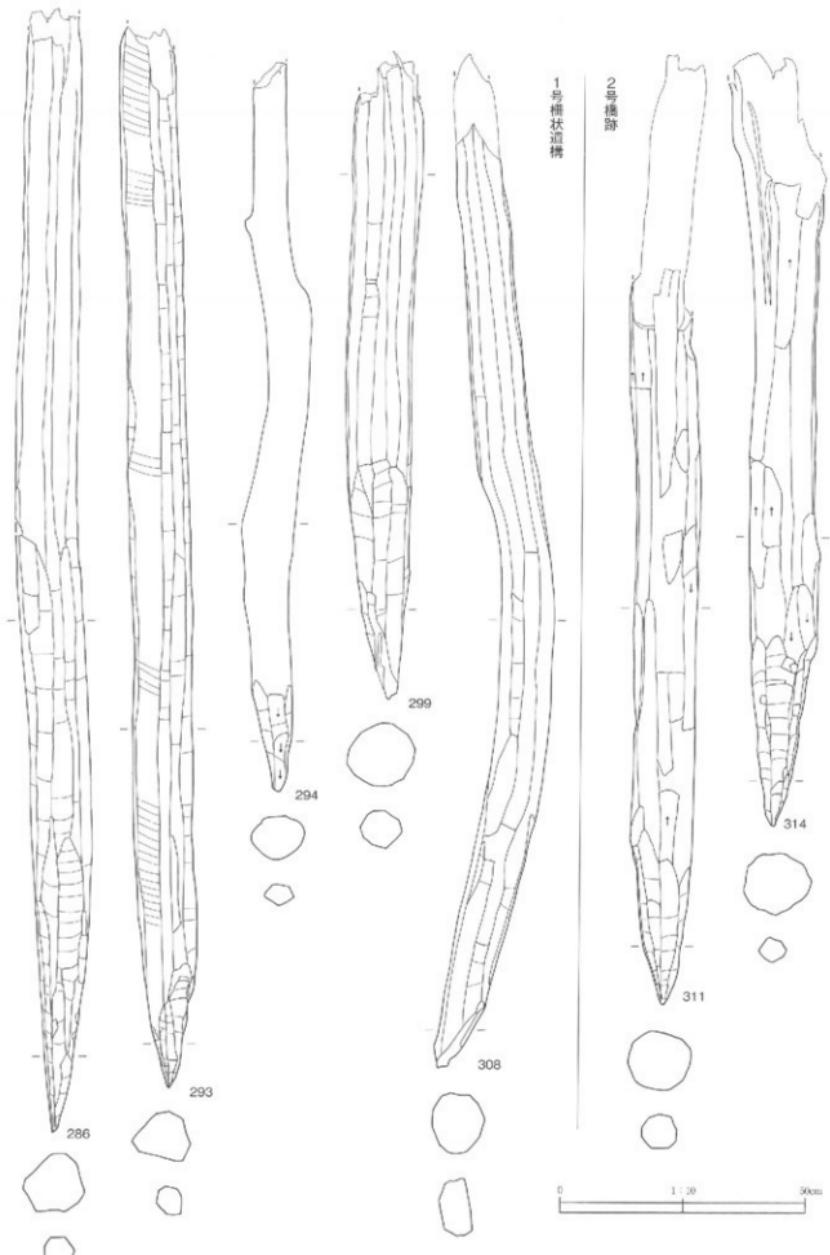
第50図 中央区・2号河川跡(2)、3号河川跡(1)出土遺物



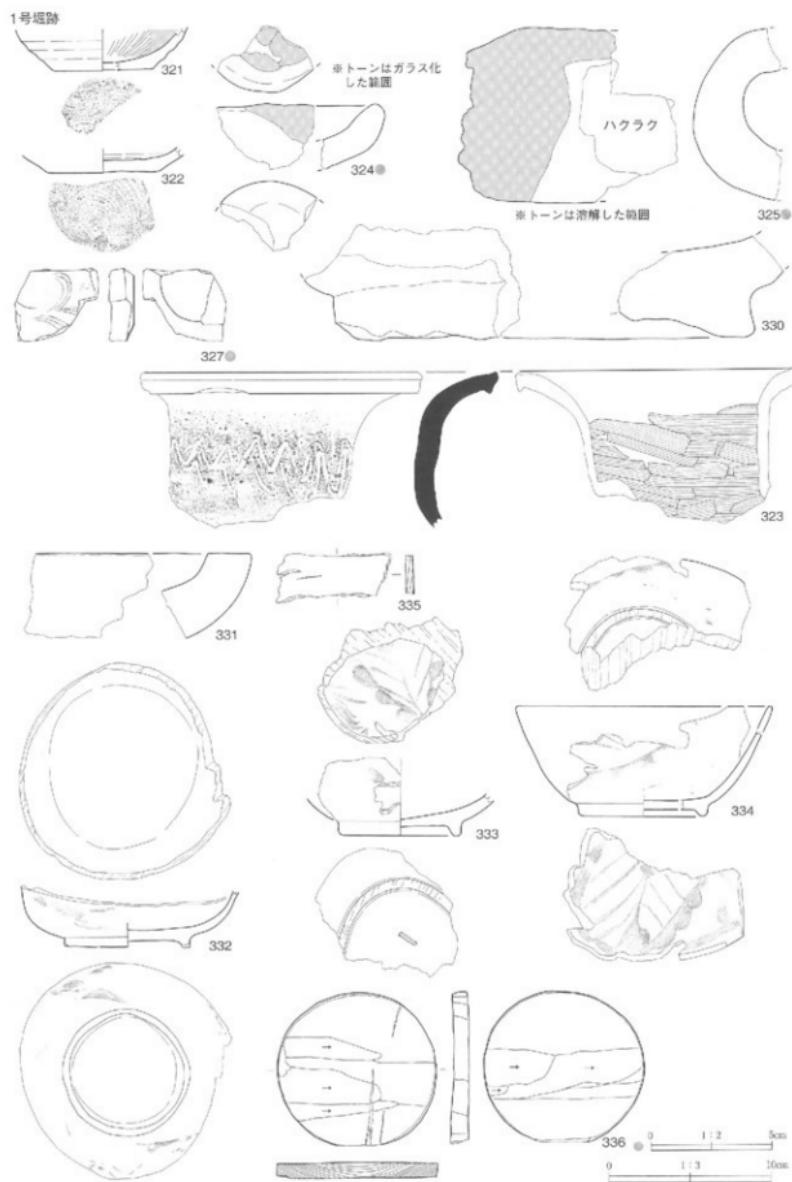
第51図 中央区・3号河川跡（2）、4号河川跡、中央区遺構外、南区・2号竪穴住居跡出土遺物



第52図 南区・2号土坑、2号水田跡出土遺物



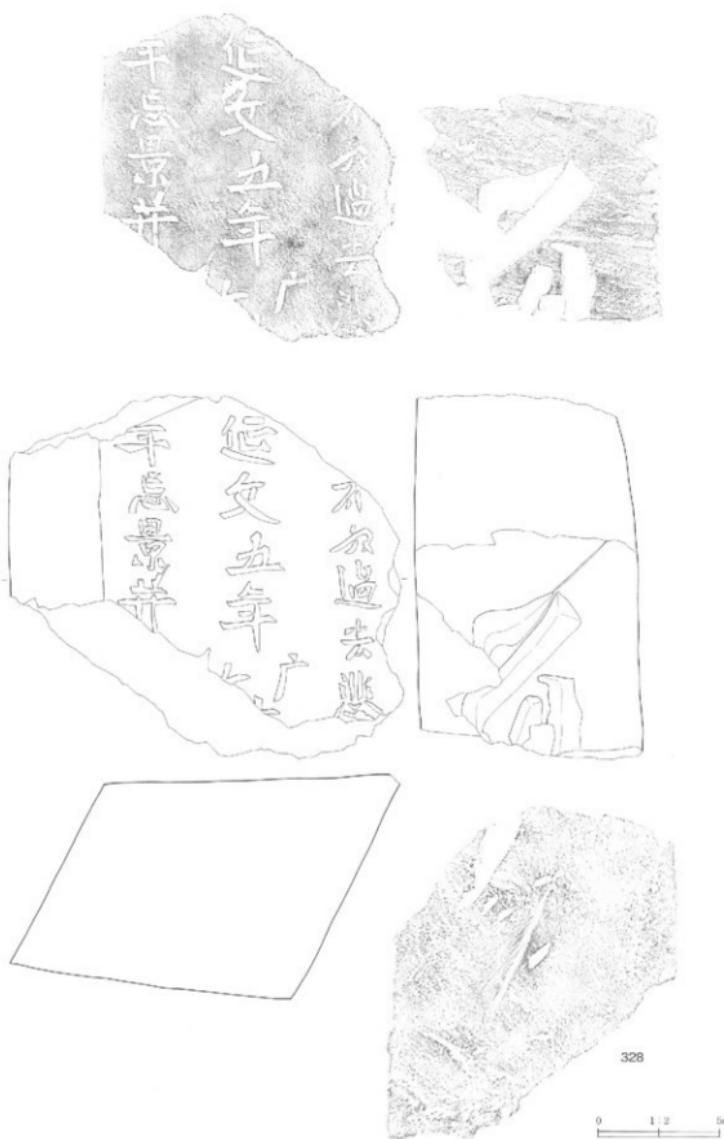
第53図 南区・1号柵状遺構、2号柵跡出土遺物



第54図 南区・1号墳跡(1)出土遺物



第55図 南区・1号墳跡（2）出土遺物



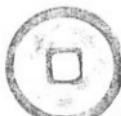
第56図 南区・1号埋跡(3)出土遺物



358 ~ 382

365
373

358

366
368

374



359



367



375



360



368



376



361



369



377



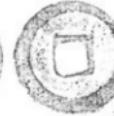
362



370



378



363



371



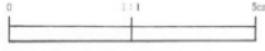
379



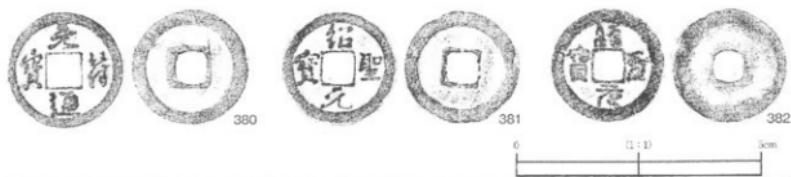
364



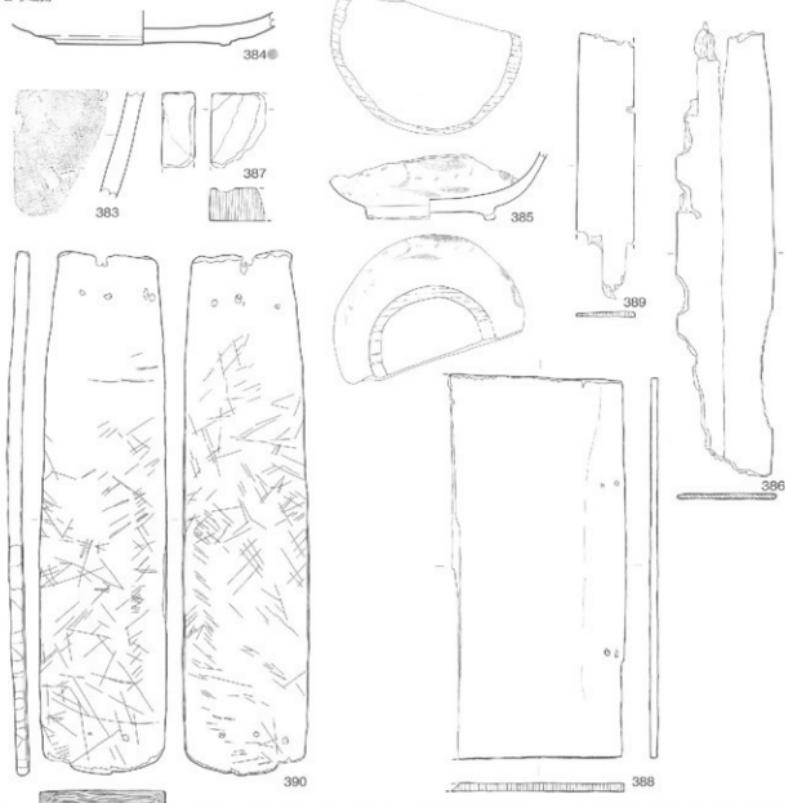
372



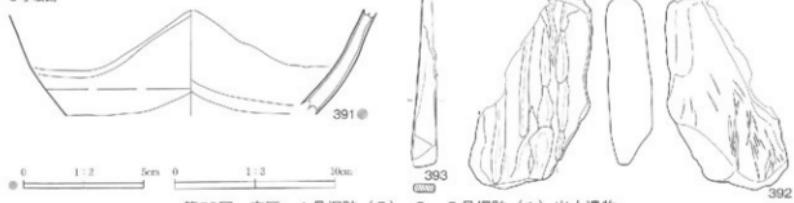
第57圖 南區・1號墓跡（4）出土遺物



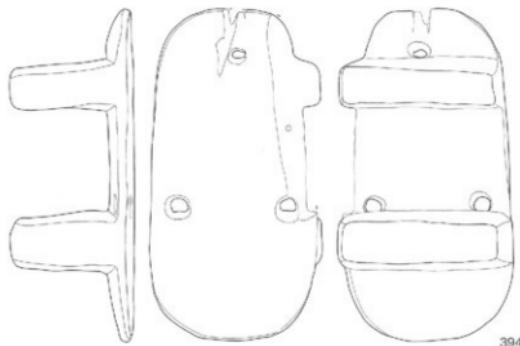
2号墳跡



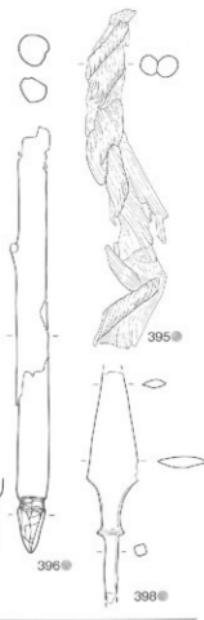
3号墳跡



第58図 南区・1号墳跡(5)、2・3号墳跡(1)出土遺物



394



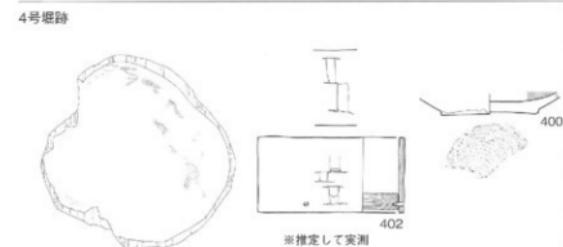
395●

396●

397●

398●

4号堀跡

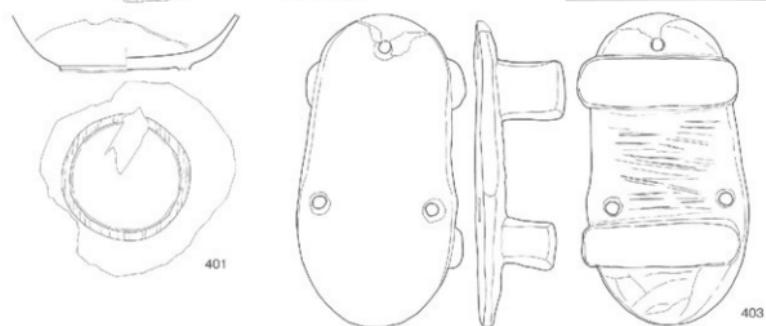


※推定して実測

400

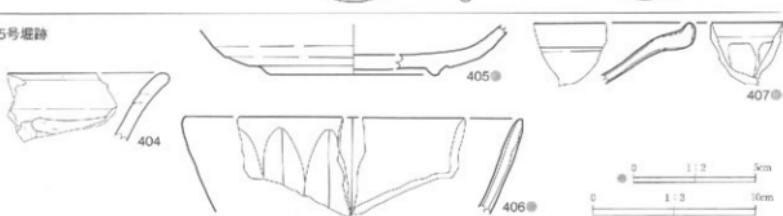
401

402



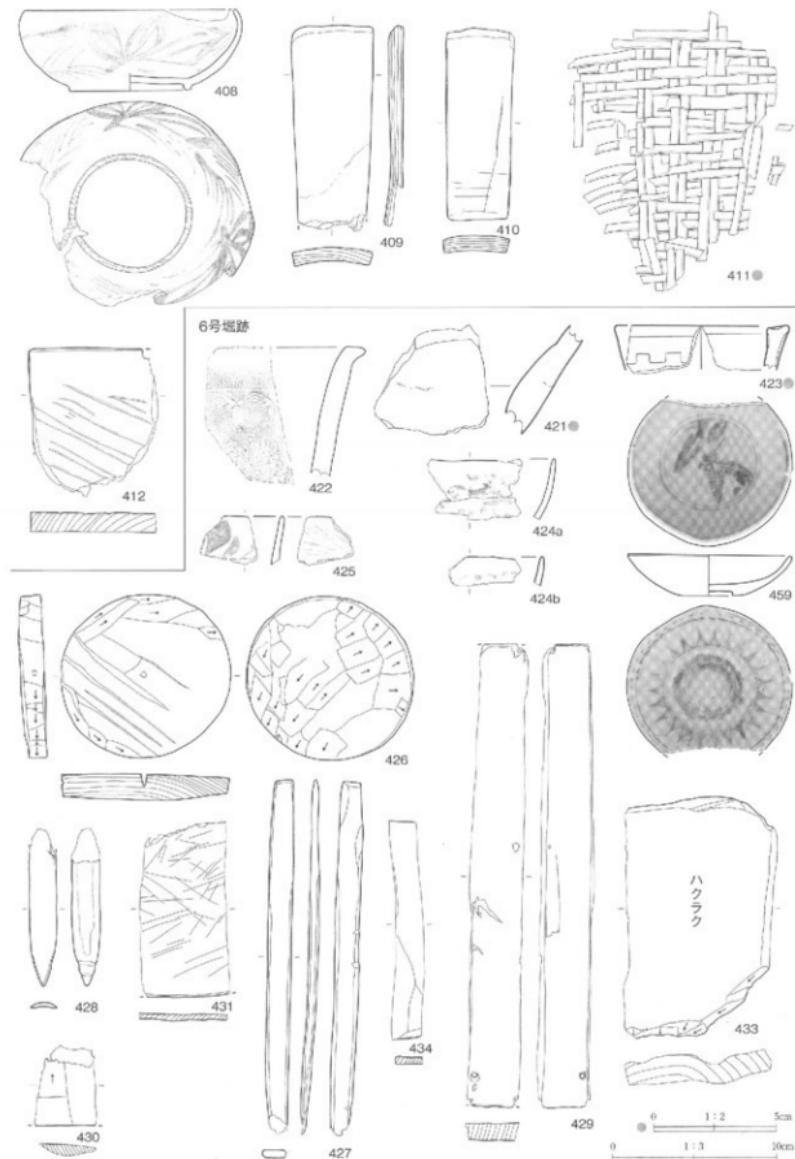
403

5号堀跡

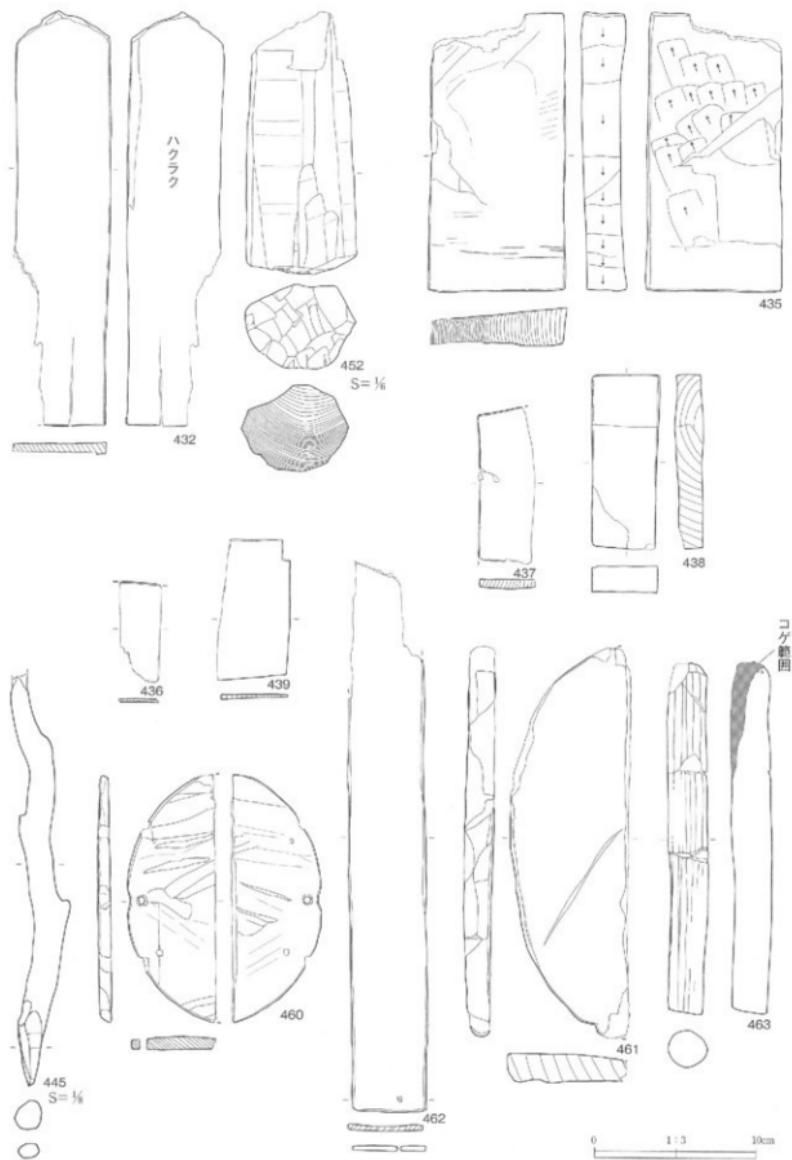


● 1:2 3cm
● 1:3 10cm

第59図 南区・3号堀跡(2)、4・5号堀跡(1)出土遺物

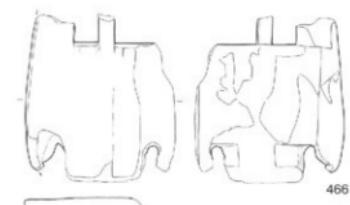


第60図 南区・5号墳跡（2）、6号墳跡（1）出土遺物

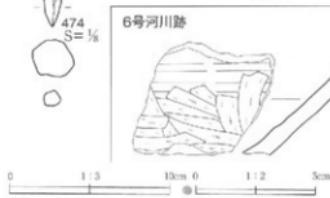
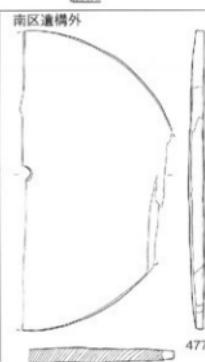
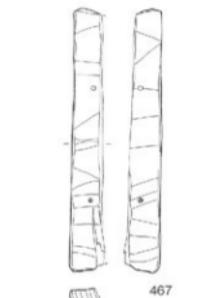
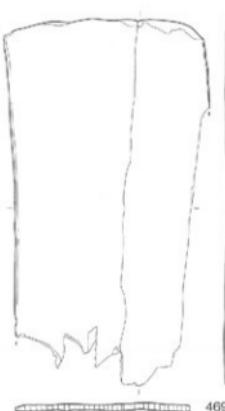
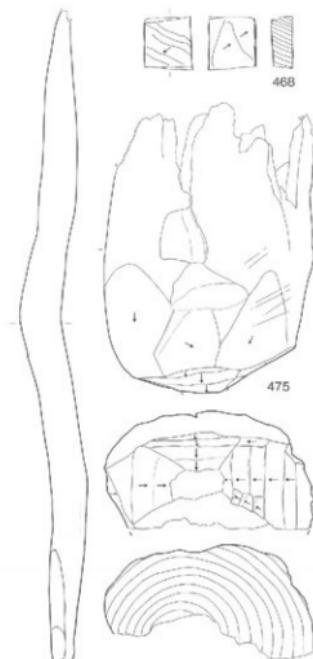
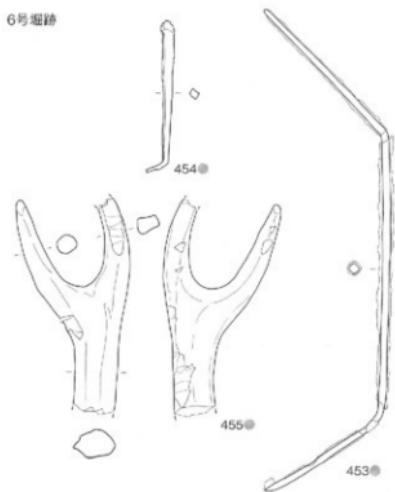


第61図 南区・6号堀跡(2)出土遺物

7号堤跡



6号堤跡



第62図 南区・6号堤跡（3）、7号堤跡、6号河川跡、南区遺構外出土遺物

V 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

中村城跡は、岩手県一関市花泉町老松字寺田320ほか（北緯 $38^{\circ} 50' 14''$ 、東経 $141^{\circ} 11' 09''$ ）に所在する。測定対象試料は、2号堀跡の下位砂層から出土した漆器椀（385:IAAA-82379）、7号溝跡の堆積土上位粘土層から出土した下駄（466:IAAA-82380）、2号橋跡の橋脚部材の柱の外側（311:IAAA-82381）、2号河川跡の側壁土留め転用材の柱（221:IAAA-82382）、1号柵状造構の部材の7箇所（299①～⑦:IAAA-82383～82385、82768～82771）、1号堀跡の底面から出土した木炭（登録5014:IAAA-82386）、2号橋跡の橋脚部材の柱の外側（314:IAAA-82772）、1号柵状造構の部材（286:IAAA-82773）、3号堀跡の堆積土上～中位から出土した木炭（396:IAAA-82774）、合計15点である。

(2) 測定の意義

遺構・遺物の年代を明らかにする。2号堀跡と7号溝跡からは中世以降の遺物が出土した。また、2号河川跡から平安時代から近世の遺物が出土している。1号堀跡では堆積土上位から延文5年（1360年）の銘がある板碑が出土した。その他の出土遺物は13～14世紀のものである。

(3) 化学処理工程

- [1] メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- [2] 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA: Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- [3] 試料を鐵化鋼と共に石英管に詰め、真空ドレーバーで封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- [4] 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- [5] 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- [6] グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシウ酸（HOx II）を標準試料とする。

この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- 〔1〕年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- 〔2〕¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として測る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- 〔3〕 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に（AMS）と記す。
- 〔4〕pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- 〔5〕暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下1桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

(6) 測定結果

¹⁴C年代は、2号堀跡の漆器碗が 670 ± 30 yrBP、7号溝跡の下駄が 350 ± 30 yrBPである。2号堀跡と7号溝跡からは中世以降の遺物が出土しており、時間幅のある遺物が含まれるが、測定試料の漆器碗と下駄も同じ時期幅の中に含まれる。

1号堀跡では、2号橋跡の橋脚部材の柱が 530 ± 30 yrBP、底面から出土した木炭が 1350 ± 30 yrBP、2号橋跡の橋脚部材の柱の外側が 490 ± 30 yrBPであった。1号堀跡では堆積土上位から延文5年（1360年）の銘がある板碑が出土した。その他の出土遺物は13～14世紀のものである。橋脚部材の柱外側の暦年較正年代（ 1σ ）は1417～1440ADであり、1号堀跡に堆積する遺物よりも若い年代を示している。1号堀跡の存続期間が推定される。

2号河川跡では、側壁土留め粧用材の柱が 200 ± 30 yrBPである。暦年較正年代（ 1σ ）から判断すれば、近世以降の所産と考えられる。2号河川跡から平安時代から近世の遺物が出土する点にも整合的である。

1号櫛状遺構の部材は、 650 ± 30 yrBP（299①：牛輪中央）、 640 ± 30 yrBP（299④：内側から10年輪付近）、 590 ± 30 yrBP（299⑤：内側から20年輪付近）、 540 ± 30 yrBP（299②：内側から30年輪付近）、 540 ± 30 yrBP（299⑥：内側から40年輪付近）、 490 ± 30 yrBP（299⑦：内側から50年輪付近）、 500 ± 30 yrBP（299③：最外年輪の52年輪目）である。それらの¹⁴C年代と年輪数の関係をグラフに示したが（図1）、反比例の直線にならず、年輪数に比べて芯部（0年輪）や10年輪目が約100年古い¹⁴C年代となる。参考までに当該期のIntcal04のデータをみると（図2）、1430calADから1380calAD付近にかけての部

1 放射性炭素年代測定

分に対応すると推察される。仮に、当地域・当該期の¹⁴C濃度変化がIntcal04データベースと同様であるとすれば、樹木の枯死・伐採年代は、およそ1420～1430calADと推定される。本来であれば年輪年代を確定する方が先決であり、それによって当地域の¹⁴C年代と曆年代の関係を探る基礎資料となる。一方で、同一試料の異なる年輪を複数測定する利点もある。本試料の芯部の年代を例にすると、2つのピークをもつ曆年較正年代の中でグラフ右側の年代範囲（1360～1387calAD）に相当する可能性が高いことを、クロスチェックによって絞り込むことができる。

3号堀跡から出土した木炭は 370 ± 30 yrBPである。曆年較正年代（ 1σ ）は、1455～1519AD（48.7%）・1593～1619AD（19.5%）である。すべての試料の炭素含有率は50%前後であり、化学処理および測定内容に問題が無く、妥当な年代であることを裏付ける。

表1 ¹⁴C年代測定結果

[#2650 - 2733]

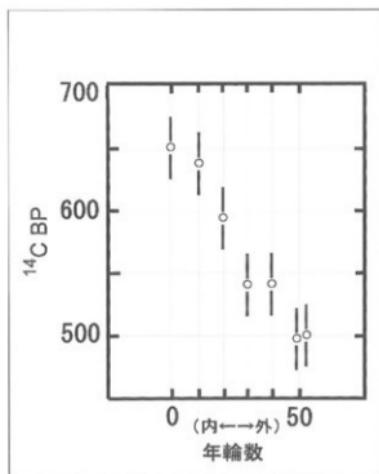
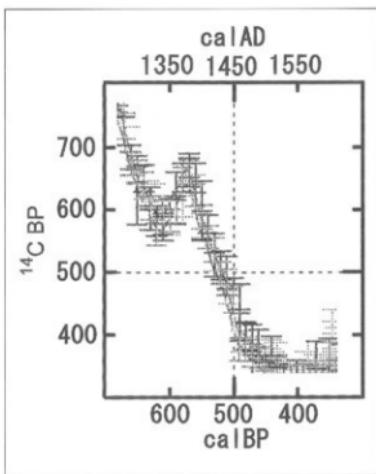
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82379	385	2号堀跡下位砂層	漆器柄	ΔΔΔ	-25.42 ± 0.75	670 ± 30	91.95 ± 0.36
IAAA-82380	466	7号溝跡堆積土上位粘土層	下駄	AAA	-26.90 ± 0.77	350 ± 30	95.72 ± 0.36
IAAA-82381	311	2号堀跡鰐脚部材	木片	AAA	-26.56 ± 0.85	530 ± 30	93.67 ± 0.37
IAAA-82382	221	2号河川跡鰐脚上留め転用材	木片	AAA	-25.53 ± 0.76	200 ± 30	97.55 ± 0.36
IAAA-82383	299①	1号横状造構部材	木片	AAA	-27.95 ± 0.62	650 ± 30	92.18 ± 0.35
IAAA-82384	299②	1号横状造構部材	木片	ΔΔΔ	-24.72 ± 0.75	540 ± 30	93.54 ± 0.36
IAAA-82385	299③	1号横状造構部材	木片	ΔΔΔ	-27.06 ± 0.56	500 ± 30	93.92 ± 0.33
IAAA-82386	登録5014	1号堀跡底面	木片	AAA	-27.49 ± 0.74	1350 ± 30	84.52 ± 0.33
IAAA-82768	299④	1号横状造構部材	木片	AAA	-26.48 ± 0.48	640 ± 30	92.36 ± 0.34
IAAA-82769	299⑤	1号横状造構部材	木片	AAA	-26.50 ± 0.43	590 ± 30	92.89 ± 0.31
IAAA-82770	299⑥	1号横状造構部材	木片	AAA	-26.11 ± 0.58	540 ± 30	93.53 ± 0.32
IAAA-82771	299⑦	1号横状造構部材	木片	AAA	-26.44 ± 0.33	490 ± 30	94.06 ± 0.32
IAAA-82772	314	2号橋跡鰐脚部材	木片	ΔΔΔ	-27.36 ± 0.54	490 ± 30	94.06 ± 0.34
IAAA-82773	286	1号橋状造構部材	木片	ΔΔΔ	-28.22 ± 0.55	640 ± 30	92.34 ± 0.36
IAAA-82774	396	3号堀跡堆積土上～中位	木片	AAA	-27.82 ± 0.59	370 ± 30	95.51 ± 0.35

表2 曆年較正年代と $\delta^{13}\text{C}$ 補正なし年代

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82379	680 ± 30	91.87 ± 0.33	674 ± 31	1280AD - 1304AD (40.7%)	1271AD - 1320AD (55.0%)
				1365AD - 1384AD (27.5%)	1350AD - 1391AD (40.4%)
IAAA-82380	380 ± 30	95.35 ± 0.33	351 ± 30	1479AD - 1523AD (30.3%)	1455AD - 1635AD (95.4%)
				1572AD - 1630AD (37.9%)	1320AD - 1350AD (16.2%)
IAAA-82381	550 ± 30	93.37 ± 0.33	525 ± 31	1400AD - 1435AD (68.2%)	1391AD - 1443AD (79.2%)
				1661AD - 1681AD (18.7%)	1647AD - 1688AD (24.9%)
IAAA-82382	210 ± 30	97.45 ± 0.33	199 ± 29	1764AD - 1801AD (35.3%)	1730AD - 1810AD (52.0%)
				1939AD - 1952AD (14.2%)	1926AD - 1955AD (18.5%)
IAAA-82383	700 ± 30	91.63 ± 0.33	653 ± 30	1287AD - 1310AD (30.8%)	1279AD - 1325AD (44.6%)
				1360AD - 1387AD (37.4%)	1345AD - 1394AD (50.8%)
IAAA-82384	530 ± 30	93.59 ± 0.33	536 ± 30	1329AD - 1340AD (10.8%)	1318AD - 1353AD (25.3%)
				1396AD - 1430AD (57.4%)	1390AD - 1439AD (70.1%)

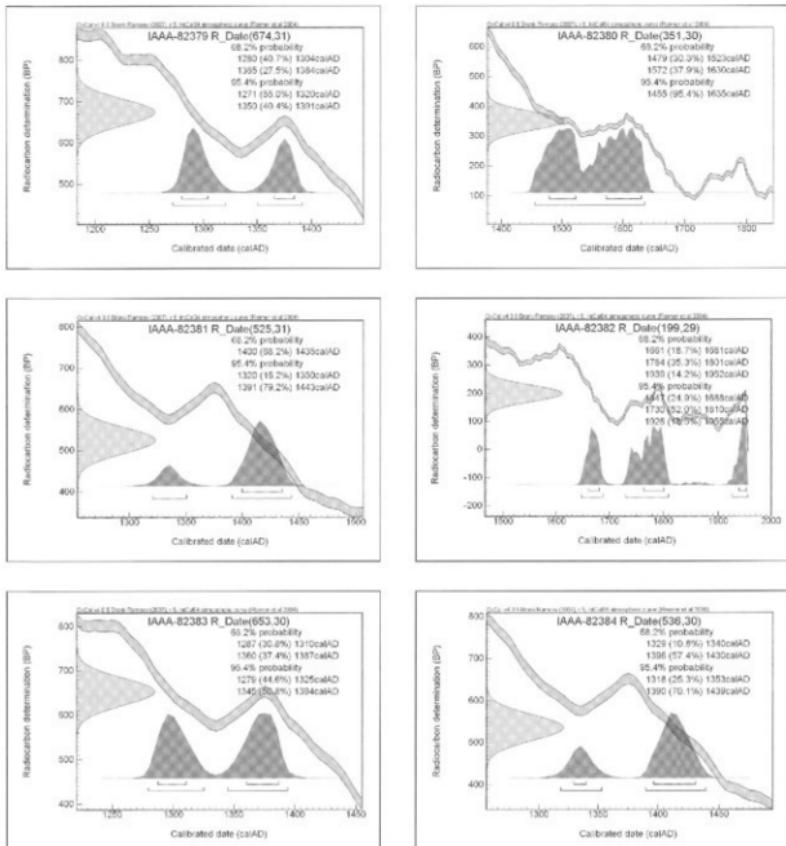
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82385	540 ± 30	93.52 ± 0.31	503 ± 28	1414AD - 1436AD (68.2%)	1399AD - 1447AD (96.4%)
IAAA-82386	1,390 ± 30	84.09 ± 0.30	1,350 ± 31	649AD - 681AD (68.2%)	635AD - 716AD (86.9%)
IAAA-82768	660 ± 30	92.08 ± 0.33	638 ± 29	1293AD - 1316AD (27.2%)	1284AD - 1329AD (40.7%)
IAAA-82769	620 ± 30	92.60 ± 0.30	592 ± 27	1315AD - 1356AD (53.5%)	1299AD - 1370AD (69.3%)
IAAA-82770	560 ± 30	93.31 ± 0.30	537 ± 27	1330AD - 1339AD (9.0%)	1320AD - 1350AD (23.0%)
IAAA-82771	520 ± 30	93.78 ± 0.31	491 ± 27	1397AD - 1429AD (59.2%)	1391AD - 1437AD (72.4%)
IAAA-82772	530 ± 30	93.61 ± 0.32	491 ± 28	1417AD - 1440AD (68.2%)	1408AD - 1447AD (95.4%)
IAAA-82773	690 ± 30	91.73 ± 0.34	640 ± 31	1292AD - 1316AD (27.8%)	1283AD - 1330AD (41.3%)
IAAA-82774	420 ± 30	94.96 ± 0.33	369 ± 29	1355AD - 1389AD (40.4%)	1340AD - 1397AD (54.1%)
				1455AD - 1519AD (48.7%)	1448AD - 1527AD (55.0%)
				1593AD - 1619AD (19.5%)	1555AD - 1633AD (40.4%)

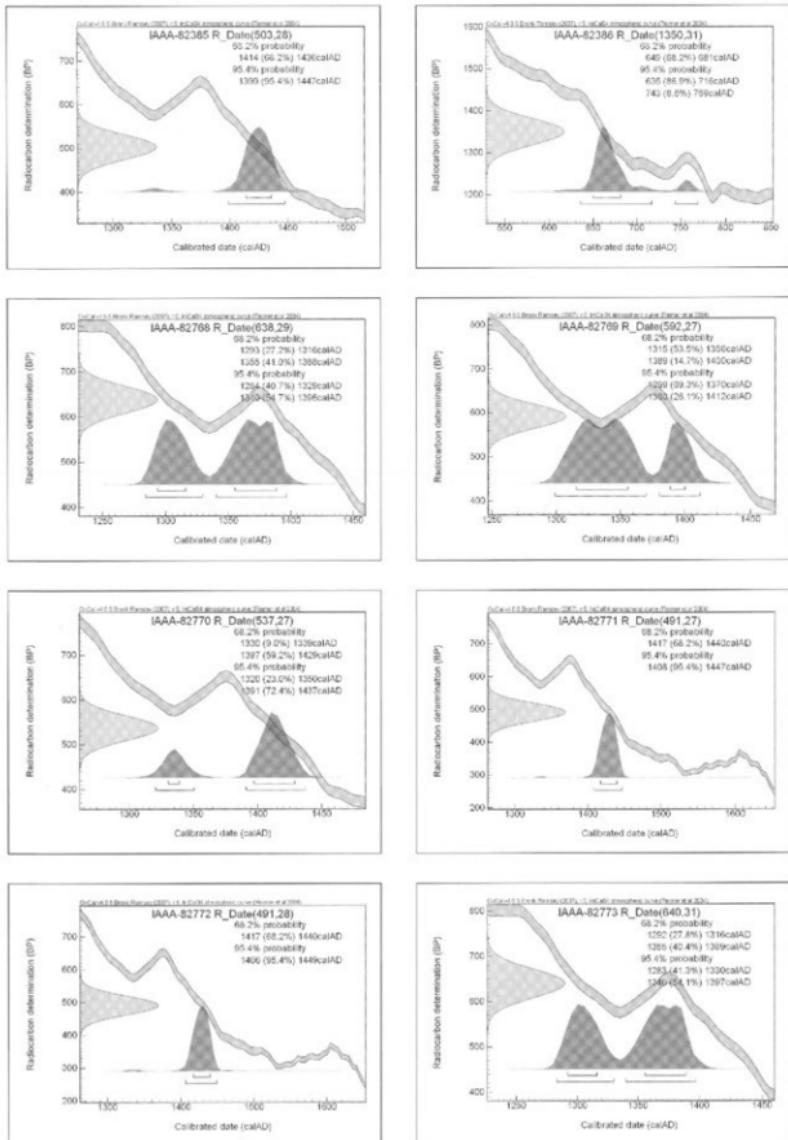
図1 1号桟状遺構部材(299)の年輪差と¹⁴C年代図2 Intcal04データベースの¹⁴C年代と曆年代
(Reimer, P.J. et al. 2004に加筆)

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

[参考図] 历年較正年代グラフ







分析試料写真

2 花粉・植物珪酸体分析—中村城跡の平安時代頃の植生と生業—

吉川昌伸（古代の森研究会）

（1）はじめに

中村城跡は、岩手県南部の一関市花泉町に位置し、金流川左岸の河岸段丘の微高地にある。調査区内には、北東側の丘陵から金流川に流入する旧河道が多く検出され、中央区北部からは平安時代の水田跡も検出されている。この水田跡は畦畔とみられる微高地により4区画に区分され、最も広い区画は10×10m以上ある。水田跡には足跡とみられる凹みが十和田aテフラにより覆われる。ここでは低地における水田耕作の検討と、周辺の植生や生業を復元することを目的に花粉化石群と植物珪酸体の調査を行った。

（2）試料と方法

調査は、中央区北部から検出された1号水田跡（水田2）の2地点（A, B）と、南区北部の2号水田跡（C地点）の3地点で行った。分析試料採取地点の地質柱状図を図1に、試料のリストと分析項目を表1に示す。

1号水田跡と2号水田跡内堆積物は、十和田aテフラ（以下To-aと表記）の下位は大きさは2層に区分され、下位より灰色粗一極粗粒砂、暗オリーブ灰色砂質シルトとオリーブ灰色ないし暗オリーブ灰色シルト質細粒砂からなる。To-aの上位は、1号水田跡では植物遺体の薄層を多く含むオリーブ灰色シルト、2号水田跡は褐色灰色砂質シルトと黒色有機質シルトからなる。なお、各地点のセクション図や堆積物の詳細な記載については考古の関係する章を参照されたい。

a) 花粉分析

花粉化石群の調査は、1号水田跡のAとB地点、2号水田跡のC地点の3地点から採取した11試料である。AとB地点は約6.5m、それらとC地点とは約20m離れる。花粉化石の抽出は、試料約2-3gを秤量し体積を測定後に10% KOH（湯煎約15分）、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48% HF（約15分）、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸 1 : 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5 分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチャミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り重量を測定（感度0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像

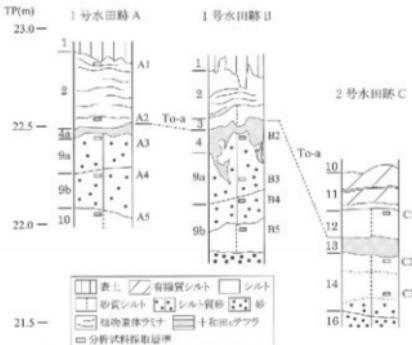


図1 中村城跡の地質柱状図と分析試料採取層準

を取り込み、画像解析

ソフトのImageJで微粒炭の積算面積を測定した。

b) 植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、

1号水田跡のAとB、

2号水田跡のCの3地

点から採取した9試料

である。植物珪酸体化

石の抽出は、試料約1

gをトールビーカーにとり、過酸化水素水、6N塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により10μm以下の粒子を除去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロビットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、主にイネ科機動細胞起源とイネ科短細胞起源珪酸体の同定・計数を行った。植物珪酸体の分類は近藤・佐瀬（1986）に基づき、タケア科植物機動細胞珪酸体は杉山・藤原（1986）、タケア科植物短細胞珪酸体は近藤・大滝（1992）による。

(3) 結 果

a. 花粉化石群

分析試料の堆積物の特性を表1に示す。1号水田跡の2層のA1とA2を除いては無機物が多い堆積物からなり、細粒～極細粒砂とシルト以下の細粒成分を主とする。A1とA2は主にシルト以下の細粒成分を主とし有機物量を12~14%と他試料より多く含まれる。

出現した分類群のリストとその個数を表2に、主要花粉分布図を図2に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究室に保管してある。

3地点の主要樹木花粉の層位的出現傾向に基づき、下位よりNs-I、II、IIIの3つの花粉化石群帯を設定する。

Ns-I (B5、C3)では、著しい優先を示す分類群はなく、コナラ亜属とハンノキ属、クリ属が比較的高率に出現し、ブナやケヤキ属、針葉樹のスギを伴う。B5ではトネリコ属が少量出現する。草本はB5では稀であるが、C3では抽水植物のミズアオイ属やオモダカ属と、クワ科やヨモギ属を伴う。またC3ではイネ科（イネ属型）が少量検出される。

Ns-II (A3-A5、B2-B3、C1-C2)ではクリ属が増加して優占し、AとB地点で約29%、C地点では49~54%と高率に占める。また、ハンノキ属は減少して低率になる。草本では抽水植物のミズアオイ属やオモダカ属などが産出し、イネ科（イネ属型）を少量伴う。ミズアオイ属はA地点では比較的多く占める。他に、クワ科が比較的多く産出し、To-aの上位であるC1ではカヤツリグサ科が比較的高率に産出し、イネ科（イネ属型）やハス属を伴う。

表1 分析試料の堆積物の特性（重量%、P：花粉分析、PI：植物珪酸体分析）

地点	試料	層位	堆積物の特徴	%	kg	熱減量 (%有機物)	分類 項目
1号水田跡 (A地点)	A1	2	オリーブ灰色シルト（植物遺体富状に堆积）	0.1	87.9	12.0	P
	A2	2	オリーブ灰色シルト（鉢石混じる）	44	81.3	14.3	P
	A3	9a	暗オリーブ灰色シルト質粘軟泥ないし砂質シルト	58.2	44.9	6.9	P, PI
	A4	9b	暗オリーブ灰色シルト質粘軟泥	60.6	33.7	5.7	P, PI
	A5	10	灰色粘粒軟質シルト（木材付む）	30.7	60.4	8.9	P
1号水田跡 (B地点)	B2	9a	オリーブ灰色シルト質粘軟沙	37.2	36.5	6.3	P, PI
	B3	9a	オリーブ灰色シルト質粘軟沙	51.0	42.1	6.9	PI
	B4	9b	オリーブ灰色シルト質粘軟沙	53.1	40.1	6.8	P, PI
	B5	9b	暗オリーブ灰色粘軟泥～極細粒軟質シルト	34.4	57.7	7.9	P, PI
	C1	14	鷺灰色細粒軟質シルト	28.9	64.3	8.8	P, PI
(C地点)	C2	14	暗オリーブ灰色細粒軟質シルト	43.2	49.2	7.6	P, PI
	C3	14	暗オリーブ灰色泥～極細粒軟質シルト	31.7	59.4	8.9	P, PI

表2 1号水田跡と2号水田跡より産出した花粉化石の一覧表

科名	学名	1号水田跡							2号水田跡			
		A1	A2	A3	A4	A5	B2	B4	B5	C1	C2	C3
木本		.	.	.	1	.	1	.	1	.	.	1
モミ属	<i>Abies</i>	.	.	1	.	1	.	1	3	.	.	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	.	.	.	1	.	1	.	5	.	.	1
トクサ科	<i>Picea</i>	.	.	.	1	.	1	.	1	.	.	1
マツ科	<i>Hymenaea</i>	.	.	.	1	.	1	.	1	.	.	1
マツ科(不明)	<i>Hymenaea</i>	3	3	2	2	2	2	3	.	1	.	1
シカマキ属	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	1	.	1	.	1	.	1	.	.	1
スギ	<i>Schizolopha</i>	.	.	2	1	1	.	3	.	.	.	1
イヌイチビノキ群-イヌガヤ科	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) D.Jon	21	41	30	14	17	11	18	15	16	26	9
シダ類	<i>Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae</i>	2	3	7	.	3	4	1	2	2	1	1
ヤナギ属	<i>Ostrya</i>	.	3	3	1	.	2	.	2	4	2	1
サワロコノ属	<i>Pterocarya</i>	2	2	.	1	.	2	.	1	1	2	2
クルミ属	<i>Juglans</i>	3	1	3	.	3	.	2	2	2	3	2
イヌクズ	<i>Carpinus tschonoskii Maxim.</i>	1	1	1	.	1	.	1	1	1	1	1
ハシバミ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	16	16	4	1	4	4	3	4	7	5	5
カバノキ属	<i>Ulmus</i>	2	2	1	.	1	1	1	1	1	1	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	3	4	1	1	2	1	2	2	1	2
ブナ	<i>Fagus crenata Blume</i>	14	19	12	14	19	8	7	30	17	11	7
イヌクズ	<i>Fagus japonica Mast.</i>	30	20	19	4	11	2	6	7	1	5	7
コシノコトコロ属	<i>Quercus suber</i> Ledebourianus	8	7	6	5	4	3	5	1	1	1	1
コナラ属	<i>Quercus ilex</i> L.	49	64	37	21	35	24	20	50	36	34	25
シリノ属	<i>Castanea</i>	2	1	3	1	2	1	1	1	1	1	1
シイノ属	<i>Castanopsis</i>	2	22	58	35	17	20	32	33	111	124	21
ニンジン属	<i>Ulmus</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	3	.	.
ケヤギ属	<i>Zelkova</i>	16	3	4	2	10	3	3	11	2	.	3
エゾノヒムクノキ属	<i>Grewia</i> - Aphanesthes	1	1	.	1	3	.	2
カラマツ属	<i>Ceratostylis</i>	1	1	.	1	2	.	1	.	.	.	2
コクヨノキ属	<i>Oriza</i>	.	.	.	1	.	.	2	.	.	.	1
ヤマハシ属	<i>Phellodendron</i>	.	.	.	1	.	.	2	.	.	.	1
セマツノ属	<i>Rhus trichosperma type</i>	.	.	.	1	.	.	1	.	.	.	1
セモリ属	<i>Rhus</i>	.	1	.	1	.	1	.	1	1	.	.
ニシキギ属	<i>Elaeagnus</i>	1	1	.	.	.
スッパバツギ属	<i>Syzygium</i>	1	7	2	2	1
カニクイ属	<i>Acor</i>	.	1	.	1	5	7	1	7	2	1	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	.	1	2	2	3	1	1	5	.	.	1
クロロウキドキ科	<i>Rhamnaceae</i>	2
ツブツブ属	<i>Vitis</i>	1
マタタキ属	<i>Astilbe</i>	1	.	6	1	2	1
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	1	1	1	1
ミズタマ属	<i>Corema</i>	.	.	1	1	.	.	.	2	.	.	.
ツヅジ科	<i>Rubiaceae</i>	.	1	1	1	2	2	2	10	3	1	1
トスココ属	<i>Prunus</i>	.	1	1	1	2	.	2	1	1	.	.
ニットリ属	<i>Sambucus</i>	.	1	1	1	.	.	1	1	.	.	1
ガマ草属	<i>Vitexinum</i>	1
ヒルシロ属	<i>Typiba</i>	.	4	1	.	4
ウジヌカダカ属	<i>Polygonatum</i>	.	2	1	2	1	.	2	1	.	5	.
オウバク属	<i>Alisma</i>	2	1	1	24	8	8
スバク属	<i>Schoenus</i>	2	2	7	64	13	.	26	37	1	.	.
イネ科(イネ型)	<i>Gramineae (Oryza type)</i>	154	77	21	6	11	8	.	37	7	10	10
イネ科(野生型)	<i>Gramineae (Wild type)</i>	29	47	31	13	9	22	23	39	37	37	19
カマツリギサ科	<i>Cyperaceae</i>	110	154	8	7	15	10	31	11	232	9	9
ホシタケ属	<i>Rhynchosciurus</i>	1	1
ブクタ属	<i>Cordyline</i>	.	1	2	1	1	.	.	.	2	2	1
イゴサク属	<i>Asplenium</i>	.	1	3	1	1	1	1	.	2	3	5
ミズクノイ属	<i>Momotaria</i>	7	14	28	41	43	17	19	.	10	33	14
クワ科	<i>Moraceae</i>	6	9	51	21	.	33	51	.	51	23	46
クワ科-イクサ科	<i>Moraceae - Urticaceae</i>	1	1	1	3	2	9	1
イヌクズ	<i>Persicaria</i>	2	.	1	1	1	2	1	5	5	2	1
アカガシ属	<i>Chionanthus</i>	.	.	3	2	2	1	1	1	1	.	.
アカギ-ヒユ科	<i>Cleomaceae - Amaranthaceae</i>
ダツコ科	<i>Caryophyllaceae</i>
ハス属	<i>Nelumbo</i>
カラツクノク属	<i>Thelium</i>
地柏	<i>other Taxaceae</i>	.	2	.	1	1	1	1	.	.	1	6
アフタ科	<i>Coriaceae</i>
ヨクシタ科	<i>Saxifragaceae</i>
バラ科	<i>Rosaceae</i>	.	.	.	1	3	1	.	.	.	2	1
マメ科	<i>Leganosicosiae</i>	1	1	1
ツリフネノウ属	<i>Impatiens</i>	.	1	1	1	2	6	4	.	4	2	4
セリ科	<i>Urticaceae</i>	1	1	12	3	2	6	4	.	4	2	4
シモツ科	<i>Labiatae</i>	.	1	1	.	.	2	1
オオバコ属	<i>Plantago</i>	.	1
ヤエシタクノイ属	<i>Calystegia - Rubia</i>	.	1	2
ヨモギ属	<i>Aronia</i>	8	123	68	12	17	56	26	9	94	31	51
他のカクシ科	<i>other Tubuliflorae</i>	.	3	1	1	1	1	2	.	.	.	2
シダ科	<i>Liguliforme</i>	.	.	.	1	.	.	.	1	.	.	1
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	1	.	1	.	.
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	2	5	4	5	1	.	3	1	4	3	.
他のグングラ属	<i>other Pteridophyta</i>	13	16	10	20	37	8	14	50	.	7	9
裸子植物	<i>Sphagnum</i>	1	.	1
アカシア属	<i>Acacia</i>	.	.	.	1
ツチクサ属	<i>Trichikosia</i>	1	2
黄毛柏油山柑属	<i>Heteropyxis</i>	2
木本花粉指数	<i>Arboreal pollen</i>	176	227	204	119	153	102	106	225	226	229	118
非木本花粉指数	<i>Nonarboreal pollen</i>	325	424	270	127	158	195	209	366	367	367	132
アラビア松花粉	<i>Pinus</i>	16	15	24	1	1	1	1	1	1	1	1
松、柏、杉花粉	<i>Pollen and Spores</i>	516	669	520	270	353	306	331	293	793	408	319
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	5	6	12	7	21	6	2	10	4	6	3
トリ葉花粉量(%)	19.609	885	542	270	746	710	729	7785	1840	650	—	
トリ葉花粉量(粒/cm ³)	463	171	564	325	556	617	444	444	255	304	573	—
油酸濃度(mm ³ /cm ³)	120	1969	336	253	136	204	382	148	312	177	351	—

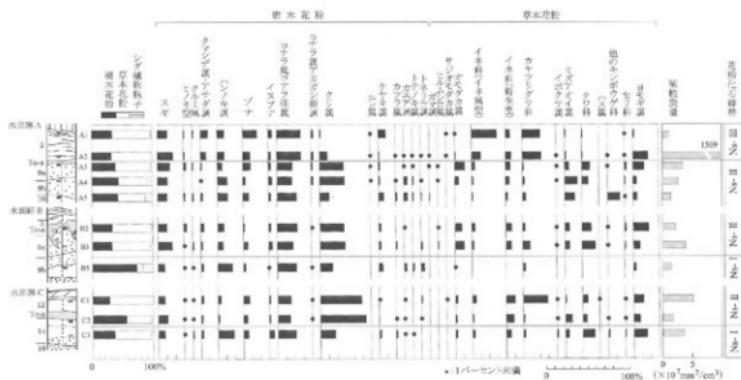


図2 中村城跡の1号水田跡と2号水田跡の主要花粉分布図

(出現率は樹木は樹木花粉数、草本・孢子は花粉孢子数を基準として百分率で算出した)

Ns-III (A1-A2) では、クリ属は減少し上部のA1では低率になる。逆にコナラ亜属やクマシデ属・アサダ属、ブナが増加するが、産出する分類群数は少なく樹木花粉の比率も34%とそれほど高くなない。草本ではカヤツリグサ科やイネ科（イネ属型）が比較的高率に産出し、ミズアオイ属やサジオモダカ属などを僅かに伴う。また、A2には夥しい微粒炭が含まれていた。

b. 植物珪酸体化石群

検出した植物珪酸体の分類群のリストとその個数を表3に、植物珪酸体分布図を図3に示す。

1号水田跡のAとB地点は概ね同様な産出傾向を示し、機動細胞起源はタケ亜科クマザサ属型とネガサ節型、他のタケ亜科、ウシクサ族などからなり、B5のみでヨシ属が検出された。短細胞起源では、全般にタケ亜科タケ類型が多く出現し、イチゴツナギ亞科とキビ型、ヨシ属などが検出される。イネの機動細胞起源は、A地点のA4 (1370粒/g) とA3 (1560粒/g)、B地点のB4 (1220粒/g) とB3 (1600粒/g)、B2 (1390粒/g) で少量検出されるが、B地点最下部のB5からは検出されない。また、イネ

表3 植物珪酸体分析結果一覧表（単位は1000個/g）

分類群	1号水田跡						2号水田跡		
	A3	A4	B2	B3	B4	B5	C1	C2	C3
イネ科被子植物珪酸体									
イネ	156	137	1.39	1.60	1.22	-	1.98	-	0.44
ヨシ属	-	-	-	-	-	1.27	-	1.62	2.21
キビ族	-	-	-	1.60	-	-	-	1.62	2.21
ウシクサ族	156	273	4.18	3.19	-	5.07	3.96	6.50	6.63
タケ亜科クマザサ属型	12.46	10.94	15.31	19.16	4.86	8.87	7.92	8.12	19.88
タケ亜科ススキ属型	156	273	5.57	6.39	3.65	6.33	1.98	3.25	4.42
他のタケ亜科	14.02	5.47	9.74	3.19	2.43	5.07	1.98	11.37	19.88
不明	6.23	273	8.33	4.79	2.43	6.33	5.94	12.99	19.88
イネ科被子植物珪酸体									
イネ	3.11	137	5.57	3.19	4.86	-	1.98	-	-
ヨシ属	4.67	683	11.14	12.77	7.30	8.87	3.96	6.50	19.88
ウシクサ族ススキ属型	-	-	-	-	-	-	-	1.62	-
イチゴツナギ亞科	7.79	8.20	25.05	11.18	7.30	6.33	27.71	12.99	11.05
キビ族	12.46	10.94	13.92	15.97	7.30	3.80	23.75	11.37	24.30
ヒゲシバ型	3.11	273	2.78	-	1.22	1.27	1.98	1.62	2.21
タケ亜科ササ類型	7.79	683	6.96	4.79	2.43	5.07	5.94	19.49	8.84
タケ亜科タケ類型	73.20	27.34	55.68	43.11	25.54	45.60	41.56	77.95	53.02
カヤツリグサ科	156	-	-	1.60	-	-	1.98	-	-
津淮酸	436.07	123.02	364.69	319.33	166.59	38.00	1721.88	1201.71	552.33

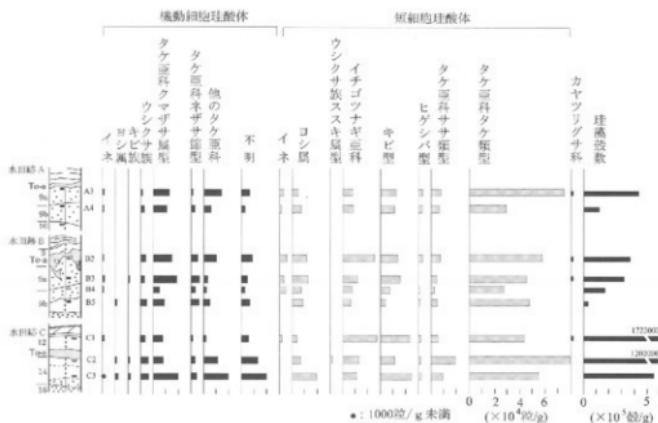


図3 中村城跡の1号水田跡と2号水田跡の植物珪酸体分布図

の機動細胞が検出される試料からは短細胞起源のイネも検出される。2号水田跡は、機動細胞起源はタケア科クマザサ属型とネザサ節型、他のタケア科、ウシクサ族などと、To-aより下位でキビ族やヨシ属が検出された。短細胞起源では、A地点と同様にタケア科タケ類型が多く出現し、次いでキビ型、イチゴツナギ亞科、タケア科ササ類型やなどが検出され、To-aより下位でヨシ属が比較的多く検出される。イネの機動細胞起源はTo-aの上位層のC1で1980粒/g、下位層のC3で440粒/g検出されたが、To-a直下のC2からは検出されない。また、C1からは短細胞起源のイネも検出されている。なお、珪藻化石が多く含まれ、沼澤湿地生の種が多いがC1では中～下流河川に生育する*Melosira varians*が目立つ。

(4) 考 察

a. 周辺の古植生と生業

3地点の花粉化石群の層位的変動に基づくと、周辺の植生は下位よりクリ林とハンノキ湿地林期、クリ林が優勢な時期、コナラ亞属とクマシデ属-アサダ属を主とする落葉広葉樹林期の3つの植生期に区分される。各植生期は花粉帯のNs-I、II、IIIにそれぞれ対応する。植生期の時期は、クリ林が優勢な時期はTo-aと考古遺物から平安時代頃と考えられるが、他は時期を特定する資料に乏しい。

クリ林とハンノキ湿地林期

この期は1号水田跡Bの下部の9b層（A5）と2号水田跡の下部の14層（C3）が相当する。時期は特定できないが平安時代、あるいはそれ以前と推定される。花粉組成は、風媒花のコナラ亞属（21-22%）とハンノキ属（17-19%）の頻度に比べ、虫媒花のクリ属（11-18%）の頻度が比較的高い。クリ属花粉は虫媒花で広域に散布しにくいためクリ林内では高率に占めるがクリ林外で急減することが明らかになっている（荒川ほか、2008）。本遺跡で調査した2地点は約200m離れているため、クリ花粉は複数のクリの木に由来することは明らかである。さらに、風媒花花粉の頻度がそれ程高くないことから、低地に隣接する微高地にクリ林が広がっていた可能性が高い。落葉広葉樹のコナラ亞属な

どは主にクリ林の後背地の丘陵に分布していたと推定される。一方、2号水田跡にはミズアオイ属やオモダカ属、イネ科やカヤツリグサ科などの抽水植物が生育し、低地にはハンノキやトネリコ属の湿地林もまばらに生えていたと推定される。また、2号水田跡の周辺にはカナムグラやヨモギ属などが生育する日あたりの良い開けた環境も広がっていたようである。

クリ林が優勢な時期

この期は1号水田跡のTo-aの下位の9aと9b層と、2号水田跡のTo-aの上位の12と下位の14層が相当し、9世紀後半から10世紀前半頃と推定される。周辺の低地ではハンノキ湿地林が縮小し、低地の後背地の微高地を中心にクリ林が拡大したと推定される。旧河道ではクリ属花粉が50%前後と高率に出現するため調査地点の低地に隣接してクリ林が形成されていたといえる。また、ハンノキ湿地林の縮小は、後述するように1号水田跡で稻作が推定されることから、低地の利用と関係すると考えられる。また、1号水田跡や2号水田跡にはイネと伴に抽水植物のミズアオイ属やオモダカ属も繁茂していた。

コナラ亜属とクマシデ属－アサダ属を主とする落葉広葉樹林期

この期は1号水田跡の2層が相当し、10世紀以降であるが時期を特定できる資料はない。周辺の植生は、クリ林が縮小してコナラ亜属やクマシデ属－アサダ属、ケヤキ属などの落葉広葉樹に、針葉樹のスギを伴う植生に変化した。クリ林の縮小は少なくともTo-a降下より幾分後である。また、クリ林が縮小する2層下部には夥しい微粒炭が含まれることから、これら微粒炭はクリ林の縮小に係る生業と関係するかもしれない。一方で、樹木花粉の比率が低いことや、山地から飛来したと考えられるブナ花粉の増加は、周辺の森林量の低下を示すと考えられる。低地では、2層下部が堆積した頃には穂やかな低湿地が形成され、カヤツリグサ科やイネ科が繁茂しオモダカ属やミズアオイ属を伴っていたが、2層上部では水田稻作が行われていたとみられる。

b. 1号水田跡と2号水田跡における水田稻作について

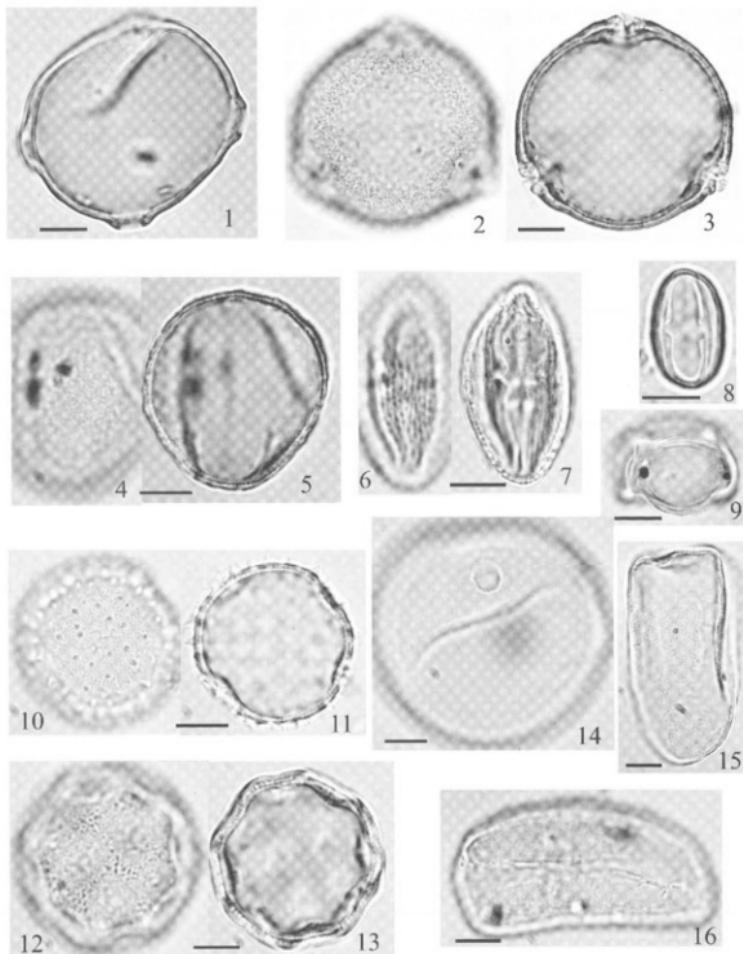
水田稻作は、1号水田跡ではTo-a降下前より、2号水田跡ではTo-a降下以降に行われていた可能性がある。つまり、1号水田跡ではイネ機動細胞珪酸体はTo-a直下の9a層とその下位の9b層上部から1220~1600個/g検出され、9b層下部や10層からは検出されない。また、イネ機動細胞珪酸体が検出された層からはイネ短細胞珪酸体も検出されている。イネの植物珪酸体密度が5000個/g以上の場合は数十年間にわたって稻作が行われていた可能性があり、古墳時代以降で株刈りの場合は3000個/g程度とされている（杉山、2000）。密度は水田稻作の継続期間や堆積物により変化するためおよその目安でしかないが、本遺跡では密度は低いものの駐畔や足跡が認められ、堆積物が砂質で堆積速度が速いなどの状況からは水田稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。一方で、イネ属型の花粉は2~4%と低率で植物珪酸体の密度も低いため、この地点で水田稻作が行われていた期間が短かった可能性もある。

2号水田跡ではイネ機動細胞珪酸体は、To-aの上位12層と下位の14層下部から検出され、To-a直下からは検出されない。イネ機動細胞珪酸体の密度はTo-a上位層では1980個/gと幾分多いが、To-a下位層下部では440個/gと少ない。また、To-a下位層ではイネ属型花粉が少量であること、To-a直下ではイネの機動細胞珪酸体が検出されないことや下部でも密度が低いことから上流域で水田稻作がおこなわれていたとみたほうが妥当であろう。To-aの上位層では、水田稻作が行われていた可能性はあるが、イネ機動細胞珪酸体の密度がそれほど高くないことや、花粉化石ではイネ属型花粉が5%と少なくカヤツリグサ科やイネ科（野生型）が比較的多いことから、この地点で水田稻作が行われていた場合でも継続期間が短かった可能性がある。

ところで、To-aの上位層のA1ではイネ科（イネ属型）花粉が多量に含まれるが、足跡が認められたTo-aより下位層では低率である。また、草本では抽水植物のミズアオイ属とオモダカ属が多く産出し、特に1号水田跡のA地点でミズアオイ属が多い。ミズアオイ属にはミズアオイとコナギがあるが、いずれも葉を食用とし「万葉集」にはミズアオイ（古名を水葱（なぎ））を食用にしたことが詠われている（沖、1996）。足跡や畦畔の遺構とイネ機動細胞珪酸体の検出に基づけば、水田稻作が推定されるのは妥当な結果であるが、イネ属型花粉が少ないことを重視するとイネのみでなくミズアオイ属の栽培の可能性も検討する必要があるのかもしれない。

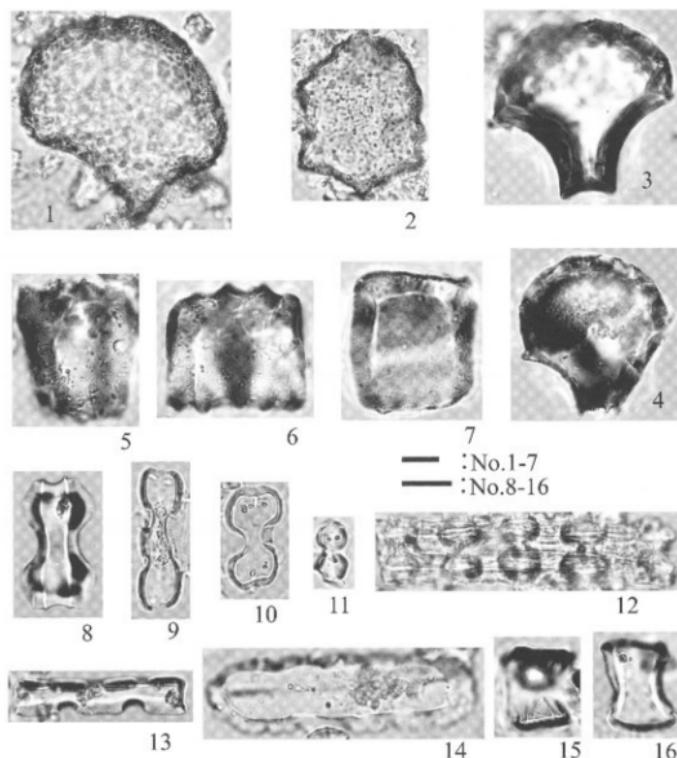
参考文献

- 荒川隆史・吉川昌伸・吉川純子・門口実代、2008. 鑑文時代のクリ利用に関する調査と実験. 考古学ジャーナル574, 23-27.
 近藤鍊三・大滝美代子、1992. タケモ科植物葉身の短細胞珪酸体. 富士竹顛植物園報告, 第36号, 23-43.
 近藤鍊三・佐瀬 康、1986. 植物珪酸体. その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-63.
 沖 陽子、1996. ミズアオイ科. 週刊朝日百科植物の世界, 113, 154-157.
 杉山真二、2000. 植物珪酸体（プラント・オパール）. 「考古学と植物学」（辻誠一郎編）189-213. 同成社.
 杉山真二・藤原宏志、1986. 機動細胞珪酸体の形態によるタケモ科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として-. 考古学と
 自然科学, 19, 69-84.



図版1 中村城跡より産出した花粉化石

1: クマシデ属-アナダ属 (*Carpinus-Ostrya*), C1, AFR.MY 1819. 2-3: ブナ (*Fagus crenata*), C1, AFR.MY 1819. 4-5: コナラ亜属 (*Lepidobalanus*), C1, AFR.MY 1818. 6-7: ヤマウルシ類 (*Rhus trichocarpa* type), C3, AFR.MY 1820. 8: クリ属 (*Castanea*), A3, AFR.MY 1815. 9: ハンノキ属 (*Alnus*), C1, AFR.MY 1819. 10-11: オモダカ属 (*Sagittaria*), A3, AFR.MY 1811. 12-13: サジオモダカ属 (*Alisma*), C1, AFR.MY 1816. 14: イネ科 (イネ属型 *Oryza* type), A3, AFR.MY 1814. 15: カヤツリグサ科 (Cyperaceae), C1, AFR.MY 1819. 16: ミズアオイ属 (*Monochoria*), A3, AFR.MY 1812. スケール=10 μm.



図版2 中村城跡から産出した植物珪酸体化石

1 ヨシ属機動細胞, B5. 2 タケ亜科クマザサ属型機動細胞, C5. 3-4 イネ機動細胞, 3:B3, 4:B4.
 5 タケ亜科機動細胞, C1. 6 タケ亜科ネザサ節型機動細胞, C1. 7 ウシクサ族機動細胞, B3.
 8-10 キビ型短細胞, 8:C1, 9:C3, 10:B4. 11-12 イネ短細胞, 11:B2, 12:B2. 13-14 イチゴツナギ
 亞科短細胞, 13:B2, 14:A3. 15 タケ亜科タケ類型短細胞, A4. 16 タケ亜科ササ類型短細胞, B5.
 スケール=10 μ m

3 種実同定分析－中村城跡より出土した種実－

青川純子（古代の森研究会）

(1) はじめに

中村城跡は一関市花泉町の金流川の東岸微高地にある平安時代以降の遺跡である。平安時代は堅穴住居や水田跡など、中世からは堀跡や土橋跡が見つかっている。これらの遺構から若干の種実化石が検出されたため、当時の植物利用状況を把握する目的で種実化石の調査を行った。

(2) 同定結果および考察

a 平安時代

表1に平安時代の1号河川跡から出土した種実を、表2には水田跡および堅穴住居跡から出土した種実をまとめた。オニグルミは、人の加工痕跡とみられる割跡や熱を受けた内果皮を比較的多く出土している。クリは炭化種子、モモにも割跡や熱を受けた核がみられた。ほかにはコハクウンボク、ヒヨウタンを出土した。水田跡からはオニグルミ、モモ、コハクウンボクを出土した。堅穴住居からはモモ核を少数出土した。焼失住居ということであるが、出土したモモ核は熱を受けていない。

表1 平安時代の1号河川跡出土種実

地点		北 岸 岸 附 て 場					北西岸		北 岸 ト レ ン ナ		北岸トレンド2		北岸	
分類群名	グリッド等	-	-	-	-	-	ベルト2	-	-	-	-	-	-	トレンド3
出土地記録	山手前位	3C3	3 C 4	-	-	-	3B3A	3C4	4C1	4C2	4D1	4C3	-	西側 東側
オニグルミ	水田反復形	黒色	灰色	黑色	河床	黑色灰	灰色	2号	2号	-	-	2号	2号	2号
	水田式供													
	部分食痕	2	1	1			1		3	1	1	1		
	全分食痕						6	3		8	1	5		3
	全分煎													1
	半分部分食化剥離						1							
	破片						2							
	炭化種子						2							
モモ	粒形	5	6					1						
	半分食痕		1											
	半分煎		1											
	半分	4												
	半分煎		1											
	破片													
	半分部分食化剥離													
コハクウンボク	内裏度化形													
	1分													
	破片													
	核子						2							
	ヒヨウタン													
地點		北 岸					北 車		北 岸		北 車		P9付近	
分類群名	グリッド等	-	-	-	-	-	ベルト2	-	-	-	-	-	-	-
出土地記録	山手前位	4C1	4C1	2B2	2B4	3C1	4B4	4C3	4B1	4C4	4D1	4D3	-	-
オニグルミ	内裏度化形	-	2号	2号	To be determined	-	2号	2号	2号	2号	2号	1号	-	-
	半分食痕	5	2	1		1		1		1				
	半分煎													
	半分食化													
	半分食化													
	半分煎													
	半分部分食化剥離	10		1				1		1				
	破片	3												
クリ	炭化種子													
モモ	粒形													
	半分食痕													
	半分煎													
	半分煎													
	破片													
コハクウンボク	内裏度化形										5	1		2
	半分										1			2
	破片											1		
	核子													
ヒヨウタン														

表2 平安時代の水田跡および豊穴住居出土種実

地点	1号水田跡			2号水田跡			3号水田跡			4号水田跡		
	水田1	水田2	水田3	水田4	水田5	水田6	水田7	水田8	水田9	水田10	水田11	水田12
グリッド等 出土部位・層位 分類群名	西端跡 NW16 田上部位・中位 内果皮完形	-	-	北端 SW22 3AC3 2面耕作土・褐色	-	-	SW22 E46 3AL 2面耕作土	-	-	北端 E46 60B4 67C4 2面耕作土	-	-
オニグルミ	内果皮完形 半分切跡	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
モモ	葉完形 壳形風化 壳形食痕 半分	-	-	-	-	-	1	1	1	3	-	-
コハクウンボク	内果皮完形 半分	1	-	-	-	-	2	-	-	1	-	2

b 中世

表3には中世の堀跡から出土した種実をまとめた。人による加工痕跡の可能性があるものはヒメグルミ破片のみであった。堀からはオニグルミ、ヒメグルミ、ツノハシバミ、モモを出土した。

表3 中世の1号堀跡出土種実

地点	百葉上						
	グリッド等 出土部位・層位 分類群名	08C1	60B4	60B4	60B4	61D3	61D4
オニグルミ	内果皮半分	1	-	-	-	-	-
ヒメグルミ	内果皮破片	-	2	-	-	-	-
ツノハシバミ	葉完形	1	-	-	-	-	-
モモ	被完形 壳形風化 半分	-	1	2	1	1	-

c 時期不明

表4には中世～近世とみられるが明確な時期が不明の遺構から出土した種実をまとめた。オニグルミとコハクウンボクが多く、ほかにクロマツ、ヒメグルミ、ツノハシバミ、クリ、モモ、トチノキ、ヒシ属を出土した。ヒシ属のみ水域に生育する種類である。

表4 時期不明遺構出土種実

分類群名	トレンチサブトレ												トレンチサブトレ	
	山土部位・地点	通横	6号	1号	3号	5号	4号	2号	6号	6号	2号	6号	底込み	トレンチサブトレ
クロマツ	絆縫	1	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	北区
オニグルミ	内果皮完形	6	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形食痕	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	半分	8	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	半分切跡	6	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	半分基部風化剥離	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒメグルミ	内果皮半分	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツノハシバミ	葉完形	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ	葉完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	被完形 壳形風化 壳形食痕 半分 半分剥離 破片	-	1	-	2	1	2	-	1	1	1	1	1	-
トチノキ	種皮	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コハクウンボク	内果皮完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-
	半分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-
	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19	-	-
ヒシ属	葉完形	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(3) 特筆すべき大型植物化石の形態記載

ヒメグルミ：オニグルミと同属で、上面観はレンズ形、内果皮上部は鋭く尖り、内果皮表面はほぼ平滑である。

ツノハシバミ：側面観は角張った円形、上面観は橢円形、上部は少し尖って基部は大きく丸く、遠心上に線状のすじがある。果皮は平滑。種子は食用とし、水域周囲の斜面に生育することが多い。

3 種実同定分析－中村城跡より出土した種実－

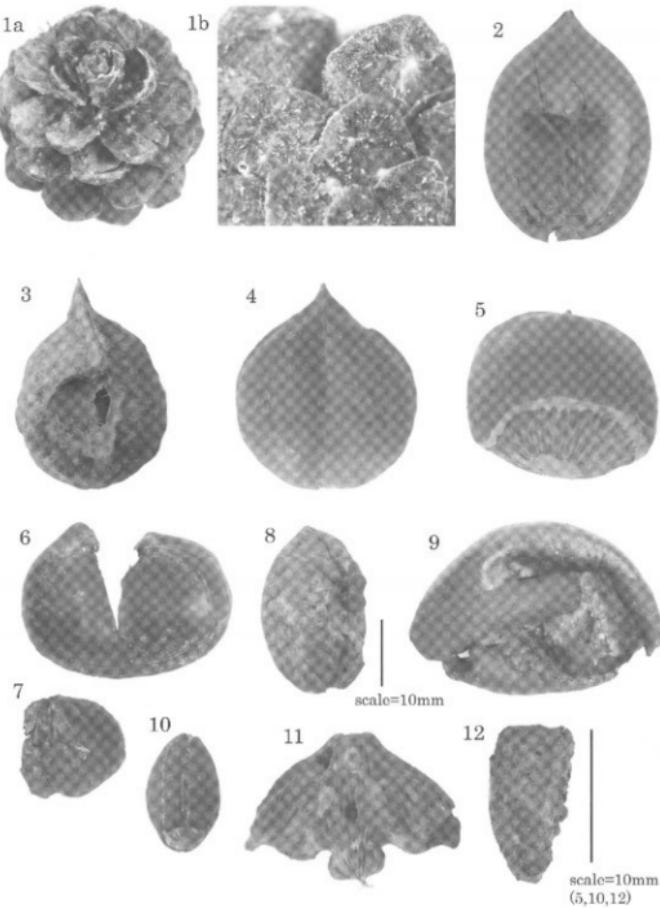
コハクウンボク：側面縁は紡錘形、上面観は円形、基部は大きく斜めにつき、内果皮壁は黒または濃褐色で平滑、微細な網目模様となっている。縁に3つの比較的明瞭な稜がある。同属のハクウンボクの種子は燃料用の油脂を採取する。

ヒシ属：果実は菱形で刺状突起が大きくふくらみ、大きい刺状突起が2個、それに直交方向に小さい突起が2個ある。種子は食用とする。

ヒヨウタン：種子は偏四角形で基部が狭く上部は広く平坦で、縁には縦に隆起がある。

(4) 当時の植物利用

中村城跡からは、平安時代から中世、近世以降にいたるまでオニグルミ、モモを出土し、それらには加工痕が確認された。さらにクリやトチノキ、ヒヨウタンなど利用できる植物を中心に出土していることから、これらの植物を利用し周囲に廃棄していたと考えられる。ヒシ属は出土個数が少なく、通常は比較的広い停滞水域に生育するため、出土した遺構に生育していた可能性は低いと考えられる。



図版1 中村城跡より出土した種実

1.クロマツ、球果(biは拡大、3号河川跡 No.6090) 2.オニグルミ、内果皮割跡(1号溝跡 No.6015) 3.オニグルミ、内果皮食痕(1号溝跡 No.6021) 4.ヒメグルミ、内果皮(3号河川跡 No.6036) 5.ツノハシバミ、果実(3号河川跡 No.6096) 6.クリ、果皮(3号河川跡 No.6092) 7.クリ、炭化種子(1号河川跡 No.6107) 8.モモ、核食痕(1号水田跡水田1 No.6083) 9.トチノキ、種皮(6号堀跡 No.6091) 10.コハクウンボク、内果皮(1号水田跡水田2 No.6100) 11.ヒシ属、果実(6号堀跡 No.6110) 12.ヒヨウタン、種子(1号河川跡 No.6113)

4 樹種同定分析—一関市中村城跡出土材の樹種—

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

(1) 試 料

試料は122点で、木製品・加工材と杭や橋脚とされているものである（表1・2）。試料を検出した遺構の大半は中世のものとされ、平安時代から近世のものも含まれると見られている。

遺跡は金流川左（東）岸の河岸段丘上の微高地（標高約22m）に立地する。平安時代から近世以降までの旧河川跡・堀跡・溝跡・土坑・住居跡など多数の遺構と遺物が確認されている。

(2) 方 法

プレパラートの作製には、筆者が遺物から採取した材片を用いた。材片は少なくとも足かけ2年分を含み、かつできるだけ少ない量となるように努め、調査担当者と協議しながら採取した。剃刀の刃を用い試料の横断面・放射断面・接線断面3面の徒手切片を作製し、これをガムクロラールで封入したプレパラートを生物顕微鏡で観察し同定した。併せて各分類群1点の顕微鏡写真図版を作成した（図版1～4）。作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

(3) 結 果

試料の中には確実な同定ができず類似種としたものもあったが、以下の13分類群に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、() の付いた試料番号は類似種としたものを表している。学名と配列は「日本の野生植物 木本I・II」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」（岩手植物の会 1970）を参照した。また、一般的な性質などについては「木の事典 第1・2・4～8巻」（平井 1979, 1980, 1981）も参考にした。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科 237, 412, 220, 221a, 223, 241, 242, 243, 245

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞、エビセリウム細胞よりなり、エビセリウム細胞の壁は壊れている。放射仮道管内壁には頗著な鋸歯状の突出が認められる。分野隙孔は窓状。放射組織は單列、1～15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘状のものがある。

複維管束亞属（二葉松類）は国内に3種あるが、県内にはクロマツ (*Pinus thunbergii*) とアカマツ (*P. densiflora*) が自生する。ただクロマツの自生地は海沿いに点在するだけなので、試料はアカマツである可能性が高いと考えている。アカマツは北海道南部から九州に自生し、また植栽される常緑高木である。材は重硬で、強度は大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途がある。

・マツ属単維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Haploxyylon* sp.) マツ科 274

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞、エビセリウム細胞よりなり、エビセリウム細胞の壁は壊れている。放射

管内壁は滑らかで、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1-15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘状のものがある。

單維管束亞属（五葉松類）は国内に4種といいくつかの変・品種がある。県内にはハイマツ (*Pinus pumila*) とゴヨウマツ（ヒメコマツ）(*P. parviflora*) が自生するがハイマツは高山に限られる。ゴヨウマツは尾根筋や斜面に生育する常緑高木で、まれに植栽される。材の硬さは中程度で、加工や乾燥は容易、保存性は中程度である。建築・建具・器具・家具材などの用途がある。

・モミ属 (*Abies* sp.) マツ科 215

早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなり、末端壁にはじめず状の肥厚が認められ、上下縁部の細胞は不定形となる。分野壁孔はスギ型で分野あたり1-4個。放射組織は単列、1-20(40)細胞高。

モミ属は国内に5種あるが、県内にはモミ (*Abies firma*) とオオシラビソ（アオモリトドマツ）(*A. mariesii*) が自生する。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、オオシラビソは本州（中部地方以北）の亜高山帯にそれぞれ分布する常緑高木である。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高いと考える。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途がある。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 (338), 409, (236), (388), 462, 343, 344, 345, 426, 427, 429, 341, 430, 431, 434, 436, 437, 410, 439, 224

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はスギ型で分野あたり2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。類似種とした3点はいずれも採取した材片が足かけ2年分なかった。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では、現在植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 468, (432)

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はヒノキ型で分野あたり1-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。1058は劣化が進んでいたため確定できなかった。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。県内にはサワラのみが自生する。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata*) ヒノキ科 336, 337, 339, 460, 477, 402a, 402b, 386, 340a, 340b, 393, (342), (389), 239, 240, 390, 275, 467a

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあ

るが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型～スギ型で分野あたり1～6個。放射組織は単列、1～15細胞高であるが5細胞程度の低いものが多い。1023と1033はともに劣化や変形が進み確定できなかつたため類似種とした。

アヌナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアヌナロ（ヒバ）（*T. dolabrata var. hondai*）がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ブナ属 (*Fagus* sp.) ブナ科 408, 401, 385, 332, 333, 334, 424, 425, 335, 295

散孔材で管孔は単独または放射方向に2～4個が複合、横断面では多角形、分布密度は高い。道管はほぼ單穿孔をもつが、晚材部では段（bar）数が10前後の階段穿孔をもつものもある。壁孔は大型で対列状～交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性、単列・數細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状、散在状。年輪界は明瞭。

ブナ属はブナ (*Fagus crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) の2種がある。ブナは北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナの方がブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落を作ることはない。ブナは日本の冷温帶落葉樹林を代表する樹木である。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Prinns* sp.) ブナ科 435, 452, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 448, 450, 451, 225, 277, 278, 279, 281, 286, 287, 289, 291, 293, 396, 415, 416, 440, 446

環孔材で孔圓部は1～3列、孔圓外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～梢円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（ドングリ）が開花の年に熟すグループで、カシワ (*Quercus dentata*)、ミズナラ (*Q. crispula*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*) といいくつかの変・品種がある。県内には4種とも自生するが、平野部に普通なのはコナラである。コナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途があり、薪炭材としては同属のクヌギに次ぐ優良材である。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 461, 276, 403, 394, 238, 387, 475, 433, 438, 469, 348, 352, 354, 309, 449, 221b, 222, 283, 285, 294, 296, 299, 308, 244, 474, 413, 442, 445

環孔材で孔圓部は1～多列、孔圓外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では梢円形～円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、

強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・檜木などに用いられる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 194, 195, 196

環孔材で孔圈部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では楕円形～円形、單独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-30(60)細胞高でしばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のもの一つにあげられる。

・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科 466

散孔材で横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2-4個が放射方向に複合する。道管は單穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は国内に6種あるが、県内にはホオノキ (*Magnolia obovata*)・コブシ (*M. praecoccissima*)・タムシバ (*M. salicifolia*) の3種が自生する。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないとから、器具・建築・家具・建具材などのはか、指物・本地・下駄齒・刃物鞘など特殊な用途も知られている。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキに準じた使われ方をする。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科 463

散孔材で横断面では楕円形、2-4個が複合または単独で配列、年輪界付近で管径と密度を減少させる。道管は階段穿孔をもち、段数は5-10、壁孔は小型で密に交互～対列状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-30(50)細胞高。柔組織は短接線状、散在状。年輪界は不明瞭。

エゴノキ属は国内に3種あるが、県内にはエゴノキ (*Styrax japonica*) とハクウンボク (*S. obassia*) が自生する。落葉高木～低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、旋作・器具・薪炭材などに用いられる。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfamily Bambusoideae sp.) 467b

基本組織の中に維管束が散在する不齊中心柱をもつ。

タケ亜科 (タケ・ササ類) には多数の種が含まれるが、解剖学的特徴のみでは区別できない。写真は割愛した。

395は繩とされるものである。イネ藁を用いている可能性があるため、植物珪酸体による検討を北方ファイティス研究室の佐瀬 隆氏に依頼し、以下のコメントをいただいた。

佐瀬氏コメント：試料を過酸化水素水で脱色し検鏡したが、植物珪酸体や珪化組織は確認できなかつた。したがって、イネを含むイネ科草本である確証を得ることはできなかつた。

筆者の観察では材や樹皮の細胞も認められないことから、イネ科を除く草本類でつくられたものの

ようである。

以上の同定結果を一覧表で示す（表1・2）。

(4) 考察

試料は類似種としたものを含め上記の13分類群に同定されたが、主な用途別に通観すると組成に偏りがみられる（表3）、用途に応じた樹種の選択があったことが窺える。

中世のものとされる漆塗椀は8点検討されたが、いずれもブナ属に同定された。一方、平安時代のものとされる漆塗皿（195）はケヤキに同定された。同時代の「素木」椀（194）もケヤキ製であった。県内の遺跡から出土した漆器の用材はケヤキが77%と圧倒的多数を占め、ブナ属が21%でこれに次いでいる（高橋 2003）。ただ、ケヤキが柳之御所遺跡など平泉町とその周辺の遺跡の12世紀代の出土例に集中しているのに対し、ブナ属例は地域・時代とも広範囲に及んでいるようである。本遺跡の北方約40kmに位置する金ヶ崎町館松本館跡出土の中世とされる漆器4点もブナ属（3）とケヤキに同定されている（高橋 1997）。

下駄は平安時代以降とされるもの1点と中世とされるもの3点が検討された。中世のもののうち1点は差歎下駄の台で、モクレン属に同定されている。残りの3点は連歎下駄で平安以降のものがスギに、中世のものはともにクリに同定された。いずれの分類群も県内の遺跡からの出土報告例が多く（高橋 2003）、本遺跡の北方約20Kmに位置する平泉町柳之御所遺跡では12世紀のものとされる連歎・差歎下駄がスギ・クリ・モクレン属などに同定されている^{注)}（能城 1995、高橋 1995）。また、北方約40Kmに位置する金ヶ崎町館山遺跡では15~16世紀のものとされる連歎下駄がクリに同定されている（岩手埋文 1983）。

曲物部材は側板や底板などとされる16点が検討された。平安時代の底板2点はモミ属とクリ、中世の側板3点はアスナロ、底や蓋板（不確実なものも含む）はスギ（2）、アスナロ（6）、クリに同定されている。曲物の部材は側板はもちろん底板も「削技法」で作られるため、ともに削裂性に優れる針葉樹材が用いられることが多いが、底板に広葉樹材が用いられる例も散見されている（岩井 1994、山田 1993）。県内でも出土報告は少ないものの、柳之御所遺跡からスギ・アスナロ・モミ属とともにクリが報告されている例（能城 1995）や、同町泉屋遺跡第13次発掘調査で検出されたヒノキ科針葉樹の側板にクリの底板をつけた例（岩手埋文 1997）もある。

中世の樋側板は3点検討され、いずれもスギに同定された。同じ針葉樹ではあるが、曲物側板がアスナロのみであったことは対照的である。ともに試料数が3点と限られていることによるものかもしれないが留意しておきたい。

杭や橋脚とされるものは55点が検討対象とされた。平安時代以降とされる3号河川跡検出の杭材5点と、平安~近代とされる2号河川跡検出の杭材7点中からは複雑管束亞属（おそらくアカマツ）がそれぞれ4点と3点認められている。一方、中世とされる2号橋の橋脚材9点はコナラ節（8）とクリ、1号・3号・5号・6号堀検出の杭材12点はコナラ節（6）とクリ（6）、1号柵状遺構・6号堀・7号溝検出の加工材22点はブナ属・コナラ節（12）・クリ（9）に同定され、組成にやや違いが認められる。これが遺構の性格や所轄時期の違いによるものなのかはわからない。

注）最多数を占めるているのはケヤキである。

引用文献

- 平井信二 1979 「木の事典 第1・2巻」、かなえ書房。
- 平井信二 1980 「木の事典 第4～7巻」、かなえ書房。
- 平井信二 1981 「木の事典 第8巻」、かなえ書房。
- 岩井宏實 1994 「ものと人間の文化史 75 血物」、法政大学出版局。
- 岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」。
- 能城修一 1995 横之御所跡から出土した木製品の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 横之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査（分冊1 本文・図版」、433-456、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 佐竹義輔・原 宽・豆理俊次・宮成忠夫（編） 1989 「日本の野生植物 本木I・II」、平凡社。
- 高橋利彦 1995 横之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 横之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査（分冊1 本文・図版」、423-432、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 1997 金ヶ崎町松本船跡出土材の樹種同定結果報告-94・95年度-、「岩手県 文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集 松本船跡発掘調査報告書 -一級県道水沢水沢線改良事業に係る発掘調査-」、172-178、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 2003 岩手県内の遺跡から出土した木質遺物の樹種I -下駄と漆器-、「岩手考古学」、第15号、39-45。
- 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史、植生史研究、特別第1号、I-242。
- 財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 木製品、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集 旗屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書 -一関遊水池事業関連遺跡発掘調査」、297-301、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、「樹種同定は高橋利彦による」
- 財團法人岩手県埋蔵文化財センター 1983 「岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第65集 館山遺跡第2次発掘調査報告書」、[樹種同定は（財）元興寺文化財研究所による]

表1 中村城跡遺跡出土材の樹種(1) 木製品・加工材など

掲載番号	試料番号	後出遺物など	用途など	分類群
408	1001	5号船跡	漆塗板	ブナ属
401	1002	4号船跡	漆塗板	ブナ属
385	1003	2号船跡	漆塗板	ブナ属
332	1004	1号船跡	漆塗板	ブナ属
333	1005	1号埠頭	漆塗板	ブナ属
334	1006	1号埠頭	漆塗板	ブナ属
194	1007	1号河川跡	檻	ケヤキ
195	1008	1号河川跡	鉢	ケヤキ
215	1009	1号埠頭	蓋	モミ属
336	1010	1号埠頭	蓋	アスナロ
337	1011	1号埠頭	蓋	アスナロ
338	1012	1号埠頭	蓋	スギ類似種
339	1013	1号埠頭	蓋	アスナロ
460	1014	6号埠頭	蓋	アスナロ
461	1015	6号埠頭	蓋	クリ
276	1016	2号水出跡	蓋	クリ
477	1017	南区地名不明	蓋	アスナロ
409	1018	5号埠頭	曲物	スギ
402a	1019a	4号埠頭	曲物側板	アスナロ
402b	1019b	4号埠頭	曲物底板	アスナロ
386	1020	2号埠頭	曲物	アスナロ
340a	1021a	1号埠頭	曲物側板	アスナロ
340b	1021b	1号埠頭	曲物底板	アスナロ
393	1022	3号埠頭	笠	アスナロ
342	1023	1号埠頭	杓子	アスナロ類似種
236	1024	3号河川跡	透歛下歎	スギ類似種
403	1025	4号埠頭	透歛下歎	クリ
394	1026	3号埠頭	透歛下歎	クリ
395	1028	3号埠頭	檻	草木
237	1029	3号河川跡	加工板	マツ属複葉管束主属
238	1030	3号河川跡	加工板	クリ
387	1031	2号埠頭	加工板	クリ
388	1032	2号埠頭	加工板	スギ類似種
389	1033	2号埠頭	加工板	アスナロ類似種
239・240・390	1034	2号埠頭	加工板	アスナロ
462	1035	6号埠頭	加工板	スギ
343	1036	1号埠頭	加工板	スギ
344	1037	1号埠頭	加工板	スギ
274	1038	2号水出跡	加工板	マツ属單葉管束主属
275	1039	2号水田跡	加工板	アスナロ
345	1040	1号埠頭	加工板	スギ
463	1041	6号埠頭	加工材	エニノキ属
466	1042	7号埠頭	差歛下歎台	モクレン属
424	1045	6号埠頭	漆塗板	ブナ属
425	1046	6号埠頭	漆塗板	ブナ属
335	1047	1号埠頭	投物?	ブナ属
426	1048	6号埠頭	曲物底板	スギ
427	1049	6号埠頭	龜	スギ
467a	1052a	7号埠頭	加工板	アスナロ
467b	1052b	7号埠頭	同上木釘	イネ科クケ科
429	1053	6号埠頭	加工板	スギ
341	1054	1号埠頭	加工板	スギ
412	1055	5号埠頭	加工板	マツ属複葉管束亞属
468	1056	7号埠頭	加工板	ヒノキ属
430	1057①	6号埠頭	加工板	スギ
431	1057②	6号埠頭	加工板	スギ
432	1058	6号埠頭	加工板	ヒノキ属類似種
433	1059	6号埠頭	加工板	クリ
434	1060	6号埠頭	加工板	スギ
435	1061	6号埠頭	加工板	コナラ属コナラ属コナラ節
436	1062	6号埠頭	加工板	スギ
437	1063	6号埠頭	加工板	スギ
438	1064	6号埠頭	加工板	クリ
410	1066	5号埠頭	漆塗板	スギ
439	1067	6号埠頭	加工板	スギ
469	1068	7号埠頭	加工板	クリ

表2 中村城跡出土材の樹種(2) 杭材など

掲載番号	試料番号	検出遺構	位置など	分類群
475	1043	7号溝跡	東	クリ
452	1065	6号施跡	ベルト付近 (62C4)	コナラ属コナラ亜属コナラ節
348	1102	1号埋跡	No. 26	クリ
352	1108	1号埋跡	No. 52	クリ
354	1110	1号埋跡	No. 62	クリ
309	1112	2号横跡	橋脚No. 64	クリ
310	1113	2号横跡	橋脚No. 65	コナラ属コナラ亜属コナラ節
311	1114	2号横跡	橋脚No. 67	コナラ属コナラ亜属コナラ節
312	1115	2号横跡	橋脚No. 68	コナラ属コナラ亜属コナラ節
313	1116	2号横跡	橋脚No. 69	コナラ属コナラ亜属コナラ節
314	1117	2号横跡	橋脚No. 70	コナラ属コナラ亜属コナラ節
315	1118	2号横跡	橋脚No. 71	コナラ属コナラ亜属コナラ節
316	1119	2号横跡	橋脚No. 72	コナラ属コナラ亜属コナラ節
317	1120	2号横跡	橋脚No. 73	コナラ属コナラ亜属コナラ節
448	1124	6号埋跡	No. 77	コナラ属コナラ亜属コナラ節
449	1125	6号埋跡	No. 78	クリ
450	1126	6号埋跡	No. 79	コナラ属コナラ亜属コナラ節
451	1127	6号埋跡	No. 80	コナラ属コナラ亜属コナラ節
220	1128	2号河川跡	No. 1	マツ属複維管束亜属
221a	1129a	2号河川跡	No. 2A	マツ属複維管束亜属
221b	1129b	2号河川跡	No. 2B	クリ
222	1130	2号河川跡	No. 3	クリ
223	1131	2号河川跡	No. 4	マツ属複維管束亜属
224	1132	2号河川跡	No. 5	スギ
225	1133	2号河川跡	No. 6	コナラ属コナラ亜属コナラ節
277	1134	1号横状遺構	No. 1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
278	1135	1号横状遺構	No. 2	コナラ属コナラ亜属コナラ節
279	1136	1号横状遺構	No. 3	コナラ属コナラ亜属コナラ節
281	1138	1号横状遺構	No. 5	コナラ属コナラ亜属コナラ節
283	1140	1号横状遺構	No. 7	クリ
285	1142	1号横状遺構	No. 9	クリ
286	1143	1号横状遺構	No. 10	コナラ属コナラ亜属コナラ節
287	1144	1号横状遺構	No. 11	コナラ属コナラ亜属コナラ節
289	1146	1号横状遺構	No. 13	コナラ属コナラ亜属コナラ節
291	1148	1号横状遺構	No. 15	コナラ属コナラ亜属コナラ節
293	1150	1号横状遺構	No. 17	コナラ属コナラ亜属コナラ節
294	1151	1号横状遺構	No. 18	クリ
295	1152	1号横状遺構	No. 19	ブナ属
296	1153	1号横状遺構	No. 20	クリ
299	1156	1号横状遺構	No. 24	クリ
308	1165	1号横状遺構		クリ
241	1167	3号河川跡	No. 1	マツ属複維管束亜属
242	1168	3号河川跡	No. 2	マツ属複維管束亜属
243	1169	3号河川跡	No. 3	マツ属複維管束亜属
244	1170	3号河川跡	No. 4	クリ
245	1171	3号河川跡	No. 5	マツ属複維管束亜属
306	1172	3号埋跡	東側	コナラ属コナラ亜属コナラ節
474	1180	7号溝跡	西	クリ
413	1181	5号埋跡		クリ
415	1183	5号埋跡		コナラ属コナラ亜属コナラ節
416	1184	5号埋跡		コナラ属コナラ亜属コナラ節
440	1187	6号埋跡		コナラ属コナラ亜属コナラ節
442	1189	6号埋跡		クリ
445	1192	6号埋跡		クリ
446	1193	6号埋跡		コナラ属コナラ亜属コナラ節
196	1194	1号河川跡	風倒木	ケヤキ

表3 中村城跡遺跡出土材の時期別・用途別樹種組成
類似種としたものもそれぞれの分類群に含めた。

分類群	時間	平安時代		平安以降		平安～近世		中世		近世		小計									
		用途	出物板	板	下駄	杭	檻	廻木	漆桶	漆桶板	漆桶板	均子	廻板	櫛脚	松	加工材					
マツ属(油樽等、木造)			1	4								1				9					
マツ属(油樽等、木造)			1													1					
スギ				1												1					
ヒノキ属																20					
アスナロ				1												2					
アザマ																16					
コナラ属(コナラ、モミ、カツラ)																10					
クリ				1												28					
ケヤキ					1											3					
モクレン属						1										1					
エゴノキ属																1					
イネ科タケ亜科																1					
小計		2	2	1	5	1	1	1	8	1	3	5	4	3	1	24	9	12	23	1	121
計		4	8	3	7	3	1	1	8	1	3	5	4	3	1	24	9	12	23	1	121

*: 錫(底)板を含む。

図版1 1. マツ属複維管束亞属 No. 221a

2. マツ属複維管束亞属 No. 274

3. モミ属 No. 215

図版2 4. スギ No. 344

5. ヒノキ属 No. 468

6. アスナロ No. 337

図版3 7. ブナ属 No. 295

8. コナラ属コナラ亜属コナラ節 No. 281

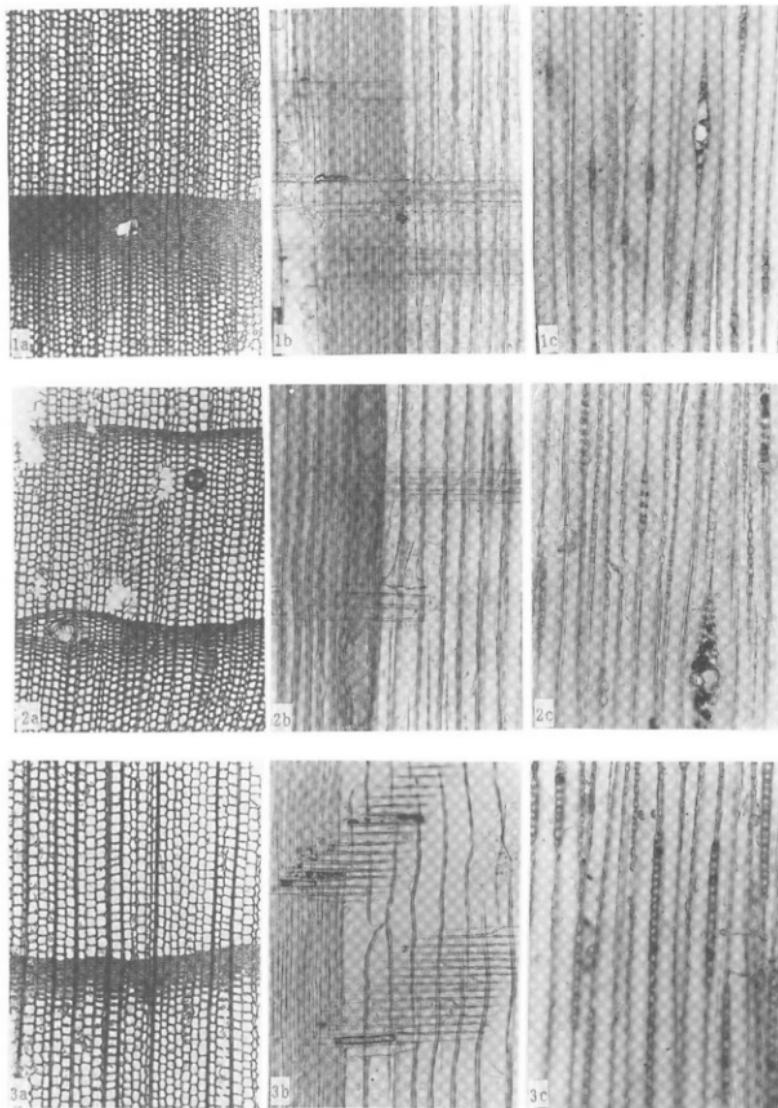
9. クリ No. 442

図版4 10. ケヤキ No. 195

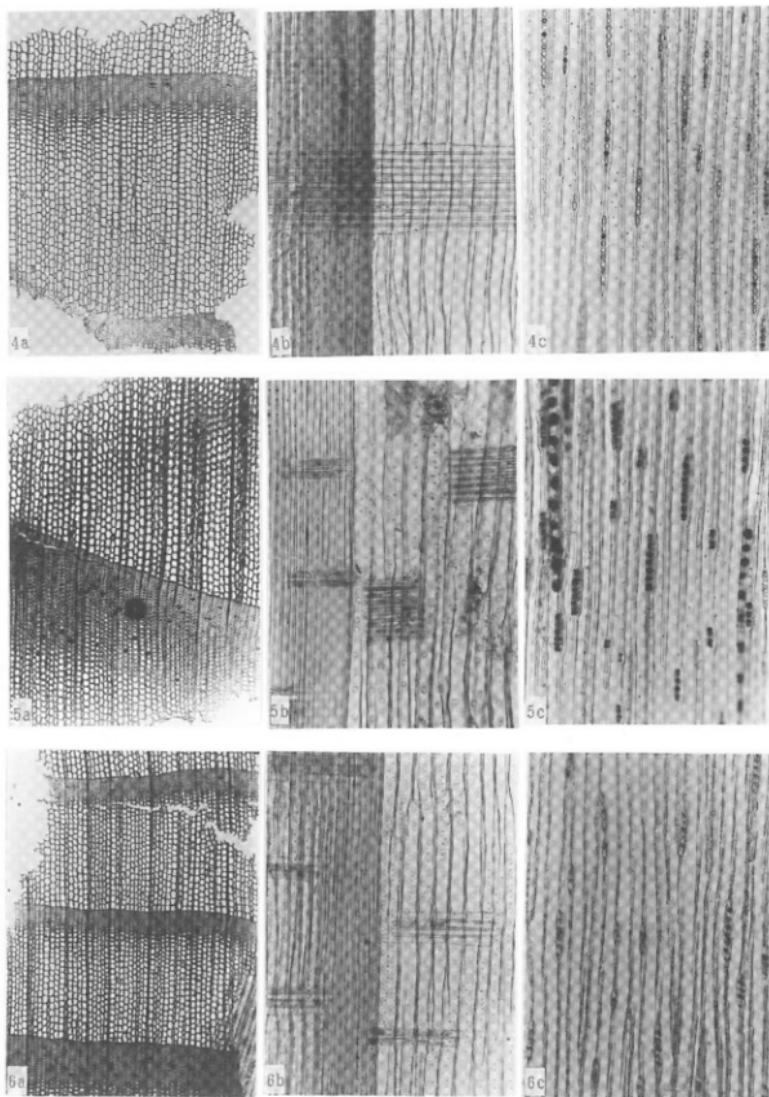
11. モクレン属 No. 466

12. エゴノキ属 No. 463

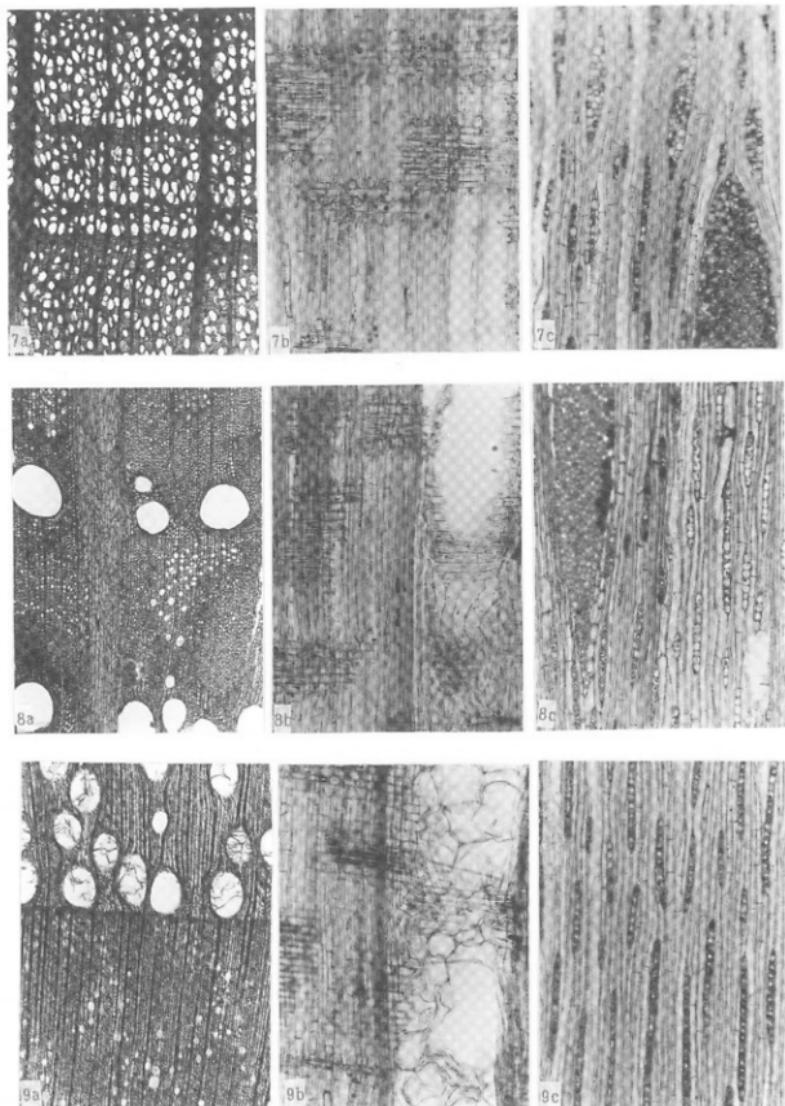
a:横断面 x40 b:放射断面 x100 c:接線断面 x100



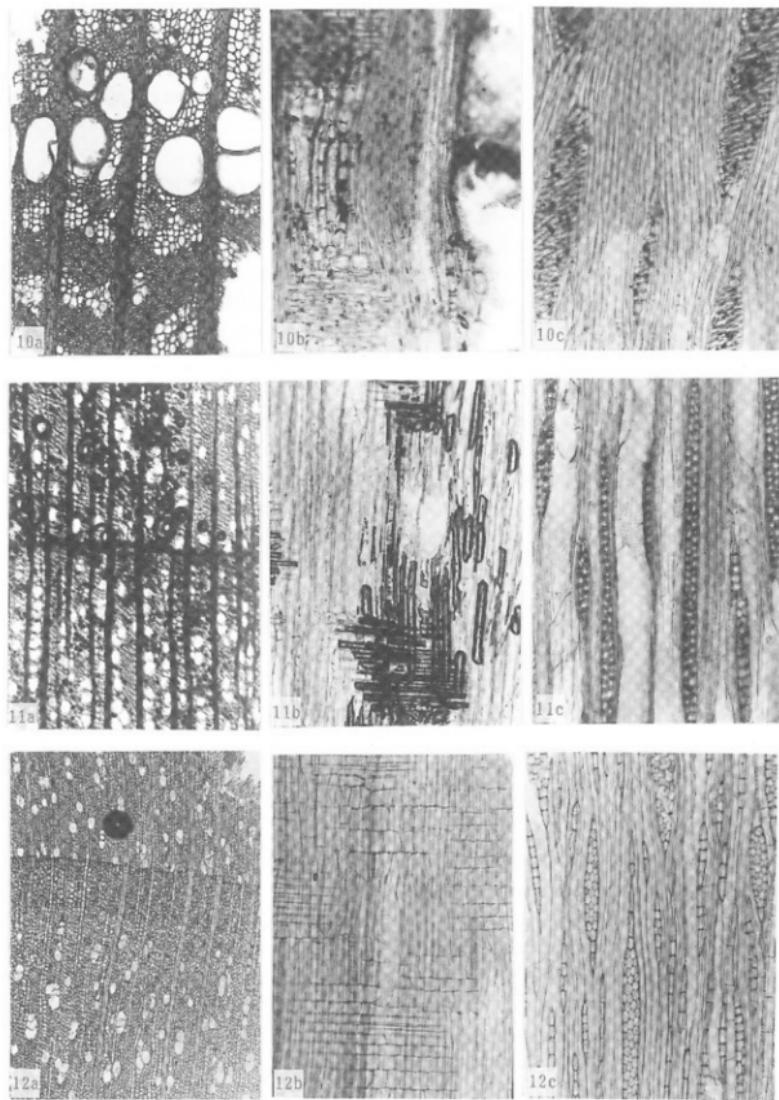
図版 1



图版2



図版3



图版 4

5 金属製品分析－中村城跡出土資料の金属考古学的調査結果－

岩手県立博物館 赤沼英男

(1) はじめに

中村城跡は岩手県一関市花泉町に立地する。一般国道342号花泉バイパス道路改築事業に伴う緊急発掘調査によって、平安時代または中世と推定される住居跡、水田跡、および堀跡から、鉄器、鉄滓、羽口、および埴輪片が出土した¹⁾。遺跡内またはその周辺で、金属関連の生産活動が行われていた可能性が高いことを示している。古代から中世における岩手県南地域出土資料の金属考古学的調査例は少なく、製作に使用された地金の組成に基づく資料の歴史を議論する状況には至っていない。古代から中世の岩手県南地方における鉄器の普及状況に関する基礎データを得ること、および遺跡内における生産活動内容を推定することを目的として、中村城跡出土資料の金属考古学的調査を実施した。以下に調査結果を報告する。

(2) 調査資料

調査資料は表1に示す鉄器3点（図2）、羽口1点、および埴輪片1点の合計5資料である。羽口は外形約7.3cm、気道内径約2.9cmで、反応サイトに面した先端は黒褐色を呈し、著しく溶融または部分溶融している（図3）。埴輪片の内面は茶褐色を呈し、全面がガラス化している（図4）。

(3) 調査試料の摘出

調査対象とした鉄器はX線透過写真撮影を行い、残存良好が良好と判断された部位からダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）で、0.1~0.2gの微量試料を摘出した。試料摘出部位はその後に行われた保存処理において修復した。羽口および埴輪片については、資料に1~2cmの深さでV字の切り込みを入れ、調査試料を摘出した。摘出した試料は2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料摘出位置は図2~図4に示すとおりである。

(4) 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、鉄器地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された組織および非金属介在物を構成する鉱物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザ（EPMA）で分析した。羽口および埴輪片については使用状況を推定するうえで重要と判断された領域をEPMA分析した。No.1およびNo.2から摘出した試料はその5割を超える領域がメタルによって構成されていたので、ナイタール（硝酸2.5ml、エチアルコール97.5mlの混合溶液）で腐食した。

化学成分分析用試料は表面に付着する土砂、鏽をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾かし、メノー乳鉢で粉碎した後、テフロン分解容器に直接秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定容とし、表2、表4および表5に示す20元素を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）で分析した。

(5) 調査結果

5-1 鉄器から摘出した試料の組織観察結果

No.1Sa₁およびNo.2Sa₁から摘出した試料はその5割以上がメタルによって構成されていたので、ナイタールで腐食した。マクロエッティング組織はその全域がほぼ一様に腐食されている(図2)。黒く腐食されたバーライト [フェライト(α Fe)とセメントタイト(Fe_3C)との共析組織]の占める面積割合から、No.1Sa₁には0.1-0.2mass% Cの鋼、No.2Sa₁には0.2-0.3mass% Cの鋼が配されているとみることができる(東北大学金属材料研究所編 1953)(佐藤編 1968)。EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップによって、No.1Sa₁から摘出した試料のメタルには、微細粒子が混在したガラス化した領域(Ma)中に長辺1μm未満の微細な灰色化合物(XT:鉄チタン酸化物)および暗灰色を呈する化合物(XF:Fe-Mg-Si-O系化合物と推定される)が混在した非金属介在物が確認された。No.2のメタルには鉄チタン酸化物(XT:Fe-Ti-Al-V-O系化合物と推定される)とガラス質ケイ酸塩(Gi)からなる非金属介在物が見出された(図2)。No.3から摘出した試料は鋳造が著しく、鋳造前の地金組織を推定できる領域を見出すことはできなかった。上記組織解析結果は表2右欄に示すとおりである。

5-2 鉄器から摘出した試料の化学組成

No.1Sa₁およびNo.2Sa₁のT.Feはそれぞれ95.21mass%、90.13mass%で、ほぼメタルまたはメタルにわずかに錫が混在した試料が分析されている(表2)。No.3Sa₁・No.3Sa₂のT.Feは38~46mass%で、相当に鋳造が進んだ試料が分析されている。上記4試料からは、いずれも0.01mass%を超えるNiおよびCo、0.008mass%以上のCuが検出されている。錫が混在した試料、および鋳造が進んだ試料が分析されているため、埋蔵環境下からの富化の可能性について吟味する必要がある(佐々木・村田 1984)。No.1Sa₁およびNo.2Sa₁に比べ、鋳造が進んだNo.3Sa₁・No.3Sa₂のNi、Co、およびCu含有量は低レベルにある(表2)。これまでの調査結果において、鉄器を埋蔵する土壤から0.005mass%以上のNi、Co、およびCuが検出された例は未確認であることをふまえると(赤沼 2004)、Cu、Ni、Coについては、埋蔵環境からの富化の可能性は乏しいといえる。

5-3 羽口から摘出した試料の組織観察結果

No.4Sa₁から摘出した試料にはいたるところに大小多数の空隙がみられる(図3b₁)。マクロ組織領域(Reg.1)内部のEPMAによる反射電子組成像(BEI)は、FeO-CaO-SiO₂-K₂O-MgO-Al₂O₃系のガラス化した領域(Gi)に酸化鉄(Mag:マグネタイトに近い)が析出した組織によって構成される(表3)。図2a₁Sa₂部から摘出した試料にはマグネタイトは見出されなかった。

5-4 羽口から摘出した試料の化学組成

No.4Sa₁およびNo.4Sa₂はSi、Alを主成分とする。No.4Sa₁のT.Feは71.13mass%で、No.4Sa₂よりも高レベルにある(表4)。No.4Sa₁で観察されたマグネタイトに近い組成の酸化鉄に起因すると推定される。

5-5 埋め込み部の組織観察結果

No.5Sa₁はその全域がガラス化していて、ところどころに微細な金属粒および灰色領域がみられる。EPMAによる分析によって前者はCu粒、後者はSn-O系領域で、ガラス化した領域は酸化鉛を主成分とすることが分かった(図4、表3)。

5-6 増堀破片の化学組成

表5はNo.5Sa₁の化学組成である。Si、Al、およびCaを主成分とし、他に2.58mass%のCu、0.16mass%のSn、および2.37mass%のPbを含有する。5-5の組織観察結果と整合する分析結果である。

(6) 考 察

6-1 微量元素による調査鉄器の分類

5-1から明らかなように、No.1およびNo.2は亜共析鋼（炭素量約0.8mass%未満の鋼）を素材とする。No.3から摘出した試料は鋳化が著しく、使用された素材の組成について言及することはできない。器種を考慮すると銅製鉄器と思われる。

古代および中世には複数の銅製造法があった可能性が高い（赤沼 1997）（赤沼・福出 1997）（赤沼・佐々木・伊藤 2000）。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、最終的に得られる鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ摘出した試料の組成分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。製造法の如何に係わらず、地金を精度高く分類する方法の確立が必要である。

銅（Cu）、ニッケル（Ni）、およびコバルト（Co）の三成分は鉄よりも錫びにくい金属であるため、鉄中に取り込まれた後は、そのほとんどが鉄中にとどまると推定される。5-2で述べたとおり、調査した3資料に埋蔵環境下からCu・Ni・Co三成分が富化された可能性は乏しい。従って、合金添加が行われていなかったとすると、その組成比は銅製造法の如何に関わらず、製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

表2の分析結果から、(mass% Co)/(mass% Ni)（本稿ではCo*と記載）と(mass% Cu)/(mass% Ni)（本稿ではCu*と記載）、(mass% Ni)/(mass% Co)（本稿ではNi**と記載）と(mass% Cu)/(mass% Co)（本稿ではCu**と記載）をそれぞれ求め、それらの値をプロットしたものが図1a・bである。図では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された試料を黒丸（●）、非金属介在物が見いだされなかつた試料を白三角（△）で表した。図1a・bのいずれにおいても、No.1Sa₁およびNo.3Sa₁・Sa₂は近接して分布する。No.1およびNo.3はほぼ同じ化学組成の地金を用いて製作された、とみることができる。一方、No.2Sa₁は上記3試料からやや離れた位置に分布する。No.2の遺跡内への来歴は、No.1およびNo.3とは異なっていた可能性が高い。

6-2 羽口の組成からみた中村城における生産活動

No.4の先端にはガラス化した領域中にマグнетタイトに近い組成の酸化鉄が析出している。羽口の製作に使用された素材中の酸化鉄の含有量は2.16mass%で、マグネットイトの混在は未確認である。羽口先が酸化鉄に富んだ融液に近接していた、あるいは酸化鉄が飛散する状況下で使用されたという2つの可能性を考えることができる。前者の場合、精錬または精錬、後者の場合、精錬または固体鉄を加熱、鍛打する鍛冶操作が想定される。発掘調査区域内外からまとまった量の鉄滓が出土していないこと、膨大な量の木炭が使用されていたことを示す状況が未確認であることをふまえると、精錬時における使用の可能性はきわめて乏しい。鍛造剥片が未確認であること、羽口外径断面が約7.3cmと肉厚であるのに対し、気道内径が約2.9cmと細いことを加味すると、空気酸化による銑鉄の脱炭または固体鉄の加熱・鍛打の際に使用された資料の可能性が高い²⁾。精錬の出発物質となる銑鉄または使用不能となつた鉄造鉄器が検出されれば前者の可能性は一層高まる。

6-3 推定される場所の用途

5-5で述べたように、No.5から摘出した試料には、酸化鉛を主成分とするガラス化した領域中に銅粒および酸化錫が析出した組織が観察された。青銅合金の溶製または使用目的を果たした青銅資料の再利用、または青銅合金中の銀を回収する際に用いられた資料と推定される。

(7) まとめ

- ① 調査した3鉄器のうち2資料（鉄鍔および雁又鍔）は亜共析鋼（炭素量が0.5mass%未満の鋼）を素材とする。微量元素の組成比のうえからは2つに分類される。ほぼ同時代に異なる地域から鉄器または鉄器製作の素材となる原料鉄がもたらされた、時代の推移と共に鉄器または原料鉄の供給地域が変化した、または使用目的を果たした鉄器の再利用が図られた、という3つの見方がとれる。
- ② 遺跡内では空気酸化により銅鉄を脱炭し銅を製造するという、精錬が行われていた可能性がある。
- ③ 遺跡内では青銅合金の溶製、利用目的を果たした青銅資料の再利用、または青銅合金中の銀の回収が行われていた可能性が高い。

中村城跡出土資料の金属考古学的調査結果について述べてきた。今回実施した調査結果を基に、今後製品鉄器、鉄塊、遺跡内周辺に分布する製鉄原料、および青銅資料に関する調査結果を加えることによって、古代から中世における当該地域の金属器普及と使用的実態が一層みえてくるにちがいない。

1) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・北田義氏からのご教授による。

2) 羽門とともに遺跡内からは粘土状物質が溶融または部分溶融した後固化した資料（表4Rn）が検出されている。羽門の先端が溶融または部分溶融した後、飛散して固化した、あるいは精錬時に使用した設備または器物の一部が溶融または部分溶融した後固化したものと推定される。

引用文献

- 佐藤知雄編 1968『銅の顯微鏡写真と解説』丸善株式会社
 東北大学金属材料研究所編 1953『金属顯微鏡組織』
 佐々木稔・村田朋美 1984「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、pp.27-33
 赤沼英男 1997「みちのくの地から中世の鉄を見る」ふえらむ、Vol.2 No.1、社団法人日本鉄鋼協会、pp.44-51
 赤沼英男 2004「出土遺物の組成からみた物質文化交流」岩手県立博物館
 赤沼英男・福田豊彦 1997「鉄の牛座と流通からみた北方世界」国立歴史民俗博物館研究報告、72、pp.1-40
 赤沼英男・佐々木稔・伊藤薰 2000「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、pp.553-576

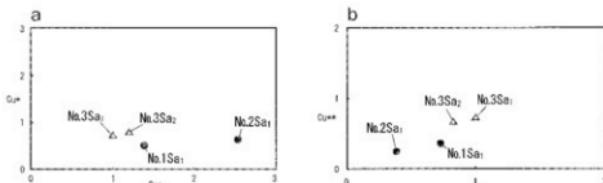


図1 分析した鉄器および鉄塊系試料に含有されるCu・Ni・Co三成分比。No.は表1に対応。
 黒丸（●）は非金属介在物に鉄チタン化合物が見出された鉄器、白三角（△）は非金属介在物が見出されなかった鉄器。
 $\text{Co}^* = (\text{mass\% Co}) / (\text{mass\% Ni})$ 、 $\text{Cu}^* = (\text{mass\% Cu}) / (\text{mass\% Ni})$ 、 $\text{Ni}^{**} = (\text{mass\% Ni}) / (\text{mass\% Co})$ 、 $\text{Cu}^{**} = (\text{mass\% Cu}) / (\text{mass\% Co})$

	No.1 (2001)	No.2 (2002)	No.3 (2003)
外観			
マクロ組織			
ミクロエッティング組織	 (Reg. 1) (Reg. 2)	 (Reg. 1) (Reg. 2)	 (Sai)
非金属介在物			

図2 No.1・No.2・No.3から抽出した試料の組織観察結果

No.1およびNo.2についてはナイタールでエッティングを実施。ミクロエッティング組織はマクロエッティング組織の領域（Reg.1）または領域（Reg.2）内部。XT=鉄チタン酸化物、XF=Fe-Mg-Ca-Si-O系化合物、GI=ガラス質ケイ酸塩、Ma=微細粒子を内包するガラス化した領域。

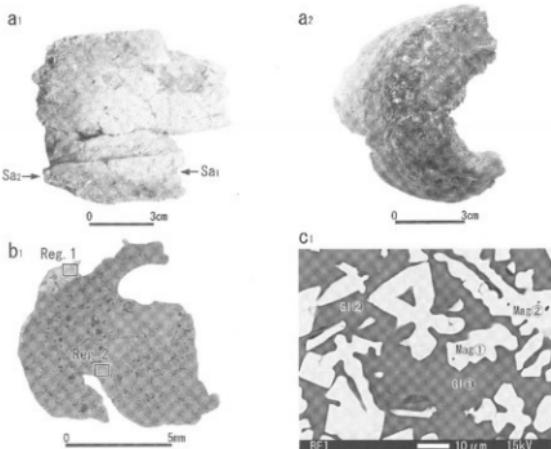


図3 No.4の組織観察結果

a₁・a₂: 外観、矢印は試料摘出位置。b₁: a₁のSa₁から摘出した試料のマクロ組織。
c₁: b₁の領域 (Reg.1) 内部の反射電子組成像 (BEI)。Mag=マグネタイト、Gl=ガラス質ケイ酸塩。

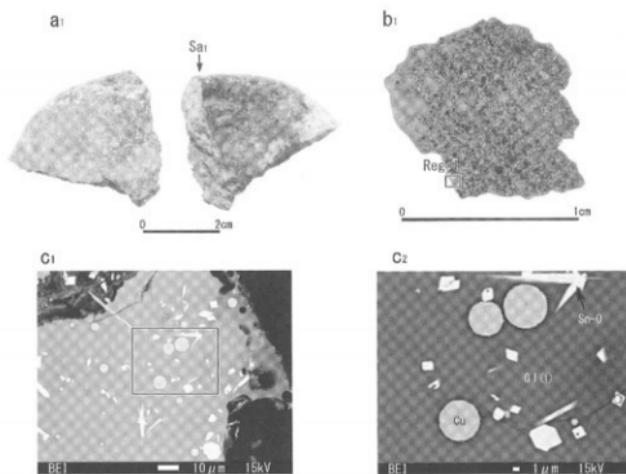


図4 No.5の組織観察結果

a₁: 外観、矢印は試料摘出位置。b₁: a₁のSa₁から摘出した試料のマクロ組織。
c₁: b₁の領域 (Reg.1) 内部のEPMAによる反射電子組成像 (BEI)。c₂はc₁の枠内部。
Gl=ガラス化した領域。

表1 調査資料の概要

No.	資料名	性別	年齢	出土地点	性別	年齢	測定番号	測定番号	測定時間
1	女性	両	3歳地歴	ダーリンド	母	3歳上位	388	71	午後
2	女性	中央	1分未満地歴	余水4号	母	7歳下位	269	64	午後
3	男児	両	2分未満地歴	余水4号	母	7歳下位	257	66	午後
4	男児	両	1分未満地歴	余水4号	母	7歳下位	254	69	午後
5	男児	両	1分未満地歴	5号C1	ベット北側	7歳下位	255	69	午後

*考査の情報は財团法人智恵文化振興事業団歴史文化財センター・北山発掘による。

表2 錫器の分析結果

No.	Ti	Cu	Ni	Co	Mn	P	Fe	Si	Al	Sn	Bi	As	Mo	S	元素分析物質	元素分析物質	元素分析物質	元素分析物質		
1	Sn	95.21	0.016	0.001	0.002	0.003	-	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	0.002	<0.001	0.002	XRF, Ma	1.38	0.50	0.73	0.36	
2	Sn	90.13	0.025	0.009	0.005	0.008	0.006	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	0.008	0.002	<0.001	Pa/Fe(0.42)	XRF, Ma	1.38	0.50	-	0.25
3	Sn	38.00	0.008	0.011	0.011	0.017	0.13	0.13	6.22	<0.001	<0.001	0.001	0.001	0.001	Pa/Fe(0.23)	XRF, Ga	2.54	0.64	1.00	0.73
4	Sn	45.88	0.008	0.010	0.012	0.008	0.016	0.062	0.38	<0.001	<0.001	0.001	0.001	0.001	Pa/Fe(0.20)	Sn	1.08	0.23	-	0.67
5	Sn	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	no	1.20	0.50	0.63	0.50	

*No.1-3はTi-Pt、4-5はSn-Pt系、結晶内の元素はミクロ組成から推定される元素。XRF=ガラス質X線、Ma=粉砕鏡子を内包するガラス化した領域、no=見出されず。

表3 No.4およびNo.5から抽出した試料に見出された鉛物相のEPMAによる定量分析結果

No.	回	測定点	測定点	化学原素 (mass%)														
No.				Mn	Sn	Co	CaO	V	ZnO	MoO	NaO	Al	KO	TiO	FeO	CrO	SiO ₂	FeO
1	Sn	Mag ₁	Mag ₂	0.63	0.23	<0.01	0.12	0.07	0.07	<0.01	0.01	0.02	0.02	2.16	87.6	-	-	-
2	Sn	Mag ₁	Mag ₂	0.65	0.22	<0.01	0.10	0.04	0.07	<0.01	0.01	0.01	0.01	2.07	87.2	-	-	-
3	Sn	Mag ₁	Mag ₂	0.67	0.66	0.99	0.07	0.04	0.07	<0.01	0.01	0.01	0.01	2.15	1.34	-	-	-
4	Sn	Mag ₁	Mag ₂	0.73	0.63	0.99	0.16	0.05	0.76	0.12	<0.01	0.01	0.01	2.01	21.5	-	-	-
5	Sn	Mag ₁	Mag ₂	0.74	0.60	0.98	0.16	0.05	0.74	0.12	<0.01	0.01	0.01	2.01	21.5	-	-	-

*No.4-5はTi-Pt、結晶内の元素はミクロ組成から推定される元素。

表4 No.4羽口の分析結果

No.	Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Sn	Si	Ca	Al	Mg	V	As	Mo	S	結晶組成
4	Sn	7.13	0.003	0.006	0.002	0.044	0.02	0.467	<0.01	31.9	11.1	8.34	0.592	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	(Mg _{1/2} , (Qcr))
5	Sn	2.16	0.001	0.004	0.001	0.039	1.21	0.251	<0.01	30.1	1.28	8.46	0.431	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	G1, G2
RF	Sn	4.17	0.001	0.005	0.001	0.053	0.56	0.545	<0.01	31.0	0.822	9.70	0.536	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	G1, G2

*No.4-5はTi-Pt、結晶内の元素はミクロ組成から推定される元素。

表5 No.5掛拂の分析結果

No.	Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Sn	Si	Ca	Al	Mg	V	As	Mo	S	ミクロ組織
255	2.58	0.015	0.004	0.056	0.002	0.289	0.16	2.37	0.02	26.6	282	7.81	1.15	<0.01	0.08	<0.01	0.08	Cr ₂ O ₃ , Fe ₂ O ₃ , Ca ₃ Al ₂ Si ₂ O ₁₀

*No.5はTi-Pt、結晶内の元素はミクロ組成から推定される元素。

VI 遺構・遺物のまとめ

1 平 安 時 代

(1) 遺構

今回の調査では平安時代中期と考えられる「和田 a テフラ（以下、To-a テフラ）」に被覆された 2 地点の水田跡を検出した。

1 号水田跡は中央区北側の 31~37 区に位置する。4 区画から構成され、最も広い水田 1 が 13.4m 以上 × 10.4m の不整長方形、面積は残存値で 89m² である。次いで水田 2 が 15.0m 以上 × 10.2m の不整長方形で面積は残存値で 87.5m²、水田 4 が 6.6m 以上 × 1.9m 以上の楕円形と思われ、面積は残存値で 9.51 m²、水田 3 が 2.55m 以上 × 1.55m 以上の不整形で面積は残存値で 3.01m² である。

もう 1 地点の 2 号水田跡は南区中央南の 68~71 区に位置する。2 区画から構成され、水田 5 は 11.5 m 以上 × 8.4~9.8m で面積は残存値で 95.5m²、水田 6 は 2.3m 以上 × 7.0m 程度で面積は残存値で 21.5m² である。

耕作土の状況は灰色粘土主体であり、色調・土質とも共通している。

To-a テフラの被覆状況であるが、隣接する水田 1 と水田 2 では様相を異にする。水田 1 は細粒の灰白色が均一に堆積しているのに対し、水田 2 は粗粒の渦ったオリーブ黄色を呈する。また、水田 2 のセクション A・4 b 層は To-a テフラ一次堆積層が人為的に攪拌されたことを示しており、テフラ降下直後の泥化した状態の耕作面に踏み込まれたことで形成されたと考えられる。水田 2 の北端には水田面より 15~20cm 積み上げられたことを示す帯状に堆積する To-a テフラが確認されており、これらを総合すると To-a テフラ一次堆積時に降下した火山灰を人為的に寄せた復旧痕跡の可能性が考えられる。

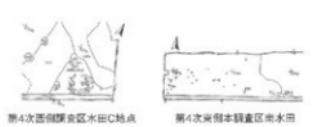
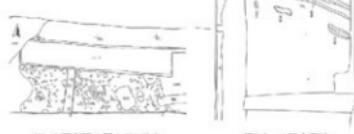
このような状況は隣接する水田 1 には観察されないことから、隣り合う区画の水田でも火山灰により埋没して放棄された水田 1、復旧を行ったものの再耕作には至らずにやむなく放棄された水田 2 とみることが出来る。このような復旧痕跡の事例は奥州市水沢区中半入遺跡（岩埋文 2002）や仙台市富沢遺跡（仙台市教委 1991）などで報告されており、To-a テフラ降下後も水田耕作が行われている（高木 2005）。

今回の調査で検出した水田跡は、いずれの区画も調査区内で完結するものではなく、区画全体の形状や面積を測ることはできない。しかし、1 号水田跡・2 号水田跡の立地を見ると、地形を大きく改変して水田域を形成したのではなく、元来自然流路である小河川が存在した低地に占地していることが分かる。

To-a テフラを被覆した水田跡は県内でこれまで、奥州市水沢区中半入遺跡（第 1・2・4 次調査）、奥州市水沢区常磐広町遺跡、奥州市江刺区岩谷堂柳沢Ⅱ遺跡、平泉町竜ヶ坂遺跡の 4 遺跡で確認されている（岩埋文 2002a・2004・2005b・2005c、伊藤 1990、平泉町教委 2003）。

水田区画はいずれも大畦（基軸畦畔）を持ち、方位を意識して区割りされた条里型土地割のようなものではなく、本遺跡と同様に地形に沿った立地となっている。区画の形状・規模は、常磐広町の東水田は 260m² 以上と広いが、大半は 1 辻が 10m 以下の小規模なものとなっている。形状も地形に合わせたものとなっているため、不整形となるものが多い。斎野は水田跡の構造と類型化を試みており（斎野 2005）、本遺跡を当てはめれば、開田地の設定方法である成立基盤はⅢ類の谷状の地形面 - 谷地

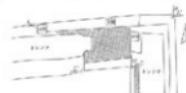
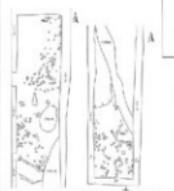
中半入塙跡



中村城跡



岩谷堂柳沢II遺跡

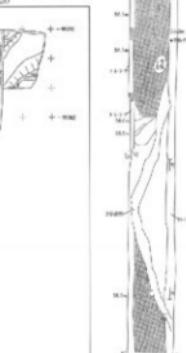


竜ヶ坂遺跡



S=1:400

S=1:330



S=1:400

第63図 十和田aテフラを被覆する水田跡（岩手県内の事例）

形あるいは自然堤防や後背湿地のなかの旧河道に立地し、水田形態はA類の水田区画が地形面の勾配に合わせて行われているものであると言える。

今回の調査から北区・1号堅穴住居跡や南区・2号堅穴住居跡などが水田の形成された位置より標高値の高い地点にあることを考えると、後背湿地の微高地（自然堤防上）には居住域、微高地の間を小河川（沢）が流れるような低地には水田などの生産域が形成されていたと考えられる。

(2) 遺 物

今回の調査で出土した土器は大コンテナ換算で11箱分である。このうち、計232点を掲載した。その大半は北区の1号河川跡北岸に形成された捨て場から出土しており、その他には北区1号堅穴住居跡、南区2号堅穴住居跡からもまとめて見つかっている。出土土器のほとんどが平安時代に属するもので須恵器・土師器（黒色処理・非黒色処理）があり、大半が土師器である。器種は、壺・高台付壺・鍔付土器・蓋・鉢・鍋・壺・瓶・甌・壺・人甌などである。下記の基準に従って分類を試みた。

第7表 出土土器分類表

種類	器種	成形方法	分類
土器群	壺	ロクロ	A 体部が直線的に立ち上がるものの B 体部が直線的に丸みを帯びるもの
	高台付壺	ロクロ	1 回転糸切り後、ヘラナフ・エスリ等調整 2 回転糸切り無調整
	鍔付土器	ロクロ	
	蓋	ロクロ	
	瓶	ロクロ	A 体部が直線的に立ち上がるものの B 体部が直線的に丸みを帯びるもの
	甌	ロクロ	1 回転糸切り後、ヘラナフ・エスリ等調整 2 回転糸切り無調整
	土師付壺	ロクロ	
	蓋	ロクロ	
	瓶	ロクロ	
	甌	ロクロ	
須恵器	壺	赤ロクロ	1 直線糸切り無調整 2 回転糸切り無調整
	蓋・瓶	ロクロ	
	甌	ロクロ	

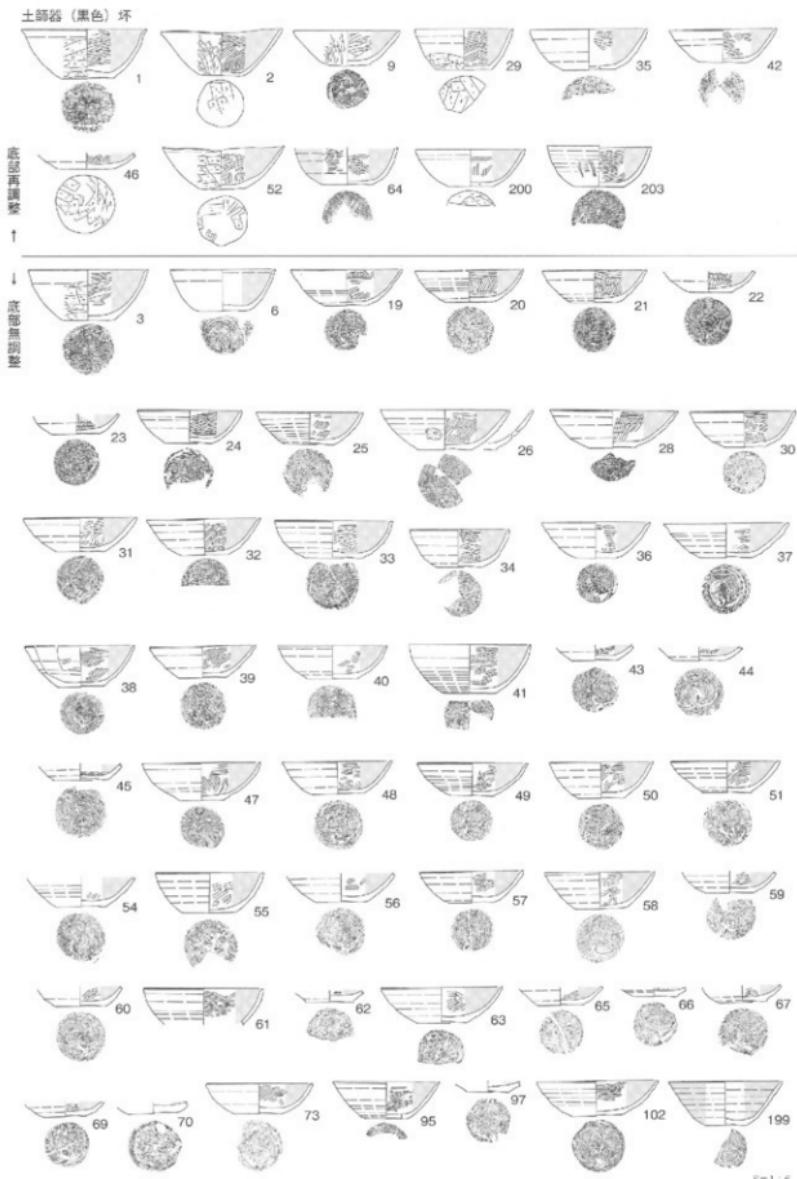
①須恵器

須恵器は計14点を掲載した。大半が1号河川跡捨て場からの出土であるが、1・2号水田跡などからも出土している。器種には壺・壺・甌・大甌がある。

壺は、体部が直線的に立ち上がるもの（A類）と体下半部に丸みを帯びるもの（B類）がある。A類は183・272、B類は182・234・249などが該当する。大半は2類：回転糸切り無調整であるが、272は唯・1類：回転ヘラ切りが認められる。

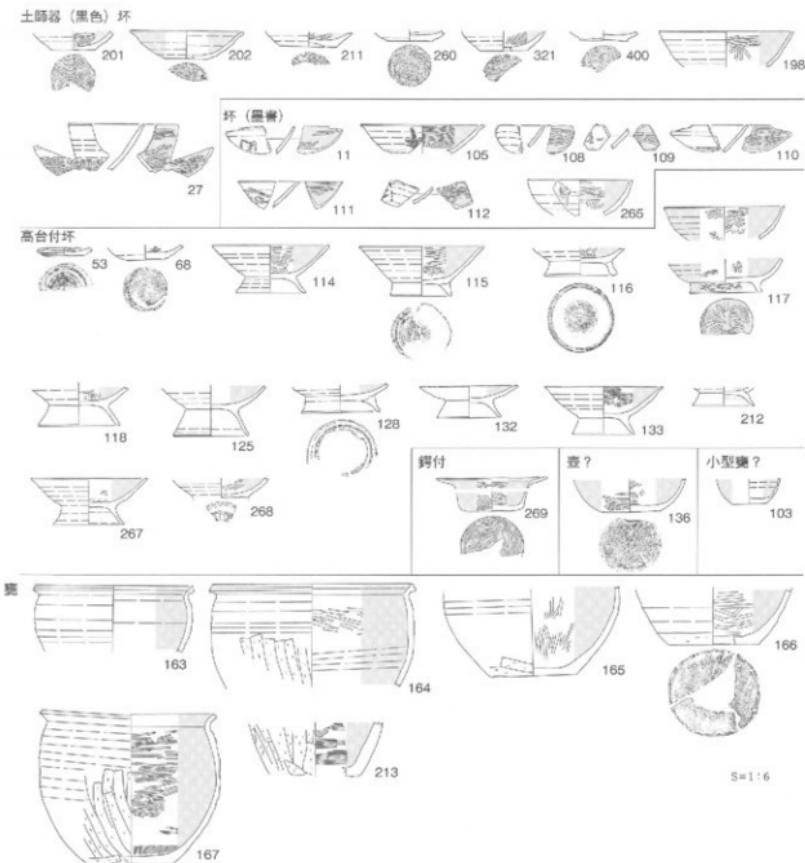
壺は184～187・204・255がある。いずれもロクロによる成形であるが、184～187・255の体部上半の内外面には輪積み痕が観察される。体部最大径から徐々に窄まる肩部に認められることから、ロクロで成形した下半部に輪積みを積み上げながらロクロで引き上げ、成形したものと考えられる。多くの場合、体下半部には外側に縦位ケズリ調整、内側に縦位ハケメが施されるが、上半部は無調整である。

大甌は、189・323などである。全形を把握することは出土資料からは困難であるが、最大径が体上半部にあるものと思われる。いずれも頸部が締まり、外反した口端部の上下端がつまみ上げられ、直立している。体部には外側タタキメ+内面当て具の痕跡が残っており、189には頸部にもタタキメが認められる。また、323の頸部には棒状工具にて鋸歯状文が横位に2条描かれている。



S=1・6

第64図 土器集成図（1）



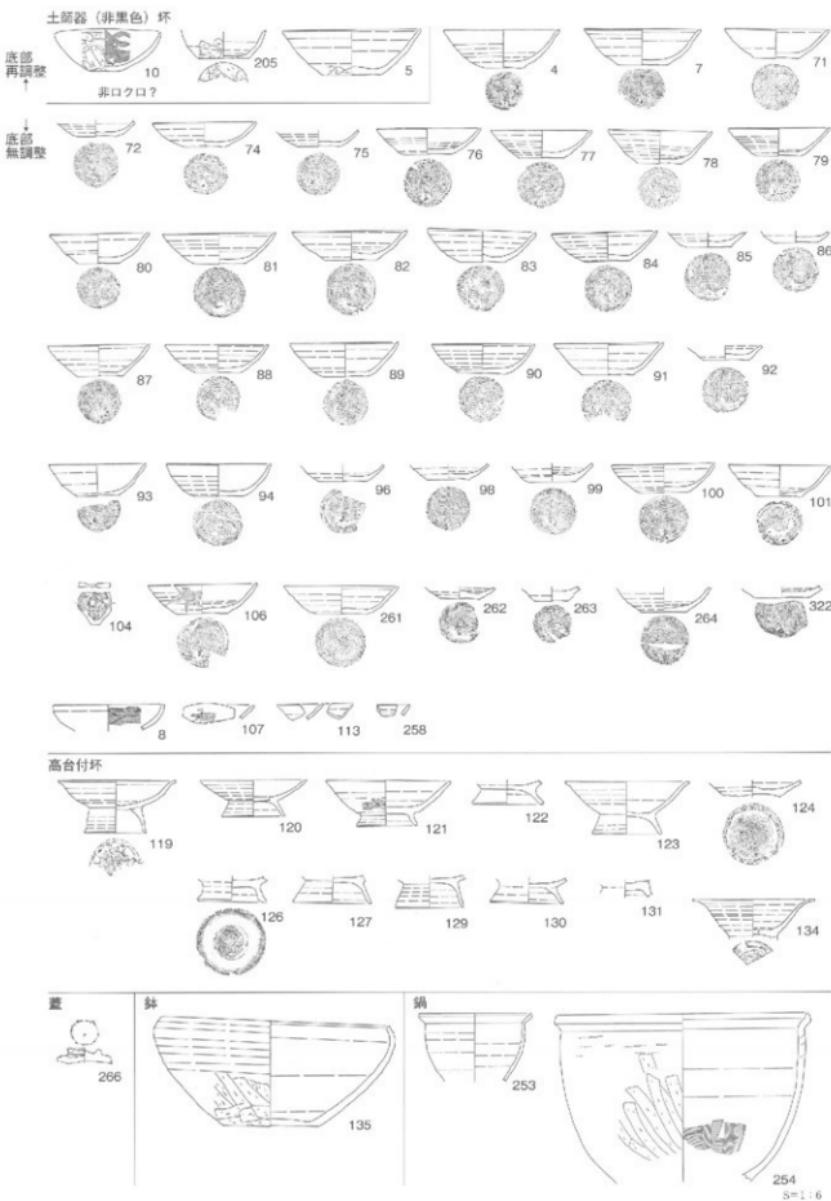
第65図 土器集成図（2）

②土師器（黒色処理）

土師器（黒色処理）は計100点を掲載した。これも大半が1号河川跡捨て場からの出土であるが、1号堅穴住居跡や1・2号水田跡などからも出土している。器種には坯・高台付坯・鉢付土器・壺・甕がある。

坯はすべてロクロ成形と思われる。体部が直線的に立ち上がるもの（A類）と体下半部に丸みを帯びるもの（B類）がある。A類は51・60・199などのみと少なく、B類が主体的である。また大半が回転糸切り無調整（2類）であるが、回転糸切り後にヘラナデ・ヘラケズリ再調整が行われる1・2・9・29・35・42・46・52・64・200・203などがある。なお、2・9・52は全体に器形が歪んでおり、非ロクロ成形とも思われるが判然としない。また、11・105・108~112・203・265の外側にはそれぞ

1 平安時代

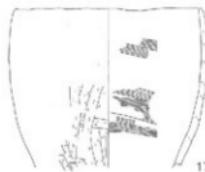


第66図 土器集成図（3）

土師器（非黒色）甕



137



17



12



13

甕A 非口クロ



232



142



252



161



162



16



14



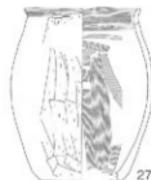
233



173

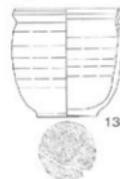


174



270

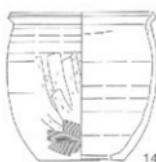
甕B ロクロ



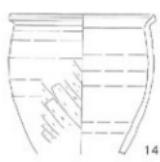
138



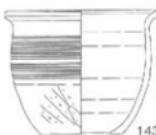
139



140



141



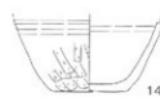
143



144



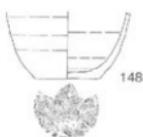
145



146



147



148

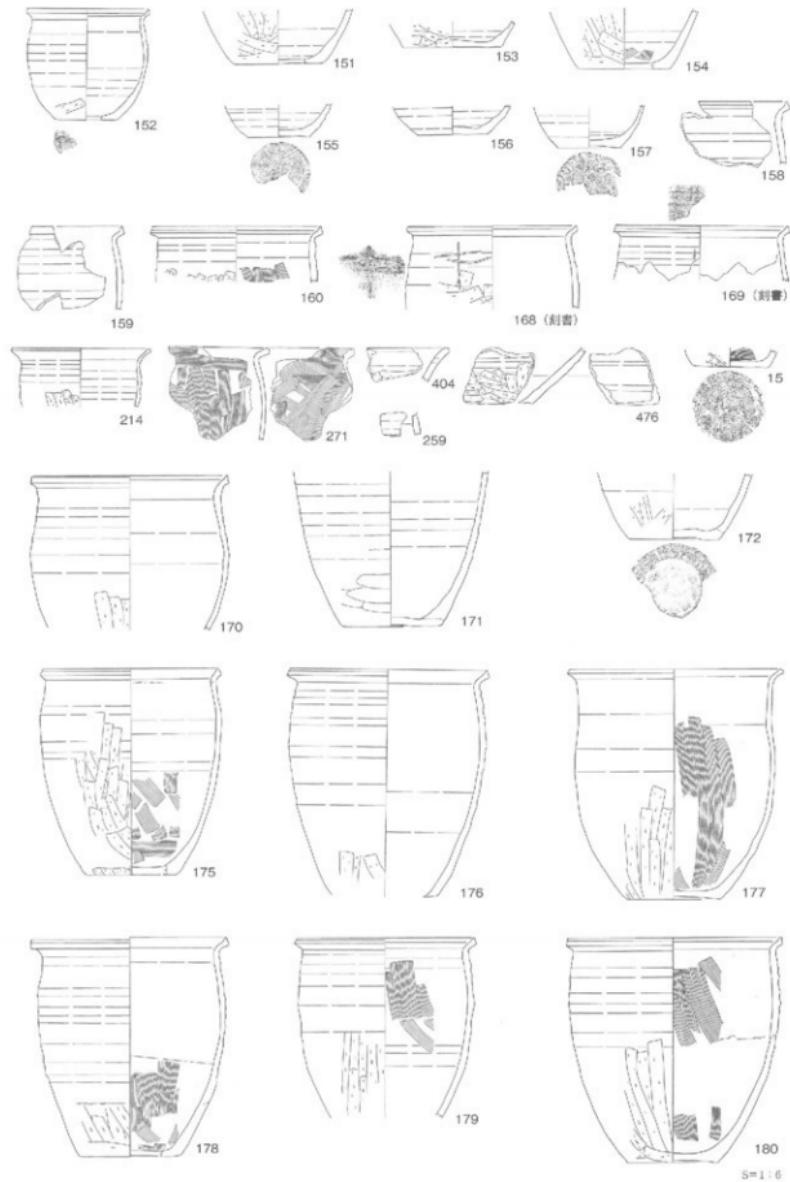


149



S=1:6

第67図 土器集成図（4）

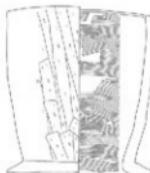


第68図 土器集成図（5）

土器器 較



18



181

須恵器 壱



182



183



234

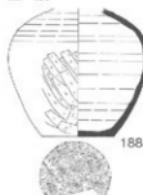


249

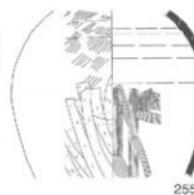


272

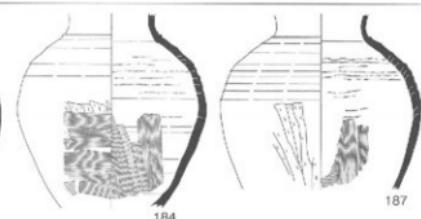
壺・瓶



188



255



184

187

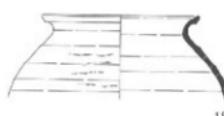
壺



185



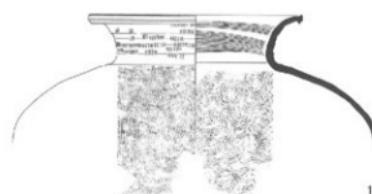
204



186



323



189

S=1:6

第69図 土器集成図（6）

れ文字が墨書きされており、11「間」・109「十カ」・112「間カ」などが読み取れる。

高台付壺はすべてロクロ成形後に高台を接合している。115や132・267などは体部が直線的に立ち上がるものであるが、その他は体下半に丸みを帯びている。117は内外面とも黒色処理・ミガキ調整が施されている。高台を接合する方法は、①回転糸切りした壺底面にヘラなどの先端でロクロを用いた切り込みを入れ接合する、②接合部分を周囲より若干突出させて被せるように接合するの2種類が認められる。いずれの際も接合後はロクロ整形によるもの（115・116）と指またはヘラ押さえによるもの（268）がある。

鉢付土器は269の1点のみ出土した。口縁部と体～底部は接点がなく、器高は不明であるが同一個体であると判断した。内外面ともに黒色処理・ミガキ調整が施されており、精緻な作りになっている。底から体部にかけてはほぼ垂直に立ち上がるが、口縁からは鋭角に外反する。器厚から見れば、器高はそれほどないと思われる。2号水田跡などから出土している。

壺は136の1点のみ出土した。壺と認定する器形は下半部しか残存しないが、外面にミガキ調整と内面黒色処理、体下半部に大きく丸みを帯びる点から、壺などとは異なる器種と判断した。

甕はすべてロクロ成形で、体上半～中央部に最大径を持つ器形である。器高は残存した部位及び全形の把握できる167から20cm前後と見られる。103は内外面黒色処理で、小型甕と思われる。外面は多くの場合、体下半部に縦位ヘラケズリ調整が認められ、166のようにロクロを用いた回転ヘラケズリ調整も観察される。内面は大半が黒色処理・ヘラミガキ調整が施される。

③土師器（非黒色処理）

土師器（非黒色処理）は計116点を掲載した。大半が1号河川跡捨て場からの出土である。その他に北区1号竪穴住居跡や南区2号整穴住居跡、1・2号水田跡などからも出土している。器種は壺・高台付壺・蓋・鉢・鉢・鍋・甕がある。

壺は大方ロクロ成形と思われるが、10は器形に歪みがあり、非ロクロ成形の可能性がある。器形には体部が直線的に立ち上がるもの（A類）と体下半部に丸みを帯びるもの（B類）がある。A類は78・87・91などと少なく、B類が主体を占める。また大半が回転糸切り無調整（2類）であるが、5・10・205のようにヘラケズリ再調整（1類）が行われるものもある。また、106・107・113の外面にはそれぞれ文字が墨書きされており、106・107「有」が認められる。

高台付壺はすべてロクロ成形であり、成形後に高台を接合している。壺と同様の器形で、口端が緩やかに外傾するものが多いと思われるが、134のように口端が鋭角に外反するもの（B類）が認められる。土師器（黒色処理）の高台付壺と同様に高台を接合する方法に特徴があり、前述の②が134に見られ、また119のような③接合部分に指状工具による刺突を加えて接地面を広くする工夫がされている。接合後はロクロ整形により馴染ませているものが多い（123・124・126）。

蓋は266の1点のみ出土した。ロクロ成形されており、中央に円錐状の突起が残存する。

鉢は135の1点のみ出土した。体上半部に最大径を持ち、口縁は緩やかに内傾する。体下半部はヘラケズリ調整がなされており、底面に至っては丁寧にヘラナデ調整が行われている。

鍋は253・254の2点認められる。甕形土器よりも口径が大きく、器高が小さい。254は器形が大きく、口径は推定値で31.1cm、器高は31.8cmある。外面の体下半部には縦位ヘラケズリ調整が見られる。体上半部には輪積み痕が認められ、粘土紐を積み上げながらロクロで引き上げたと考えられる。

甕は非ロクロ成形（A類）とロクロ成形（B類）がある。非ロクロ成形と思われるものは12点あり、大半が外面縦位のヘラケズリ調整、内面が横位ハケメまたはヘラナデ調整が施される。口縁はヨコナデ調整されている。頭部に括れを持ち緩やかに外反するもの（1類）が多く、17・137のように頭部に括れを持たず、口縁部が内傾するもの（2類）は限られる。137・233の底部には木葉痕が確認される。ロクロ成形と思われるものは計40点ある。こちらも大半に外面体下半にヘラケズリ調整、内面にハケメまたはヘラナデ調整が施される。143の外面体上半部にはカキメが認められる。口縁上端がつまみ上げられるもの（1類）として138～141・160・169・170・176・178～180、口縁上端が緩やかに外反するものとして143・152・159・214・177などが挙げられる。168・169の外面体上半部には焼成以前に描かれたと思われる刻書が観察される。

瓶は18・181の2点が認められる。いずれも単孔で、甕などからの転用ではなく予め目的を持って製作されたと考えられる。いずれも非クロコ成形と思われ、18には輪積み痕が顕著に観察される。どちらも外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナダ調整が施されており、器高も20cm前後と近い。18内面下半には外面に貫通しない孔が3ヶ所認められ、枝などを支える工夫がなされている。

今回の資料の大半は1号河川跡捨て場から出土したもので、一部にTo-aテフラを含んでいるものの河川の流入と市堆積により混在した状況である。従って、層位的事実を基にした分類は困難である。この状況を踏まえて、本遺跡出土資料を宮城県多賀城周辺出土資料と対比して大まかな位置付けを行う（多賀城研1991・1992・1998、岩埋文414・464集）。主な遺構の器種組成は以下の通りである。

1号堅穴住居跡から出土した土器は、土師器（黒色）壺7点、土師器（非黒色）壺4点、土師器瓶1点、土師器（非黒色）甕6点で、土師器（非黒色）壺1点・土師器瓶1点・土師器（非黒色）甕1点が非クロコ成形である。このうち、土師器壺について観察すると、土師器（黒色）壺4点、土師器（非黒色）壺2点は体～底部に手持ちヘラケズリ再調整が施され、回転糸切り無調整とは約半分である。器種組成及び器形から多賀城跡SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器と類似し、非クロコの壺・甕も含むことから、SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器よりも古い9世紀前葉、「多賀城跡B群土器」相当に位置付けられる（多賀城研 1980・1991・1992）。2号堅穴住居跡については形態変化が特徴的な壺が出土していないが、同時期に含まれると思われる。

1号河川跡捨て場から出土した土器は、土師器（黒色）壺62点、土師器（非黒色）壺30点、土師器（黒色）高台付壺11点、土師器（非黒色）高台付壺12点、土師器鉢1点、土師器甕1点、土師器（黒色）甕6点、土師器（非黒色）甕39点、土師器瓶1点、須恵器壺2点、須恵器甕1点、須恵器大甕1点である。土師器（黒色）壺3点の体～底部に手持ちヘラケズリ再調整が施され、回転糸切り無調整が主体的である。また、須恵器壺1点が回転ヘラ切りされる。上述したように混在しているため一概には言えないが、大半の土器は多賀城跡第61次鴻の池地区第10層出土土器群のように須恵系土器壺を伴出せず、黒色処理されたものが多い。また、ロクロ成形が多いことからもSE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器よりも新しく位置付けられる9世紀中～後葉頃、「多賀城跡C～D群土器」相当の範疇に収まるものであると考えられる（多賀城研1980）。その他もこの前後に捉えられる。ただし、高台付壺の形態が中半入遺跡第2次S D16溝跡から出土したものに高台部の形状・高さが類似することから、該期遺構年代の10世紀初頭～中葉代も含まれると考えられる（岩埋文2004）。

これらから、本遺跡の出土土器群は既存の研究から9世紀前半～9世紀後半、10世紀前半に位置付けられると考えられる。

2 中世

(1) 遺構

①中村城跡の縄張りと存続時期

今回の調査では、中世と考えられる堀跡、溝跡、橋跡、柵状遺構、土坑が確認された。

『仙台領古城書上』によると中村城は須崎館とも称され、「中村城 二十四間 二十三間 城主千葉相模」と記されている。また、「風土記」にも「須崎館 東西廿四間 南北廿三間 右城主葛西御家臣千葉相模」と同様の記述が認められる。

今回の調査区が所在する一関市花泉町老松字寺田は昭和30年代に大規模な廻場整備が行われ、旧地形は完全に失われている。このため、現況から中世城館であることを確認することは出来ない。しか

し、近隣の方のお話では調査区のほぼ中央北側は周りより一段高い丘のようになっていたとのことである。

これを裏付ける資料として、元禄十六年（1703年）に描かれた流中村絵図（写図3）と昭和22年（1947年）に米極東空軍によって撮影された航空写真（写図5）がある。流中村絵図は元禄十年（1697年）に仙台藩が幕府から命じられ、絵図元となって行われた陸奥国国絵図の調査作成過程の中で作られた郡絵図の一枚と思われ、絵図役人生江助内らによって描かれたものと考えられる（岩手日日新聞社2003）。中央には北西から南東に向かって蛇行しながら金流川が流れおり、河川流域一帯には水田が描かれている。金流川の北東側、絵図中央の東端が島状に高くなっている。この箇所に「館」を示されている箇所が中村城であると考えられる。この状況を写図5の航空写真で確認すると、写真中央が周りより小高くなっている、木が繁茂していることが分かる。写真下側には金流川があるが、この北側に蛇行する旧河川が確認され、おそらく旧金流川であると考えられる。この2点から、中村城（須崎館）と考えられる中世城館が存在したことを確認した。

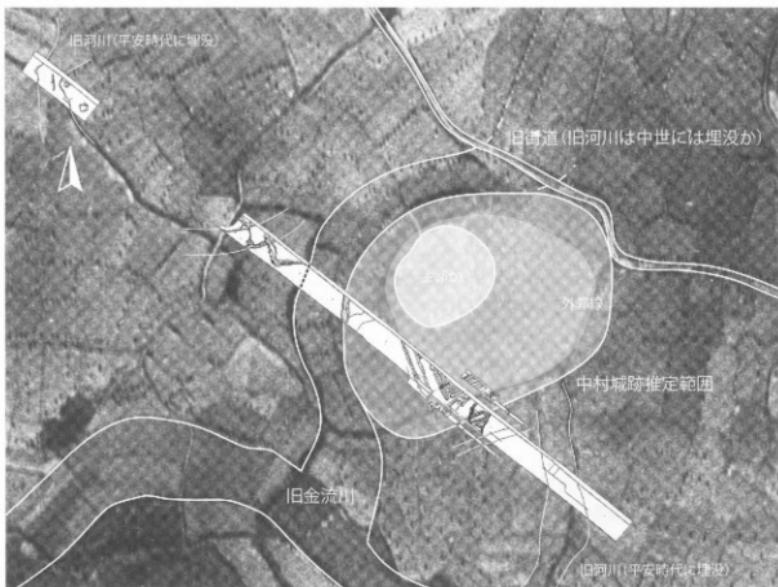
現況から縄張り図を作成することは困難であるため、より旧地形を確認できる昭和22（1947）年撮影の米軍写真に今回の調査区を嵌め込み想定図を作成した（第70図）。南の外郭線を6・7号溝跡とし、北から西にかけては旧金流川まで、東は旧街道までを想定範囲とした。主郭は最も小高い箇所を想定し、1・2号堀の内部に開まれる構造となる。3～7号堀は南側の防御のために構築されたと考えられる。東にも何らかの施設か自然地形による防御がなされていたと思われるが、近世には街道が北西から南東にかけて走っており存在しない。伝えられる「東西廿四間 南北廿三間（東西43.6m×南北41.8m）」は、主郭と考えられる範囲のみを示したものと考えられる。

今回の調査区は推定される縄張り範囲の両西部分を調査したと考えられる。城館の主体部は調査区北に存在すると考えられるが、調査区からは外郭部分と思われる堀跡や溝跡のみが検出された。遺構同士の重複関係ではなく、状況からは中世と考えられる遺構群は同時存在していたと想定される。

城館としての存続時期は、遺構内出土の中世遺物とC14AMS年代から推定される。1号堀跡からは堆積土中位から328板磚1点が出土しており、延文五（1360）年の銘が刻まれている。堆積土下位からは銭貨25枚が固着した状態で出土しており、最も初鋤年が新しい永楽通寶が1408年である。2号堀跡の橋脚部材である311のC14AMS年代は1391AD-1443AD（2σ）である。2号堀跡下位砂層から出土した385漆器椀のC14AMS年代は1271AD-1320AD（2σ）、384志野産陶器皿は16世紀後半～17世紀初頭、3号堀跡堆積土上～中位出土の396加工杭のC14AMS年代は1448AD-1527AD（2σ）、5号堀跡検出面出土の405志野産陶器皿は16世紀後半～17世紀初頭、堆積土上位出土の406中国産青磁碗は13世紀中葉～14世紀前半である。6号溝跡堆積土上位出土の中国産染付小皿は15世紀後半～16世紀代、1号樹状遺構の骨組部材である286はC14AMS年代で1340AD-1397AD（2σ）である。

遺構の廃絶についてであるが、1～7号堀跡の断面にはいずれも水成堆積した状況が認められる。1号堀跡は2層以下、2号堀跡は2a層以下、3・4号堀跡は1層以下、5号堀跡は7層以下、6号堀跡は2層以下、7号堀跡は3層以下にはほぼ同じ堆積状況が観察され、水成堆積後は人為的に一括土で埋め戻されている。このように大規模な水成堆積はおそらく金流川の氾濫による洪水堆積と推定される。この洪水後まもなく、人為的な埋め立てが行われ廃絶したものと考えられる。

これらの中世に係わる出土遺物と各遺構の堆積状況から、城館として機能していた時期幅は13世紀中葉～17世紀初頭までと捉えられる。その中でも15世紀半ば～16世紀代が中心時期と考えられる。



第70図 中村城跡の想定図

②橋跡

今回の調査では2箇所の橋跡を確認している。1号橋跡は2号堀跡に架かる土橋として検出した。規模は長さ3.4m、幅65~80cmである。橋の幅としてはやや狭いが、人一人通行するには十分である。西側は隣接箇所が浅く、この部分までを橋と捉えれば、幅2.68~3.60mと広くなる。

2号橋跡は1号堀跡に架かる等間隔に並ぶ柱列として検出した。規模は1×2間で、桁行2丈(606cm)×梁行1丈5尺(454.5cm)である。また、堀側壁部分には9.3尺(281.8cm)間隔の補助的な柱も確認している。

2号橋跡のような木橋の出土例は非常に少なく、残存することは稀である。奈良~中世・近世の集落遺跡である福島県郡山市荒井鶴田遺跡では、河川跡の流路方向にはほぼ直交する2列の杭列として検出している(郡山市教委 2001)。杭の内、①~③・⑥・⑧は他と比較して際立って高く、等間隔に列状配置している。残存する規模は、①長さ105cm・直径10cm、②長さ65cm・直径7cm、③長さ75cm・直径8cm、⑥長さ87cm・直径10cm、⑧長さ84cm・直径10cmを測る。いずれも丸材で、先端のみを鋭角に加工している。間尺は記載ないが、1×1間で5.1尺(155cm)×4.1尺(125cm)ほどである(報告書から計測)。年代については、概ね中世に属するとされている。

本遺跡の2号橋跡を比べると、橋脚である主柱として用いた6本はいずれも長さ2m前後あり、側壁にも補助杭を打ち、補強も行っている。柱についても大半に全面に及ぶ面取加工を施し、先端を鋭く尖らせている。柱は1m前後地中に打ち込まれていた。本遺構は間尺が大きいことから、上部構造である橋桁部分の重量を支えるのを見越して設置したものと考えられる。

③柵状造構

本遺構は5・6号堀跡に跨って構築された遺構である。

遺構の構造は、丸太材・心持材・割材を立杭や横木として組み合わせて骨組みとし、約60度傾斜を持たせて折断痕が明瞭に確認される樹皮が付いたままの木枝を縦に並べ敷き詰めている。

このような構造を持つ例としては、主に河川跡に検出されるしがらみ状遺構・柵状遺構・堰跡がある。埼玉県熊谷市北島遺跡では弥生時代中期から近世に至るまでの遺構・遺物が検出されており、第19地点からしがらみ状遺構・堰跡・護岸跡がまとまって検出された（崎塙調 2005）。第2号堰跡は中央水路に築かれた3つの堰跡の中央に位置し、5世紀後半を上限とする時期まで使用された。遺構は垂直に杭が打たれたA列とB列に横木を渡し、支えとなる細い杭を等間隔に設置している。愛知県瀬戸市古野遺跡では自然流路に伴って柵状遺構が確認された（愛埋文 2004）。自然流路（NR01）伴う柵は芯持ちの丸太や板状で立杭や横木として482本を組み合わせた構造となっている。柵は太い横木を流れを遮るように設置し、その両側に芯持ちの立て杭を打ち込み動かないよう横木を固定し、固定した杭より長い立杭を打ち込み柵を作っている。大阪府八尾市久宝寺遺跡でも流路に構築された堰が検出されている（大文セ 2007）。05423堰は流路中央付近に川幅一杯の全長約21.5m見つかっており、流向に対して斜交に設置され、05418溝への給水用施設という性格を持つ。時期は弥生時代末～古墳時代初頭である。

上記の通り、しがらみ状遺構・柵状遺構・堰跡などは河川に設置され、主に水量調節や水流調節、木枝除去の目的で使用される。これに対し、今回の調査で検出された1号柵状遺構は2つの堀に跨って構築されている。5号堀跡は調査区内で完結せず不明であるが、6号堀跡は本遺構から南に約8mで途切れていますため、水流調節や漁労のための梁（やな）などは考えにくい。堀内部は地下水位が高く、底面には常に水が張っている状態であること、柵を北側に向けて傾斜させていることから、5・6号堀跡の1号柵状遺構より南側の水量を調節するためと考えられる。また、2号堀跡に架かる1号橋跡（土橋）にも近い位置にあることから、堀を開仕切る防御的な性格を有していた可能性もある。

（2）遺 物

①板碑

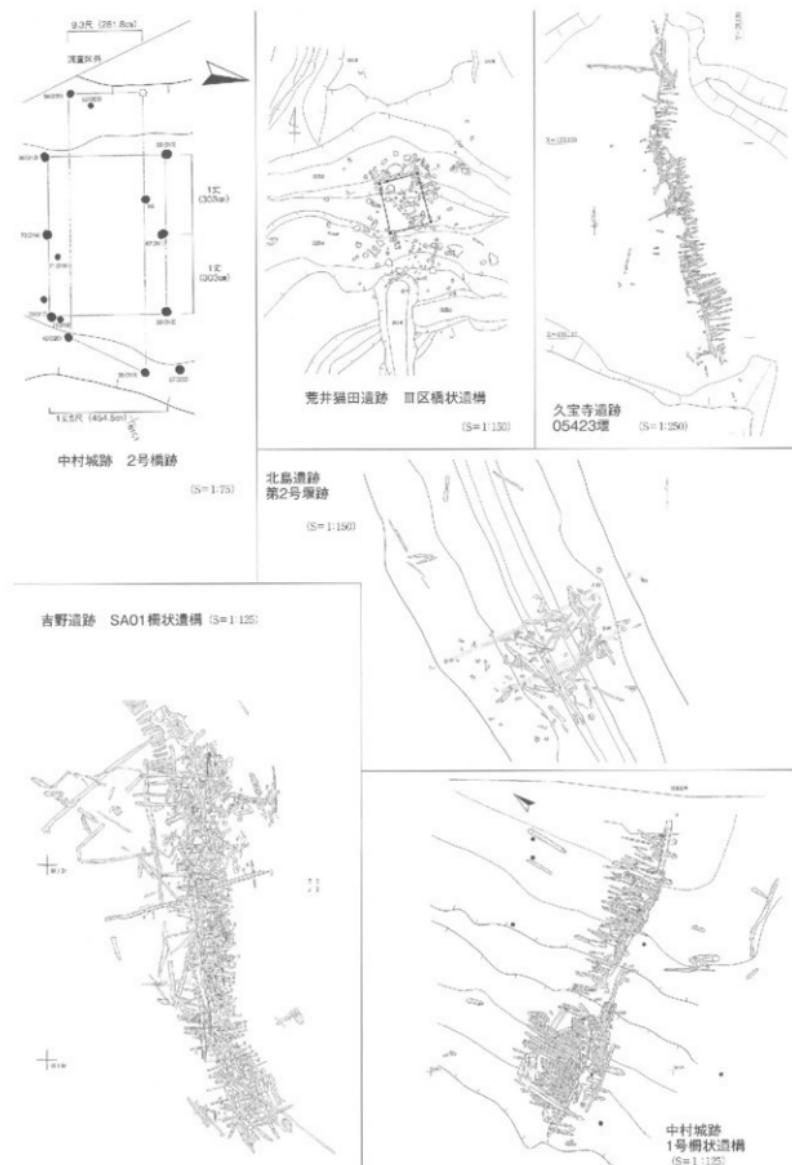
328・329は板碑である。

岩手県内で確認されている板碑については1,098基とされている（司東真雄1985）（注：1）。県内の板碑の分布状況は、第73図の通り岩手県南地域に集中し、旧花泉町内にかぎってみると、382基もの板碑が確認されている。また、岩手県内の板碑の概要・研究歴史は、「千厩町史第一巻」に詳しい。

328は、1号堀跡トレンチ内の堆積土上位から出土した。全体的に風化が進んでおらず鮮明である。縦14cm、幅13cm、厚さ11cm、重さ886gで、石質は岩手県南・宮城県石巻地域の板碑に主に使われる粘板岩である。旧花泉町内の板碑の多くは粘板岩製で、付近から素材となる岩石を採取し使用したと考えられる。色調は、青灰で、頭部と基部を欠損している断碑であるが、種子・紀年・額文が刻まれている部分は残っている。

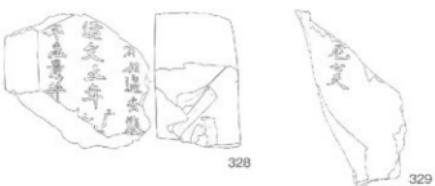
武藏型板碑（注：2）のように、板碑は、そもそも板状に薄く作られるが旧花泉町周辺の板碑は、自然石に近い形で使用されている。しかし、328は周辺でみられる自然石に近いものではない。人為的に成形され厚みのあるもので、形状は、切り口が平行四辺形の角柱で、それには深くしっかりとした鉢が薬研彫りで刻まれており、その銘は第72図の通りである。

紀年は、延文5年（1360年）で、一関市花泉町では22番目に古いものとなりそうである。岩手県最



第71図 橋跡・柵状遺構の類例

年
忌
景
并
子
善
延
文
五
年
庚
提



第72図 出土板碑

古のものは、川崎村門崎にある建長8年（1256年）で、町内では、老松にある乾元2年（1304年）である。ちなみに、国内の最古は埼玉県熊谷市にある嘉禄3年（1227）である。

願文は、右志者（みぎこころざし）で始まることが一般的で、何々為と省略されることもあるが、これには「者」が確認できるため、「(右志) 者為過去悲（母）」と彫られていたと思われる。父の供養の場合は「慈父」、母の供養の場合は「悲母」と表現されるのが通例で、この板碑は、母の追善供養のために造立されたことがわかる。

3列の願文の間に見られる縦2条の線刻は、願文を刻む時のレイアウトを考える下書きのようなものと思われる。

偽頃は無く、供養者は確認できない。

種子は、願文が書かれた部分を正面とするならば、正面の部分の種子は欠損しているものの、この板碑には右側面に種子が彫られている。種子は「カ」で、地蔵菩薩をあらわしており、地蔵菩薩は、十三仏の五七日忌にあたる。一関市花泉町内の板碑は、そのほとんどが一つの碑に一つの種子という一碑一尊の形式をとっている。本來種子は、仏（本尊）を現し板碑造立の趣旨を含む祈願本尊である。つまり328の板碑の場合、種子を側面に彫ったのではないかという見方でもできるが、仏である本尊を側面に彫ることは考え難い。また、正面の紀年銘等が彫られている位置より側面の種子が下に位置しているのが不釣り合いの様に感じる。

この328の板碑のように、正面と片面を利用している板碑の型式は、岩手県内や宮城県内さらに、全国的にも類例がなく、正面と裏



第73図 岩手県内の板碑分布図

に書かれた板碑や、三面碑（注：3）といわれる型式の板碑は全国的に数例あるが、この板碑はそれらに属さないと思われる。

時期差は不明であるが、一度作られたものの、何らかの理由で側面を利用し再び板碑として役目を任された転用板碑の可能性も考えられる。

329は、1号塚跡の東岸検出面直下で出土した。縦21cm、幅9.5cm、厚さ5cm、重さ306g石質は、粘板岩である。色調は、にぶい赤褐色で、上半をほとんど欠損しており、種子・紀年等は不明である。葉研磨で頸文の一部とみられる「…尼七天」の文字が残存している。（佐藤）

注：1 藤沢町では、2002年に町内の板碑を調査し報告書にまとめているが、その中で新たに102基を確認したとあるし、司東氏の調査後も県内で新資料として板碑報告がされてきている。しかしながら、それらと相反し司東氏が『岩手の石塔婆』で示した板碑が亡失されているのも少なくない状況である。

本稿では、司東氏が『岩手の石塔婆』で記載した总数に準じた。

注：2 武藏型板碑の特徴は、関東地方に多く分布されており、石材が秩父地方産の青石（緑泥片岩）で、頭部が三角形、2本の脚（二条線）、種子・蓋で仏を現すものが多く、現在まで約4万基が知られている。

注：3 三面板碑は、県内では藤沢町黄海鐵治屋敷に、元治3年（1863）のもので1基所在する。

②木製品

今回の調査では計68点の木製品と橋脚部材を含む柱杭類（計74点を掲載）が多量に出土した。

木製品の大半は中世と考えられる遺構から出土しており、年代測定結果からも裏付けられている。器種は服飾具（下駄）、容器（挽物・削物・円形曲物・籠物）、籠編物・食事具（杓子形木器・匙）、部材・用途不明品である。

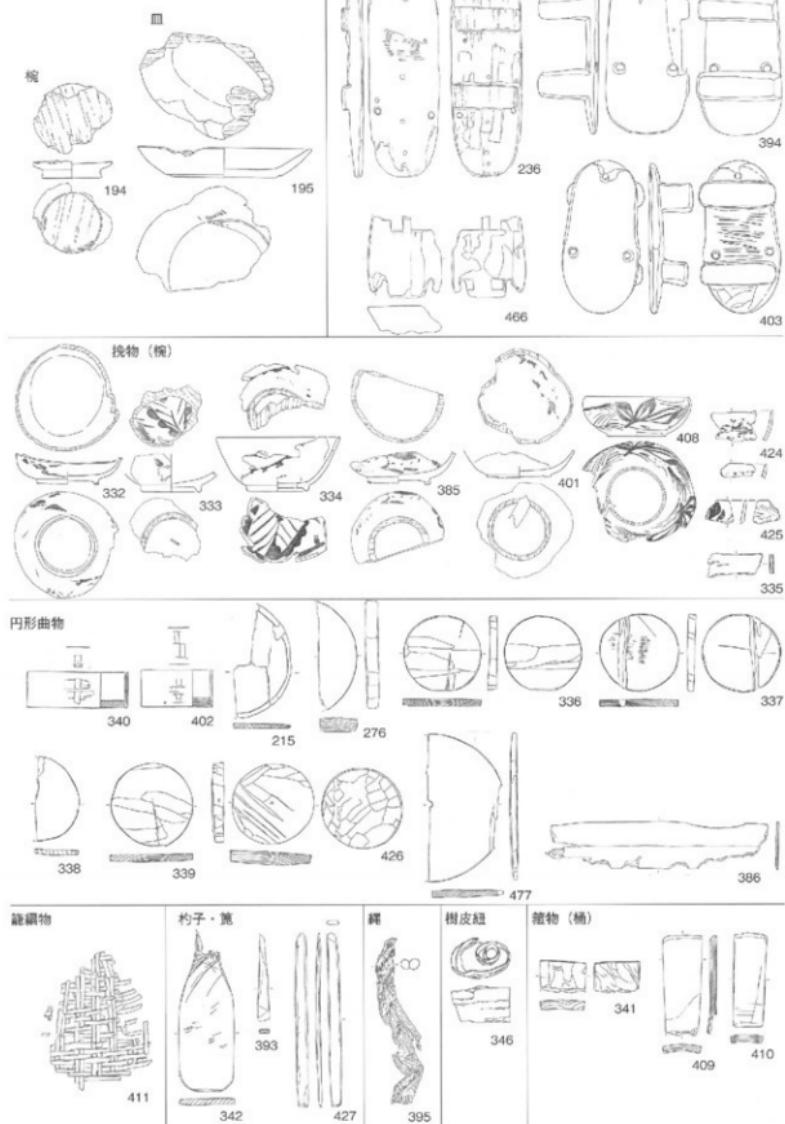
下駄は4点出土しており、連歛下駄が3点と差歛下駄が1点出土している。236の連歛下駄が26.2cmと長く、394・403の連歛下駄は20cm前後である。466の差歛下駄は年代測定から1455AD-1635AD（2σ）の数値が得られている。

挽物の椀は9点出土しており、すべて漆塗りが施されている。漆は332・385・408は内面朱漆、その他は内外面に黒漆が塗布されており、薄れているが朱漆で植物の絵柄が施されている。全形を推定できるのは334と408のみであるが、底径が7.4~7.9cmに集中していることからもほぼ同じ大きさに製作されたものと思われる。形状は408のみが口縁が内傾するもので、その他は緩やかに立ち上がるものと考えられる。333の外底面には成形する際に使用したロクロ挽き痕跡が確認される。385は年代測定から1271AD-1391AD（2σ）の数値が得られている。

円形曲物は11点出土しており、多くは蓋板もしくは底板のみである。340及び402は側板とセットの状態で出土したが、取り上げ時に外れてしまい、整理において復元した。側板は檍皮で縫じられている。386は側板のみである。336~339・402・426はほぼ同じ寸法であり、直径10cm前後に集中する。340は（12.8）cm、276は（13.8）cmとやや大きい。底板の大半は打ち込み式であり、板の側面に若干傾斜が付けられているのに対して、215のようにしゃくり底になっていて側板を嵌め込む形状もある。打ち込み式の底板は底が抜けないようにタケ製の木釘で數々所押さえられることが多い。426には中央にロクロ挽き使用時の痕跡が認められる。477は中央に予め孔が空けられており、紐などを通して蓋として使用したと考えられる。

籠物は3点出土しており、いずれも側板のみである。桶と思われるが、深さは不明である。この他に籠編物、杓子、箋、繩などが出土している。また、用途不明品として加工板が多く出土しているが、指物など何らかの製品の一部を構成していたと考えられる。削物の2点については平安期の捨て場である1号河川跡北西岸から出土した。194は椀、195は皿と思われる。194は白木作りと思われるのに

削物・平安時代



第74図 木製品集成図

対し、195は内外面に漆を塗布している可能性がある。

部材は橋脚部材、加工杭、加工材に分けた。加工杭及び加工材は概ね長さ1mを区分基準とする。橋脚部材はすべて2号橋跡を構成するもので、全面に面取り加工を施し先端を尖らせている。年代測定において、311は1391AD-1443AD（2σ）、314は1406AD-1449AD（2σ）の数値が得られている。加工材は主に1号橋状遺構の骨格に使用されていたもので、長さ2m前後に集中する。表皮はなく、全面に面取り加工しているものと先端のみを尖らせているものがある。年代測定で、286は1340AD-1397AD（2σ）、299は伐採年代で1408AD-1447ADの数値が得られている。加工杭はその他となるが、多くは伐採した枝木の先端のみを鋭く加工し尖らせたもので、表皮は残存している状態である。加工にはいざれも鋭い刃物が用いられていると考えられ、斧や鉈、手斧などの工具が想定される。

木質遺物は酸性土壤中では残存することは稀で、本遺跡のように地下水位の高い土壤中でないと出土しない。県内で中世の木製品がまとまって出土している事例として一戸城跡（15～17世紀）が挙げられる。1980（昭和55）年調査ではSH01・SH04堀跡を中心に下駄（差歎下駄・連歎下駄）、漆器椀・漆器皿・箆状木製品・棒状木製品（錐柄）、製作台・曲物・折敷・台形加工板・板材・刀形木製品・削りかすなどが出土している。

樹種は差歎下駄の場合、台部がホオノキであるのに対し、歯部はキハダやケヤキが用いられている。連歎下駄にはマツ・ケヤキを選択している。本遺跡出土の差歎下駄は台部のみでモクレン属製、連歎下駄はスギ類似種・スギ製と材質は一致しない。曲物は側板にネズコ・スギ、底板にアスナロ・スギを用いており、本遺跡の側板にアスナロ、底板（蓋か）にアスナロ・スギ・クリなど針葉樹質の木材を多用することは共通している。漆器椀・皿はブナ・ケヤキであるのに対し、本遺跡はいざれもブナ属である。

また、下駄は長さが21～22cmに集中する傾向が見られ、本遺跡出土394・403とほぼ同サイズである。漆器椀（20）は口径14.4cm・器高8.0cm・底径8.0cmとこれも本遺跡出土漆器椀とほぼ同サイズである。漆器椀は2001（平成13）年調査でも1点確認されており、黒色漆と赤色漆の分析を行っている（一戸町教委2003）。

漆器椀は金ヶ崎町松木館跡からも4点確認されており（岩垣文1996）、樹種はブナ属の一種・ケヤキが同定されている。口径は14.0cm・（15.4）cm、底径は（6.6）～（7.7）cmと本遺跡出土のものに近い。また、花巻市筒間館跡からも3点出土しており、草花文（かたばみ文？）が描かれ、大きさ、形状も類似する（岩垣文1988）。

3 総 括

今回の調査で検出した遺構は、平安時代の堅穴住居跡2棟・土坑1基・ピット1個・水田跡2地点・溝跡2条、平安時代または平安時代～近世・近代の河川跡6ヵ所（うち1ヵ所に土器捨て場）、平安時代以降の溝跡2条、中世の堀跡7条・橋跡2基・溝跡3条・土坑1基・樹状遺構1基である。

遺物総量は平安時代の土器大コンテナ11箱・土錠5点・鐵錠2点・木製品2点・中世の陶磁器小コンテナ0.5箱・堆積1点・板碑2点（うち1点に延文5年銘）を含む石製品7点・錢貨25点・漆器椀や曲物、下駄などの木製品約60点・杭や柱多量・近世以降の陶磁器小コンテナ1箱・踏鉄や煙管など金属製品小コンテナ1箱・杭多量・自然遺物（種実中コンテナ1箱・獸骨少量）が出土した。

今回の調査で中村城跡は、遺跡の性格として平安時代の集落、中世の城館跡の大きく2つの時期に存在したことが分かった。平安時代の遺構配置からは、居住域と生産域が想定された。特に十和田a

テフラを被覆する水田跡は、県内では奥州市水沢区中半入遺跡・同市同区常磐広町遺跡・同市江刺区岩谷堂柳沢II遺跡・平泉町竜ヶ坂遺跡から検出されているのみで、県内の調査事例は少ない。今回の資料追加により、平安時代の北上川流域の水田稻作を考える上で一助となれば幸いである。また、中世の中村城存続期には堀を巡らし、橋や柵を設置するなど大規模な呂説の痕跡を知ることができた。中世の木製品や橋跡・柵状遺構などの木質遺構は、残存していることが少ないものだけにこの時期の様相を考える上で貴重な資料が提供できたのではないかと思う。

しかし、各種遺構・遺物の類例や検討が深く及ばなかった。今後の課題としたい。(北田)

参考・引用文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 2004 「古野遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第125集
- 一戸町教育委員会 1982 「一戸城遺跡」『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』・『一戸町文化財調査報告書第2集』
- 一戸町教育委員会 2003 「一戸城跡・芦原遺跡～平成13・14年度町内遺跡発掘調査報告書～」『一戸町文化財調査報告書第45集』
- 伊藤博幸 1988 「岩手県水沢市常磐広町遺跡」『日本考古学会報41』日本考古学会会
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 『笠間館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第121集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『松本館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002a 「中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002b 「綱谷地遺跡発掘調査報告書～第4・5次測定～」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 「中半入遺跡第2次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第443集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005a 「西川日・塙向II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005b 「中半入遺跡第4次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第465集
- 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005c 「平成16年度発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集
- 岩手日日新聞社 2003 「絵で見る古里」一関郷村松園。
- 助大阪府文化財センター 2007 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ」助大阪府文化財センター発掘調査報告書第156集
- 御崎玉県埋蔵文化財調査事業団 2005 「北尚遺跡刈」『刈玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第303集』
- 喜野裕彦 2005 「水田跡の開拓方法及び構造の理解について」山形考古学会資料
- 司東真雄 1985 「岩手の石塔婆～東北方の板碑文化～」
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土上器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 仙台市教育委 1991 「宮沢遺跡～第30次調査報告書第1分冊～」仙台市文化財調査報告書第149集
- 千厩町史編纂委員会 1999 「千厩町史 第一巻」
- 高木晃 2005 「「和田a」に覆われた水田跡について」『岩手考古学』第17号 岩手考古学会
- 千々和利 2007 「板碑と石塔の折り」
- 花泉町教育委員会 1974 「花泉町文化財調査報告書 第四集」
- 平泉町教委 2003 「一関施水地内圃場整備箇間遺跡発掘調査報告書～竜ヶ坂遺跡第1次・佐藤屋敷遺跡第2次・畑中遺跡第1次」岩手県平泉町文化財調査報告書第82集
- 藤沢町教育委員会 2002 「藤沢町文化財調査報告書第151号 藤沢町の板碑」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992 「多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報1991」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1993 「多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報1992」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998 「多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報1997」

第8表 土器観察表

種類	目録番号	土器名	主な特徴 (テキスト)	毎回	青銅器時代			古墳時代			奈良時代			平安時代			鎌倉時代			
					古墳時代	平安時代	鎌倉時代	古墳時代	平安時代	鎌倉時代	古墳時代	平安時代	鎌倉時代	古墳時代	平安時代	鎌倉時代				
1	新、30	北 1号の付属品	KONI 1号の付属品	古墳時代	上縁	平	0	90	(160)	67	63	1号	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	1号の付属品	古墳時代		
2	2	新、30	北 2号の付属品	KONI 2号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	65	91	65	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	2号の付属品	古墳時代
3	1、3	新、30	北 3号の付属品	KONI 3号の付属品	古墳時代	上縁	平	5	上縁	平	60	140	63	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	3号の付属品	古墳時代
4	1、2	新、30	北 4号の付属品	KONI 4号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	90	54	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	4号の付属品	古墳時代
5	1、2	新、30	北 5号の付属品	KONI 5号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	140	58	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	5号の付属品	古墳時代
6	1、2	新、30	北 6号の付属品	KONI 6号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	140	62	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	6号の付属品	古墳時代
7	1、2	新、30	北 7号の付属品	KONI 7号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	140	58	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	7号の付属品	古墳時代
8	5、10	新、30	北 8号の付属品	KONI 8号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	90	54	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	8号の付属品	古墳時代
9	5、10	新、30	北 9号の付属品	KONI 9号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	90	54	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	9号の付属品	古墳時代
10	9、26	新、30	北 10号の付属品	KONI 10号の付属品	古墳時代	上縁	平	16	上縁	平	60	90	53	底	ヘラ形	底	ヘラ形	古墳時代	10号の付属品	古墳時代
11	11、15	新、30	北 11号の付属品	KONI 11号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	下縁	平	60	160	34	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	11号の付属品	古墳時代
12	12	新、30	北 12号の付属品	KONI 12号の付属品	古墳時代	上縁	平	2	下縁	平	60	160	34	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	12号の付属品	古墳時代
13	13	新、30	北 13号の付属品	KONI 13号の付属品	古墳時代	上縁	平	2	下縁	平	60	160	35	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	13号の付属品	古墳時代
14	7	新、30	北 14号の付属品	KONI 14号の付属品	古墳時代	上縁	平	2	下縁	平	60	160	35	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	14号の付属品	古墳時代
15	8	新、30	北 15号の付属品	KONI 15号の付属品	古墳時代	上縁	平	2	下縁	平	60	160	35	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	15号の付属品	古墳時代
16	24、35	新、30	北 16号の付属品	KONI 16号の付属品	古墳時代	上縁	平	2	下縁	平	60	160	35	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	16号の付属品	古墳時代
17	15、16、21	北 17号の付属品	KONI 17号の付属品	古墳時代	上縁	平	2	下縁	平	60	160	35	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	17号の付属品	古墳時代	
18	36、37	北 18号の付属品	KONI 18号の付属品	古墳時代	上縁	平	7	下縁	平	60	160	35	底	ヨリダ形	底	ヨリダ形	古墳時代	18号の付属品	古墳時代	
19	16、36	北 19号の付属品	KONI 19号の付属品	古墳時代	上縁	平	20	90	(140)	58	58	9	筒状	底	筒状	古墳時代	19号の付属品	古墳時代		
20	17	36、34	北 20号の付属品	KONI 20号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
21	24、36、37	北 21号の付属品	KONI 21号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代		
22	25	36、37	北 22号の付属品	KONI 22号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
23	24	36、37	北 23号の付属品	KONI 23号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
24	21	36、37	北 24号の付属品	KONI 24号の付属品	古墳時代	上縁	平	10	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
25	22	36、37	北 25号の付属品	KONI 25号の付属品	古墳時代	上縁	平	11	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
26	24	36、32	北 26号の付属品	KONI 26号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
27	26	36、40	北 27号の付属品	KONI 27号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
28	26	36、41	北 28号の付属品	KONI 28号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
29	25	37	北 29号の付属品	KONI 29号の付属品	古墳時代	上縁	平	6	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
30	25	37	北 30号の付属品	KONI 30号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
31	26	37	北 31号の付属品	KONI 31号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
32	25	37	北 32号の付属品	KONI 32号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
33	26	37	北 33号の付属品	KONI 33号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
34	26	37	北 34号の付属品	KONI 34号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	
35	26	37	北 35号の付属品	KONI 35号の付属品	古墳時代	上縁	平	4	上縁	平	60	100	(120)	59	54	筒状	底	筒状	古墳時代	

154	53	53	北	1年7月8日	0.5%水	6 土壌肥 率 0 5 ~ - (14.3°) (2.3)	体子+ヘタケテ	1092.2%ふる葉子
155	52	49	北	1年7月8日	0.5%水	3 上部 花 0 70 ~ - 79 (4.1) 枝、葉子+花びら	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
156	53	59	北	1年7月8日	0.5%水	5 +地表 2cm 0 70 ~ - 87 (3.6) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
157	54	59	北	1年7月8日	0.5%水	4 上部 花 0 40 ~ - 78 (5.5) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
158	53	53	北	1年7月8日	0.5%水	2 上部 花 5 0 ~ - 5 (0.5) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
159	55	53	北	1年7月8日	0.5%水	3 +地表 2cm 5 0 ~ - 10 (0.5) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
160	56	43	北	1年7月8日	0.5%水	1 +地表 2cm 20 0 ~ - 69 (2.7) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
161	58	44	北	1年7月8日	0.5%水	1 +地表 2cm 20 0 ~ - 72 (2.7) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
162	56	41	北	1年7月8日	0.5%水	4 +地表 2cm 25 0 ~ - 11 (1.6) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
163	56	41	北	1年7月8日	0.5%水	1 +地表 2cm 20 0 ~ - 8 (0.5) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
164	57	41	北	1年7月8日	0.5%水	5 +地表 2cm 10 0 ~ - 13 (1.3) 茎、葉子+花	1072.2%ふる葉子	1072.2%花
165	58	41	北	1年7月8日	0.5%水	12 +地表 2cm 0 75 ~ - 310 (1.1) 大枝子+花	体子+ヘタケテ+花	1072.2%花
166	56	45	北	1年7月8日	0.5%水	6 上部 花 0 70 ~ - (11.1) (2.7) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
167	56	40	北	1年7月8日	0.5%水	2 +地表 2cm 5 0 ~ - 205 (2.5) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
168	52	46	北	1年7月8日	0.5%水	11 +地表 2cm 25 0 ~ - 10 (0.4) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
169	52	52	北	1年7月8日	0.5%水	4 +地表 2cm 30 0 ~ - 10 (0.4) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
170	52	51	北	1年7月8日	0.5%水	11 +地表 2cm 75 0 ~ - 192 (1.6) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
171	53	45	北	1年7月8日	0.5%水	18 +地表 2cm 0 90 ~ - 123 (3.6) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
172	53	49	北	1年7月8日	0.5%水	5 +地表 2cm 0 55 ~ - 11 (0.2) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
173	53	46	北	1年7月8日	0.5%水	10 +地表 2cm 0 30 ~ - 10 (0.2) (2.0) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
174	53	46	北	1年7月8日	0.5%水	22 +地表 2cm 0 12 (4) ~ - 10 (0.2) (2.0) 体子+花+葉子	1072.2%花	1072.2%花
175	54	41	北	1年7月8日	0.5%水	17 +地表 2cm 45 0 ~ - 11 (1.5) 110 256 (22.0) 茎、葉子+花	体子+ヘタケテ	1072.2%花

第9表 土製品調査表

場所名	位置	区	山麓部		砂質	砂地	長さ	幅	厚さ	計量(cm)	重量(g)	測定・検定	欠損	備考
			位置(クリップ)	位置(クリップ)										
206 301 49 64 中央 1号水路	水田等 2NS (内側)	To-alluvium (内側)	土壤	4.5	1.5	1.4	0.5	0.8						
207 302 49 64 中央 1号水路	水田等 2NS (内側)	To-alluvium (外側)	土壤	6.3	2.1	2.0	0.3	19.4						
208 303 49 61 中央 1号水路	水田等 2NS (内側)	土壤	—	—	—	—	—	—	—					
216 304 49 65 中央 2号溝跡	土壤	—	—	—	—	—	—	—	—					
217 308 49 65 中央 2号溝跡	椚出面	切口	—	—	—	—	—	—	—					
225 212 50 65 中央 3号溝跡	椚出面	平瓦	—	—	—	—	—	—	—					
250 309 51 66 中央 59BA	地盤上 (粘土)	鉄筋コンクリート	—	—	—	—	—	—	—					
236 305 51 66 前 2号溝跡	ピット (11N)	地盤上 (粘土)	上縁	4.0	—	—	—	—	—					
324 306 51 69 前 1号溝跡	ベルト北側	地盤下	高さ	—	—	—	—	—	—					
325 307 54 69 前 1号溝跡	地盤上 (粘土)	切口	高さ	—	—	—	—	—	—					
			高さ (9.1)	—	—	—	—	—	—					

第10表 開墾器具調査表

機種	機種名	機種名	機種											
201 301 52 64 北 1号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
202 306 46 64 北 1号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
218 409 49 65 小北 1号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
219 403 49 65 小北 2号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
272 409 52 65 小北 3号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
327 413 54 69 前 1号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
383 403 56 70 前 2号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
384 407 58 71 前 2号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
200 417 50 71 前 3号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
956 935 59 72 前 5号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
406 411 59 72 前 5号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
407 415 59 71 前 6号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
621 630 60 72 前 6号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
623 614 60 72 前 6号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													
659 656 61 72 前 6号溝跡	1号溝跡 (0.5-3m)													

第11表 木製品観察表

品名	英語名	部位	部位名	位置(アーチ)	部位										
191 1007	北 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	口唇										
195 1006	北 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
196 1194	北 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
225 1009	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
220 1126	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
221 1129	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
222 1130	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
223 1131	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
224 1132	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
225 1133	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
226 1213	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
237 1029	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
238 1030	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
239 1034	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
240 1167	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
241 1167	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
242 1158	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
243 1159	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
244 1170	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
245 1171	中央 3号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
271 1038	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
272 1039	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
276 1016	中央 2号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
277 1134	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
278 1135	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
279 1136	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
280 1137	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
281 1138	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
282 1139	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
283 1140	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
284 1141	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
285 1142	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
286 1143	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
287 1144	中央 1号床頭部	4.42	白色紙	位置アーチ	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻

338	1121	77	南	2号漁港	海防港674	江村	漁村	750	120	今漁に間に取り扱う漁船は少ない。支那船は一方向、心合符		
319	1105	77	南	2号漁港	海防港678	通村	漁村	570	170	支那船のみで販賣はない。支那船は出伏後、漁船(心合符)、漁業(心合符)、漁業(心合符)、漁業(心合符)である。		
320	1107	77	南	2号漁港	海防港682	通村	漁村	780	110	支那船(心合符)である。		
322	1104	54	東	1号漁港	6912	中下位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
						漁村	漁村	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に			
333	1095	54	東	1号漁港	6904	小下位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
334	1096	54	東	1号漁港	6905	中下位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
						漁村	漁村	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に			
335	1047	54	東	1号漁港	6912	4	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
336	1109	54	東	1号漁港	6912	中下位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
337	1031	55	東	1号漁港	6902	中上位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
338	1012	55	東	1号漁港	6912	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
339	1013	55	東	1号漁港	6903	中上位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
340	1021	55	東	1号漁港	6912	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
341	1053	55	東	1号漁港	6912	3	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
342	1022	55	東	1号漁港	6912	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
343	1008	55	東	1号漁港	6902	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
345	1007	55	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
346	1009	55	東	1号漁港	6904	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
347	1108	77	東	1号漁港	6912	5	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
348	1105	77	東	1号漁港	6906	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
349	1100	77	東	1号漁港	6907	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
350	1109	78	東	1号漁港	6907	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
351	1107	78	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
352	1108	78	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
353	1109	78	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
354	1110	78	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
355	1111	78	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
356	1122	78	東	1号漁港	6912	2	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
357	1166	78	東	1号漁港	6905	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
358	1033	56	南	2号漁港	6642	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に		
366	1103	56	南	2号漁港	6612	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
367	1103	56	南	2号漁港	6612	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
388	1032	56	南	2号漁港	6612	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
389	1033	56	南	2号漁港	6612	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
390	1034	56	南	2号漁港	6612	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	
391	1102	56	南	2号漁港	6612	4	中位	海防港682	内下位	110	内漁は漁業(心合符)である。外漁も内漁地帯に	

地點 No.	系群 No.	地質 No.	地質 名	斑状岩質		留位	特徴	固井深度 (m)	固井試験 長さ (m)	固井試験 深度 (m)	水切り	開地	備考	
				内 外	内 外									
394 1026 59	71	南	3号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	下鉄	208	193	漂成	木本	クリ	
395 1028 59	71	南	3号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	下鉄	(141)	—	木本	クリ	コナガコナサギ森コナ ウ代謝	
396 1172 59	71	南	3号地盤	木相	上	一单位	粘土	加・灰	71.3	51	漂成	木本	クリ	
397 1172	—	78	南	3号地盤	木相	上	一单位	粘土	加工灰	66.0	40	漂成	木本	アシテ
401 1026 59	71	南	4号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	下鉄	177	96	漂成	木本	クリ	
402 1019 59	71	南	4号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	下鉄	140	90	口16度堅密度試験 結果 90	木本	クリ	
403 1025 59	71	南	4号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	下鉄	90	90	漂成	木本	クリ	
408 1001 60	72	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	117	96	漂成	木本	クリ	
410 1018 60	72	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	(127)	(51)	漂成	木本	クリ	
410 1006 60	72	南	5号地盤	北端	—	—	—	木相	(120)	42	漂成	木本	クリ	
411 1027 60	72	南	5号地盤	トレチ	—	—	—	木相	90	90	漂成	木本	クリ	
412 1055 60	71	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	80	漂成	木本	クリ	
413 1181	—	78	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ
414 1182	—	78	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ
415 1183	—	78	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ
416 1181	—	78	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ
417 1185	—	78	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ
418 1186	—	78	南	5号地盤	ペルト	外	中粒白色粘土質 (漂成)	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ
424 1045 60	72	南	6号地盤	トレチ	外	漂成	漂成	木相	90	40	漂成	木本	クリ	
425 1046 60	72	南	6号地盤	北端	61.03	漂成	漂成	木相	90	50	漂成	木本	クリ	
436 1058 60	72	南	6号地盤	61C4	漂成	漂成	漂成	木相	104	102	16	木相	クリ	
427 1019 60	72	南	6号地盤	61C2	漂成	漂成	漂成	木相	(221)	16	0.5	木相	クリ	
428 1058 60	72	南	6号地盤	61C2	漂成	漂成	漂成	木相	(98)	17	0.4	木相	クリ	
429 1053 60	72	南	6号地盤	61C2	漂成	漂成	漂成	木相	(288)	23.0	1.0	木相	クリ	
430 1057 60	72	南	6号地盤	61C2	漂成	漂成	漂成	木相	(50)	(39)	0.7	木相	クリ	
431 1067 60	72	南	6号地盤	61C2	漂成	漂成	漂成	木相	(110)	(66)	0.4	木相	クリ	
432 1068 61	72	南	6号地盤	61C3	漂成	漂成	漂成	木相	262	59	0.7	木相	クリ	
433 1059 60	72	南	6号地盤	61C2	漂成	漂成	漂成	木相	(151)	(33)	1.7	木相	クリ	
434 1060 60	72	南	6号地盤	61C4	漂成	漂成	漂成	木相	137	3.8	0.5	木相	クリ	
435 1061 61	73	南	6号地盤	61C4	漂成	漂成	漂成	木相	175	86	0.2	木相	クリ	

					語源			
436 1062 61 72 田 6号施設	トレスナビ	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(64) (27)	着手の次第。用事小所、ト迎波は女房。	着手日	スギ	
437 1063 61 72 田 6号施設	トレスナビ	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(93) (36)	用事に就いてる。巨神からも近い女房。	着手日	クリ	
438 1064 61 72 田 6号施設	トレスナビ	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	11.0 42	机角は魔童といふ。元祖が不規。	着手日	本村	
439 1067 61 72 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	8.6 (46)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	コドリ属コナラモロコナ	
440 1187 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	87.0 40	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房をしてる。	着手日	本村	
441 1188 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	83.0 30	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
442 1189 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	84.0 45	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	クリ	
443 1190 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	90.0 40	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
444 1191 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	96.0 50	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
445 1192 73 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	68.0 50	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	クリ	
446 1193 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	56.5 40	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
447 1193 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	20.5 7.0	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
448 1194 78 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	19.0 10	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
449 1195 79 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	146.0 90	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
450 1196 79 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	20.0 15.0	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
451 1197 79 田 6号施設	走者 (D1)	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	147.0 8.0	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
452 1195 73 田 6号施設	ベルト付押	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(331) 132	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
453 1094 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(156) (56)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	アヌナコ		
454 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(24.5) (74)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	クリ		
455 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(36.8) (49)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村		
456 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	22.2 25	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スゴノキ属		
457 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	14.0	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
458 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.4	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
459 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.8	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
460 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.8	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
461 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.8	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
462 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.8	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
463 1095 61 73 田 6号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.8	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
464 1174 79 田 6号施設	ベルト付押	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	61.0 5.5	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
465 1175 79 田 6号施設	ベルト付押	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	106.0 40	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村	
466 1092 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(16.0) (9.5)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	モクレン属		
467 1092 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	16.5 (22)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	アヌナコ		
468 1095 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	0.7	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
469 1098 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	3.0	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	ヒノキ属		
470 1176 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(22.9) (11.0)	上辺や小枝の丸い毛根。右側から下邊は女房。	着手日	クリ		
471 1177 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	51.0 40	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村		
472 1178 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	65.0 30	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村		
473 1179 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	91.5 25	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	本村		
474 1180 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	97.5 40	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	クリ		
475 1043 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	11.0 (6.0)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	心材		
477 1077 62 73 田 7号施設	機械上位 (機械上位)	電線小形管 加工機	(18.1) (11.2)	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	スギ		
				10.0	机角は魔童といふ。巨神からも近い女房。	着手日	アヌナコ	

第12表 金属製品割算表

川子東洋						川子東洋					
規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.
197	2014	48	61	北	1号切削	304	黒色上塗	T字角下押付	40	8.5	3.5
209	2002	49	61	中	1号水溶漆	水田414鋼	漆付	漆付	40	0.9	3.0
210	2013	49	61	中	2号水溶漆	漆付	漆付	漆付	42	0.2	3.0
225	2006	50	65	中	2号油	2961	漆付	漆付	42	0.2	3.0
227	2008	50	65	中	2号用漆	2961	漆付	漆付	44	0.5	3.0
228	2010	50	65	中	2号用漆	2942	漆付	漆付	44	0.5	3.0
229	2015	50	65	中	2号用漆	2973	漆付	漆付	44	0.5	3.0
230	2015	50	65	中	2号用漆	4101	漆付	漆付	44	0.5	3.0
236	2007	31	65	中	2号瓦斯漆	4852	漆付	漆付	44	0.5	3.0
241	2008	51	65	中	2号瓦斯漆	4955	漆付	漆付	44	0.5	3.0
253	2008	51	65	中	2号瓦斯漆	4912	漆付	漆付	44	0.5	3.0
257	2005	51	66	中	2号瓦斯漆	漆付	漆付	漆付	44	0.5	3.0
326	2001	59	71	中	漆付	漆付	漆付	漆付	44	0.5	3.0
338	2001	59	71	中	漆付	漆付	漆付	漆付	44	0.5	3.0
420	2003	62	73	中	漆付	漆付	漆付	漆付	44	0.5	3.0
434	2004	62	73	中	漆付	漆付	漆付	漆付	44	0.5	3.0

第13表 錆鋼調査表

川子東洋						川子東洋					
規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.	規格名	規格No.
231	2016	59	65	中	2号切削	3942	漆付	漆付	22	0.1	2.6
338	2018	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	23	0.2	3.8
339	2018	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
360	2019	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
361	2020	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
362	2021	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
363	2022	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
364	2023	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
365	2024	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
366	2025	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
367	2026	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
368	2027	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
369	2028	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
370	2029	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
371	2030	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
372	2031	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
373	2032	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	25	0.1	3.8
374	2033	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
375	2034	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
376	2035	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
377	2036	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
378	2037	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
379	2038	57	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
380	2039	58	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
381	2040	58	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8
382	2041	58	70	中	1号切削	6853	漆付	漆付	24	0.1	3.8

第14表 石製品観察表

揭露No.	浮遊No.	回収No.	写真No.	区	測定名	位置(グリッド)	層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量(g)	台材	欠損	備考
193	3006	48	61	北	1号測定跡	ベルト②	褐色灰岩層	砾石	(4.7)	28	2.5	232	混水岩	有	
328	3001	55	70	南	1号測定跡	トレンチ	培積上位(粘土層)	板磚	(15.1)	(16.3)	9.4	886.1	頁岩	有	
329	3002	56	69	南	1号測定跡	61B2 堆積	堆積上位(粘土層)	板磚	(19.9)	(12.3)	(3.7)	3061.1	頁岩	有	
330	3004	54	69	南	1号測定跡	60F4	堆積下位(粘土と砂の間)	石片	表面(73)	—	—	882.1	安山岩	有	
331	3005	54	69	南	1号測定跡	61H2	堆積下位(砂層)	石片	表面(53)	—	—	181.8	安山岩	有	
362	3007	58	71	南	3号測定跡	堆積中位(灰色粘土層)	砾石	(12.4)	(7.4)	2.6	3061.1	砂岩	有		

第15表 骨角遺物観察表

揭露No.	登録No.	回収No.	写真No.	区	測定名	位置(グリッド)	層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量(g)	動物種	備考
258	4004	—	4中央	3号測定跡	48C3	堆積(上)～下位(砂と小漂砾)	角	—	—	—	—	52.6	ウマ	
369	4006	—	南	3号測定跡	—	堆積上位(黒色粘土層)	角	—	—	—	—	—	シカ	
419	4003	—	南	5号測定跡	トレンチ背	(63C2)	堆積(上)位(一括)	肩甲骨	—	—	—	40.6	シカ	
455	4005	455	南	6号測定跡	トレンチ下位	(63C1)	堆積中～下位	前突片	(9.1)	(4.9)	(1.2)	23.3	シカ	
456	4001	—	南	6号測定跡	北端	(61D1)	堆積(上)～下位	中手骨か中足骨	—	—	—	96.4	シカ	
457	4002	—	南	6号測定跡	北端	(61D1)	堆積下位	尾骨か	—	—	—	88.0	シカ	
458	4007	45	南	6号測定跡	南端から3m	—	堆積下位(黒色粘土層)	頭骨	—	—	—	—	シカ	

第16表 炭化材観察表

掲載No	登録No	区	出土地点		層位	樹種	備考
			遺構名	位置(グリッド)			
-	5001	北	1号堅穴住居跡	炭化材1		ケヤキか	
-	5002	北	1号堅穴住居跡	炭化材2		クリ	
-	5003	北	1号堅穴住居跡	炭化材3		クリ	
-	5004	北	1号堅穴住居跡	炭化材4		クリ	
-	5005	北	1号堅穴住居跡	炭化材5		クリ	
-	5006	北	1号堅穴住居跡	炭化材6		ケヤキ	
-	5007	北	1号堅穴住居跡	炭化材7		ケヤキ	
-	5008	北	1号堅穴住居跡	炭化材9		ケヤキ	
-	5009	北	1号堅穴住居跡	炭化材11		ケヤキ	
-	5010	北	1号堅穴住居跡	炭化材18		ケヤキか	
-	5011	北	1号堅穴住居跡	炭化材21		クリ	
-	5012	北	1号堅穴住居跡	炭化材22		センノキ	
-	5013	北	1号堅穴住居跡	炭化材23		センノキ	
-	5022	北	1号河川跡	2B4	To-aテフラ上層	タモ	
-	5023	北	1号河川跡	2C2		ナラ	
-	5021	北	1号河川跡	北西岸捨て場3C4	黒色下灰色層(河床)	クリ	
-	5018	北	1号河川跡	4B4 北岸トレンチ②東側	黒色粘土層	タモ	
-	5019	北	1号河川跡	4B4	黒色粘土層	イタヤカニデ	
-	5016	北	1号河川跡	4C	黒色炭化層	タモ	
-	5017	北	1号河川跡	4C1 北岸トレンチ		ホウノキ	
-	5020	北	1号河川跡	4C3		タモ	
-	5024	北	1号堅穴住居跡	カマド P1		クリ	
-	5025	北	1号堅穴住居跡	P3	堆積土中	クリ	
-	5029	中央	1号水田跡	水田1 NW区	耕作土2面(砂層上)	タモ	
-	5028	中央	1号水田跡	水田2 N区(ベルト付近)	耕作土2面(砂層上)	センノキ	
-	5030	中央	1号水田跡	水田2 NW区	耕作土1面下位	タモ	
-	5026	南	2号堅穴住居跡	NW (59D1)	堆積土中	クリ	
-	5014	南	1号掘跡	北端	堆積土下位(底面)	センノキ	年代測定
-	5027	南	1号掘跡	58C2・4	堆積土中～下位(粘土～砂質)	タモ	
-	5015	南	6号掘跡	トレンチすぐ北 62C1	堆積土中～下位	樹皮	

第17表 種実観察表

剖面名	登録名	区	遺構名	位置(グリッド)	層位	種類	個数	重量(g)	備考	
									層位	層位
-	6055	北	1号堅穴住居跡	東西下カマド付近		モモ	2	0.85		
-	6108	北	1号土坑		堆積土上空(To-Bより上)	モモ	1	2.15		
-	6070	北	1号河川跡	2D2		モモ	1	0.38		
-	6072	北	1号河川跡	2B4	To-a向下降作土	モモ	1	3.1		
-	6071	北	1号河川跡	2C1		モモ	1	0.88		
-	6023	北	1号河川跡	2C1・3		オニグルミ内果皮	1	2.44		
-	6058	北	1号河川跡	2C1・3		モモ	1	2.33	貧漿	
-	6002	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C3	黒色土層	オニグルミ内果皮	2	3.09	
-	6053	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C3	黒色土層	モモ	10	19.05	
-	6001	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C4	黒色下灰褐色層(河床付近)	オニグルミ内果皮	1	3.48	
-	6050	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C4	黒色下灰褐色層(河床)	モモ	2	5.48	
-	6052	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C4	黒色下灰褐色層(河床)	モモ	4	10.96	
-	6050	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C4	黒色下灰層	モモ	1	0.73	
-	6018	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C4	黒色土層	オニグルミ内果皮	1	1.26	
-	6084	北	1号河川跡	北西岸	3C4	黒色・灰色層(河床)	モモ	1	1.43	
-	6107	北	1号河川跡	北西岸捨て場	3C4	黒色下灰褐色層(河床付近)	クリ炭化種子	2	0.68	
-	6025	北	1号河川跡	4D1	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	1	1.96		
-	6003	北	1号河川跡	4E4	灰白色土層	オニグルミ内果皮	1	1.43		
-	6004	北	1号河川跡	4F2.4と4J.3		オニグルミ内果皮	3	5.95		
-	6007	北	1号河川跡	4G1 北ベルトB西側	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	15	26.58		
-	6009	北	1号河川跡	4G1 北岸・レンテチ	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	3	6.04		
-	6011	北	1号河川跡	北西岸捨て場ベルトB	黒色炭化層	オニグルミ内果皮	4	2.76		
-	6012	北	1号河川跡	北西岸捨て場ベルトB	黒色炭化層	オニグルミ内果皮	6	11.24		
-	6020	北	1号河川跡	4C1	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	2	3.65		
-	6015	北	1号河川跡	4C1	黒色粘土層	モモ	1	0.95		
-	6005	北	1号河川跡	4C2	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	8	8.84		
-	6016	北	1号河川跡	4C2 北岸トレンチ西側	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	1	1.47		
-	6077	北	1号河川跡	4C2 北岸トレンチ右側	黒色粘土層	モモ	1	2.01		
-	6024	北	1号河川跡	4C3	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	1	2.08		
-	6008	北	1号河川跡	4C3 北岸下レンチ当	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	5	9.58		
-	6006	北	1号河川跡	4C1・3 北ベルトB西側		オニグルミ内果皮	6	10.09		
-	6098	北	1号河川跡	4C4	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	1	2.68		
-	6026	北	1号河川跡	4D1	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	2	3.76		
-	6104	北	1号河川跡	4D1・2	黒色粘土層	コハクウンボク内果皮	7	0.42		
-	6103	北	1号河川跡	4D3	褐色粘土層	コハクウンボク内果皮	1	0.04		
-	6104	北	1号河川跡	北岸トレンチC東側	黒色粘土層	オニグルミ内果皮	4	5.45		
-	6102	北	1号河川跡	T附近	北岸トレンチC東側	コハクウンボク内果皮	2	0.16		
-	6113	北	1号河川跡	北西岸捨て場	河床	ヒヨウタン種子	2	0.05		
-	6105	北	遺構外	5C		コハクウンボク内果皮	17	1.84		
-	6028	中央	1号水田跡	水田1 NW区西壁斜傾	To-a直下耕作土	オニグルミ内果皮	1	0.97		
-	6039	中央	1号水田跡	水田1 SW区	耕作土2面土	オニグルミ内果皮	1	3.96		
-	6083	中央	1号水田跡	水田1	To-a直下土	モモ	1	2.73		
-	6099	中央	1号水田跡	水田1 3AC3	水田耕作土	コククウンボク内果皮	1	0.05		
-	6101	中央	1号水田跡	水田1 NW区西壁斜傾	To-a直下耕作土	コハクウンボク内果皮	1	0.12		
-	6031	中央	1号水田跡	水田2 北端複数	灰色土層	オニグルミ内果皮	1	2.37		
-	6051	中央	1号水田跡	水田2 S区	To-a直下耕作土	モモ	1	1.78		
-	6058	中央	1号水田跡	水田2 (3A1)	水田耕作土	モモ	1	1.02		
-	6065	中央	1号水田跡	水田2 E区	To-a直下耕作土	モモ	3	6.03		
-	6066	中央	1号水田跡	水田2 N区	耕作土2面(砂層直上)	モモ	1	2.35		
-	6100	中央	1号水田跡	水田2 SW区(トレンチ西)	To-a直下水田耕作土	コハクウンボク内果皮	1	0.09		
-	6105	中央	1号水田跡	水田2 NW区	To-a直下耕作土	樹皮	3	0.34		
-	6046	中央	1号水田跡	水田4 ベルト北側	耕作土2面(砂層直上)	モモ	1	3.66		
-	6057	中央	1号水田跡	水田4	水田耕作土	モモ	1	0.95		
-	6084	中央	1号水田跡	60D4	地盤下中位(黒色土層)	モモ	3	8.44		
-	6015	中央	1号溝跡	1号溝跡と接する箇所	地盤	オニグルミ内果皮	1	1.26		
-	6021	中央	1号溝跡	地盤	砂層	ヒメグルミ内果皮	1	3.45	貧漿	
-	6111	中央	1号溝跡	35A4	樹皮	モモ	1	0.18		

掲載No	登録No	区	出土地点		層位	種類	個数	重量(g)	備考
			遺物名	位置(グリッド)					
-	6030	中央	1号溝跡	36C1・3		オニグルミ内果皮	1	3.87	食糞
-	6064	中央	1号溝跡	36C1・3		モモ	1	1.51	食糞
-	6035	中央	1号溝跡	東端	底面	オニグルミ内果皮	1	4.53	
-	6093	中央	1号溝跡	東端	底面付近	トチノキ種皮	5	0.54	
-	6080	中央	2号溝跡	37D1	鉢底	モモ	4	0.75	
-	6092	中央	3号河川跡	48T3	堆積土中～下位	クリ果皮	1	0.85	
-	6096	中央	3号河川跡	48C3	堆積土下位(砂層)	ツノハシバミ果実	1	0.58	
-	6022	中央	3号河川跡	48D1	堆積土中～下位(砂～小礫層)		1	6.03	
-	6048	中央	3号河川跡	48D3	堆積土中～下位	モモ	1	3.47	
-	6085	中央	3号河川跡	48D3	堆積土中～下位	クロマツ球果	1	6.01	
-	6086	中央	3号河川跡	48D3	堆積土下位(砂)	クロマツ球果	1	4.21	
-	6089	中央	3号河川跡	東端トレンチ 48D1・3		クロマツ球果	1	2.3	
-	6036	中央	3号河川跡	西端トレンチ 49A1		ヒメグルミ内果皮	1	2.68	
-	6019	中央	3号河川跡	西端トレンチ 49A1		モモ	1	2.89	
-	6090	中央	3号河川跡	西端トレンチ 49A1		クロマツ球果	1	11.01	
-	6031	南	2号水田跡	水田5 67C1	To-a底下耕作土	オニグルミ内果皮	1	3.72	
-	6063	南	2号水田跡	68B2	黒色粘土層	モモ	1	2.94	
-	6037	南	2号水田跡	67D4	褐色土上層(To-a底上層)	オニグルミ内果皮	1	4.55	
-	6044	南	2号水田跡	68B4	褐色土上層(To-a底上層)	モモ	1	0.37	
-	6095	南	1号掘跡	58C1・3	堆積土中位	ツノハシバミ果実	1	0.28	
-	6017	南	1号掘跡	60B4	堆積土中位(黒色土層)	オニグルミ内果皮	1	2.6	
-	6056	南	1号掘跡	60B4	堆積土中～下位	モモ	3	3.28	
-	6073	南	1号掘跡	60B4	堆積土下位(砂層)	モモ	2	3.87	
-	6106	南	1号掘跡	60D4	堆積土中位(黒色土層)	モモ	1	0.14	
-	6112	南	1号掘跡	60B4	堆積土中～下位	ヒメグルミ内果皮	2	0.24	
-	6078	南	1号掘跡	61B3	堆積土上位	モモ	2	1.78	
-	6074	南	1号掘跡	61B4	暗褐色粘土層	モモ	1	0.65	
-	6054	南	2号掘跡			モモ	2	0.65	
-	6067	南	2号掘跡	トレンチ		モモ	1	1.26	
-	6033	南	4号掘跡	ベルト	6層	オニグルミ内果皮	1	2.79	
-	6059	南	4号掘跡			モモ	2	3.84	
-	6027	南	5号掘跡			オニグルミ内果皮	1	1.82	
-	6043	南	5号掘跡			モモ	1	2.83	
-	6097	南	5号掘跡	ベルト西側		オニグルミ内果皮	1	0.35	
-	6082	南	6号掘跡	北端(61D1)	堆積土中～下位	モモ	1	1.27	
-	6013	南	6号掘跡	北端(61D1)	堆積土中～下位	オニグルミ内果皮	2	4.46	
-	6010	南	6号掘跡	北端(61D3)	堆積土上位(孫土)	オニグルミ内果皮	10	21.78	
-	6047	南	6号掘跡	北端(61D3)	堆積土上位(一括土)	モモ	3	5.45	
-	6012	南	6号掘跡	ベルト北(62C1)	堆積土中位	オニグルミ内果皮	2	4.8	
-	6062	南	6号掘跡	ベルト北(62C1)	堆積土中位	モモ	1	1.03	
-	6091	南	6号掘跡	ベルト北(62C1)	堆積土中位	トチノキ種皮	1	1.37	
-	6094	南	6号掘跡	トレンチすぐ北 62C1	堆積土中～下位	ツノハシバミ果実	1	0.85	
-	6014	南	6号掘跡	63C1	堆積土上位	オニグルミ内果皮	1	5.67	
-	6029	南	6号掘跡	63C1	堆積土中位	オニグルミ内果皮	1	3	
-	6041	南	6号掘跡	63C3		オニグルミ内果皮	3	27.14	
-	6079	南	6号掘跡	63C1	堆積土中位	モモ	1	2.14	
-	6110	南	6号掘跡	63C3		ヒシ属果実	1	1.16	
-	6076	南	6号掘跡	南端(64B4)	堆積土中～下位	モモ	1	0.66	
-	6088	南	6号掘跡	南端から3m北	堆積土上位(褐色粘土)	クロマツ球果	1	1.48	
-	6032	南	6号溝跡	西側	堆積土下位(沙層)	オニグルミ内果皮	1	1.96	
-	6061	南	6号溝跡	内側	堆積土中～下位	モモ	1	1.54	
-	6087	南	6号溝跡	西側	堆積土上位(後削面から30cm)	クロマツ球果	2	2.85	
-	6075	南	6号溝跡	東側	堆積土下位	モモ	1	2.36	
-	6098	南	7号溝跡	西側	堆積土中～下位	不明	1	0.15	
-	6099	南	6号河川跡	302	To-a底下耕作土	モモ	2	3.87	
-	6019	南	濃霧外	74B2		オニグルミ内果皮	1	4.76	

写 真 図 版



遺跡遠景（南西から）



遺跡遠景（南東から）

写真図版 1 遺跡遠景

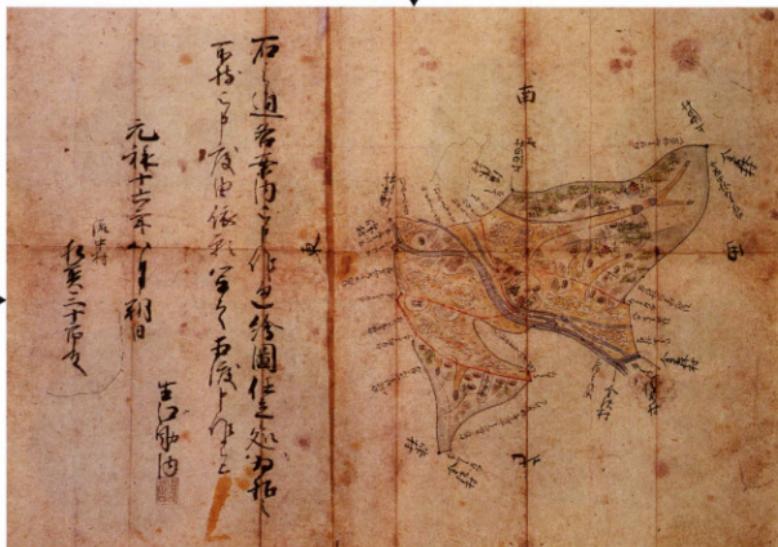


遺跡近景（南東から）

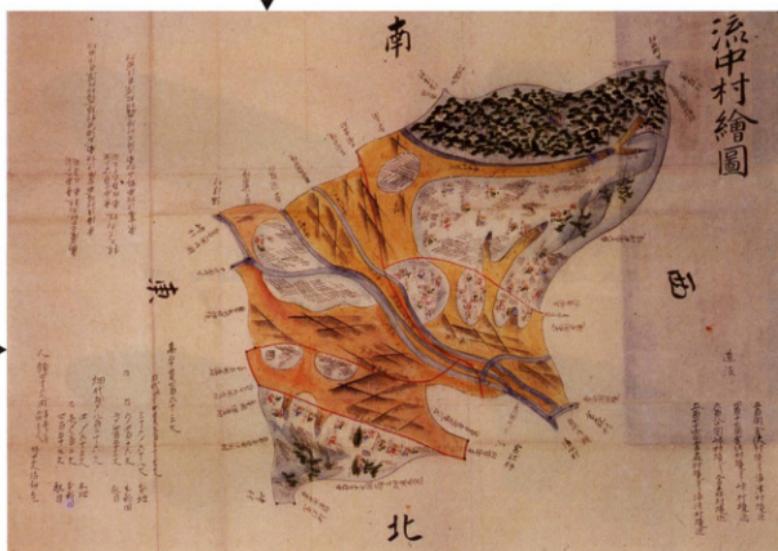


南区・1号柵状遺構

写真図版2 遺跡近景



「流中村繪図」元禄十六（1703）年 中村共右衛門所蔵



「流中村繪図（写本）」文化十三（1816）年 宮城県図書館所蔵

※複数にあたっては、一関市博物館が撮影したフィルムを使用した
※▼の文例が複数の位置に記載されています。

写真図版3 流中村繪図



漆器椀 (332)



漆器椀 (333)



漆器椀 (334)



漆器椀 (385)



漆器椀 (425)



連齒下駄 (236)



連齒下駄 (394)



連齒下駄 (403)

写真図版 4 出土遺物



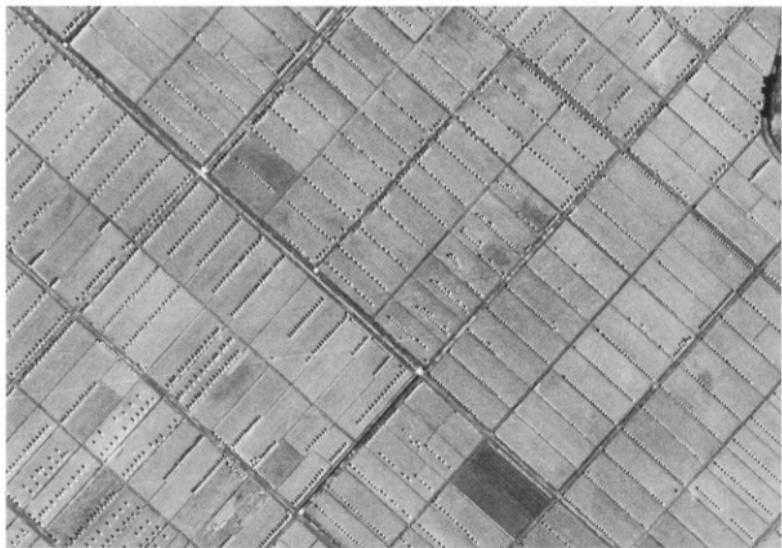
遭跡範囲全体（上が北）



遭跡範囲拡大（上が北）



遺跡範囲全体（上が北）

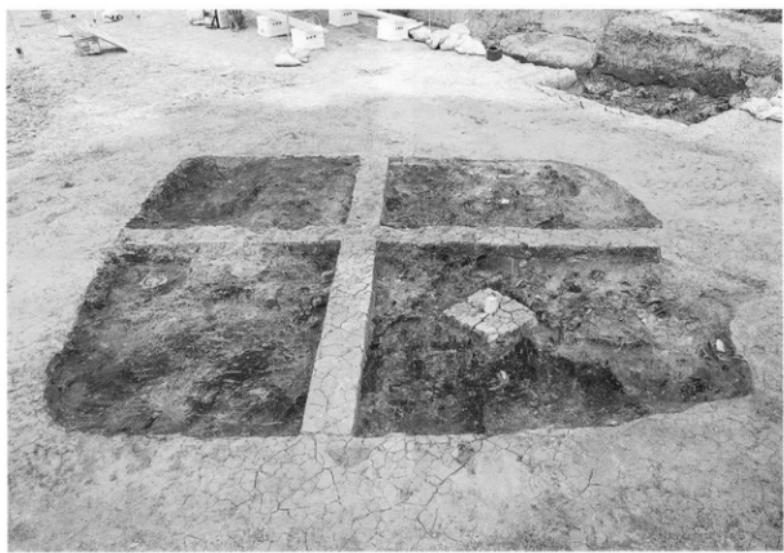


遺跡範囲拡大（上が北）

写真図版6 国土地理院撮影航空写真（昭和37年10月10日撮影）



平面（南から）



炭化材出土状況（南から）



断面（南から）



カマド検出（南東から）



カマド崩落状況（南から）



カマド崩落状況（直上から）



カマド燃焼部 平面（直上から）

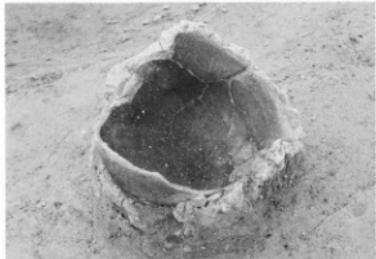


10号出土状況（南から）



18号出土状況（南から）

写真図版 8 北区・1号竪穴住居跡（2）



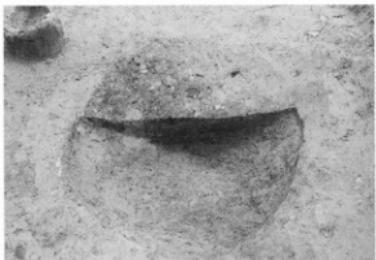
12号出土状況（北から）



床面出土遺物（北から）



ピット1平面（南西から）



ピット1断面（西から）



ピット2平面（南から）



ピット2断面（東から）



ピット3平面（南から）

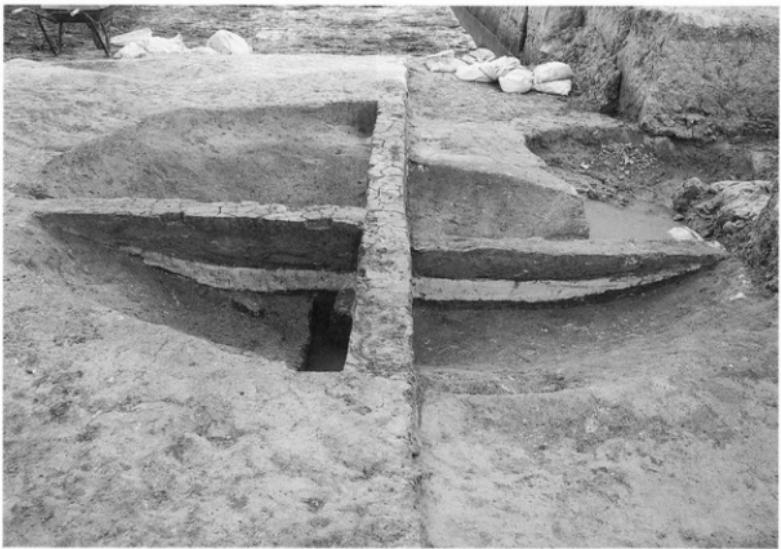


ピット3断面（西から）

写真図版9 北区・1号竪穴住居跡（3）



平面（南から）

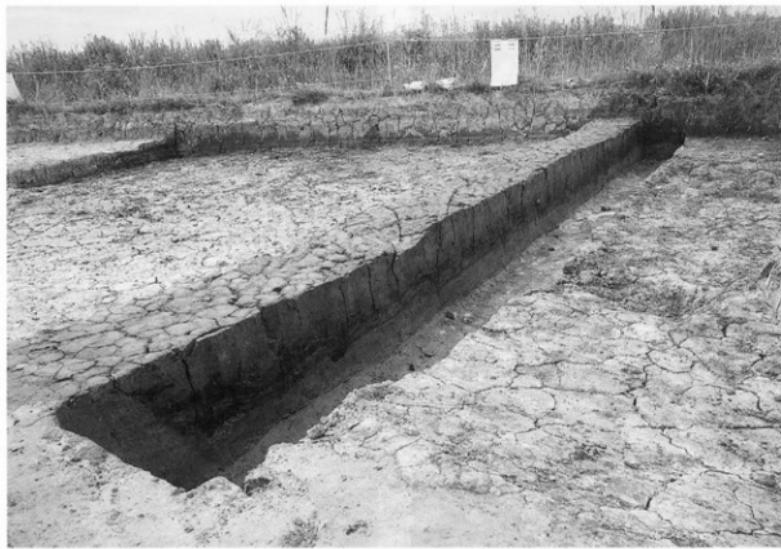


断面（南東から）

写真図版10 北区・1号土坑

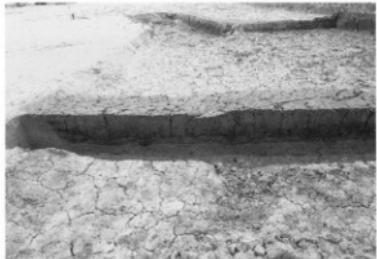


平面（東から）



セクションD断面（北から）

写真図版11 北区・1号河川跡（土器捨て場）（1）



セクションD断面（北西から）



セクションA断面（南西から）



セクションB断面（南から）



セクションC断面（南西から）



遺物出土状況（東から）



遺物出土状況（南東から）

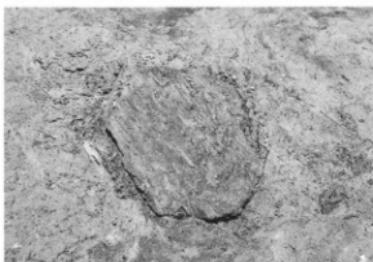


遺物出土状況（南から）

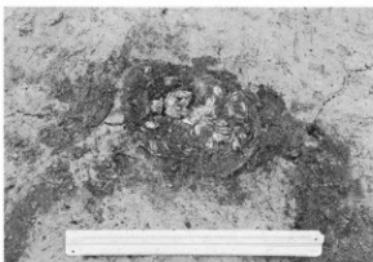


189須恵器甕出土状況（南東から）

写真図版12 北区・1号河川跡（土器捨て場）(2)



195木製皿出土状況（南から）



ウリ科種子出土状況（南から）



4C区遺物出土状況（南西から）



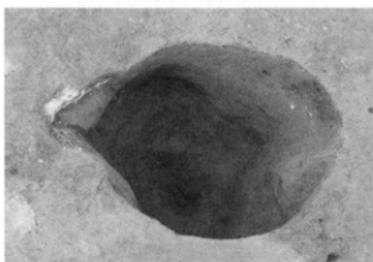
4C区遺物出土状況（北東から）



6B～C区倒木出土状況（南東から）



土器捨て場作業風景



1号ピット平面（南から）



1号ピット断面（南から）



耕作面平面（北西から）



To-aテフラ被覆状況（北西から）

写真図版14 中央区・1号水田跡（1）



水田1 耕作土断面（北東から）



水田2 耕作土断面（北東から）

写真図版15 中央区・1号水田跡（2）



畦畔1 平面（西から）



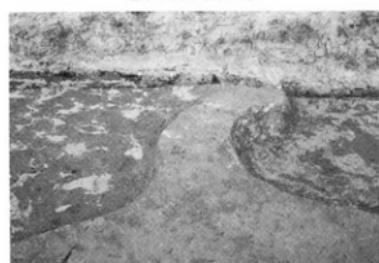
畦畔2 平面（北から）



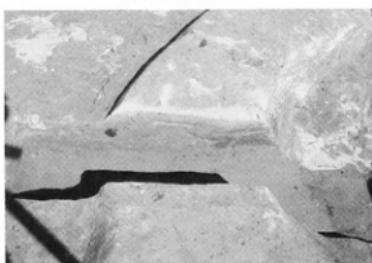
畦畔3 平面（西から）



畦畔3 断面（西から）



畦畔4 平面（西から）



畦畔4 断面（西から）



畦畔1 棱出（西から）

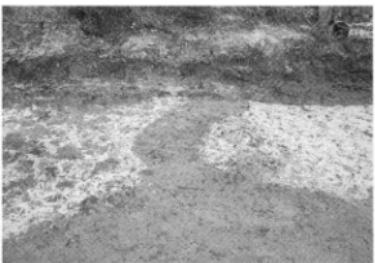


畦畔2 棱出（北から）

写真図版16 中央区・1号水田跡（3）



畦畔3検出（西から）



畦畔4検出（西から）



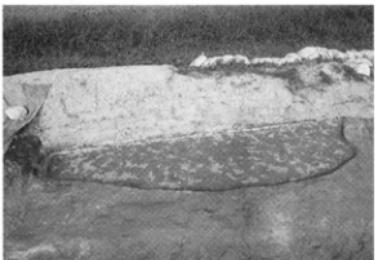
水田1平面（南から）



水田2平面（南から）



水田3平面（西から）



水田4平面（西から）



水田1足跡検出状況（北から）



水田2足跡検出状況（北西から）

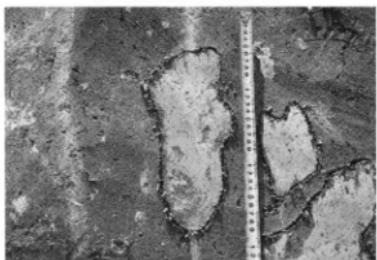
写真図版17 中央区・1号水田跡（4）



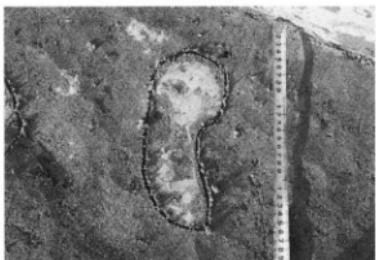
水田3足跡検出状況（西から）



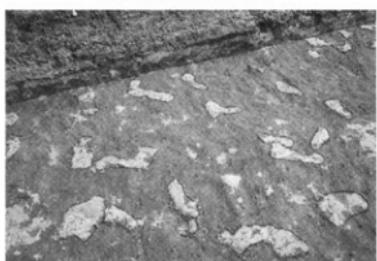
水田4足跡検出状況（西から）



水田1足跡検出状況（拡大）



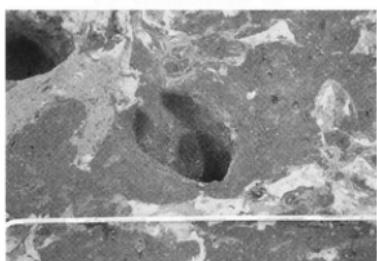
水田4足跡検出状況（拡大）



水田4足跡検出状況（西から）



水田2耕作痕検出状況（東から）

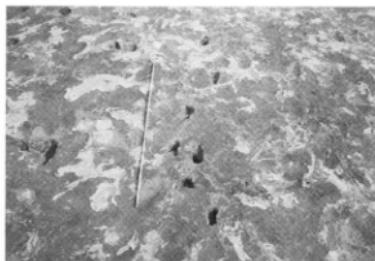


俄跡目類足跡平面（南から）

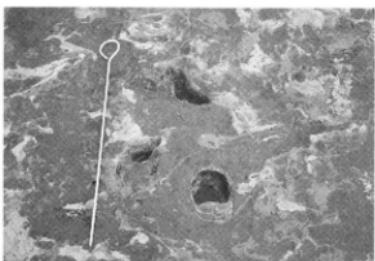


田面の痕跡検査風景（北から）

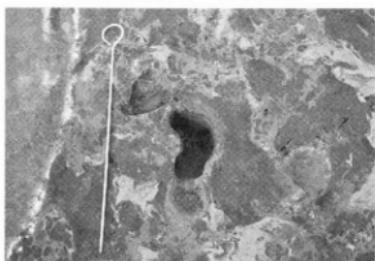
写真図版18 中央区・1号水田跡（5）



水田1 動物の足跡か 平面（南から）



水田1 動物の足跡か 平面（南から）



水田1 人間の足跡 平面（南から）



水田2 復旧により寄せられた火山灰（北東から）



花粉・植物珪酸体分析試料採取風景



水田1 To-aテフラ除去風景



搅わに実った現代の田園風景



現代の稻架（ホンニヨ）



平面（南西から）



断面（北東から）

写真図版20 中央区・1号溝跡



2号溝跡平面（南西から）



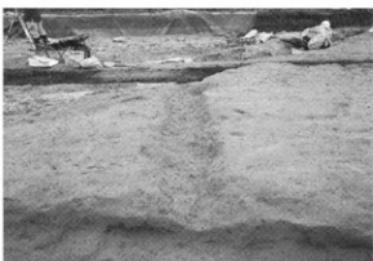
2号溝跡セクションA断面（東から）



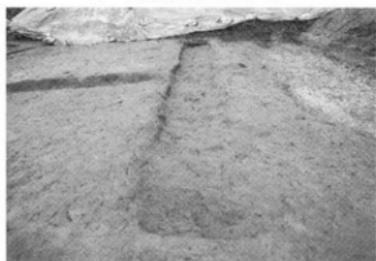
2号溝跡セクションB断面（西から）



3・4号溝跡平面（南東から）



4号溝跡平面（南西から）



3号溝跡平面（南東から）



3号溝跡断面（南東から）



平面（東から）



平面（北から）

写真図版22 中央区・2号河川跡（1）



セクションA断面（西から）



セクションB断面（西から）



セクションC断面（西から）



セクションD断面（南から）



平面（南から）



平面（南から）

写真図版24 中央区・3号河川跡（1）



3号河川跡断面（南から）



4号河川跡平面（東から）



4号河川跡断面（北東から）



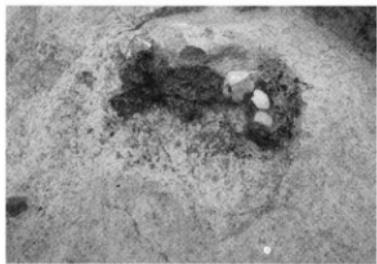
平面（南から）



断面〔南東から〕



燃焼部平面（南から）



ピット1平面（南から）



ピット1断面（南西から）

写真図版26 南区・2号竪穴住居跡



第1 水田面平面（北から）



To-aテフラ被覆状況平面（北から）



第2水田面平面（北から）



断面（南西から）

写真図版28 南区・2号水田跡（2）



2号水田跡、6号溝跡断面（南西から）



2号水田跡、7号溝跡断面（南西から）



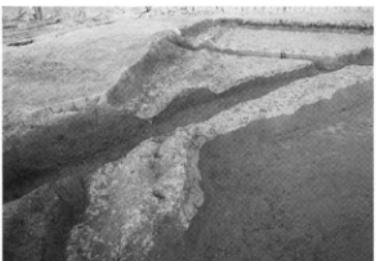
2号水田跡、6号溝跡断面（南西から）



2号水田跡、6・7号溝跡断面（南から）



畦畔5平面（南西から）



畦畔5・To-aテフラ被覆状況平面（南西から）



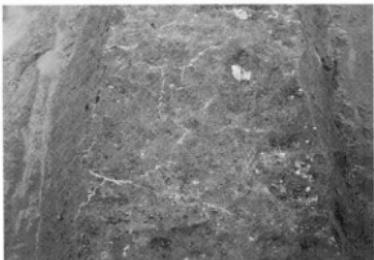
8号溝跡平面（北から）



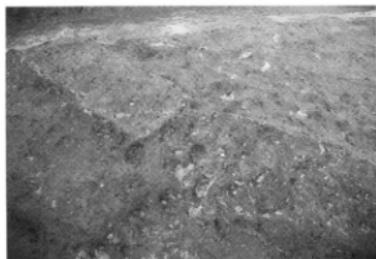
畦畔6平面（東から）



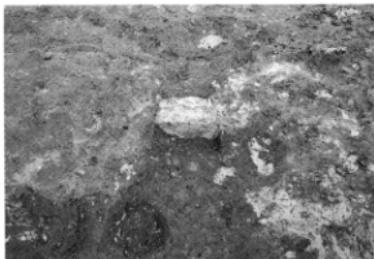
畦畔6 To-aテラ被覆面検出（東から）



水田5・第2水田面に観察されるサンクラック平面（北から）



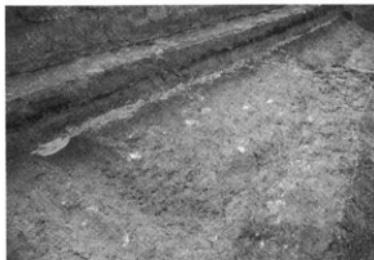
畦畔6水口平面（南東から）



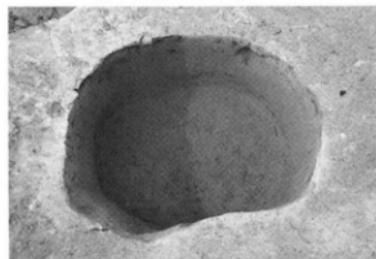
畦畔6水口断面（南から）



水田5足跡検出状況（北から）



水田6足跡検出状況（東から）



2号土坑平面（南から）



2号土坑断面（南から）

写真図版30 南区・2号水田跡（4）、2号土坑



平面（南西から）



平面（北から）

写真図版31 南区・1号柵状遺構（1）



骨格検出状況（6号墳跡・西から）



骨格検出状況（6号墳跡・北東から）

写真図版32 南区・1号柵状遺構（2）

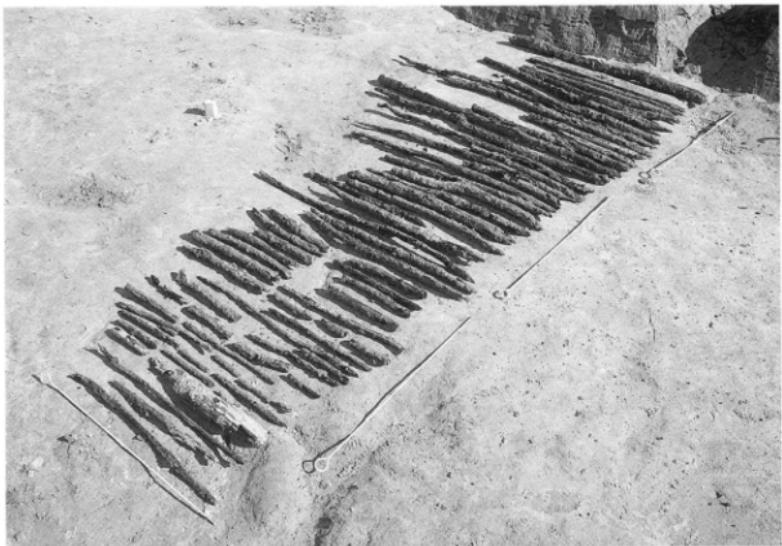


骨格検出状況（5号塙跡・北西から）



骨格設置状況（6号塙跡・南から）

写真図版33 南区・1号柵状遺構（3）

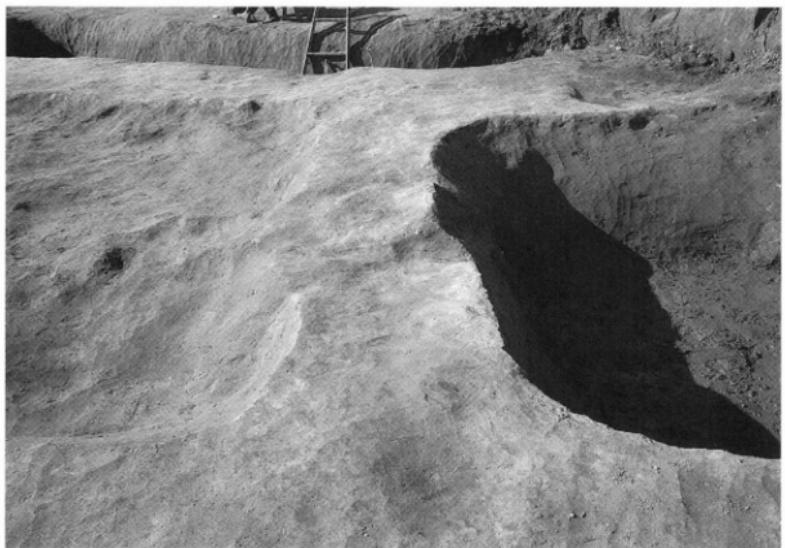


柵出土状況（6号墳跡側）



柵出土状況（5号墳跡側）

写真図版34 南区・1号柵状遺構（4）



1号橋跡平面（南東から）



2号橋跡平面（西から）

写真図版35 南区・1号橋跡、2号橋跡（1）



平面（南東から）



橋脚310断面（南から）



橋脚311断面（南から）



橋脚317断面（南から）



現地公開風景

写真図版36 南区・2号橋跡（2）



平面（北から）



断面（北から）



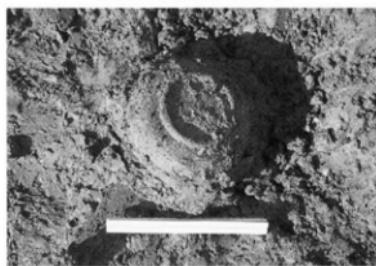
東壁杭列検出状況（南から）



西辺上部の杭痕平面（北から）



西辺上部の杭列平面（北から）



中央60B2堆積土中～下位332漆器陶出土状況

写真図版38 南区・1号堀跡（2）



平面（北東から・中央は1号横路）



断面（南東から）



断面（南東から）



垂直高の比較（北東から）



断面（北東から）



底面385漆器検出土状況



堆積土上位388加工板出土状況

写真図版40 南区・2号堀跡（2）



平面（北東から）



断面（北東から）



平面（北東から）



断面（北東から）

写真図版42 南区・4号堀跡



写真図版43 南区・5・6号堀跡（1）



5号堀跡断面（南東から）



6号堀跡断面（南東から）

写真図版44 南区・5・6号堀跡（2）



7号堀跡平面（北から）



6、7号堀跡断面（右が6号、左が7号・南から）



5号堀跡堆積土上位に観察される粉砂（南西から）



5号堀跡堆積土中位408漆器椀出土状況



6号堀跡堆積土上位458シカ頭骨出土状況



5号溝跡平面（南西から）



5号溝跡断面（南西から）



6号溝跡堆積土上位461蓋板出土状況



5・6号溝跡精査風景



雨天時の調査区冠水風景

写真図版46 南区・5・6号溝跡



平面（北東から）



平面（南西から）

写真図版47 南区・6・7号溝跡



平面（南西から）



断面（南から）

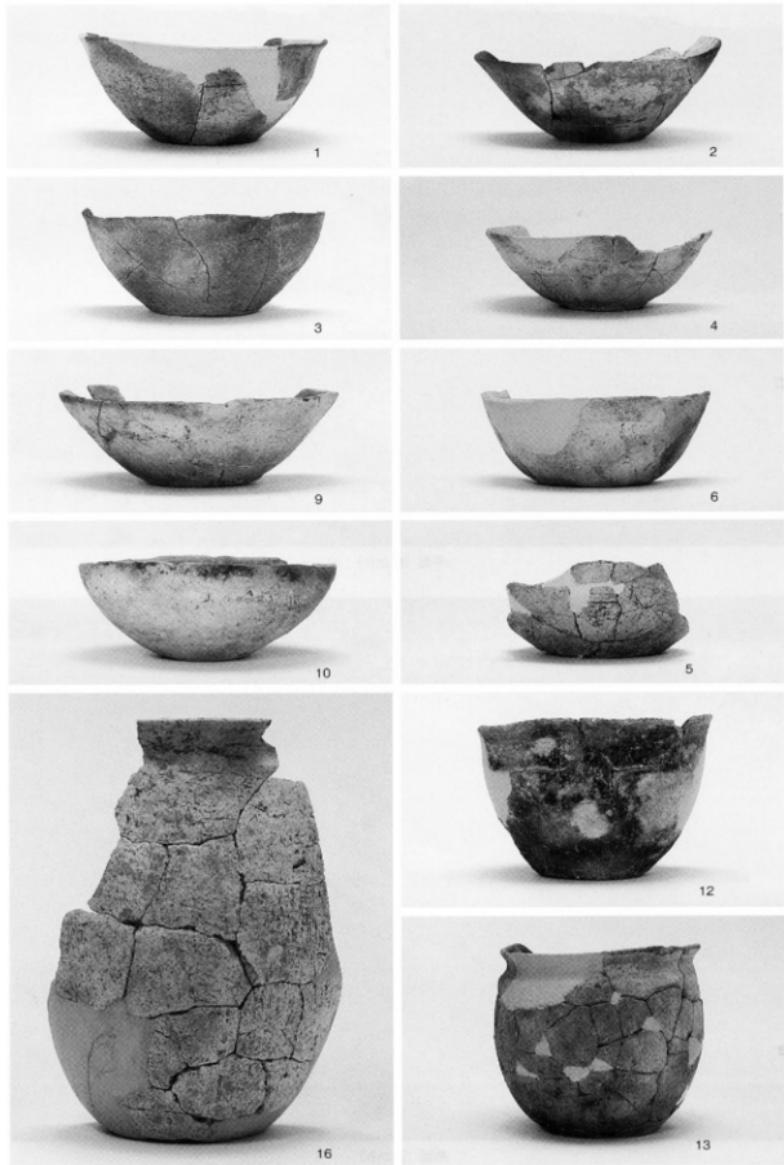
写真図版48 南区・5号河川跡



平面（南から）



断面（西から）



写真図版50 北区・1号竪穴住居跡（1）出土遺物

1号竪穴住居跡



14



15



7



8



17

11



20



18



24



25



28



30



31

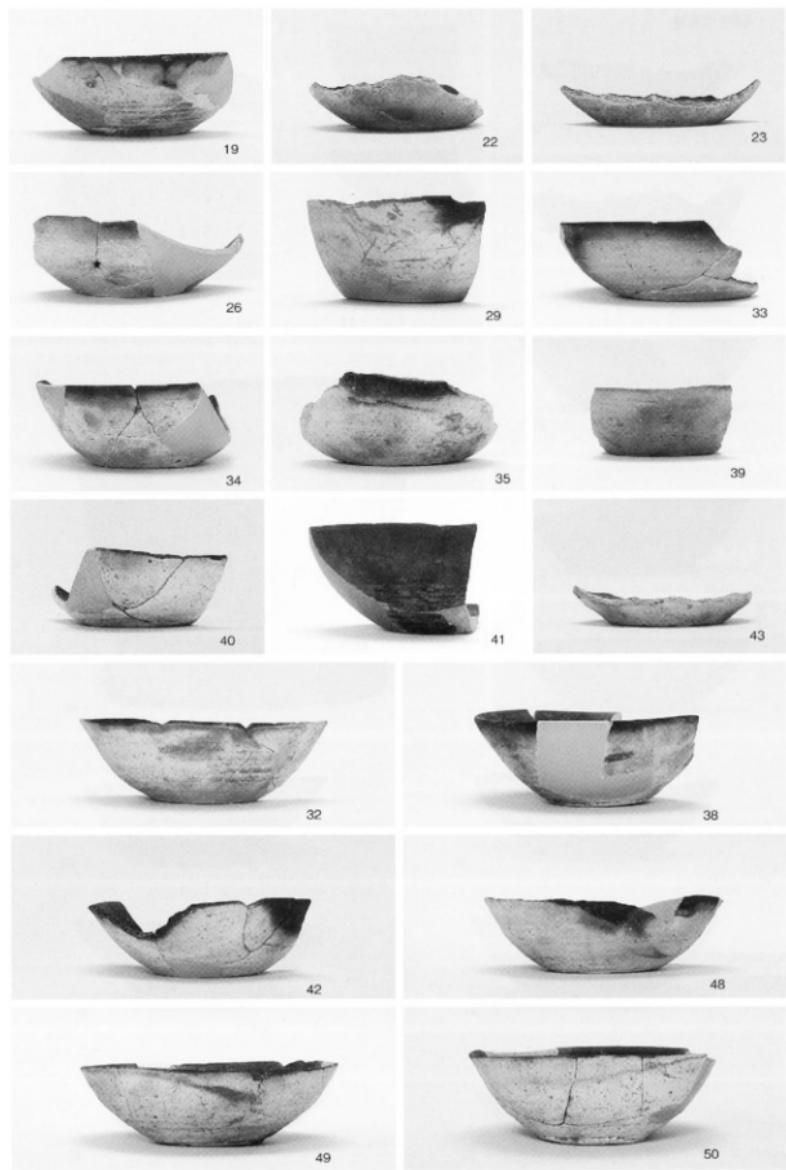


36

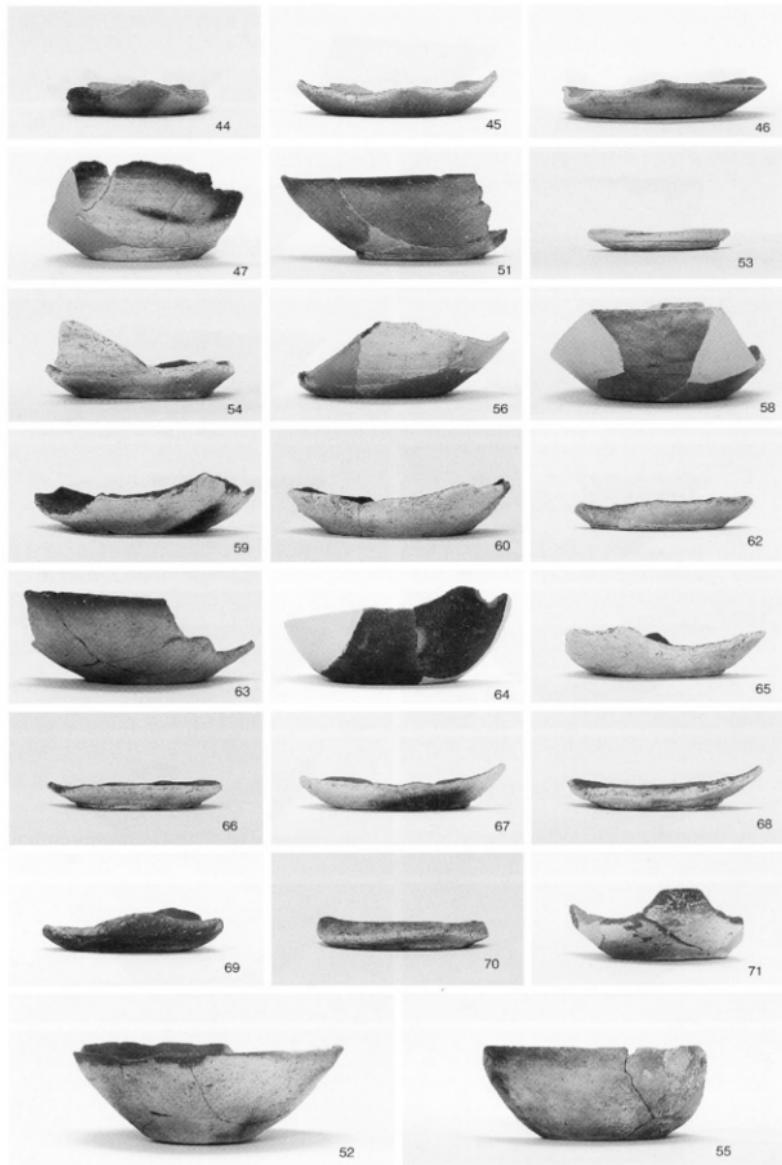


37

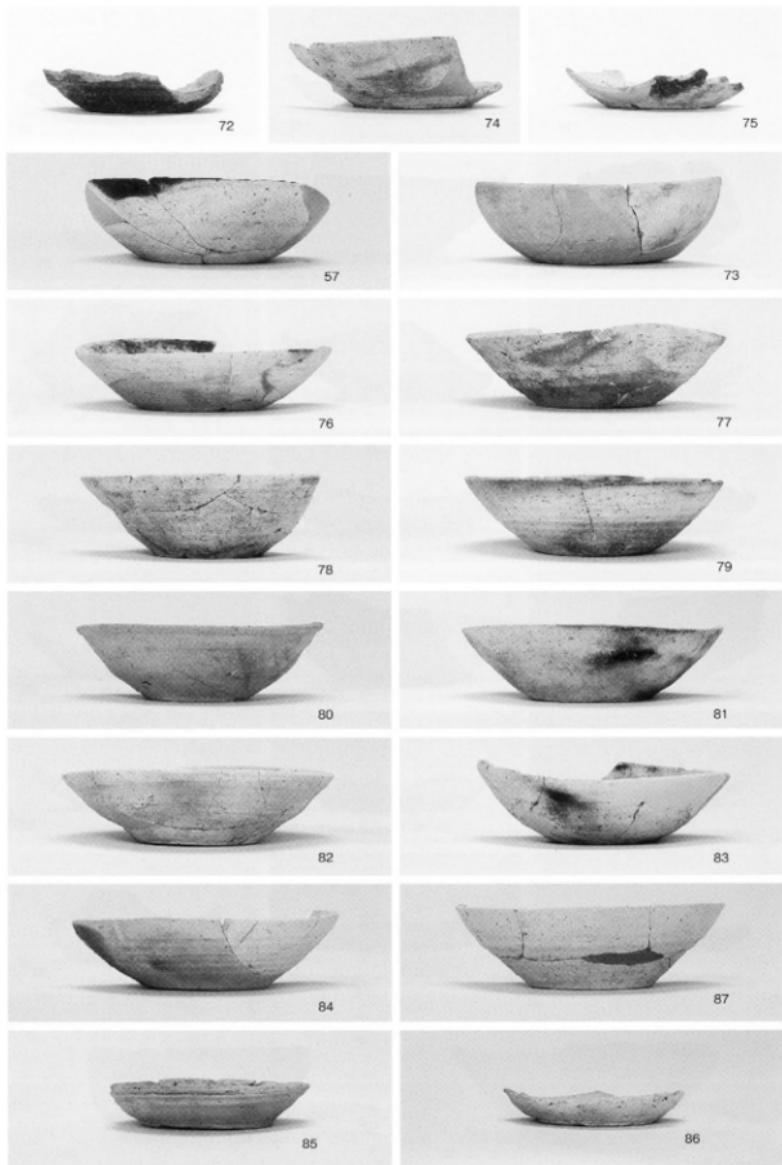
写真図版51 北区・1号竪穴住居跡（2）、1号河川跡（1）出土遺物



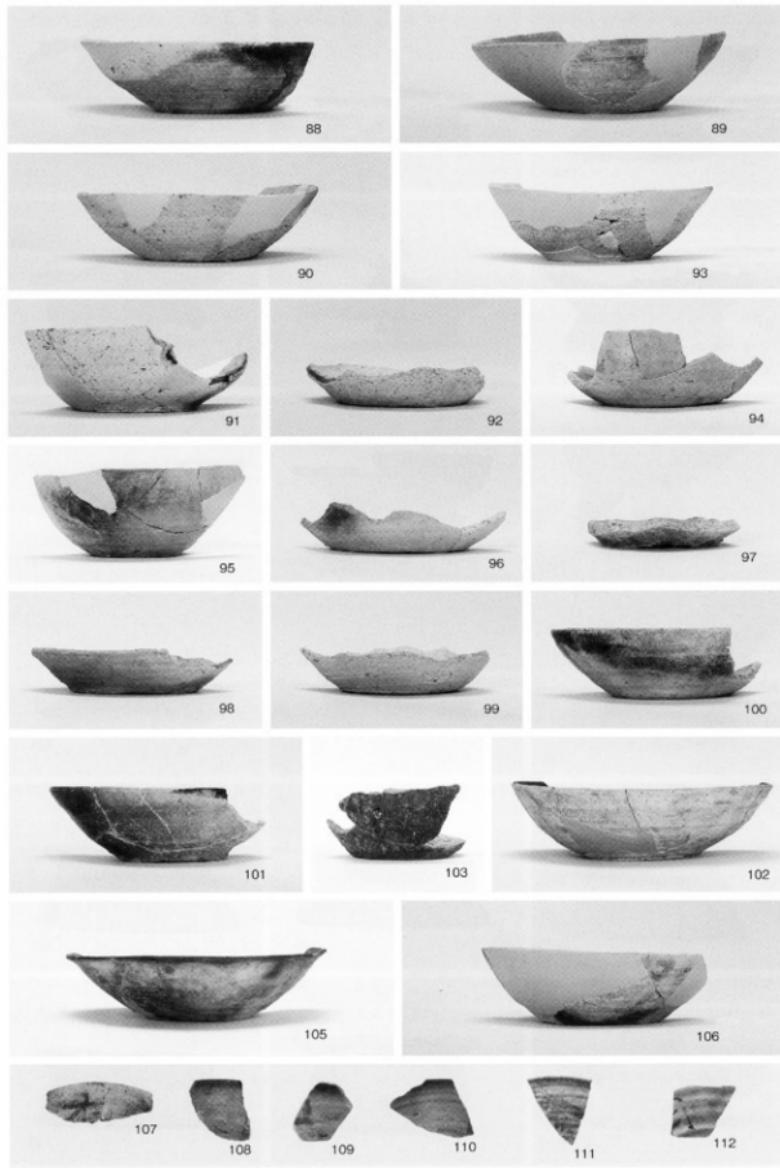
写真図版52 北区・1号河川跡（2）出土遺物



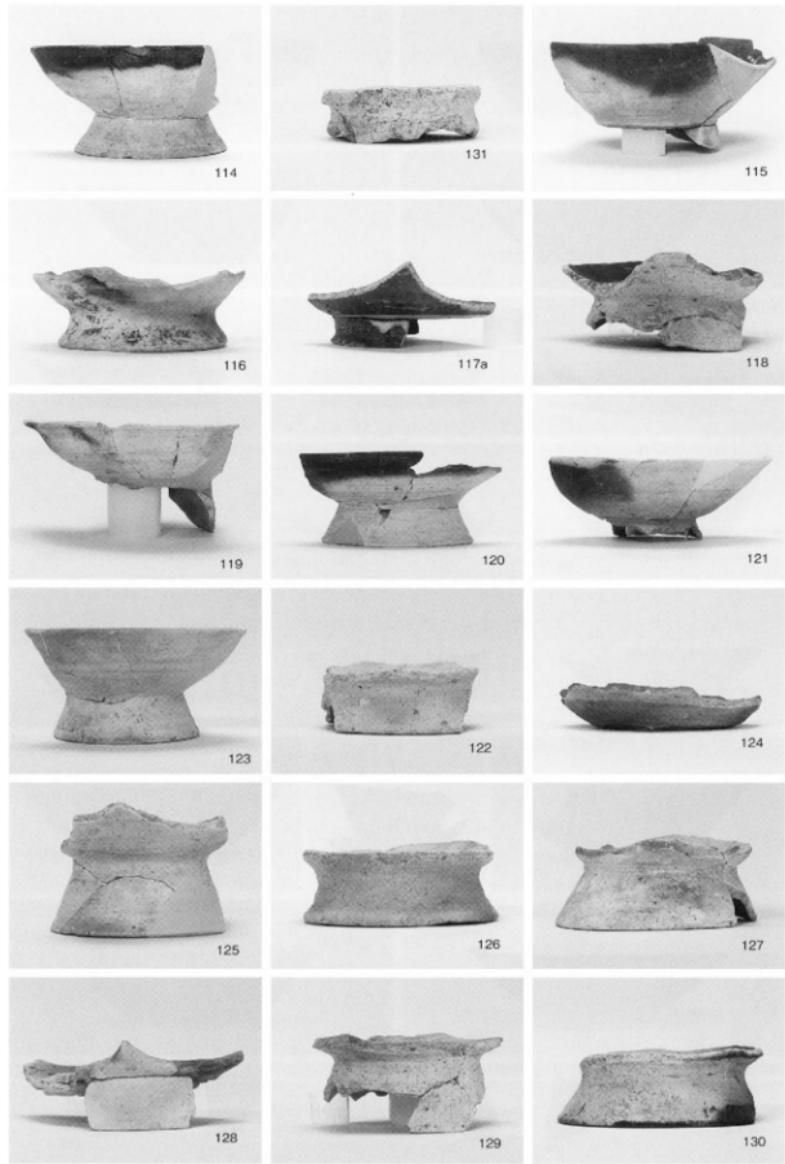
写真図版53 北区・1号河川跡（3）出土遺物



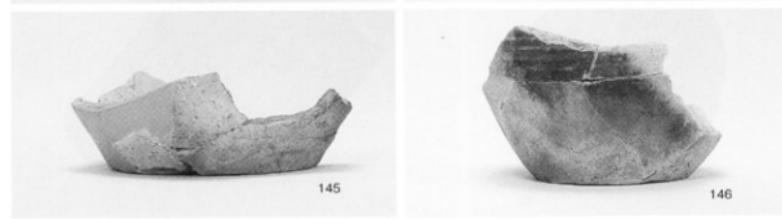
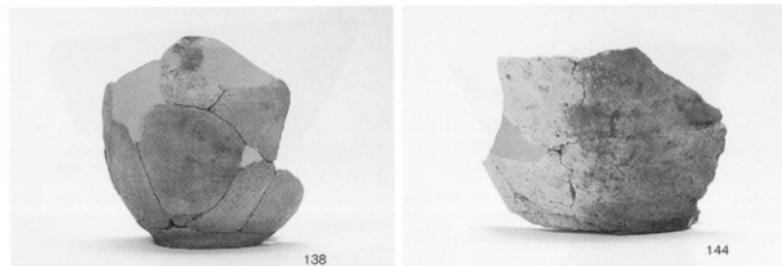
写真図版54 北区・1号河川跡（4）出土遺物



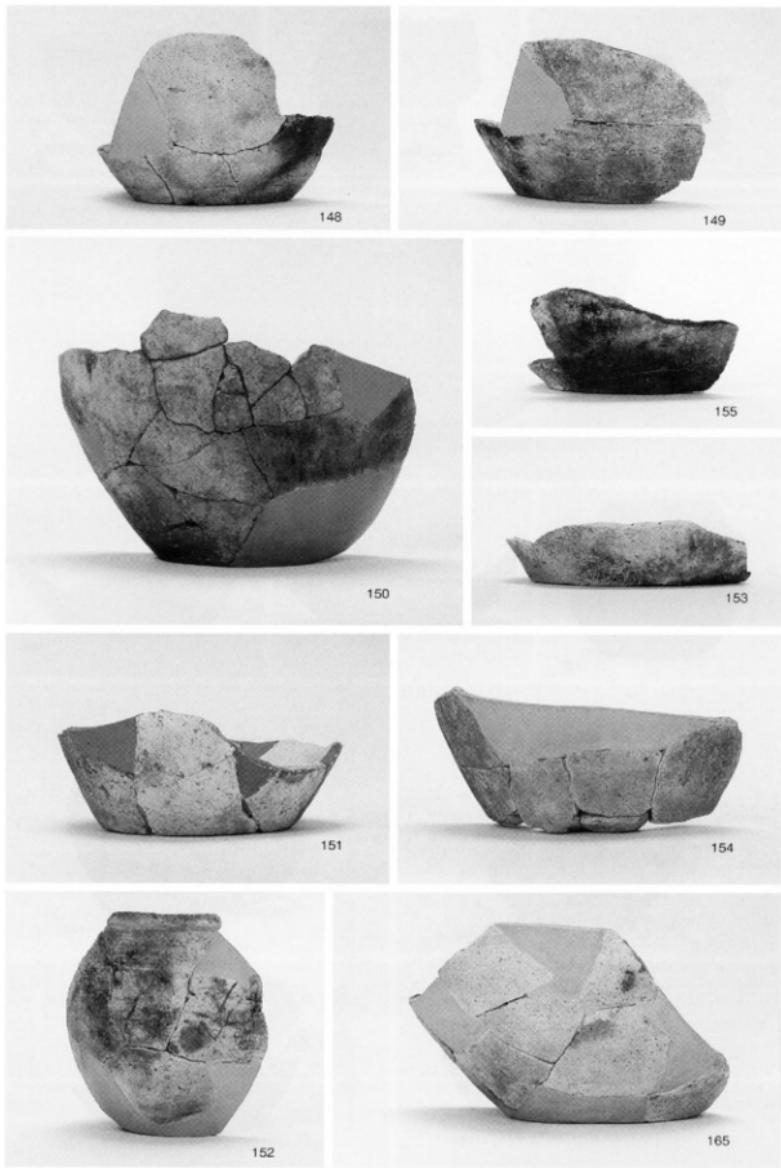
写真図版55 北区・1号河川跡(5)出土遺物



写真図版56 北区・1号河川跡（6）出土遺物



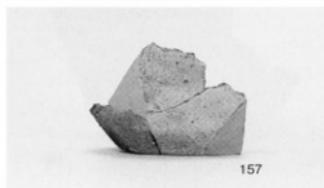
写真図版57 北区・1号河川跡(7)出土遺物



写真図版58 北区・1号河川跡（8）出土遺物



156



157



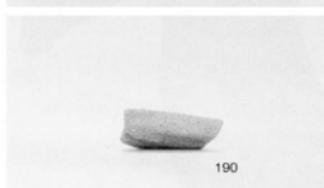
156



177



182



190



172



178

写真図版59 北区・1号河川跡（9）出土遺物



167



188



171



141



27



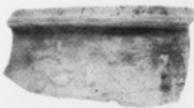
104



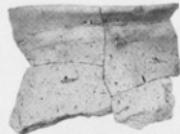
113



183



160



142



143



161

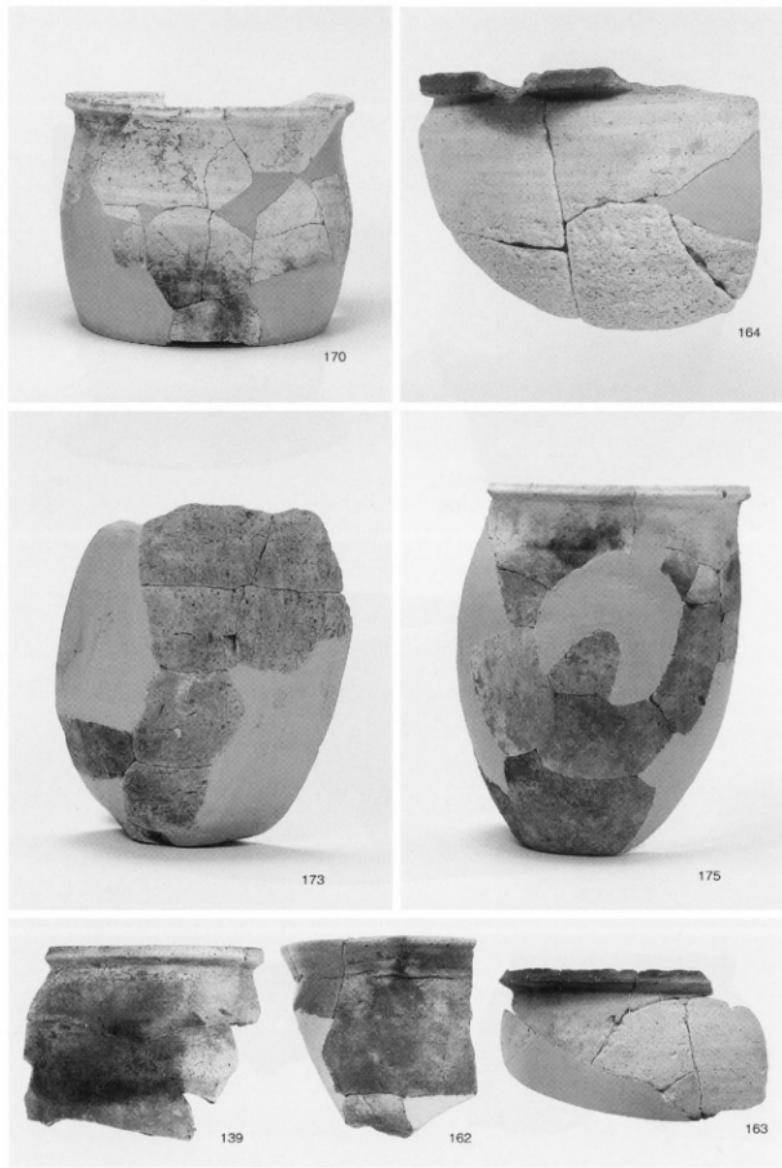


158



159

写真図版60 北区・1号河川跡(10)出土遺物



写真図版61 北区・1号河川跡(11)出土遺物

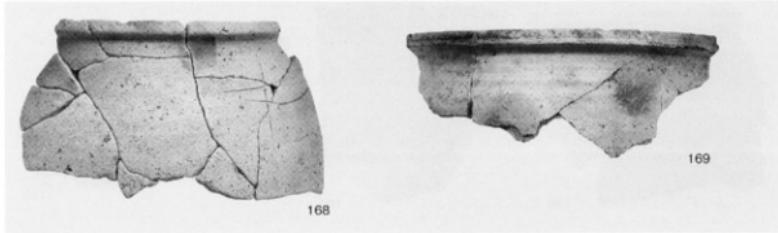


180

181



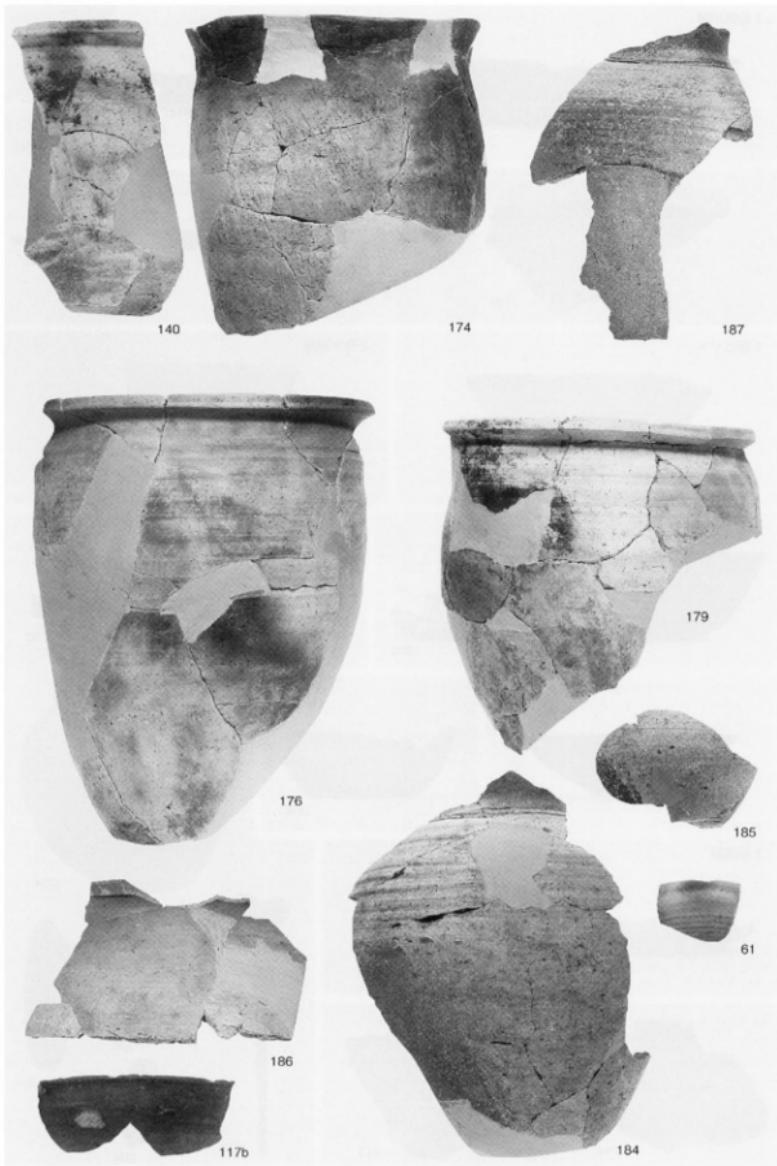
189



168

169

写真図版62 北区・1号河川跡(12)出土遺物



写真図版63 北区・1号河川跡(13)出土遺物

1号河川跡



195



194



193



191

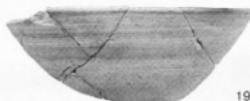


192



197

1号ピット



196

1号水田跡



203



199



200



201



210



202



205



204

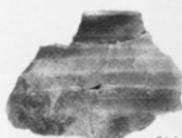
1号溝跡



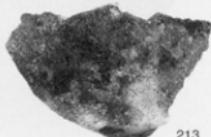
211



212



214



213



209



206



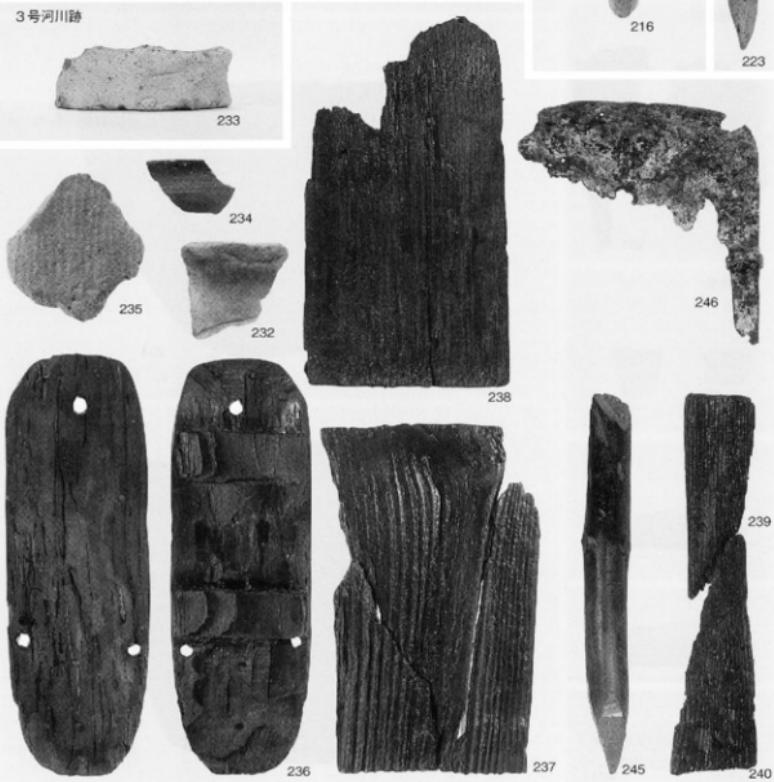
207

写真図版64 北区・1号河川跡（14）、中央区・1号ピット、1号水田跡、1号溝跡（1）出土遺物
—236—

1号溝跡



3号河川跡

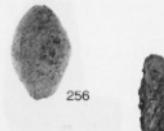
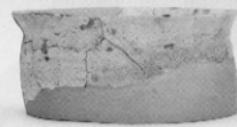


写真図版65 中央区・1号溝跡（2）、2号溝跡、3号河川跡（1）

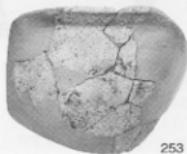
3号河川跡



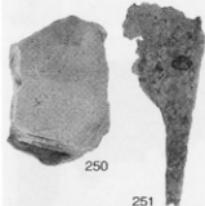
2号竪穴住居跡



4号河川跡



中央遺構外



2号土坑



2号水田跡



写真図版66 中央区・3号河川跡(2)、4号河川跡、遺構外、南区・2号竪穴住居跡、2号土坑、2号水田跡(1)出土遺物
— 238 —

2号水田跡



261



264



267



268

269a



269b



272



273



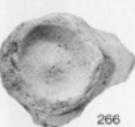
271

265



270

1号柵状遺構



266



274



275



276



299



294

写真図版67 南区・2号水田跡、1号柵状遺構（1）出土遺物

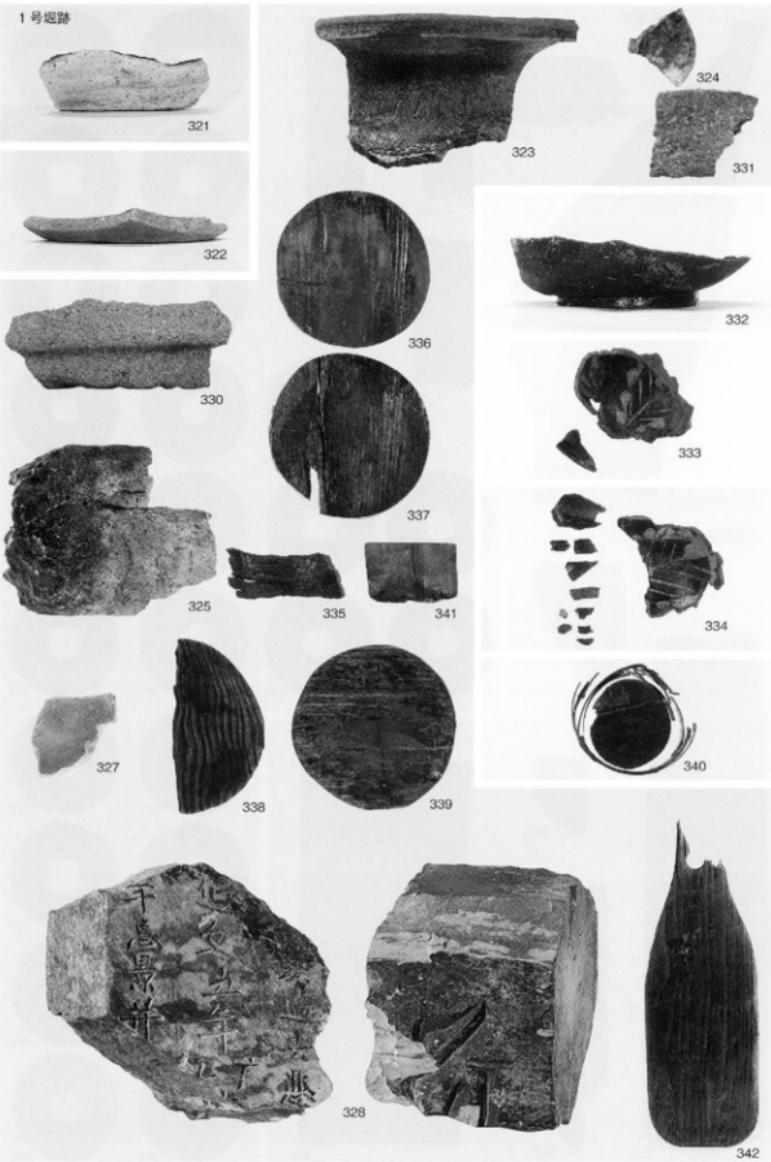
1号柵状遺構



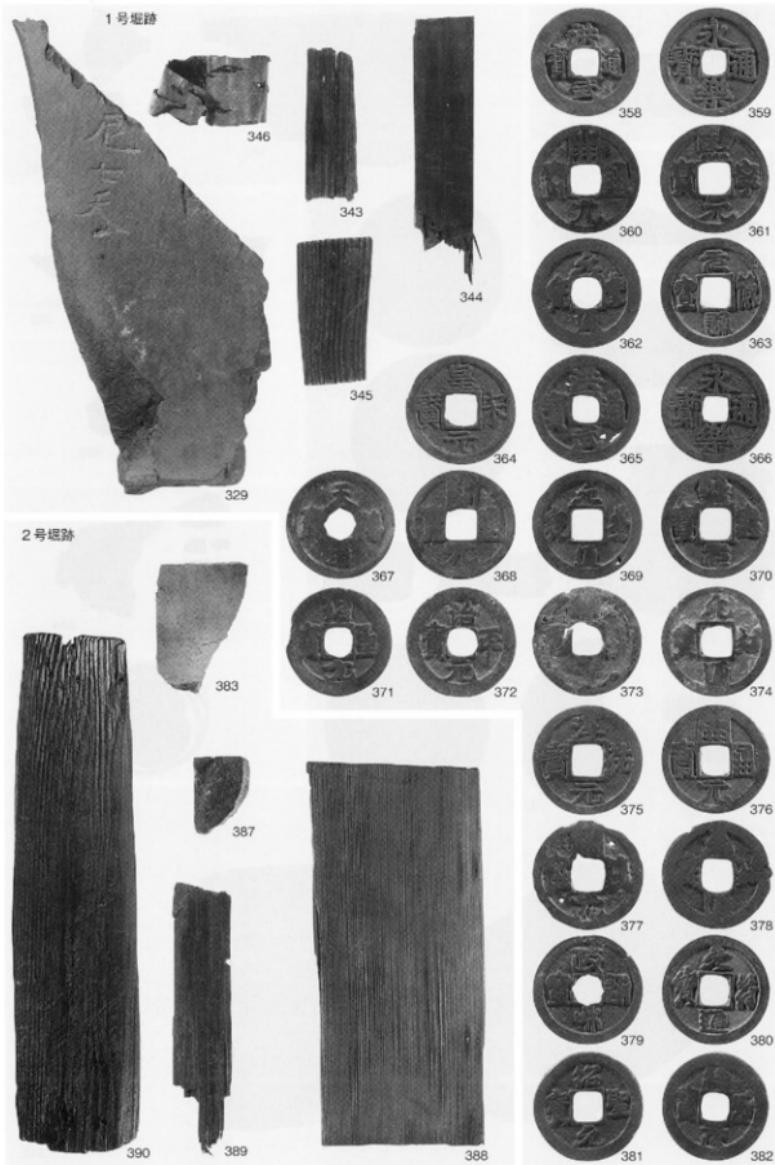
2号橋跡



写真図版68 南区・1号柵状遺構（2）、2号橋跡出土遺物



写真図版69 南区・1号塙跡（1）出土遺物

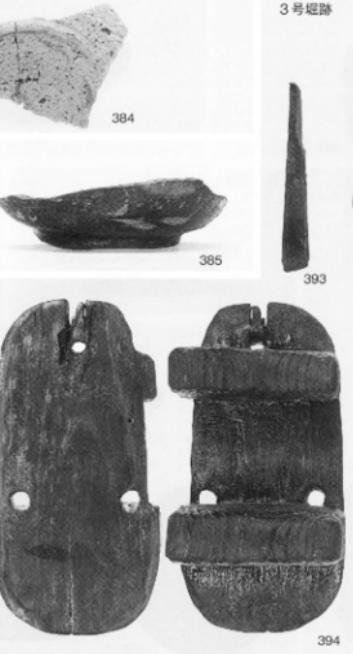


写真図版70 南区・1号堤跡（2）、2号堤跡（1）出土遺物

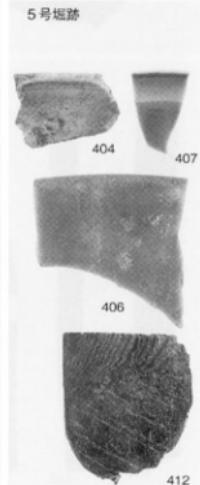
2号堀跡



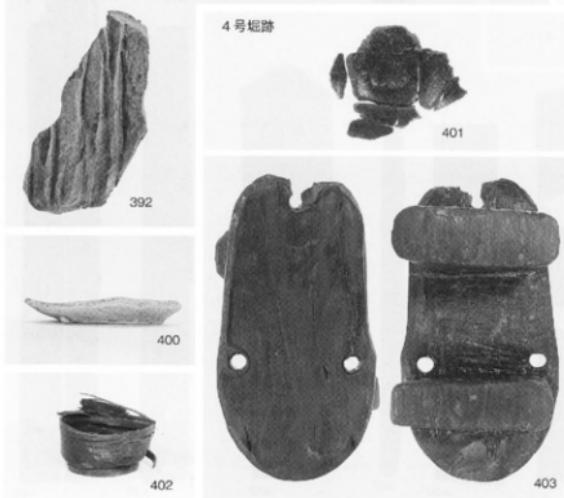
3号堀跡



5号堀跡



4号堀跡



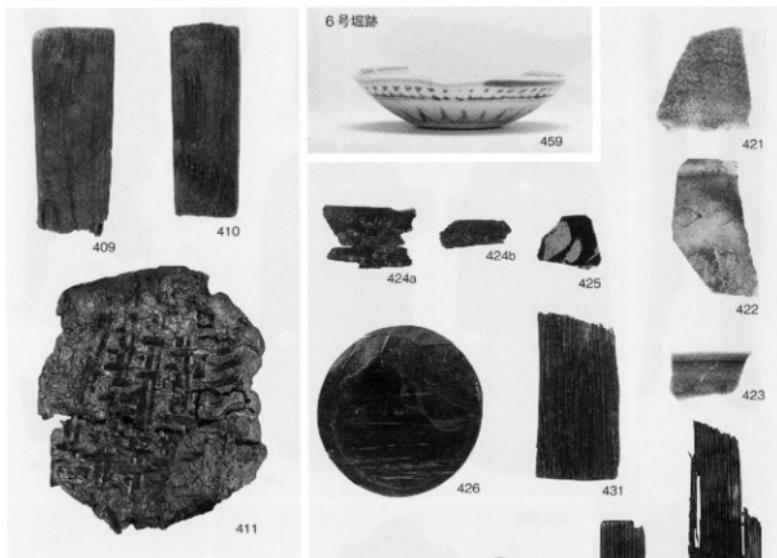
写真図版71 南区・2号堀跡（2）、3、4号堀跡、5号堀跡（1）出土遺物

5号堀跡



405

408



409

410

411

424a

424b

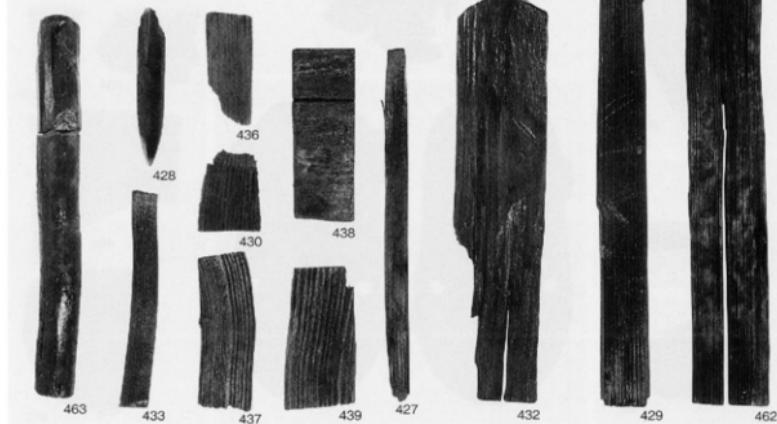
425

421

422

423

431



463

433

437

439

438

427

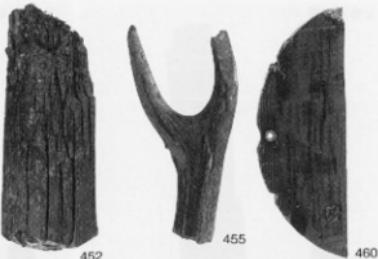
432

429

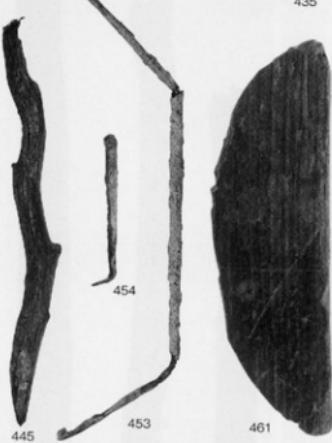
462

写真図版72 南区・5号堀跡(2)、6号堀跡(1)出土遺物

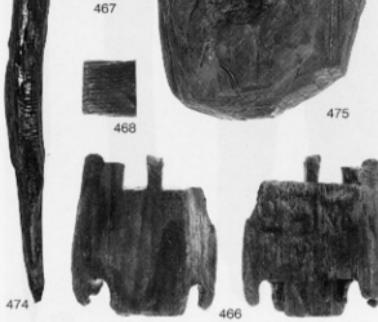
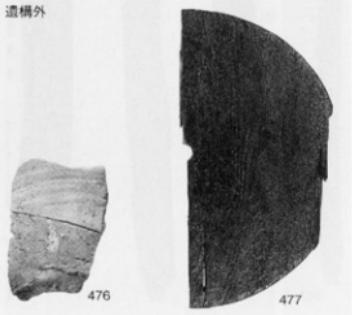
6号堀跡



7号堀跡



遺構外



写真図版73 南区・6号堀跡(2)、7号堀跡、遺構外出土遺物

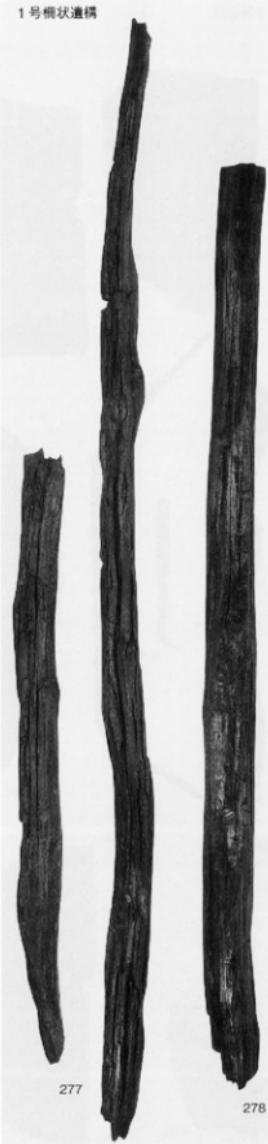
2号河川跡



3号河川跡



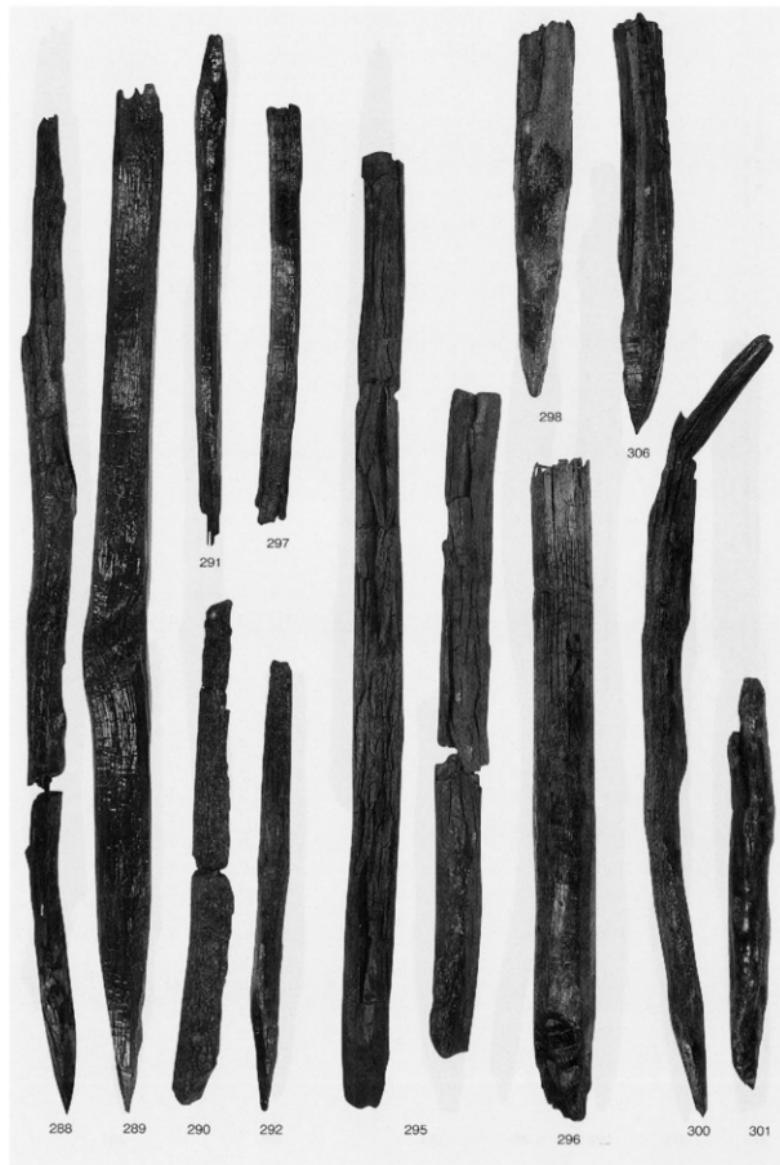
1号柵状遺構



写真図版74 中央区・2、3号河川跡、南区・1号柵状遺構（1）出土遺物



写真図版75 南区・1号柵状遺構（2）出土遺物



写真図版76 南区・1号柵状遺構(3)出土遺物



写真図版77 南区・1号柵状遺構(4)、2号柵跡、1号堀跡(1)出土遺物

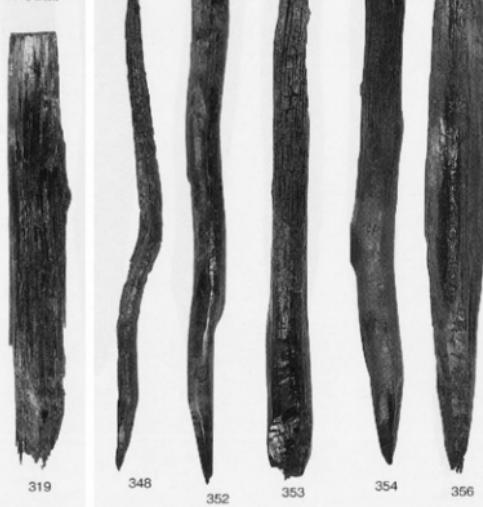
1号堀跡



5号堀跡



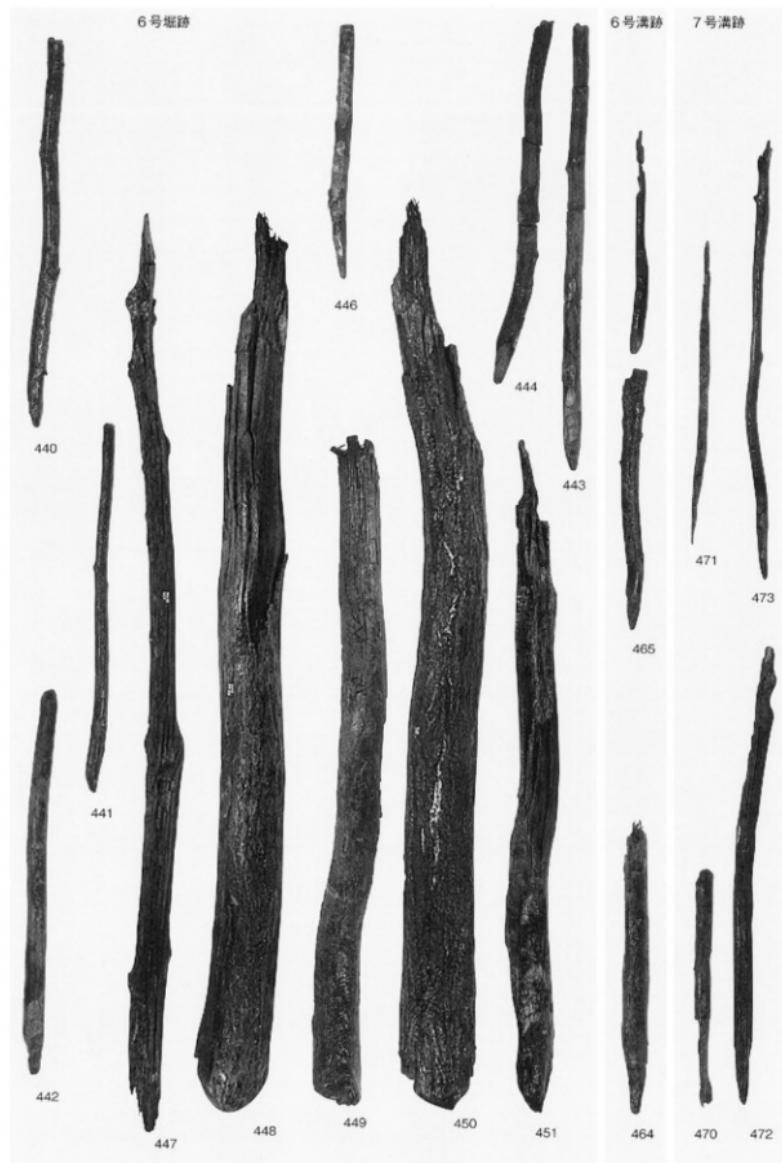
2号横跡



3号
堀跡



写真図版78 南区・1号堀跡（2）、3、5号堀跡、6号堀跡（1）出土遺物



写真図版79 南区・6号堀跡(2)、6、7号溝跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかむらじょうあとはくつちょうきはうこくしょ					
著名	中村城跡発掘調査報告書					
副著名	一般国道342号花巻バイパス道路改築事業関連追跡発掘調査					
卷次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第560集					
編著者名	北田 眞・佐藤あゆみ					
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001					
発行年月日	2010年2月19日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
中村城跡	岩手県一関市花巻町老松 字寺田320ほか	03209 OE3740332	38度 50分 14秒	141度 11分 ~ 09秒	2008.05.01 2008.11.06	一般国道342号花巻バイパス道路改築事業に係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中村城跡	集落跡	平安時代	堅穴居石踏2棟 土坑1基 ピット1個 水田跡2地点6区画 溝跡2条 河川跡1カ所(捨て場)	土器(十郎器・須恵器)、上製品、 金属製品(鉄錐・鍔先)、木製品(樋・皿)	土和田aテフラに被覆された水田跡2地点・6区画を検出した。	
			城館跡	中世	堀跡7条 櫓跡2基 溝跡3条 土坑1基 横状遺構1基	陶器器、埴輪、石製品(板碑ほか)、銅貨、木製品(津輪・曲物・下駄など)、杭・柱、自然遺物(種実・獸骨)
		近世以降	河川跡5カ所	陶磁器、金属製品(薄鉄・鋳管など)、杭、自然遺物(種実・獸骨)		
要約	今回の調査では、上記に示した平安時代・中世・近世以降の遺構・遺物が確認された。調査区北側を中心とし、平安時代の集落が拡がっていると考えられ、堅穴居石踏や河川跡に形成された土器捨て場、To-aテフラが被覆した水田跡が確認された。調査区南側には主に中世の遺構が集中し、中村城の一部と考えられる堀跡や溝跡、横状遺構などの遺構群が確認された。また、中世の木製品が多量に出土し、延文5年銘が刻まれた板碑が見つかっている。					

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第560集

中村城跡発掘調査報告書

一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年2月16日

発 行 平成22年2月19日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部

〒021-8503 岩手県一関市竹山町7-5

電話 (0191) 26-1418

(財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印 刷 杜陵高速印刷株式会社

〒020-0811 岩手県盛岡市川日町23番2号

電話 (019) 651-2110

